

異文化間コミュニケーション（経営）

担当者：T. アサモア

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1. 内容

国の国際化は、社会、組織、企業、人の中でより多くの相互依存につながった。国際化を実行するに当たって、文化的環境の理解が不可欠である。文化的環境とは、政治的環境、経済的環境、国際金融の潮流、あるいは企業の政策や戦略の理解などのことである。このことを理解することが、この授業の重要な目的のひとつである。従来の異文化間コミュニケーション学習では、文化的変数とコミュニケーション機能の重要性を通り一遍に説くものであった。この授業は、文化やコミュニケーション機能の専門領域に深く踏み込むものではなく、包括的に異文化間コミュニケーションとビジネスの関係に焦点を当てている。この授業は、国際的な企業や組織に興味がある学生だけでなく、これから社会にでる多くの学生に対して有意義なものである。なぜなら、ますます相互依存が強まる世界では、国内ビジネスマンと国際ビジネスマンの区別がなくなっているからである。

2. 学びの意義と目標

インターネットの普及により、距離を意識せずに外国に住む家族や友人とのコミュニケーションが24時間可能となった。実際に外国を訪れることも、一生に一度の出来事ではなく仕事や休暇のために頻繁に起こりうる出来事となりつつある。しかし、異文化との接触機会が増えることが、自動的に異文化理解を深めることに繋がると考えるのはあまりに短絡的である。異文化を理解し、それとうまく付き合うためには、異文化コミュニケーション、異文化コミュニケーション能力に関する知識とスキルの習得が不可欠である。授業では、異文化間コミュニケーションの基本的な考え方について、理論的、実践的に学習し、異文化間のスキルを高めることを目的とする。

準備学習(予習)

(1)経営についての基本的な知識。(2)コミュニケーション論の履修又は、関連する文献を読む。(3)企業経営についての授業の履修又は、関連する本を読む。

準備学習(復習)

授業後の課題の提出。

授業計画

1. 異文化間コミュニケーションの背景
2. 異文化コミュニケーションの範囲
3. 異文化間コミュニケーションの課題
4. ケース 1
5. 現代社会と異文化間コミュニケーション
6. 異文化間コミュニケーションの主要理論
7. コミュニケーションの仕組みと働き
8. コミュニケーションスタイル
9. ケース 2
10. 異文化間コミュニケーションとしての言語活動
11. 異文化間コミュニケーションとしての非言語活動
12. 文化価値の比較
13. 文化と国際ビジネス
14. ケース 3
15. 国境を越えて流れるヒト
16. 国境を越えて流れるモノ
17. 国境を越えて流れるカネ
18. 国境を越えて流れる情報
19. ケース 4
20. 経済的・文化的「従属」・「依存」
21. 経営的・文化的「従属」・「依存」
22. 政治的・文化的「従属」・「依存」
23. ケース 5
24. 国際コミュニケーション戦略
25. 国際広報
26. 国際広告
27. ケース 6
28. ニュースの国際流通
29. インターネットの異文化間コミュニケーション
30. ケース 7

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)授業中の課題:40% (2)レポート:20% (3)期末試験:40%

異文化間コミュニケーション（経営）

担当者：八木 規子

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1. 内容

本科目は、経営学的見地からの異文化間コミュニケーション論として、異なる文化背景を持つ人々がともに働く状況を背景として意識しながら、異文化間コミュニケーションを学ぶこととする。異なる文化背景を持つ人々の接触を、衝突や障害としてではなく、豊かな実りある建設的な結果につなげるためには、どのような知識、スキル、態度が必要か、ロール・プレイ、シュミレーション、ケーススタディなど手法を通じて、体験的に学ぶ。

2. 学びの意義と目標

文化、ことに異文化という言葉は、往々にして国民文化の違いを想起させる。しかしながら、文化の違いは、国の境界線の内と外にあるばかりでなく、国のなかにも異文化は存在するし、また国の境界線と文化の境界線が重なり合うとも限らない。ところが、日本という国家、文化、言語の重なり合いが強い場に生きる日本人は、こうした文化の境界線の多様性を直感的に理解することが、とても難しい。異文化間コミュニケーションを学ぶことは、異文化が日本の外に存在するだけでなく、この社会のなかにも存在し、我々は多文化社会を生活している、という感受性を高めることに寄与する。そして、多文化社会に生きる感受性を高めることは、国内外を問わず、異なる文化背景から来るひとびとの協同作業を実りの高い建設的なものとする能力向上の前提条件である。体験的学習手法を通じて、学生がこのような建設的な異文化接触の可能性を実感することを目標とする。

準備学習(予習)

配布資料等、授業の該当箇所を読み込んでおき、クラス討論に参加できる準備をする。

準備学習(復習)

期末試験に向けたノート整理をしておく。期末試験では、本科目の授業内容および授業におけるクラス討論の内容に照らした記述式設問に対して回答するかたちを取る。

授業計画

1. 本科目の進め方について。異文化間コミュニケーションとは何か
2. 文化を生成し伝播する主体としての自己：わたしは誰か？
3. 文化とはなにか？ 定性的アプローチ
4. 文化とはなにか？ 定量的アプローチ
5. 異文化の諸側面：時間と空間
6. 異文化の諸側面：コミュニケーションと意識構造
7. 異文化の諸側面：言語
8. 異文化の諸側面：非言語メッセージ
9. 異文化インテリジェンス概論
10. 異文化インテリジェンス：戦略的思考の側面
11. 異文化インテリジェンス：意欲・動機の側面
12. 異文化インテリジェンス：行動の側面
13. 異文化接触：内部者と外部者
14. 異文化接触：カルチャーショックと適応
15. 異文化と経営：動機付け
16. 異文化と経営：多文化チーム
17. 異文化と経営：リーダーシップ
18. 異文化と経営：意思決定
19. 異文化と経営：交渉
20. 異文化と経営：海外赴任
21. 異文化と経営：本国復帰
22. 異文化と経営：国際キャリアの形成
23. 異文化と経営：企業戦略と企業の異文化対応指向
24. 文化と政治：世界はグローバル化するのか
25. 文化と政治：日本と多文化主義
26. 複数文化アイデンティティから成る自己モデル
27. マイノリティ経験プロジェクト発表【要出席】 - 1
28. マイノリティ経験プロジェクト発表【要出席】 - 2
29. まとめ
30. 期末試験

教科書

授業の中で指示する

評価方法

- (1) 授業出席・参加点:20%
- (2) ケース分析:20%:10% × 2
- (3) マイノリティ経験プロジェクト:30%:提案書 5%、発表25%
- (4) 期末試験:30%

インターンシップ(自主活動)

担当者：藤井 重隆, 酒井 俊行

開講期：秋学期集中 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

インターンシップ（実習）のプログラムに期間、実習先等の都合が合わないために参加出来なかった学生で、インターンシップへの参加を希望する学生が対象となります。また原則としてインターンシップ（事前学習）の単位取得が前提となります。

2.学びの意義と目標

インターンシップ（実習）参照

準備学習(予習)

インターンシップ（実習）参照

準備学習(復習)

インターンシップ（実習）参照

授業計画

- 1.各自インターンシップ先での実習・・・実習先での所定の書式での実習ノート作成
- 2.各自インターンシップ先での実習・・・実習先での所定の書式での実習ノート作成
- 3.各自インターンシップ先での実習・・・実習先での所定の書式での実習ノート作成
- 4.各自インターンシップ先での実習・・・実習先での所定の書式での実習ノート作成
- 5.各自インターンシップ先での実習・・・実習先での所定の書式での実習ノート作成
- 6./各自インターンシップ先での実習・・・実習先での所定の書式での実習ノート作成
- 7.各自インターンシップ先での実習・・・実習先での所定の書式での実習ノート作成
- 8.各自インターンシップ先での実習・・・実習先での所定の書式での実習ノート作成
- 9.各自インターンシップ先での実習・・・実習先での所定の書式での実習ノート作成
- 10.各自インターンシップ先での実習・・・実習先での所定の書式での実習ノート作成
- 11.各自インターンシップ先での実習・・・実習先での所定の書式での実習ノート作成
- 12.各自インターンシップ先での実習・・・実習先での所定の書式での実習ノート作成
- 13.実習のまとめレポート作成
- 14.実習のまとめレポート作成
- 15.実習に関するレポート作成

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)実習報告:100%:インターンシップ（実習）参照

インターンシップ (事前学習)

担当者：酒井 俊行

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1. 内容

この講義では、基本的にインターンシップ実習に出るための事前準備を行います。しかしながら3年生のこの時期、わずか4ヶ月の座学で、全ての準備が可能になるなどとは思わないで下さい。ここでは皆さん1人1人のこれまでの集大成がまず問われます。

例えばビジネスマナーやビジネス上の言葉づかいなどを考えてみましょう。社会人としてのマナーや言葉遣いは、決して大学で学ぶものではないはずです。これまで皆さんが生活して来た過程、即ち学校生活、家庭生活、社会生活の中で自然に身に付いているものでなければなりません。

いずれにしても、20年分の学習をたった4ヶ月間で修得することなど、端から無理な相談です。無理な話を先刻承知のうえで開講するのがこの講義ということです。その大変さを予めよく理解して受講するよう心掛けて欲しいと思います。

2. 学びの意義と目標

この講義の最終目標は、皆さんをインターンシップ実習に出せるか出せないかの見極めと、社会人として活躍するために足りない能力の自覚を促すことです。

したがって本講義において単位を無事取得出来た場合には、一応社会人としてのスタートラインに着くことが認められると理解して下さい。ただ言うまでもなく、ここで単位を取ったからと言ってこれで免許皆伝ということにはなりません。社会に出しても大丈夫であるとの最低限の見極めが出来たということにすぎないわけです。

インターンシップは飽くまでも教育の一環です。完璧なパフォーマンスはそもそもインターンシップに出る必要などないわけです。企業やお役所での実習を通じてしっかり鍛えてもらうことこそが、その目的です。そうした意味で、本講義はそのための助走路を提供するというにすぎません。

準備学習(予習)

格別の準備は必要ありません。ただこれまでの学生生活において何をしてきたかは、折に触れて整理しておいて下さい。また就活を意識すれば、長髪や茶髪などはそろそろ卒業した方がよいと思います。

準備学習(復習)

この授業で学んだことはインターンシップ実習に出た時に、有形無形に有効です。その都度、しっかりノートを取り、学んだことをしっかり自分のものにして下さい。

授業計画

1. オリエンテーション
2. 最近の就活の仕組み
3. 大学生での学びを活かす
4. 自分を分析してみよう
5. S P Iは大丈夫ですか？
6. 自己分析と将来設計：作業
7. 簡単なビジネスマナー(1)
8. 簡単なビジネスマナー(2)
9. 簡単なビジネスマナー(3)
10. ビジネス言語入門～語感トレーニングを中心に(1)
11. ビジネス言語入門～語感トレーニングを中心に(2)
12. ビジネス言語入門～語感トレーニングを中心に(3)
13. 大学生から社会人へ
14. 大学生と就活
15. まとめ：インターンシップを楽しもう！

教科書

塚谷正彦 『大学生の生き方・考え方』(実教出版)

評価方法

- (1)レポート:60%:3～4回レポートを提出
- (2)授業への貢献:40%:社会に出るための積極性を評価

インターンシップ (事前学習)

担当者：藤井 重隆

開講期：春学期/秋学期

必修・選択：選択科目

授業回数：週1回

単位数：2単位

講義概要

1.内容

1.内容

インターンシップとは、在学中に就業体験を行うこと。企業などの組織に自分を置き、その組織がかかげる理念や目標に向かって日々の様な活動をしているかを実感することを目的としている。この機会を通じて、自ら社会が求める人材像を理解し、より良いキャリア選択を目指す姿勢を知ることが望ましい。就職活動にも役立つよう「模擬企画プロジェクト」のグループワークや、ビジネスマナーを理解する講座も設けている。

2.カリキュラム上の位置づけ

夏休み・春休みなどに、民間企業、自治体、特定非営利活動法人(NPO)などでインターンシップとして働くことを希望する学生を対象とする。すなわち、インターンシップII(実習)受講のために必要な講義である。

2.学びの意義と目標

就職に際して職場をイメージできることや仕事観を持っていること、また就業体験を通じて自己の気づきへの機会を持ち自己紹介や志望動機を述べられることは有利である。経済のグローバル化やICTの発展により産業構造は近年大きく変わっている。また雇用情勢や働き方も変化している。職場の一員として働いてみて「就業力」を理解し、これを育成していくことの大切さを理解すること。

準備学習(予習)

講義のポイントを講義中に理解するよう努めること。

準備学習(復習)

講義中に理解できなかったことや、納得できなかった点などあれば質問して解決すること。復習により理解を定着させていくこと。

授業計画

- 1.プログラム紹介 : 就活の前段階としてのインターンシップ
- 2.インターンシップの目的とその効果/「就業力」育成に向けて
- 3.「就業力」や「社会人基礎力」が必要とされるバックグラウンド
- 4.自ら「就業力」を高め、それを実感できること
- 5.社会に出て働く時、知っておくべきこと、心得ておくべきこと
- 6.ビジネスマナー演習(1)対面の場合
- 7.ビジネスマナー演習(2)文書の場合
- 8.ビジネスの現場におけるICT
- 9.模擬企画プロジェクト(1)
- 10.企業の「理念」、ビジネス・モラル、「信用」の大切さ
- 11.模擬企画プロジェクト(2)
- 12.実業家による講演
- 13.インターンシップに向けての心構え(4年生の体験談)
- 14.インターンシップに向けての心構え(事前学習のまとめ)
- 15.提出レポートへのコメントと講師からのフィードバック

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)出席点:50% (2)レポート点:40% (3)受講態度:10%
社会人並みの自己管理を求める。15回で完結する内容を組んでいるため、全講座出席のこと。遅刻3回で一回欠席扱いとする。

インターンシップ (実習)

担当者：酒井 俊行, 藤井 重隆

開講期：秋学期集中 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

本講義は民間企業、自治体等において正味10日の実務実習を行うプログラムです。この講義を選択する場合は、インターンシップ（事前学習）の単位取得が前提となります。

2.学びの意義と目標

インターンシップ実習を受けた結果として、就活に際しての業界・企業を選択の判断力が養われます。

準備学習(予習)

インターンシップ（事前学習）を受講して単位を取得することが必須条件です。

準備学習(復習)

実習終了後に学んだことをよく反芻し、就活本番での業界・企業選択に役立てるようにして下さい。

授業計画

- 1.各自インターンシップ先での実習・・・実習先での所定の書式での実習ノート作成
- 2.各自インターンシップ先での実習・・・実習先での所定の書式での実習ノート作成
- 3.各自インターンシップ先での実習・・・実習先での所定の書式での実習ノート作成
- 4.各自インターンシップ先での実習・・・実習先での所定の書式での実習ノート作成
- 5.各自インターンシップ先での実習・・・実習先での所定の書式での実習ノート作成
- 6./各自インターンシップ先での実習・・・実習先での所定の書式での実習ノート作成
- 7.各自インターンシップ先での実習・・・実習先での所定の書式での実習ノート作成
- 8.各自インターンシップ先での実習・・・実習先での所定の書式での実習ノート作成
- 9.各自インターンシップ先での実習・・・実習先での所定の書式での実習ノート作成
- 10.各自インターンシップ先での実習・・・実習先での所定の書式での実習ノート作成
- 11.各自インターンシップ先での実習・・・実習先での所定の書式での実習ノート作成
- 12.各自インターンシップ先での実習・・・実習先での所定の書式での実習ノート作成
- 13.実習のまとめレポート作成
- 14.実習のまとめレポート作成
- 15.実習に関するレポート作成

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)実習報告:100%:日報と実習のまとめ報告で評価

オペレーションズ・マネジメント

担当者：柴田 武男

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1. 内容

生産現場などの現業現場のマネジメント及び、生産性改善の手法を、理論面と実践面から講義する。理論においては、業種による手法の相違を学び、実践面においては経済グローバル化の中で顕在化する国内外におけるマネジメントや手法の相違、さらには国境を超えた手法の移転の実践を学ぶ。その目的に適用される科学的手法については、数学的な講義は省き、理論の概念的な説明にとどめる。

講義は、4名の実業界出身の講師による、オムニバス方式を採用。第1回から7回までは、化学産業に勤務した講師が、その実務経験を踏まえて講義する。第8回から15回までは、電子・機械産業に勤務した講師が、グローバルオペレーションに伴う技術移転を主題とする生産管理について講義する。第16回から22回までは、食品産業に勤務した講師が、その実務経験を踏まえて講義する。23回から30回までは、情報産業に勤務した講師が、その実務経験を踏まえて講義する。

2. 学びの意義と目標

現業の現場を如何に管理するか、また現場操業の効率化と生産力アップを如何に達成するかを実践的に学ぶ。講師の勤務した各産業界の違いは何か、そして共通するものは何かを探求して欲しい。またグローバル化の中で欠かせない海外での操業においては、果たして国内での手法が適用可能なのか。どのような点に留意すべきかなど、製造等現業拠点の海外移転に求められる基礎的な知識や情報を身に付けて欲しい。

準備学習(予習)

次回講義テーマに関する関心事項を一つでもあらかじめ調べて、講義に臨むこと。

準備学習(復習)

講義内容をレビューして、不明な点、疑問点などを次回の講義で質問する。また特に関心ある事項があれば、講義内容の枠を超えた領域をも含めて知識や情報を掘り下げて欲しい。

授業計画

1. 日本経済が置かれた現状の理解と対処の方法 講師：宇高昇
2. 企業戦略とオペレーションズマネジメント 講師：宇高昇
3. マーケティング（プロダクト・アウト、マーケット・イン他） 講師：宇高昇
4. 品質管理（日本企業と欧米企業の品質管理他） 講師：宇高昇
5. 設備投資と設備保全（最高の効率の上げ方他） 講師：宇高昇
6. 損益管理（損益分岐点演習他） 講師：宇高昇
7. グローバルに活躍するには（異文化共棲でのマネジメント） 講師：宇高昇
8. グローバルオペレーションズと技術移転各論1（グローバルオペレーションズとは） 講師：肥後照雄
9. グローバルオペレーションズと技術移転各論2（技術移転とは） 講師：肥後照雄
10. グローバルオペレーションズと技術移転各論3（南米での技術移転・アルゼンチン） 講師：肥後照雄
11. グローバルオペレーションズと技術移転各論4（アフリカでの技術移転・ガーナ） 講師：肥後照雄
12. グローバルオペレーションズと技術移転各論5（東欧・中欧での技術移転・モルドバほか） 講師：肥後照雄
13. グローバルオペレーションズと技術移転各論6（アジアでの技術移転・ベトナムほか） 講師：肥後照雄
14. グローバルオペレーションズと技術移転各論7（海外への技術の伝え方、まとめなど） 講師：肥後照雄
15. グローバルオペレーションズと技術移転各論7（ゲストスピーカー・現役国際ビジネスマンによる発表・討論など） 講師：肥後照雄
16. オペレーションズマネジメントとマネジメントシステム＝食品産業の現場での取組みを中心にした講義 講師：本多靖明
17. 食品産業での製品設計・開発と生産準備 講師：本多靖明
18. 製品の製造と生産管理 講師：本多靖明
19. 生産管理に関連した各部門及び顧客（消費者）対応 講師：本多靖明
20. 外国でのオペレーション（準備段階） 講師：本多靖明
21. 外国でのオペレーション（具体的業務） 講師：本多靖明
22. 食品産業の経営面から見た生産管理と、再びオペレーションズマネジメントとは 講師：本多靖明
23. 情報産業関連企業の現場経験による実践的観点より、オペレーション・マネジメントの目的、歴史等を講義する。 講師：田中啓二
24. オペレーション・マネジメントの要素と管理項目 講師：田中啓二
25. いろいろな製品と管理システム 講師：田中啓二
26. 具体的なマネジメントシステム（トヨタ生産方式を例として） 講師：田中啓二
27. マネジメントに必要な管理データとは 講師：田中啓二
28. 企業のグローバル化とマネジメント 講師：田中啓二
29. 新しいオペレーションズマネジメント（SCMなど） 講師：田中啓二
30. これからのオペレーションズマネジメント 講師：田中啓二

教科書

プリントを配布する

評価方法

- (1)出席日数による加点減点:10%
- (2)課題レポート提出:90%:4人の講師がレポート課題を提示する出席日数がコマ数の2/3未満は評価対象外

会計学

担当者：成川 正晃

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

会計情報は、受託責任を明らかにしたり、意思決定に役立つ情報を提供したり、様々な利害関係者の利害を調整するのに用いられます。このような会計情報の作成原理や、利用方法を学ぶのが会計学です。講義では、なるべく具体的な例を用い、絶えず現実の経済事象を意識できるように工夫して進めていきます。

2.学びの意義と目標

会計学では、会計情報の作成原理を理解するとともに、その利用方法を学習していきます。したがって、会計学の一端を学習することで、企業人としての基礎を身に付けたことになります。具体的には、企業の各種財務資料の作成から、分析方法まで学習していきます。このことにより、「企業を見る目を養う」というのが会計学を学ぶ目標となります。

準備学習(予習)

授業計画を参照し、テキストの該当箇所を読み、疑問点等をまとめておくこと。

準備学習(復習)

授業内の課題を復習し、各項目について次回までに説明できるようにしておくこと。

授業計画

1. オリエンテーション/授業の狙い・到達目標/会計情報の役割を理解する
2. 会計情報の果たす役割に影響を与える(法)制度を理解する
3. 企業の財政状態を示す「貸借対照表」を理解する
4. 企業利益の測定と貸借対照表の関係を理解する
5. 企業の経営成績を示す「損益計算書」を理解する
6. 企業のタイプにより貸借対照表の構造が大きく異なることを理解する
7. 商品とは/製品とは/企業の在庫とは
8. 棚卸資産の評価/回転率
9. 有形固定資産とは/減価償却とは
10. 減価償却方法とは/減損処理とは
11. 金融資産の種類/現金とは/預金とは
12. 売上債権とは/売上債権の評価額とは
13. 有価証券の種類/有価証券の評価額とは/保有目的による違いは
14. 負債とは/資本とは
15. まとめ
16. 財務諸表の概要を理解する
17. 損益計算書の構造を理解する
18. 収益認識の基本原則を理解する
19. 営業活動の成果を把握する
20. 会計情報の比較/趨勢分析とは
21. 収益性の分析とは/ROEとは
22. ROEの3分解
23. 個別具体的企業にみるROEの3分解
24. 安全性の分析/流動比率とは
25. 個別具体的企業にみる安全性の分析
26. 企業の利益構造とは/損益分岐点とは
27. 損益分岐図表の2つのタイプとは
28. 外部分析としての損益分岐図表の応用
29. 経営管理のための会計情報の役割
30. まとめ

教科書

谷 武幸, 桜井 久勝 『1からの会計』(碩学舎)

評価方法

(1)試験:60% (2)課題:40%

環境学

担当者：村上 公久

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

君たちが生まれた頃から現在まで、つまり君たちの平均年齢に相当する約20年間の間に私たちの地球の生命圏の環境は、急速に悪化し、この間日本列島の約6倍の面積の熱帯の森林が失われ、中国の耕地面積に相当する陸地が砂漠化した。

今日、世界的規模での最大の問題は、環境の急激な悪化による生命圏(生態圏)の全的壊滅の危険、すなわち地球環境問題である。この科目では「ヒトと環境」が相互に影響し呼応し合うシステム〔人間-環境〕系を理解し、「ヒトと森林の関係」を例にとって考える。かつては環境問題の問題意識の中心は産業公害だったが、現在ではこの問題は国境を突破した生命圏全体の存続を懸けた「地球環境問題」として捉えられており、いわゆる公害問題はその一部として意識されている。

2.学びの意義と目標

専門科目「環境保全論」履修の準備となる科目でもあるので学びを進めて「環境保全論」を履修する予定の者は予めこの科目を学んでおくことが望ましい。

NGOの果たす大きな役割を含め、私たちと生き物たちのこの世界を全体的な壊滅から救うほとんど唯一の戦略「保続的開発」の可能性を探る。

準備学習(予習)

岩波ジュニア新書の中で環境をテーマとしている、「地球をこわさない生き方の本」「世界の環境都市に行く」などを読んでおくこと。

準備学習(復習)

各回の講義内容について、関係する情報・資料を探して参考にし、講義を受けて自分で考えたことを含めて講義記録のノートに記録する。

授業計画

- 1.地球環境問題(1) - 自然破壊の実態 砂漠化
- 2.地球環境問題(2) - 自然破壊の実態 森林破壊
- 3.地球環境問題(3) - 地球温暖化問題
- 4.自然の中の人間 - 「自然の支配」か「自然と共存」か
- 5.自然と環境
- 6.〔人間-環境〕系(1)
- 7.〔人間-環境〕系(2)
- 8.「自然」が「環境」に変わるとき - 主体(ヒト)が帯びている生命圏への責任
- 9.ガイアGaia仮説 - 地球も宇宙も生きている
- 10.さまざまな自然観と風土(1) - 温度・降水量と植生区
- 11.さまざまな自然観と風土(2) - 世界各地の自然と「風土」
- 12.わが国の自然、風土の特徴
- 13.水文循環
- 14.エコロジーに関する概念 生命圏(生態圏)の理解
- 15.「命」とは - エントロピーの概念
- 16.人口問題(1) - 人口増加と環境容量
- 17.人口問題(2) - 人口増加と、環境・天然資源
- 18.森と人間(1)
- 19.森と人間(2) - 森と人と文化、森林の科学、木の文化の復権
- 20.「破壊」と「保護」の対立から「保全」へ - 第三の立場「環境保全」
- 21.環境関連法と制度 - わが国の「環境基本法」と「環境基本計画」
- 22.地球環境問題の課題『アジェンダ21』の検討
- 23.新しい課題「保続(持続)可能な開発」(1)
- 24.新しい課題「保続(持続)可能な開発」(2)
- 25.NGOの役割 - 「お団子」が、未来を担う(お団子=ODA+NGO)
- 26.環境NGOの事例(1)
- 27.環境NGOの事例(2)
- 28.「宇宙船地球号」から「地球村」へ Spaceship Earth Global Village
- 29.〔人間-環境〕系を保つための課題
- 30.まとめ

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)出席:40% (2)2回以上の試験と期末試験:60%
欠席回数が講義回数の3分の1を超える者には、単位を認定しない。

管理学

担当者：竹井 潔

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

1.目的

管理は英語のマネジメントのことである。管理は人々が協働して、変化する環境の下で有限な資源を能率よく使って、組織目標を効果的に達成するプロセスである。管理は企業の経営における領域で発展してきたが、あらゆる組織体にも適応されてきている。本講義においては、管理の生成と発展を概観し、管理の原理・原則を学ぶことにより、管理の基礎について理解する。

2.学びの意義と目標

管理（マネジメント）は社会に出てから様々な場面で必要とされる領域である。講義では企業を対象とした経営における管理の原理・原則を学ぶことにより、管理の新しい領域や課題も検討していきたい。

準備学習(予習)

管理の専門用語が多く出てくるので、授業の事前に各自わからない用語は調べて理解しておいてほしい。

準備学習(復習)

管理の専門用語で、各自わからなかった用語は調べて理解しておいてほしい。また、与えられた課題は内容をよく理解して提出すること。

授業計画

- 1.管理とは
- 2.管理の原理 1
- 3.管理の原理 2
- 4.管理の系譜
- 5.管理の原点としての伝統的管理論 1
- 6.管理の原点としての伝統的管理論 2
- 7.管理の人間関係論的アプローチ
- 8.管理の組織論的アプローチ
- 9.管理の意思決定論的アプローチ
- 10.管理の戦略論的アプローチ
- 11.管理のリーダーシップ論的アプローチ
- 12.管理のモチベーション論的アプローチ
- 13.目標による管理
- 14.ナレッジマネジメント
- 15.中間まとめ
- 16.組織構造とマネジメント
- 17.動的組織とマネジメント
- 18.トップマネジメントとミドルマネジメント
- 19.改善と管理
- 20.管理技術としてのIE, QC, VEの特徴
- 21.生産性の考え方, 標準時間とその意義
- 22.生産管理の概要
- 23.品質管理について
- 24.コスト管理について
- 25.改善の手法と進め方1
- 26.改善の手法と進め方2
- 27.小集団活動とコミュニケーション
- 28.ブレイクスルー思考について
- 29.マネジメントの課題
- 30.まとめ

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)平常点:20%:出席、課題提出 (2)中間試験:40% (3)期末試験:40%

キャリアデザインA

担当者：上田 信一郎

開講期：春学期 必修・選択：必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

1)<内容>

キャリアデザインは、広くは人生設計全体に関わりますが、具体的には将来の進路・職業について、将来なりたいもの、やりたい仕事、自分の適性、職業の現状を考え整理し、目標を企画・設計していくことです。そして、現在学ぶもの、身につけるもの、体験行動すべきテーマを発見・具体化し、目標の設定と行動に移すキッカケとなるものです。また職業紹介に関するビデオを上映し職業理解を進めます。さらにコミュニケーション力、プレゼンテーション力向上のために、就職面接で決め手になる自己PRを取り入れた自己紹介プレゼン（みんなの前で話す）を演習します。

(2)<カリキュラム上の位置づけ>

キャリアデザインAは自分を知ることが重点に、仕事を知ることと並行して講義を進める。自分を知ることとは、やりたいこと、なりたいもの、適性、価値観などの自己分析を進めることだ。並行して進める仕事を知ることでは、仕事図鑑のビデオで仕事の現状を知る。

2.学びの意義と目標

自分自身のなりたいもの、やりたいことを明確にし、自分のできるととのすり合わせの中で、進路を明確にし、目標設定できるようになること。将来の進路目標が設定されるとモチベーションが生まれやる気が出ます。そして今やるべきことの目標設定が出来ます。なりたい職業につくためには身につけなければならない能力・スキルや試験合格が必要だからです。公務員試験、各種資格試験、パソコンスキル、コミュニケーション能力などの学習目標を設定しましょう。

準備学習(予習)

将来の進路を見つけより早い時期に目標を定めることができるようにするため、職業に関する興味のある新聞、テレビ、本をできるだけ読むようにして下さい。

準備学習(復習)

情報や知識を資料のある図書館やキャリアサポで深めてください。またインターネットで自分自身の関心のある職業情報を調べてください。

授業計画

1. キャリアデザインとは
2. 将来の夢、仕事と自己実現
3. 生きていく力と自己PR、コミュニケーション力
4. やりたいこと、できること、適性
5. 仕事のやりがい感とは * 演習
6. 仕事の選択基準 * 演習
7. 適性を知る・適性試験 * 適性試験
8. 人に役立つ仕事とは * 演習
9. 社会に役立つ仕事とは * 演習
10. インターンシップ・アルバイトなどの体験の重要性
11. 公務員の仕事と公務員試験 * 演習
12. 業種の種類・概要と興味 * 演習
13. 職種の種類・内容と適性 * 演習
14. 知らない仕事もいろいろある
15. 自分の進路を考える一個別面談、レポート提出

教科書

プリントを配布する

評価方法

- (1)出席率:50%:3分の1以上の欠席は単位認定不可
- (2)演習・発表:40%:筆記演習、プレゼン演習実施
- (3)授業態度:10%:私語、離席減点
出席は学生証による電子入力で、遅刻3回で1回欠席のペナルティとなります。

キャリアデザインB

担当者：上田 信一郎

開講期：秋学期 必修・選択：必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

(1)内容

キャリアデザインAでは比較的「自分を知る」ことを重点に進路目標をたてることを柱にしましたが、キャリアデザインBでは「職業を知る」ことを重点に、自分とのマッチングの可能性を探ります。また、職業を通して社会的な役割をになう意味、職業をもち生きていく力を身につける意味を考えます。職業を紹介するビデオをほぼ毎回上映します。

(2)カリキュラム上の位置づけ

職業について、業種・職種の種類、特性などを知り、職業への関心を高め、自分自身の関心のある仕事発見につなげます。関心のある仕事の発見のためにリサーチし、仕事のやりがいなどについて、自分が主体的に職業を選択する視点で学びます。

2.学びの意義と目標

講義及び演習でのリサーチ発表を通じて、自分の関心のある職業についての業種・職種の内容、職業につくための要件・方法、労働条件、職業につくための競争条件などを調べることを通じて知り、仕事に対するモチベーションを高め、進路を明確にすること。また、リサーチ発表を通してプレゼンテーション力を身につけること。

準備学習(予習)

まず自分のやりたい仕事や興味のある仕事について調べることから始めます。そしてその仕事につくための条件を調べることから始めましょう。

準備学習(復習)

関心のある業界・職種についてインターネット、書籍などで更に詳しく調べ、自分の進路・職業の目標を設定できるようにしましょう。

授業計画

1. 職種の特性と自分の適性のマッチング
2. 業種と仕事の研究 地方公務員
3. 業種と仕事の研究 地域情報サービス・マスコミ
4. 業種と仕事の研究 福祉、医療
5. 業種と仕事の研究 教育、育児支援、カルチャー
6. 業種と仕事の研究 旅行、宿泊サービス
7. 業種と仕事の研究—環境
8. 業種と仕事の研究 スポーツ、車、エンタテインメント
9. 業種と仕事の研究 Web・IT
10. 業種と仕事の研究 貿易、国際ビジネス
11. 業種と仕事の研究 飲食、流通他サービス業
12. 業種と仕事の研究 地域金融機関、生協他
13. 業種と仕事の研究—社会と人の役に立つ仕事、ソーシャルビジネス
14. 業種と仕事の研究—資格、カウンセラー、コンサルタントの仕事
15. 自分の進路を考える—個別面談、レポート提出

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)出席率:50%:3分の1以上の欠席単位認定不可 (2)演習・発表:40% (3)授業:10%
遅刻3回で1回の欠席となるペナルティがあります。演習・発表は職業リサーチ発表中心となります。

担当者：酒井 俊行

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

就活を意識した場合に、まず押さえておかなければならないのは就活の仕組みを知ることです。昨今の就活においては、無手勝流でチャレンジすることは極めて非効率と言えます。孫子の兵法に言うとおり、百戦を危うくしないためには、敵を知り、己を知らなければなりません。

「己を知ること」は自己分析ということですが、ここで「敵を知ること」が『業界・企業分析』の作業ということになります。就職を希望する企業が必ずしも敵ということではありません。しかし相手を知らないでチャレンジすることは無謀ですし、何よりも先方企業に失礼です。

本講義では必要最小限の範囲で、皆さんが就活に際してチャレンジする業界・企業に関する研究の方法を学ぶこととします。

2.学びの意義と目標

就活を意識した場合に、準備しなければならないことがいくつかあります。中でもエントリーシートを書いたり、面接に臨んだりするための準備は周到にしなければなりません。エントリーシートというのは読んで名のごとし。志望先にアプローチするためのツールです。これの書き方によって先に進めるか否かが大きく左右されます。

エントリーシートで重要なのは、自己PRと志望の動機がきっちり書けていることです。この授業では志望動機を過不足なく書けるようになるために不可欠な「業界・企業研究」について勉強します。

これまでの先輩がたの例を挙げると、遺憾ながら面接を含めて志望動機を相手先によく伝えることが出来なかったケースが多かったと言えます。志望動機をうまく伝えることが出来ないのは、それが全てではありませんが、業界・企業研究が不十分であるからと言って過言ではありません。そのために、この授業が必要とされるのです。

「転ばぬ先の杖」ということがあります。またものごとにはすべからず「傾向と対策」があります。就活本番での成功を掴み取るために、是非一緒に勉強して行きましょう。

授業計画

1. オリエンテーション
2. 就活の仕組みを知る
3. 業界・企業研究とエントリーシート・面接
4. 業界研究の必要性
5. さまざまな業界を知る(1)
6. さまざまな業界を知る(2)
7. 企業研究の必要性
8. 企業研究の方法(1)
9. 企業研究の方法(2)
10. 企業研究の方法(3)
11. 働く場としての中堅・中小企業
12. 業界・企業研究実習(1)
13. 業界・企業研究実習(2)
14. 業界・企業研究実習(3)
15. まとめ

準備学習(予習)

格別の準備は必要ありませんが、受講する学生は、並行して、マナー、言葉遣い、一般常識等のシェーブアップについても心掛けるようにして下さい。

準備学習(復習)

実践が大事です。その都度指示する課題が復習になりますので、作業指示は絶対を守りるようにして下さい。

教科書

プリントを配布する

評価方法

- (1)レポート:60%:3回程度のレポート提出を求めます。
- (2)授業への貢献:40%:出席状況等授業への参加状況を評価。

担当者：藤井 重隆

開講期：秋学期/春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

自分はどんな仕事をしたいのか、自分に向いている仕事はあるのだろうか、沢山の情報や選択肢の中から自分の納得いく仕事に出会って就職したいものである。この課題に取り組む手法として「履歴書」や「エントリーシート」を書いてみることで自分自身を理解し、求人票や求人情報に触れてみることで企業やその理念、職種や雇用条件などを理解する。そして志望動機を明確にしていくプロセスを体験する。業界や企業は時代の流れに応じて浮沈を繰り返していく。グループワークを行いながら業界や企業への理解を深め、合わせて就職の仕組みも学んでいく。

2.学びの意義と目標

就職活動の前に自分のキャリアデザインをどう考えるかを自分に問う機会とする。また将来、転勤や転職や再就職などの事態に遭遇しても新たな職場で自分のキャリア伸ばしていく考え方を持つことの大切さを理解する。

準備学習(予習)

講義のポイントは講義中に理解できるよう心掛けること。不明点は質問して講義中に理解しておくこと。

準備学習(復習)

講義内容は復習によって理解を定着させておくこと。

授業計画

1. 「業界研究」の目的、方法とゴール
2. 履歴書、エントリーシートを知る
3. 自分はどんな人間か、何をしたい人間かを考える
4. グループワーク 理想的な履歴書
5. 求人票、求人情報を知る
6. それぞれの業界はどのような人材を求めているかを考える
7. グループワーク 志望先の絞り込み
8. 志望動機について考える
9. グループワーク 志望先の会社内容について納得する
10. 模擬企画プロジェクト
11. 「業界研究」：企業の成長と衰退
12. グループワーク 志望する業界の検討と評価
13. 実業家(先輩)による講演
14. 「業界研究」のまとめ、「就業力育成」とキャリアデザイン
15. 提出レポートへのコメントと講師からのフィードバック

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)出席点:50% (2)レポート:40% (3)受講態度:10%
 社会人並の自己管理を求める。15回で完結する内容を組んでいるため全講座出席のこと。遅刻3回で1回欠席扱いとする。

行政学

担当者：鈴木 潔

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

本講義では、これまでの行政学の蓄積を利用し、現代日本における行政の仕組みと行政の理論を中心に説明する。

本講義は、政治学、憲法（統治）、政治過程論、地方自治論、公共政策論などを学習するうえで重要なポイントとなる行政の仕組みに関する知識を提供している。

2.学びの意義と目標

行政の活動が複雑・多様化するのに伴って、市民が行政を的確に評価し、コントロールすることが一層重要になってきている。

本講義では、受講者が(1)行政の主要な仕組みを理解できるようになること、(2)抽象的な行政の理論を用いて具体的な行政の活動を説明できるようになること、(3)行政を評価し、コントロールするために必要な事柄について考察できるようになることを目標とする。

準備学習(予習)

受講者は、政治・行政に関するテーマについて、書籍、新聞、ニュースなどを利用して情報を収集し、自分が問題意識をもつテーマについて説明できるようにしておくこと。

準備学習(復習)

毎回の講義で実施する小テストの内容を十分に確認しておくこと。

授業計画

1. 行政学の範囲と学習方法
2. 国家公務員の採用
3. 国家公務員の昇進
4. 国家公務員の退職と天下り
5. 内閣制度（1）
6. 内閣制度（2）
7. 中央省庁（1）
8. 中央省庁（2）
9. 政官関係
10. 行政ネットワーク（特殊法人、業界団体）（1）
11. 行政ネットワーク（NPO、諮問機関）（2）
12. 行政管理と行政改革
13. 官民関係（民営化、規制緩和）（1）
14. 官民関係（民間委託、NPM）（2）
15. レポート報告会
16. 中央省庁の意思決定方式
17. 予算編成過程
18. 決算と会計検査院
19. 行政責任（1）
20. 行政責任（2）
21. 行政学説史
22. 政策決定論
23. 政策実施論
24. 政策評価論
25. 官僚制論
26. 官僚制批判
27. 官僚制の演繹モデルと帰納モデル
28. レポート報告会
29. 日本の行政システム（2）
30. 学期末試験

教科書

評価方法

(1)試験:50% (2)レポート:40% (3)平常点:10%:授業貢献度、出席状況

行政法

担当者：仲田 孝仁

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

(講義の内容)本講義は、行政法の入門的な知識・考え方の修得を主目的とする。講義では、各種行政活動に共通する通則的な理論である「行政法総論」と、違法な行政活動に対する事後的な権利・利益の救済制度である「行政救済法」とを学ぶ。公務員として任用された場合は、実際に法律や条例を運用し、また民間企業であれば、行政の規制を受けない業種・業界はないといっても過言ではない。さらに、市民としても、運転免許や営業許可の取得、各種申請・届出、ゴミ収集、年金の給付等行政との関わりは生涯切っても切れないといえる。よって、公務員希望者に限らず、企業に就職し或いは一市民として社会生活を営む上でも「行政法」を学ぶ重要性は極めて高い。

(カリキュラム上の位置づけ)本科目は法律学であり、法学概論や憲法、民法などの基幹科目との対比では、応用科目に位置する。とはいえ、法学の基礎についても適宜ふれる。諸君の将来の進路とのかかわりでは、各種国家試験や資格試験対策としても必要性がある科目である(むろん、民間企業への就職希望や自営業者でもニーズはある。)。

2.学びの意義と目標

本講義を履修することにより、私たちが一市民としていかに「行政」との法的かかわりが切っても切れないものであるかを認識し、その上で望ましい「行政」とのかかわり方を諸君自身で考えたり、問題提起することができる。社会に生起する諸問題を法的に考えることができる。

準備学習(予習)

「日本国憲法」の教科書をひもとく(手元がない場合は図書館で調べる)、 「内閣」の章を読みその内容を400字程度で初回の授業までにまとめ、提出できるように用意しておくこと。なぜこの授業を履修するのか、理由を述べられるように準備しておくこと。

準備学習(復習)

概ね2週分の内容について、その翌週に小テストを行うので、講義内容について、十分復習しておくこと。1回目の範囲は初回の講義時に指示する。

授業計画

1. ガイダンス (「行政法」とは? 学習する意義。)
2. 行政法の基本構造(法律による行政の原理、公法・私法二元論)
3. 行政の仕組(1) - 行政組織法概説 (「行政主体」・「行政機関」概念、内閣、「国家行政組織法」概説)
4. 行政の仕組(2) - 地方自治法概説
5. 公務員法(国家公務員と地方公務員、人事院、人事委員会、公務員の内定、公務員の任用から退職まで、懲戒・分限処分)
6. 行政立法と行政計画(法規命令と行政規則、浜松市土地区画整理事業計画)
7. 行政裁量(日光太郎杉事件、伊方原発訴訟、マクリーン事件)
8. 行政手続(1)(行政手続法、申請に対する処分、不利益処分)
9. 行政手続(2)(個人タクシー事件、パブリック・コメント制度)
10. 情報公開・個人情報保護
11. 行政行為(1) - 行政行為の概念・類型
12. 行政行為(2) - 行政行為の効力・無効と取消(公定力、重大・明白説とは?)
13. 行政行為(3) - 取消と撤回・附款(実子あっせん事件、菊田医師事件)
14. 行政の実効性確保の手段(1) (行政代執行法、違法建築物の除去)
15. 行政の実効性確保の手段(2) (レッカー移動)
16. 行政契約・行政指導
17. 行政救済法総説
18. 損失補償
19. 国家賠償(1) - 総説・1条責任
20. 国家賠償(2) - 2条責任・賠償と補償の谷間
21. 行政不服申立て(1) (行政不服審査法の概要について)
22. 行政不服申立て(2) (審査請求について)
23. 行政事件訴訟(1) - 総論 (行政事件訴訟法、抗告訴訟、取消訴訟)
24. 行政事件訴訟(2) - 取消訴訟の対象 (取消訴訟の対象となる「処分」とは?)
25. 行政事件訴訟(3) - 訴えの利益
26. 行政事件訴訟(4) - 取消訴訟の審理手続
27. 行政事件訴訟(5) - 取消訴訟以外の抗告訴訟
28. 行政事件訴訟(6) - 客観訴訟
29. 行政救済法事例式問題演習
30. これまでの講義のまとめ

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)期末試験:80% (2)小テスト:10% (3)レポート:10%

キリスト教社会倫理 A

担当者：菊地 順

開講期：春学期 必修・選択：必修科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

倫理学というのは、平たく言えば、よりよい人間の生き方、あるいはより正しい人間の生き方について考える学問ですが、この授業は、「キリスト教」社会倫理とあるように、それをキリスト教の視点に立って考えるものです。しかし、また同時に、キリスト教「社会倫理」とあるように、それは広く社会に目を向けた中で考察されます。その考察を、今年度は特に「平和」の問題に集中して行いたいと思います。ただし、「平和」というのは、単に戦争のない状態のことではなく、もっと豊かな内容を持つ言葉であり、そのことを具体的な事例を検討しながら考えていきます。

具体的には、まずキリスト教の考える「平和」について考察します。そこには、いわゆる戦争のない平和ともっと広い意味での平和が認められますが、そのそれぞれを吟味したあと、特に20世紀にいくつかの事例を求め、その具体的な内容を検討し、人間の生き方について学びます。

2.学びの意義と目標

この授業では、平和に関する具体的な事例を学ぶことをとおして、特に人間の尊厳および人格・人権という価値の尊さの理解を深め、現代世界に通用する倫理観を身に付けることが目指されています。

準備学習(予習)

予習としては、シラバスを読んで授業内容を確認し、予め下調べしておくこと。

準備学習(復習)

復習として、毎回授業で配布される講義内容のプリントを読み直すこと。また必要や関心に応じて、自分で調べ、知識を深めること。特に、この授業では復習に重点を置いてください。

授業計画

1. 授業のオリエンテーション
2. キリスト教の「平和論」(1)
3. キリスト教の「平和論」(2)
4. 「平和をつくり出す者」(1) コルベ神父
5. 「平和をつくり出す者」(2) ボンヘッフアー
6. 「平和をつくり出す者」(3) 新渡戸稲造
7. 「平和をつくり出す者」(4) 賀川豊彦
8. 「平和をつくり出す者」(5) 田中正造
9. 「平和をつくり出す者」(6) マハトマ・ガンディ(1)
10. 「平和をつくり出す者」(7) マハトマ・ガンディ(2)
11. 「平和をつくり出す者」(8) マザー・テレサ(1)
12. 「平和をつくり出す者」(9) マザー・テレサ(2)
13. 「平和をつくり出す者」(10) ダイアナ元皇太子妃
14. 「平和をつくり出す者」(11) 井深八重
15. 「平和をつくり出す者」(12) エレノア・ルーズベルトと世界人権宣言

教科書

プリントを配布する
毎回授業の初めにプリントを配布します。

評価方法

(1)試験:70% (2)出席:20% (3)課題:10%
以上の3点を総合的に判断して成績を出します。ただし、3分の1以上の欠席者、あるいは課題の未提出者は試験を受ける資格がありませんので、注意すること。

キリスト教社会倫理 B

担当者：菊地 順

開講期：秋学期 必修・選択：必修科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

倫理学というのは、平たく言えば、よりよい人間の生き方、あるいはより正しい人間の生き方について考える学問ですが、この授業は、「キリスト教」社会倫理とあるように、それをキリスト教の視点に立って考えるものです。しかし、また同時に、キリスト教「社会倫理」とあるように、それは広く社会に目を向けた中で考察されます。その考察を、秋学期は、アメリカ合衆国における人種問題、特にアフリカ系アメリカ人（黒人）に注目して行いたいと思います。

具体的には、まずアメリカ合衆国の歴史について学びます。そこには奴隷制以前の歴史、奴隷制に至る歴史、また奴隷制の実態とそれに対する戦いの歴史、そしてその後の人種隔離時代の歴史がありますが、またそこには同時にキリスト教との深い関わりもあり、その両面から考察していきます。そして、その具体的な内容の検討をとおして、人間の生き方について、特に人間の尊厳とか人格・人権といった価値の尊さについて学びたいと思います。

2.学びの意義と目標

この授業では、人種問題の学びをとおして、人間の生き方や価値観、特に人間の尊厳とか人格・人権などの価値についての理解を深め、現代世界に通用する倫理を身に付けることが目指されています。

準備学習(予習)

予習としては、シラバスで授業内容を確認し、下調べをしておくこと。

準備学習(復習)

復習としては、授業で毎回配布される講義内容のプリントを読み返すこと。また必要と関心に応じて、自分でさらに調べ、知識を深めること。この授業では後者に重点を置いてください。

授業計画

1. 授業のオリエンテーション
2. アメリカの宗教的多元化と右派化
3. 「アメリカ黒人の歴史」(1)
4. 「アメリカ黒人の歴史」(2)
5. 「アメリカの教会の歴史」
6. 「フレデリック・ダグラスの生涯と奴隷制」
7. 「南北戦争と奴隷解放宣言」
8. 「奴隷制と教会の取り組み」
9. 「人種隔離政策と黒人たちの戦い」
10. 「M.L. キングと公民権運動」(1)
11. 「M.L. キングと公民権運動」(2)
12. 「M.L. キングと公民権運動」(3)
13. 「マルコムXの戦い」(1)
14. 「マルコムXの戦い」(2)
15. 現代アメリカと人種問題

教科書

プリントを配布する
毎回授業の初めにプリントを配布します。

評価方法

(1)試験:70% (2)出席:20% (3)課題:10%
以上の3点を総合的に判断して成績を出します。ただし、3分の1以上の欠席者、あるいは課題の未提出者は、試験を受ける資格がありませんので、注意すること。

担当者：鈴木 真実哉

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

金融に関する基礎概念の修得に力点を置く。その上で、日本における金融現象を中心に、理論、政策、トピックスについて解説する。とくに、1990年代から現在に至るまでの日本金融史上でも稀である大変革期について、その本質と今後の方向性について解説する。たとえば、金融ビッグ・バン、大蔵省の改組、日本銀行法改正、郵便貯金の民営化、不良債権問題、などである。

2.学びの意義と目標

「金融」に無縁で生活できない現代において、すべての学生に学んでもらいたい科目である。社会科学系統の科目として、政治経済学部における両学科学生にとって共通専門科目となっている。現代の人間として知っておくべき知識を提示している。
現代に生きる人間として知っておくべき「金融」に関する基礎知識を修得できる。難解な金融現象の理解が深まる。

準備学習(予習)

指定する教科書の講義予定箇所をレポート用紙1枚にまとめておくこと。
。シラバスの講義予定テーマについてテキスト(第1回講義において指定する)の相当箇所をよく読んでおくこと。

準備学習(復習)

テキストの講義箇所、板書をまとめて、清書ノートを作成しておくこと。
。

授業計画

1. 金融とは何か
2. 金融とは何か
3. 金融とは何か
4. 金融システム
5. 金融システム
6. 金融市場
7. 金融市場
8. 金融構造
9. 金融構造
10. 貨幣とは何か？
11. 貨幣とは何か？
12. 貨幣とは何か？
13. 貨幣の供給
14. 貨幣の供給
15. 貨幣の供給
16. 貨幣の需要
17. 貨幣の需要
18. 貨幣と利子
19. 貨幣と利子
20. 日本の金融機関
21. 日本の金融市場
22. 日本の金融政策
23. 金融の自由化・国際化
24. 金融の自由化・国際化
25. 不良債権問題
26. 円高
27. 金融界の未来
28. 金融界の未来
29. まとめ
30. まとめ

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)定期試験:90% (2)出席状況:10%
定期試験90%には、レポートによる評価を含むこともある。

経営学

担当者：酒井 祐太郎

開講期：秋学期/春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

1 目的:当科目は、企業の経営・管理の体系的知識を基本的レベルから学ぶことを目的とします。現代は企業の時代と呼ぶことができるほど、我々の生活は企業活動なしには成り立ちません。我々は消費者や労働者という意味でも企業に深くかかわっています。その意味で、企業という組織を多面的に考察することは、社会の構成員としても必須の事と言えます。

実際の講義では、まず我々と企業が基本的などのようなかかわりを持つか、企業が社会の中でどのような役割を持って存在しているか、また企業が社会の様々な要因変化にどのように対応してゆくべきかを考える。

2 カリキュラム上の位置づけ:入門レベルの授業を考えています。経営学のより専門的な内容の導入としての科目として捉えて頂きたい。

2.学びの意義と目標

当授業の到達目標は、経営学の基礎としての専門用語を理解できるようにすること、経済・経営に関する新聞記事等を理解し、読めるようにすること、経営学の中の各専門分野をさらに深く学ぶための基礎力と身につけること、経営学上の財務分析の基礎が自分でできるようにすることである。

準備学習(予習)

授業時に次回の学習内容を告知するので、その内容を参考書等を利用して学習すること。

準備学習(復習)

テーマごとに課題を課すので、それを復習として行い、理解を深めること。

授業計画

- 履修上の注意、企業の役割、環境変化に対する企業の対応(1)
- 環境変化に対する企業の対応(2) (特に国際関係に関して)
- 企業内の階層と経営者 (水平的分業と垂直的分業 1)
- 企業内の階層と経営者 (水平的分業と垂直的分業 2)
- 経営組織について(1) ライン組織、ラインアンドスタッフ組織
- 経営組織について(2) 事業部制組織 1
- 経営組織について(3) 事業部制組織 2、その他の組織の応用形態
- 人的資源管理(1) 労働条件(1)
- 人的資源管理(2) 労働条件(2)
- 人的資源管理(3) 人事制度(1)
- 人的資源管理(4) 人事制度(2)
- 企業形態(1) 合名会社、合資会社
- 企業形態(2) 株式会社(1)
- 企業形態(3) 株式会社(2)
- 企業形態(4) 株式会社(3)
- 企業形態(5) 株式会社(4)
- 所有と経営の分離・一致とは?
- 所有と経営の分離・一致のケーススタディ
- 財務管理の基礎(1) 財務管理とは?
- 財務管理の基礎(2) 貸借対照表の内容
- 財務管理の基礎(3) 損益計算書の内容
- 経営分析の基礎
- 経営分析の基礎 実例分析
- 経営分析の基礎(2)
- マーケティングの基礎 (1) 製品戦略 (2) 価格戦略
- マーケティングの基礎 (3) 広告戦略 (4) 流通戦略
- マーケティングの基礎 (5) 消費のパターン等
- 経営戦略の考え方(1)
- 経営戦略の考え方(2)
- まとめ

教科書

プリントを配布する

評価方法

- (1)定期試験:70%:中間試験および期末試験を実施予定
- (2)課題レポート:30%

担当者：八木 規子

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要**1.内容**

現代の経営学は、複雑、多様化する現実の企業経営に対応すべく、その考察対象を広範にし、また細分化している。このような現状を鑑み、本科目では、その全体像を把握することを目指す。経営学の基礎的概念、基本用語、各理論の概要について解説し、経営学の考察対象である企業の特徴・諸側面について学ぶこととする。

2.学びの意義と目標

経営学の主な研究・考察対象は「企業」である。現在の我々の経済社会は、「企業」に大きく依存し、また影響を受けている。現在の社会現象の多くは、企業との関わりを考慮することなくしては、それらを正しく理解することは困難である。また、企業は、多くの人々の仕事の間である。したがって、企業の仕組みや性質を知ることは、すべてのひとびとにとって重要である。経営学では、企業を理解し、判断するための「見地（ものをみる見方・視点）」を養うことを目標とする。「企業もしくは会社と呼ばれているものは、いったい何なのか」「会社の組織はどうなっていて、それがどのように活動するのか」「企業は、それを取り巻く諸環境とどう結びつき、関わっているか」「どの国の企業もそれぞれ独自性をもつが、日本の企業の特徴は何か」「時代の動きに対応しつつ、望ましい企業経営を行うには、どのようにしたらよいか」これらさまざまな問題について考えていこうとするのが、経営学の目的である。

準備学習(予習)

教科書の該当箇所および追加で配布する資料を読み込んでおくこと。

準備学習(復習)

試験は、講義内容をもとに行うので、講義毎にノートまとめておくこと

授業計画

1. 本科目の進め方について。経営学とは何か
2. 経営学における企業観
3. 企業の分類 1
4. 企業の分類 2
5. ケース分析：公企業、私企業、第三セクター問題
6. 企業の分類 3
7. 株式会社の特徴と仕組み
8. 所有と経営の分離
9. 所有と経営に関する日本企業の現状
10. ケース分析：企業は誰のものか
11. コーポレート・ガバナンス
12. 企業と社会：企業の社会的責任
13. 経営者の役割
14. 前半まとめ
15. 中間試験
16. 伝統的管理論
17. 人間関係論
18. 行動科学的管理論 1
19. 行動科学的管理論 2
20. 近代管理論 1
21. 近代管理論 - 2
22. 企業の組織形態 1
23. 企業の組織形態 2
24. 経営戦略論 1
25. 経営戦略論 2
26. 経営戦略論 3
27. 財務管理論
28. 企業評価
29. 後半まとめ
30. 期末試験

教科書

井原久光『テキスト経営学 基礎から最新の理論まで(MINERVA TEXT LIBRARY)』(ミネルヴァ書房)

評価方法

- (1)授業出席・参加点:20% (2)中間試験:30%
(3)ブックレポート:20%:10% × 2回 (4)期末試験:30%

担当者：後藤 兼一

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

本講義では、前半を理論を中心に後半を実務を中心に学ぶ。前半の理論では、経営管理の意義役割から始まり、管理対象、モデル構築、管理指標などについて、又後半の実務では、経営管理の改革改善から始まり、調査分析、目的目標、組織運営などについて学ぶ。

2.学びの意義と目標

会社の経営管理に関心のある人、及び将来、会社を起業したいと思っている人、親の会社を継ぐかも知れないと思っている人を対象とする。本講義では経営管理とは何かとか、効率化とは何かについてカレー屋やそば屋、及び大手の企業の経営管理を例に実務的に学ぶ。本年度のねらいは経営管理の基本である『マネジメントの切り口』を理解することである。将来実際に企業に入って役に立つと思われる。

準備学習(予習)

コンビニ、ファミレスなどに行った時、経営管理及びマネジメントという観点から観察してみることを。

準備学習(復習)

授業で学習した内容をコンビニ、ファミレスなどの経営管理に照らし合わせて考えてみることを。

授業計画

1. ガイダンス
2. 意義役割から見た切り口
3. 意義役割から見た切り口
4. 管理対象から見た切り口
5. 管理対象から見た切り口
6. モデル構築から見た切り口
7. モデル構築から見た切り口
8. 管理指標から見た切り口
9. 管理指標から見た切り口
10. Q C Dから見た切り口
11. Q C Dから見た切り口
12. 効率化から見た切り口
13. 効率化から見た切り口
14. レベルアップから見た切り口
15. レベルアップから見た切り口
16. 心理的側面から見た切り口
17. 心理的側面から見た切り口
18. 基本概念から見た切り口
19. 基本概念から見た切り口
20. 行動から見た切り口
21. 行動から見た切り口
22. 改革改善から見た切り口
23. 改革改善から見た切り口
24. 調査分析から見た切り口
25. 調査分析から見た切り口
26. 目的目標から見た切り口
27. 目的目標から見た切り口
28. 作業工数から見た切り口
29. 組織運営から見た切り口
30. まとめ

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)出席:50% (2)試験:50%

経済学

担当者：大森 達也

開講期：春学期 必修・選択：必修科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

本講義では、「まんがDE入門 経済学」というのを教科書とし、経済学の基礎、用語および理論等を体系的に学習する。

2.学びの意義と目標

本講義が経済関連の他の講義全般に対する導入部と位置づけられ、経済学に関する基本的な考え方、用語、ミクロ、マクロの理論などを学習することを目的としている。

準備学習(予習)

教科書と連動して講義を進めるので、教科書をあらかじめ読んでおくこと。

準備学習(復習)

試験は、講義したことをもとに行うので、講義毎にノートまとめておくこと。

授業計画

1. 経済学とは
2. ミクロ経済学とマクロ経済学
3. 分業と取引の発生
4. 価格の決定と価格弾力性
5. 消費者と需要の決定
6. 所得と価格の変化を需要
7. 代替財と補完財
8. 労働供給と余暇
9. 生産関数
10. 生産費用と規模の経済
11. 市場均衡とパレート効率性
12. 寡占市場
13. 外部効果と公共財
14. 不確実性と不完全情報
15. まとめ
16. 中間試験
17. マネタリストとケインジアン
18. 産業関連表
19. 国民総生産 (GNP)
20. 財政と金融政策
21. 貯蓄と投資の均衡
22. 消費関数
23. 投資の決定
24. 乗数効果 (IS曲線)
25. 貨幣市場 (LM曲線)
26. ハイパワードマネーと公定歩合
27. 総需要
28. 労働市場と総供給曲線
29. インフレーションと景気循環
30. まとめ

教科書

西村和雄 『まんがDE入門 経済学』(日本評論社)

評価方法

(1)中間試験:35% (2)期末試験:35%
(3)ブックレポート:30%:1200文字程度
3回 × 10%

経済学

担当者：由川 稔

開講期：秋学期 必修・選択：必修科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

経済学は抽象化や理論化という科学的な方法に拠っています。日常生活の中で、しばしば「感情」や「常識」に埋没して見えなくなりがちな経済現象の「本質」を暴き、そこから新しい経済や人間のあり方などを構想するためです。しかしやり方を間違えると、かえって現実を見る目を曇らせてしまいます。授業では、このバランスを重視したいと思います。

2.学びの意義と目標

本来、「経済が人間のためにあるのであって、人間が経済のためにあるのではない」はずですが。しかし現実の経済は、人間を奴隷化する恐ろしい面も持っています。究極的には、私たちが英知と勇気を持って、少なくとも経済の面で明るい未来を築いていくことが、経済学を学ぶ意義であり、目標であると言えるでしょう。

準備学習(予習)

教科書の予習ポイントは毎回指示します。国内外の政治経済動向に十分注意する姿勢を持ち続けてください。

準備学習(復習)

復習は絶対に必要です。何度でも、読んで、書いて...、「頭で」というよりもむしろ「身体で」覚えるくらいの意識で臨んでください。

授業計画

1. 経済学とマネーの暴走 (1)
2. 経済学とマネーの暴走 (2)
3. 経済学とマネーの暴走 (3)
4. 経済学とマネーの暴走 (4)
5. 経済と法 (1)
6. 経済と法 (2)
7. 租税と財政の問題 (1)
8. 租税と財政の問題 (2)
9. 租税と財政の問題 (3)
10. 租税と財政の問題 (4)
11. 新自由主義 (1)
12. 新自由主義 (2)
13. ケインズ理論をめぐって (1)
14. ケインズ理論をめぐって (2)
15. ケインズ理論をめぐって (3)
16. ケインズ理論をめぐって (4)
17. ケインズ理論をめぐって (5)
18. ケインズ理論をめぐって (6)
19. 国際経済 (1)
20. 国際経済 (2)
21. 国際経済 (3)
22. 国際経済 (4)
23. 消費者行動 (1)
24. 消費者行動 (2)
25. 消費者行動 (3)
26. 消費者行動 (4)
27. 生産者行動 (1)
28. 生産者行動 (2)
29. 生産者行動 (3)
30. 生産者行動 (4)

教科書

伊藤元重 『はじめての経済学「上」』 (日本経済新聞出版社)
伊藤元重 『はじめての経済学「下」』 (日本経済新聞出版社)

評価方法

(1)受講態度:30%:授業内小テストを含む (2)レポート等:20%:諸提出物
(3)試験:50%

担当者：鈴木 真実哉

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

現代の経済学の教科書は、過去の経済学の偉人たちの業績の集大成である。これを分解して、個々の経済学者の生き方と理論について解説する。現代では、あまり触れられないことのない経済学の碩学についてもできるだけとりあげる。時代的には、「経済学」が独立した学問となったとされるアダム・スミスの時代以降である。

2.学びの意義と目標

様々な経済理論や政策、制度の背景を理解する科目である。選択専門科目ではあるが、多くの学生に受講してもらいたい。経済思想の歴史を学ぶ科目である。

現代の経済的発展は多くの過去の偉大な経済学者の努力の上に成り立っている。この科目はこの事実を具体的に理解できるようになっている。その生き方と思想は多大な感銘をもたらすであろう。

準備学習(予習)

毎回ミニテーマを示すので次回までにレポート用紙 1 枚程度にまとめておくこと。

シラバスの講義予定テーマについて、全体的なサーベイをして簡単なメモを作成しておくこと。

準備学習(復習)

舞香の板書を整理し、関連書籍を用いて項目ごとに清書ノートを作成しておくこと。

授業計画

1. 序論
2. アダム・スミスと「導徳感情論」
3. アダム・スミスと「国富論」
4. 限界革命と近代経済学の成立
5. 限界革命と近代経済学の成立
6. ジェヴォンズの経済学
7. ジェヴォンズの経済学
8. メンガーの経済学
9. メンガーの経済学
10. ワルラスの経済学
11. ワルラスの経済学
12. 限界革命の展開
13. 限界革命の展開
14. 限界革命の展開
15. 限界革命の展開
16. ケンブリッジ学派
17. ケンブリッジ学派
18. ケンブリッジ学派
19. 不完全競争理論
20. 貨幣理論と物価の変動
21. ケインズの経済学
22. ケインズの経済学
23. ケインズの経済学
24. シュムペーターの経済学
25. シュムペーターの経済学
26. シュムペーターの経済学
27. ハイエクの政治経済学
28. ハイエクの政治経済学
29. ハイエクの政治経済学
30. まとめ

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)定期試験:90% (2)出席状況:10%
この評価対象は、授業日数の2/3以上の出席回数をクリアしている受講者に限る。

現代社会と社会教育 B

担当者：小池 茂子

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

1.内容

第1に、今日問題になっている青少年の自立と社会性の育成をどのようにするかを巡って展開されている「奉仕活動」の学校教育や社会教育政策の中での奨励をめぐる議論について取り上げる。第2に、人間がよりよく生きていくためには、生にまつわる否定的側面の課題（死・病、対象喪失などをめぐる課題）を直視し考えることの必要を説く「生と死の準備教育」がある。「生と死の準備教育」提唱者たちの理念、教育目的、教育内容を紹介し、生涯教育としての「いのち」を考える教育の可能性について考えていきたい。

2.カリキュラム上の位置づけ

社会教育主事の資格取得のための必修科目。（資格取得を目的としない学生の受講も歓迎する。）

2.学びの意義と目標

青年期を生きる人間の生をよきものとするため、どのような教育が必要なのかを受講生が自らの課題として考察することを目標とする。

準備学習(予習)

講義では、教科書を使用しないため、事前に資料を配布して講義を進めていく。そこで毎回の講義に際し、事前に資料に目を通し資料の内容を理解した上で講義に臨むこと。

準備学習(復習)

講義の中で小レポート課し、学生諸君の意見を求めることが間々ある。課題レポート作成に際しては自分で主体的に問題と向き合い、自分の意見を根拠を示して表明することを常に心がけてほしい。

授業計画

- 1.オリエンテーション：教育政策の保守化と青少年教育の動向
- 2.青少年問題（戦後の青少年非行の変遷）・社会のアノミー化
- 3.青少年問題審議会答申に見る青少年問題の今日的動向と教育的課題
- 4.教育改革国民会議の中間報告「学校教育における奉仕活動の義務化」をめぐる議論
- 5.学校教育における「奉仕活動」の是非をめぐる議論
- 6.イギリスにおけるシティズンシップ教育
- 7.サービスマーケティングとは何か
- 8.「死生学」、「死の準備教育」、「いのちの教育」とは何か
- 9.子どもの「死」をめぐる問題に関する意識調査・結果（1）
- 10.子どもの「死」をめぐる問題に関する意識調査・結果（2）
- 11.学校教育におけるいのちをめぐる教育の理念、目的、カリキュラム
- 12.学校教育におけるいのちをめぐる教育の理念、目的、カリキュラム
- 13.中等教育学校段階における「死の準備教育 - 実践事例の紹介 - 」
- 14.社会教育における「死の準備教育 - 実践事例の紹介 - 」
- 15.まとめ

教科書

プリントを配布する
講義の中で扱うテーマに関する資料を事前に配布し、それに基づいて講義を行う。

評価方法

(1)出席点:20% (2)平常点:40% (3)レポート点:40%

現代政治理論

担当者：森 達也

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

<テーマ> 政治的自由論の歴史と現在
政治の存在理由はしばしば自由の達成と保全にあると言われる。歴史上、数多くの人々がこの「自由」の旗印の下に集い、議論し、政府に異議申し立てを行い、時に武器を手に革命を遂行した。自由はきわめて強力な政治的理念である。だが、一見、誰の目にも明らかと思えるこの言葉が実際に何を意味しているのかと問えば、その答えは一様ではない。本講義では政治理論および政治思想史の観点から、自由論の伝統とその現在について考察する。自由は欧米の政治的伝統の中心を占める理念であり、自由をめぐる多様な議論を辿ることは、西洋政治思想の全体像を知ることに等しい。政治学の古典を読み解き、基本的な政治的理念について考えることを通じて、混迷する現代社会における個と共同体のあり方を理解し、進むべき道を見出す一助としたい。

2.学びの意義と目標

政治学の規範的側面に関する理解を深める。政治思想の歴史から現代社会を見通し、そこにおけるわれわれ自身の生活様式を批判的に吟味する。

準備学習(予習)

教科書の次回講義に関連する部分を読んでおくこと。

準備学習(復習)

授業で扱った文献を実際に(図書館などで)手に取り、可能な限り読むこと。

授業計画

1. イントロダクションおよびアンケート
2. 政治的自由とは何か
3. 自由意志と決定論
4. 自由、権力および責任
5. 自由概念の複数性
6. 自由と自由主義(1) 自由主義の歴史と類型
7. 自由と自由主義(2) 映像で学ぶピューリタン革命
8. 自由と自由主義(3) ホッブズ『リヴァイアサン』
9. 自由と自由主義(4) ロック『統治二論』
10. 自由と自由主義(5) スミス『国富論』
11. 自由と自由主義(6) ミル『自由論』
12. 自由と自由主義(7) 古典的自由主義の修正
13. 自由と自由主義(8) ハイエク『隷従への道』
14. 自由と自由主義(9) ロールズ『正義論』
15. 中間試験
16. 自由と共和主義(1) 映像で学ぶ古代ローマ世界
17. 自由と共和主義(2) アリストテレス『政治学』
18. 自由と共和主義(3) マキアヴェリ『ディスコルシ』
19. 自由と共和主義(4) モンテスキュー『法の精神』
20. 自由と共和主義(5) ルソー『社会契約論』
21. 自由と共和主義(6) アーレント『人間の条件』
22. 自由と共和主義(7) ハーバーマス『公共性の構造転換』
23. 自由と共和主義(8) サンデル『民主政の不满』
24. 自由と保守主義(1) ヒューム『原始契約について』
25. 自由と保守主義(2) パーク『フランス革命の省察』
26. 自由と保守主義(3) フィヒテ『ドイツ国民に告ぐ』
27. 自由と社会主義(1) マルクス・エンゲルス『共産党宣言』
28. 自由と社会主義(2) レーニン『帝国主義』
29. 現代社会における自由(1) アイデンティティ
30. 現代社会における自由(2) ライフ・ポリティクス

教科書

岡崎晴輝・木村俊道編『はじめて学ぶ政治学』(ミネルヴァ書房)

評価方法

- (1) 中間試験:35%:論述式
- (2) 最終試験:35%:論述式
- (3) 授業内課題:30%:コメントシートの提出

憲法(人権)

担当者：石川 裕一郎

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

講義内容を「人権」（日本国憲法でいえば第3章「国民の権利及び義務」）に絞られている分、法解釈に重点を置いた、密度の高い講義を行います。とはいえ、その背景にある政治的・経済的・社会的・文化的諸要素にも相当言及する内容になる予定です。

具体的には、内容的に入りやすい刑事手続き上の人権保障（身体的自由）に始まり、人権の一般原則、精神的自由、経済的自由、社会権、参政権、マイノリティの権利等を丁寧に論じてゆくことを考えています。

なお、できるだけアクチュアルな問題を取り上げたいので、内容は多少変更される可能性があります。また、法学に関する講演会または映像作品の鑑賞も2～3回ほど実施する予定です。

2.学びの意義と目標

憲法の一義的目標たる人権保障について学び、人権という視点から政治・経済・社会を考察する能力を身に付けることをめざします。

ところで、本講義では第一にオーソドックスな日本国憲法の通説・判例理解をめざしますが、（公務員試験の予備校ではない）大学の講義ですから、それに留まらず、ポストモダニズム、ネオリベリズム、フェミニズム、マルキシズム、マルチカルチャリズム等から挑戦を受ける「近代」の象徴としての立憲主義の意義を検討する、語本来の意味におけるcritiqueな講義としたいと考えています。

準備学習(予習)

原則として事前にレジュメを配布するので、必ず目を通しておくことを求めます。毎回かなりの分量なので、ある程度の時間と集中力を必要とします。

準備学習(復習)

毎回の講義の後で、習得した知識の確認と講義への主体的な取り組み姿勢を評価することを目的としたリアクションペーパーの作成および提出を課しますので、それを踏まえて次回までに講義内容の理解を定着させることを求めます。

授業計画

1. オリエンテーション
2. 刑事手続上の人権保障(1)
3. 刑事手続上の人権保障(2)
4. 刑事手続上の人権保障(3)
5. 刑事手続上の人権保障(4)
6. 刑事手続上の人権保障(5)
7. 個人の尊重
8. 幸福追求権(1):自己決定権
9. 幸福追求権(2):プライバシー権
10. 公共の福祉
11. 平等原則(1)
12. 平等原則(2)
13. 思想・良心の自由
14. 表現の自由(1)
15. 表現の自由(2)
16. 信教の自由と政教分離原則(1)
17. 信教の自由と政教分離原則(2)
18. 生存権(1)
19. 生存権(2)
20. 労働権(1)
21. 労働権(2)
22. 教育権(1)
23. 教育権(2)
24. 学問の自由と大学自治
25. セクシュアリティ・家族と人権
26. 集団・マイノリティの権利
27. 天皇・皇族と人権
28. 参政権
29. ポストモダンと人権
30. まとめ

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)平常点:80%::リアクションペーパーの記述内容によって評価します。
(2)期末試験:20%:場合によっては期末レポートに変更する可能性もあります。

単なる出席（物理的に教室内に存在すること）だけでは何ら評価の対象となりません。

公共政策論

担当者：鈴木 潔

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

本講義では、これまでの公共政策学の蓄積を利用し、公共政策がどのように決定され、実施され、評価されているかという公共政策のプロセスを中心に説明する。

本講義は、まちづくり学、環境政策論、社会保障論、リスク対策論、社会福祉行政論、公的扶助論、児童福祉論などの個別政策の学習を進めていくうえで、その共通基盤となる公共政策の知識を提供するものである。また、政治学、行政学、地方自治論の知識が、どのように公共政策と関連するかを理解するうえでも役に立つ。

2.学びの意義と目標

社会問題を解決するための手段である公共政策が、どのように決定され、実施され、評価されているかを理解し、国や自治体の公共政策の適否を総合的に判断できる能力を身につけることを目標とする。

準備学習(予習)

受講者は、事前に指示される教科書の当該箇所を読み、用語などを調べておくこと。

また、公共政策は現実の社会問題の解決に寄与することを志す実践的学問であるから、日ごろから時事問題に関心を払っておくことが求められる。

準備学習(復習)

毎回の講義で実施する小テストの内容を十分に確認しておくこと。

授業計画

1. イントロダクション
2. 公共政策とは何か(1) 公共政策の基本構造
3. 公共政策とは何か(2) 公共政策へのアプローチ
4. 公共政策学の系譜(1) 第1期・第2期
5. 公共政策学の系譜(2) 第3期
6. アジェンダ設定(1) アジェンダ設定理論
7. アジェンダ設定(2) 政策決定
8. 政策問題の構造化
9. 公共政策の手段(1) 直接供給と直接規制
10. 公共政策の手段(2) 誘因およびその他の手段
11. 規範的判断(1) 公平、効率性、安全・安心、自由
12. 規範的判断(2) 価値の対立と政策の判断基準
13. 政策決定と合理性(1) 政策決定の合理化への試み
14. 政策決定と合理性(2) 合理的意思決定の限界
15. 政策決定と利益(1) 利益調整としての政策決定過程
16. 政策決定と利益(2) 利益と政治
17. 政策決定と制度
18. レポート報告会
19. 政策決定とアイデア(1) アイディアの概念、アイデアによる影響
20. 政策決定とアイデア(2) 政策へのプロセス
21. 公共政策の実施(1) 位置づけと構造、実施の現場
22. 公共政策の実施(2) 実施研究のアプローチ
23. 公共政策の評価(1) 評価のロジック、政策評価の種類と機能
24. 公共政策の評価(2) 政策評価の政治性と参加
25. 公共政策管理のシステム(1) 市場メカニズムの活用
26. 公共政策管理のシステム(2) 地方分権とガバナンス
27. レポート報告会
28. 応用問題(1) 国際紛争
29. 応用問題(2) 社会保障と税負担
30. 期末試験

教科書

秋吉 貴雄、伊藤 修一郎、北山 俊哉 『公共政策学の基礎(有斐閣ブックス)』(有斐閣)

評価方法

(1)試験:50% (2)レポート:40% (3)平常点:10%:授業貢献度、出席状況

公共哲学

担当者：谷口 隆一郎

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

現代の市民社会とその政策を考えるに当たって、各コミュニティが所属する、社会の各領域に内在する規範と、コミュニティがどう関係するかを理解することはとても重要です。私の「公共倫理」の概念を手がかりに、プラグマティズム的思考に即しつつ、コミュニティの新しい政治学の出来（しゅったい）の経緯と動向について学びます。

公共倫理（コミュニティ間の倫理）、民主的市民精神、多元多文化と寛容、市場の公共性、社会政策にとってのコミュニティの意味、コミュニティリアリズム対リベラリズム論争、等の諸問題と諸課題を取り上げます。

期末試験として、テキストおよび授業内で言及された著作の中から1冊から2冊を選んで、その内容をまとめ報告し、そのうえでそれをレポートないし小論文にまとめて提出してもらおう。

2.学びの意義と目標

将来、公共性の高い仕事（公務員職等）に就きたいと考えている学生にとっては、知っておくといいいテーマと内容が、この講義には含まれているのみならず、現代政治状況を根底から理解するために不可欠な視点が数多く盛り込まれています。コミュニティをどう捉えるかによって、政策への取り組みの考え方がどのように異なるのか、等について整理して学ぶことができます。行政系コースの専門科目の一つです。

準備学習(予習)

テキストの各章を読んで予習する。授業内レポート（BRC：授業内で書き上げる簡単な論述400字程度．BRCについては、オリエンテーションで説明する）の作成を通して予習する。オリエンテーションで、BRCについての別紙シラバスを配布する。

準備学習(復習)

BRCを再読する。授業内予習時間に書き残した未完成のBRCを授業後に完成させる。それにより、授業後の理解を深める。

授業計画

1. オリエンテーション
2. 【総論1】 公共哲学とは何か（1）
3. 【総論2】 公共哲学とは何か（2）
4. 【序章】 3.11の衝撃と公共哲学（1）
5. 【序章】 3.11の衝撃と公共哲学（2）
6. 【第1章】 公共哲学の「人間 社会」観と倫理観（1）
7. 【第1章】 公共哲学の「人間 社会」観と倫理観（2）
8. 【第2章】 メディアと宗教の公共的役割（1）
9. 【第2章】 メディアと宗教の公共的役割（2）
10. 【第3章】 新しい「公共的な諸学」の構想（1）
11. 【第3章】 新しい「公共的な諸学」の構想（2）
12. 【第4章】 正義と人権（1）
13. 【第4章】 正義と人権（2）
14. 【中間試験】
15. 【発展的テーマ】（1）
16. 【発展的テーマ】（2）
17. 【発展的テーマ】（3）
18. 【発展的テーマ】（4）
19. 【発展的テーマ】（5）
20. 【発展的テーマ】（6）
21. 【発展的テーマ】（7）
22. 【発展的テーマ】（8）
23. 【発展的テーマ】（9）
24. 【受講生による研究報告】
25. 【受講生による研究報告】
26. 【受講生による研究報告】
27. 【受講生による研究報告】
28. 3.11が突きつけた諸課題への公共哲学の応答（1）
29. 3.11が突きつけた諸課題への公共哲学の応答（2）
30. まとめと結論

教科書

授業の中で指示する
その他、必要に応じて授業の中でプリントを配布したり、入手する文献を指示したりする。

評価方法

受講者が少数の場合、両試験40%、BRC50%、授業貢献度10%で評価

公的扶助論

担当者：宮寺 良光

開講期：春学期集中 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

- ・公的扶助の概念
- ・貧困・低所得者問題と社会的排除
- ・公的扶助の歴史
- ・生活保護制度の仕組み
- ・生活保護の運営実施体制と関係機関
- ・生活保護の動向
- ・低所得者対策とホームレス対策
- ・自立支援プログラムの意義と実際

2.学びの意義と目標

- ・低所得階層の生活実態とこれを取り巻く社会情勢、福祉ニーズとこの実際について理解する。
- ・相談援助活動において必要となる生活保護制度や生活保護制度に係る他の法制度について理解する。
- ・自立支援プログラムの意義とその実際について理解する。

準備学習(予習)

- (1)講義内容の予習 毎回配付する資料を読解してくる

準備学習(復習)

- (1)講義内容の復習
毎回出題する課題に対して、400文字程度のレポートを提出する

授業計画

1. 公的扶助の概念
2. 貧困・低所得者問題と社会的排除
3. 公的扶助の歴史 (1) 海外の歴史
4. 公的扶助の歴史 (2) 日本の歴史
5. 生活保護制度の仕組み (1) 生活保護法の目的・原理
6. 生活保護制度の仕組み (2) 生活保護法の原則
7. 生活保護制度の仕組み (3) 生活保護の種類と内容
8. 生活保護制度の仕組み (4) 生活保護基準と実施要領
9. 生活保護制度の仕組み (5) 保護施設
10. 生活保護制度の仕組み (6) 被保護者の権利と義務・不服申立てと訴訟
11. 生活保護の運営実施体制と関係機関
12. 生活保護の動向
13. 低所得者対策とホームレス対策
14. 自立支援プログラムの意義と実際
15. 貧困・低所得者に対する相談援助活動

教科書

プリントを配布する

評価方法

- (1)出席:30% (2)小レポート:30% (3)試験:40%

公務員演習

担当者：鈴木 潔

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

公務員試験の教養試験は、社会科学、人文科学、自然科学、数的・判断推理、文章理解・資料解釈など出題範囲が幅広いため、要領よく集中して学習することが求められる。本講義は、大卒程度の警察官、消防官、一般行政職などの採用試験に合格することを目的とし、教養試験に関する厳選された演習問題を実際に解くことで実力の養成を図る。また、演習問題に関連する時事問題の解説を適宜行う。

コミュニティ政策学科の「警察官・消防官・一般行政職公務員試験対策プログラム」の一環であり、公務員試験の受験を志す受講者に対して開講されている。他の公務員講座関係の講義も併せて受講することを強く勧める。

2.学びの意義と目標

教養試験のアウトラインを把握するとともに公務員試験の1次試験に合格する実力を養成することを目標とする。

受講生の苦手分野を中心に過去問に取り組むことにより実力の底上げを図る。

授業計画

1. イントロダクション
2. 演習問題I
3. 演習問題II
4. 演習問題III
5. 演習I～IIIの復習
6. 演習問題IV
7. 演習問題V
8. 演習問題VI
9. 演習IV～VIの復習
10. 演習問題VII
11. 演習問題VIII
12. 演習問題IX
13. 演習VII～IXの復習
14. まとめ
15. 最終試験とその解説

準備学習(予習)

効率的に知識を習得するため、授業で指示した過去問を事前に解いておくこと。

準備学習(復習)

知識の定着を図るため、授業で取り上げた頻出テーマや過去問は必ず復習すること。

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)平常点:70%:授業貢献度、出席状況 (2)試験:30%

公務員演習

担当者：鈴木 潔

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

公務員試験の教養試験は、社会科学、人文科学、自然科学、数的・判断推理、文章理解・資料解釈など出題範囲が幅広いため、要領よく集中して学習することが求められる。本講義は、大卒程度の警察官、消防官、一般行政職などの採用試験に合格することを目的とし、教養試験に関する厳選された演習問題を実際に解くことで実力の養成を図る。また、演習問題に関連する時事問題の解説を適宜行う。

コミュニティ政策学科の「警察官・消防官・一般行政職公務員試験対策プログラム」の一環であり、公務員試験の受験を志す受講者に対して開講されている。他の公務員講座関係の講義も併せて受講することを強く勧める。

2.学びの意義と目標

教養試験のアウトラインを把握するとともに公務員試験の1次試験に合格する実力を養成することを目標とする。

受講生の苦手分野を中心に過去問に取り組むことにより実力の底上げを図る。

授業計画

1. イントロダクション
2. 演習問題I
3. 演習問題II
4. 演習問題III
5. 演習I～IIIの復習
6. 演習問題IV
7. 演習問題V
8. 演習問題VI
9. 演習IV～VIの復習
10. 演習問題VII
11. 演習問題VIII
12. 演習問題IX
13. 演習VII～IXの復習
14. まとめ
15. 最終試験とその解説

準備学習(予習)

効率的に知識を習得するため、授業で指示した過去問を事前に解いておくこと。

教科書

授業の中で指示する

準備学習(復習)

知識の定着を図るため、授業で取り上げた頻出テーマや過去問は必ず復習すること。

評価方法

(1)平常点:70%:授業貢献度、出席状況 (2)試験:30%

公務員講座(数的・判断推理)

担当者：鈴木 潔

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

本講義は大卒程度の警察官、消防官、一般行政職などの採用試験の合格を目的としている。これらの採用試験は職種により試験出題科目は異なるが、教養試験は全職種の採用試験に共通し、警察官・消防官の採用試験は全国どこでも教養試験のみで第一次の合否が判定されている。教養試験を一般知識分野と一般知能分野とに分け、過去の出題傾向・実際の試験問題を分析した上で、試験合格に必要な水準に無理なく無駄なく達することのできるよう、演習を取り入れながら進めていく。本講義では一般知能分野の核となる判断推理・数的推理・資料解釈を取り上げる。

コミュニティ政策学科の「警察官・消防官・一般行政職公務員試験対策プログラム」の最も重要な科目の一つである。

2.学びの意義と目標

公務員としての基礎知識を身につけ、公務員試験の1次試験を合格する力をつけることが、本講義の目標である。

準備学習(予習)

効率的に知識を習得するため、教科書の該当部分を事前に読んでおくこと。

準備学習(復習)

知識の定着を図るため、授業で取り上げた頻出テーマや過去問は必ず復習すること。

授業計画

- 1.判断推理 論理
- 2.判断推理 対応関係
- 3.判断推理 勝敗
- 4.判断推理 発言内容
- 5.判断推理 順序・手順
- 6.判断推理 数値からの推定
- 7.判断推理 配置・席順・方位
- 8.判断推理 軌跡
- 9.判断推理 平面図形の分割・構成
- 10.判断推理 投影図・陰影
- 11.判断推理 展開図
- 12.判断推理 立体の分割・構成
- 13.数的推理 整数問題
- 14.数的推理 公約数・公倍数
- 15.数的推理 方程式の応用
- 16.数的推理 速さ・時間・距離
- 17.数的推理 比・比例
- 18.数的推理 年齢算・仕事算・時計算
- 19.数的推理 場合の数・順列・組合せ
- 20.数的推理 確率・期待値
- 21.数的推理 平面図形(三角形・多角形)
- 22.数的推理 立体の体積・容積
- 23.資料解釈 図表題(実数・割合)
- 24.資料解釈 数表題(実数・割合)
- 25.資料解釈 伸び率他
- 26.資料解釈 複数の数表・図表題
- 27.補足・追加(1)
- 28.補足・追加(2)
- 29.補足・追加(3)
- 30.補足・追加(4)

教科書

資格試験研究会『[大卒程度]警察官・消防官 新スーパー過去問ゼミ 数的推理』(実務教育出版)
資格試験研究会『[大卒程度]警察官・消防官 新スーパー過去問ゼミ 判断推理』(実務教育出版)
資格試験研究会『[大卒程度]警察官・消防官 新スーパー過去問ゼミ 文章理解・資料解釈』(実務教育出版)

評価方法

(1)試験:100%

中間試験および期末試験の結果で成績をつける。実際の公務員試験の合格ラインを基準に評価する。期末試験は、第16週目に行く。中間試験は、15週目を目安に実施する。

公務員講座(人文・社会)

担当者：鈴木 潔

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

本講義は大卒程度の警察官、消防官、一般行政職などの採用試験の合格を目的としている。これらの採用試験は職種により試験出題科目は異なるが、教養試験は全職種の採用試験に共通し、警察官・消防官の採用試験は全国どこでも教養試験のみで第一次の合否が判定されている。教養試験を一般知識分野と一般知能分野とに分け、過去の出題傾向・実際の試験問題を分析した上で、試験合格に必要な水準に無理なく無駄なく達することのできるよう、演習を取り入れながら進めていく。本講義では一般知識分野の人文科学と社会科学を対象にして、特に過去において繰り返し出題されてきた頻出分野を重点的に取扱う。

コミュニティ政策学科の「警察官・消防官・一般行政職公務員試験対策プログラム」の最も重要な科目の一つである。

2.学びの意義と目標

公務員としての基礎知識を身につけ、公務員試験の1次試験を合格する力をつけることが、本講義の目標である。

準備学習(予習)

効率的に知識を習得するため、教科書の該当部分を事前に読んでおくこと。

準備学習(復習)

知識の定着を図るため、授業で取り上げた頻出テーマや過去問は必ず復習すること。

授業計画

1. 政治「各国の政治制度」
2. 政治「わが国の政策」
3. 政治「選挙制度」
4. 政治「地方自治」
5. 政治「日本国憲法の基本原理」
6. 政治「基本的人権の保障と制約」
7. 政治「国会・内閣」
8. 政治「裁判所・国会の権限」
9. 経済「ミクロ 余剰分析」
10. 経済「ミクロ 消費者行動」
11. 経済「マクロ 経済循環と国民所得」
12. 経済「マクロ 貨幣数量説と物価変動」
13. 経済「国内経済事情」
14. 経済「世界経済事情」
15. 社会・時事「現代社会の諸相」
16. 社会・時事「国際社会の諸相」
17. 日本史「幕藩体制の変遷」
18. 日本史「両世界大戦と日本」
19. 日本史「通史 土地・貨幣・税制」
20. 日本史「通史 文化・仏教・教育史」
21. 世界史「市民革命と産業革命」
22. 世界史「近代国家の成立」
23. 世界史「第二次大戦後の国際政治」
24. 世界史「中国近・現代史」
25. 地理「気候・農林水産業」
26. 地理「地誌 民族と国家」
27. 補足・追加(1)
28. 補足・追加(2)
29. 補足・追加(3)
30. 補足・追加(4)

教科書

資格試験研究会『[大卒程度]警察官・消防官 新スーパー過去問ゼミ 社会科学』(実務教育出版)
資格試験研究会『[大卒程度]警察官・消防官 新スーパー過去問ゼミ 人文科学』(実務教育出版)

評価方法

(1)試験:100%

中間試験および期末試験の結果で成績をつける。実際の公務員試験の合格ラインを基準に評価する。期末試験は、第16週目に行う。中間試験は、15週目を目安に実施する。

公務員講座(専門A)

担当者：鈴木 潔

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

この講義は市役所など地方公務員上級試験の合格を目的としている。公務員試験は、教養試験と専門試験から構成され、本講義は専門試験を対象としている。

専門試験の科目としては、政治学、行政学、社会政策、社会学、国際関係、憲法、行政法、民法、刑法、労働法、経済原論、財政学、経済史、経済政策と極めて幅広い。過去の出題傾向・実際試験問題を踏まえて、試験合格に必要な水準に無理なく無駄なく達することのできるよう、演習を取入れながら授業を進める。

また、授業の中では、公務員に求められる文章技法や表現方法についても指導を行う。

なお、受講生の希望進路を踏まえ、授業内容を適宜変更する場合がある。

2.学びの意義と目標

公務員としての基礎知識を身につけ、公務員試験の1次試験を合格する力をつけることが、本講義の目標である。

準備学習(予習)

公務員試験の受験を真剣に考えている学生向けの特別の講義であることをわきまえ、事前準備のうえ、積極的に授業に臨むこと。

準備学習(復習)

授業内容について、自ら確認し、定着を図ること。

授業計画

1. ガイダンス
2. 講義と演習「専門(1):行政学 1」
3. 講義と演習「専門(2):社会学 1」
4. 講義と演習「専門(1):行政学 2」
5. 講義と演習「専門(2):社会学 2」
6. 講義と演習「専門(1):行政学 3」
7. 講義と演習「専門(2):社会学 3」
8. 講義と演習「専門(1):行政学 4」
9. 講義と演習「専門(2):社会学 4」
10. 講義と演習「専門(1):行政学 5」
11. 講義と演習「専門(2):社会学 5」
12. 講義と演習「専門(1):行政学 6」
13. 講義と演習「専門(2):社会学 6」
14. 講義と演習「専門(4):政治学 1」
15. 講義と演習「専門(3):財政学 1」
16. 講義と演習「専門(4):政治学 2」
17. 講義と演習「専門(3):財政学 2」
18. 講義と演習「専門(4):政治学 3」
19. 講義と演習「専門(3):財政学 3」、文章技法・表現方法
20. 講義と演習「専門(4):政治学 4」
21. 講義と演習「専門(3):財政学 4」、文章技法・表現方法
22. 講義と演習「専門(4):政治学 5」
23. 講義と演習「専門(3):財政学 5」、文章技法・表現方法
24. 講義と演習「専門(4):政治学 6」
25. 講義と演習「専門(3):財政学 6」、文章技法・表現方法
26. 講義と演習「専門(5):民法(1) 1」
27. 講義と演習「専門(5):民法(1) 2」
28. 講義と演習「専門(5):民法(1) 3」
29. 講義と演習「専門(5):民法(1) 4」
30. 講義と演習「専門(5):民法(1) 5」、春学期のまとめ

教科書

東京工学院専門学校『最新最強の地方公務員問題 初級 '13年版』(成美堂出版)
<参考図書として>資格試験研究会『[大卒程度]警察官・消防官 新スーパージョブ過去問ゼミ 社会科学』(実務教育出版)

評価方法

(1)授業参加度:50%:出席、質疑応答等 (2)期末試験:50%
授業参加度、期末試験を総合的に評価する

公務員講座(専門B)

担当者：鈴木 潔

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

1.内容

この講義は市役所など地方公務員上級試験の合格を目的としている。公務員試験は、教養試験と専門試験から構成され、本講義は専門試験を対象としている。

専門試験の科目としては、政治学、行政学、社会政策、社会学、国際関係、憲法、行政法、民法、刑法、労働法、経済原論、財政学、経済史、経済政策と極めて幅広い。公務員講座(専門A)に引き続き、過去の出題傾向・実際試験問題を踏まえて、試験合格に必要な水準に無理なく無駄なく達することのできるよう、演習を取入れながら授業を進める。また、授業の中では、公務員に求められる文章技法や表現方法についても指導を行う。

なお、受講生の希望進路を踏まえ、授業内容を適宜変更する場合がある。

2.学びの意義と目標

公務員としての基礎知識を身につけ、公務員試験の1次試験を合格する力をつけることが、本講義の目標である。

準備学習(予習)

公務員試験の受験を真剣に考えている学生向けの特別の講義であることをわきまえ、事前準備のうえ、積極的に授業に臨むこと。

準備学習(復習)

授業内容について、自ら確認し、定着を図ること。

授業計画

1. 秋学期ガイダンス、講義と演習「専門(6):憲法1」
2. 講義と演習「専門(7):マクロ経済1」
3. 講義と演習「専門(6):憲法2」
4. 講義と演習「専門(7):マクロ経済2」
5. 講義と演習「専門(6):憲法3」
6. 講義と演習「専門(7):マクロ経済3」
7. 講義と演習「専門(6):憲法4」
8. 講義と演習「専門(7):マクロ経済4」
9. 講義と演習「専門(6):憲法5」
10. 講義と演習「専門(7):マクロ経済5」
11. 講義と演習「専門(6):憲法6」
12. 講義と演習「専門(8):ミクロ経済1」
13. 講義と演習「専門(6):憲法7」
14. 講義と演習「専門(8):ミクロ経済2」
15. 講義と演習「専門(6):憲法8」
16. 講義と演習「専門(8):ミクロ経済3」
17. 講義と演習「専門(10):行政法1」
18. 講義と演習「専門(9):経営学1」、文章技法・表現方法
19. 講義と演習「専門(10):行政法2」
20. 講義と演習「専門(9):経営学2」、文章技法・表現方法
21. 講義と演習「専門(10):行政法3」
22. 講義と演習「専門(9):経営学3」、文章技法・表現方法
23. 講義と演習「専門(10):行政法4」
24. 講義と演習「専門(9):経営学4」、文章技法・表現方法
25. 講義と演習「専門(11):民法(2)1」
26. 講義と演習「専門(11):民法(2)2」
27. 講義と演習「専門(11):民法(2)3」
28. 講義と演習「専門(11):民法(2)4」
29. 講義と演習「専門(11):民法(2)5」
30. 講義と演習「専門(11):民法(2)6」、秋学期のまとめ

教科書

東京工学院専門学校『最新最強の地方公務員問題 初級 '13年版』(成美堂出版)
<参考図書として>資格試験研究会『[大卒程度]警察官・消防官 新スーパー過去問ゼミ 社会科学』(実務教育出版)

評価方法

(1)授業参加度:50%:出席、質疑応答等 (2)期末試験:50%
授業参加度、期末試験を総合的に評価する。

公務員講座(文章理解)

担当者：大槻 岳

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

1.内容

本講義は大卒程度の警察官、消防官、一般行政職などの採用試験の合格を目的としている。これらの採用試験は職種により試験出題科目は異なるが、教養試験は全職種の採用試験に共通し、警察官・消防官の採用試験は全国どこでも教養試験のみで第一次の合否が判定されている。教養試験を一般知識分野と一般知能分野とに分け、過去の出題傾向・実際の試験問題を分析した上で、試験合格に必要な水準に無理なく無駄なく達することのできるよう、演習を取り入れながら進めていく。本講義では一般知能分野の核となる文章理解を取り上げるとともに、二次試験で課される教養論文の対策にも触れていく。

2.学びの意義と目標

公務員としての基礎知識を身につけ、公務員試験の1次試験を合格する力をつけることが、本講義の目標である。
この講座はコミュニティ政策学科の「警察官・消防官・一般行政職公務員試験対策プログラム」の最も重要な科目の一つであるので、公務員試験を意識している学生にはぜひ受講してもらいたい。

準備学習(予習)

前回内容の復習。各問題の解答を覚えるのではなく、なぜその選択肢が正解となるのか(なぜその選択肢が不正解となるのか)の根拠を理解するように心がけてください。

準備学習(復習)

授業内で演習した問題の復習。各問題の解答を覚えるのではなく、なぜその選択肢が正解となるのか(なぜその選択肢が不正解となるのか)の根拠を理解するように心がけてください。

授業計画

- 1.文章理解 概要解説
- 2.論作文 概要解説
- 3.文章理解 要旨把握(人文)
- 4.論作文演習
- 5.文章理解 要旨把握(哲学)
- 6.文章理解 内容把握(人文)
- 7.文章理解 内容把握(哲学)
- 8.論作文演習
- 9.文章理解 傍線部問題
- 10.文章理解 空欄補充
- 11.文章理解 文意整序
- 12.論作文演習
- 13.文章理解 英文要旨把握
- 14.文章理解 英文内容把握
- 15.文章理解 英文空欄補充
- 16.論作文演習
- 17.文章理解 古文要旨把握
- 18.文章理解 古文傍線部問題
- 19.文章理解 総合演習
- 20.論作文演習
- 21.文章理解 総合演習
- 22.文章理解 総合演習
- 23.文章理解 総合演習
- 24.論作文演習
- 25.文章理解 総合演習
- 26.文章理解 総合演習
- 27.文章理解 総合演習
- 28.論作文演習
- 29.文章理解 総合演習
- 30.授業内試験を予定

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)出席点:60% (2)毎回の課題:10% (3)学期末テスト:30%

公務員講座演習 A (数的・判断推理)

担当者：鈴木 潔

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

本講義は、大卒程度の警察官、消防官、一般行政職などの採用試験に合格することを目的とし、教養試験で出題される一般知識分野（数的・判断推理）を対象に、演習中心の授業形態をとる。過去の採用試験で実際に出題された問題について、受講者による自習を基本としつつ、出題傾向の把握と頻出テーマの解説等を適宜行うこととする。

公務員試験対策プログラムの一環であり、公務員講座（数的・判断推理）と並行して履修する学生、過去に同公務員講座を受講した学生、公務員マスター講座（キャリアサポートセンター実施）の受講者のみが本講座を履修することができる。

2.学びの意義と目標

教養試験のアウトラインを把握するとともに公務員試験の1次試験に合格する実力を養成することを目標とする。

準備学習(予習)

効率的に知識を習得するため、教科書の該当部分を事前に読んでおくこと。

準備学習(復習)

知識の定着を図るため、授業で取り上げた頻出テーマや過去問は必ず復習すること。

授業計画

- 1.判断推理:論理、対応関係
- 2.判断推理:勝敗、発言内容
- 3.判断推理:順序・手順、数値からの推定
- 4.判断推理:配置・席順・方位、軌跡
- 5.判断推理:平面図形の分割・構成、投影図・陰影
- 6.判断推理:展開図、立体の分割・構成
- 7.数的推理:整数問題、公約数・公倍数
- 8.数的推理:方程式の応用、速さ・時間・距離
- 9.数的推理:比・比例、年齢算・仕事算・時計算
- 10.数的推理:場合の数・順列・組合せ、確率・期待値
- 11.数的推理:平面図形（三角形・多角形）、立体の体積・容積
- 12.資料解釈:図表題（実数・割合）、数表題（実数・割合）
- 13.資料解釈:伸び率他、複数の数表・図表題
- 14.まとめ（1）
- 15.まとめ（2）

教科書

資格試験研究会 『判断推理がみるみるわかる! 解法の玉手箱[改訂版]』(実務教育出版)
資格試験研究会 『数的推理がみるみるわかる! 解法の玉手箱[改訂版]』(実務教育出版)

評価方法

(1)平常点:100%
平常点（出席状況＋講義内で適宜実施する小テスト）で総合的に評価する。特に出席状況を重視する。

公務員講座演習 A(人文・社会)

担当者：鈴木 潔

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

本講座は、大卒程度の警察官、消防官、一般行政職などの採用試験に合格することを目的とし、教養試験で出題される一般知識分野（人文・社会）を対象に演習中心の授業形態をとる。過去の採用試験で実際に出題された問題について、受講者による自習を基本としつつ、出題傾向の把握と頻出テーマの解説などを適宜行うこととする。

コミュニティ政策学科の「警察官・消防官・一般行政職公務員試験対策プログラム」の一環であり、公務員講座（人文・社会）と並行して履修する学生、過去に公務員講座を受講したことのある学生、公務員試験マスター講座II（キャリアサポートセンター実施）の受講者のみが本講座を受講することができる。

2.学びの意義と目標

教養試験のアウトラインを把握するとともに公務員試験の1次試験に合格する実力を養成することを目標とする。

準備学習(予習)

効率的に知識を習得するため、教科書の該当部分を事前に読んでおくこと。

準備学習(復習)

知識の定着を図るため、授業で取り上げた頻出テーマや過去問は必ず復習すること。

授業計画

1. 政治（法の基礎理論・基本的人権）
2. 政治（国会・内閣・裁判所・各法律の基本問題）
3. 政治（政治の基礎理論・政治制度）
4. 政治（選挙制度・国際政治）
5. 経済（ミクロ経済学・マクロ経済学）
6. 経済（財政政策・金融政策）
7. 経済（日本と世界の経済事情）
8. 社会・時事（国際社会・国内問題）
9. 日本史（古代～江戸時代）
10. 日本史（近代・現代）
11. 世界史（古代・中世～市民革命と産業革命）
12. 世界史（自由主義・帝国主義～現代社会）
13. 地理（自然地形・気候）
14. 地理（世界の産業・諸地域）
15. まとめ（理解度の確認）

教科書

資格試験研究会 〓 [大卒程度] 警察官・消防官 新スーパー過去問ゼミ 社会科学』（実務教育出版）
資格試験研究会 〓 [大卒程度] 警察官・消防官 新スーパー過去問ゼミ 人文科学』（実務教育出版）

評価方法

(1)平常点:70%:授業貢献度、出席等 (2)試験:30%

公務員特講(自治体研究 A)

担当者：猪狩 廣美

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

最近の地方自治体を取り巻く状況を前提として
(1)公務員の仕事の特性
(2)自治体の業務の実際
(3)進路としての公務員等について、
実例を題材とする一方、バズセッション等を織り交ぜて理解を深める。

2.学びの意義と目標

自治体が社会の中でどのような役割を担い、どのような事業を展開しているのか、理解を深めるとともに、その業務を担う地方公務員の取り組みを学ぶことを通して、自らの進路を考える一助としたい。

準備学習(予習)

開講までに、高等学校の政治経済の教科書を読み返しておきましょう。
開講後は、逐次指示します。

準備学習(復習)

受講後は、内容を取りまとめ、知識として整理するとともに、新聞等マスコミで報道される自治体の取り組みなどにも注意を払い、一人の住民・主権者としての意識を涵養していくことを望みます。

授業計画

1. イントロダクション
2. 地方自治体の役割(1)
3. 地方自治体の役割(2)
4. 地方自治体の役割(3)
5. 自治体の業務(1)
6. 自治体の業務(2)
7. 自治体の業務(3)
8. 自治体の業務(4)
9. 自治体の業務(5)
10. 自治体の業務(6)
11. 自治体の業務(7)
12. 自治体の業務(8)
13. 自治体で働くということ(1)
14. 自治体で働くということ(2)
15. 公務員になるために・まとめ

教科書

授業の中で指示する

評価方法

- (1)出席状況:30% (2)一言メモ提出:30%:毎回の授業の感想メモです
(3)レポート:40%:詳細は授業で指示します

公務員特講(自治体研究 B)

担当者：北川 嘉昭

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

福祉や教育、防災、街づくりなど、自治体の基幹的な業務に加え、タバコのポイ捨て禁止やレジ袋規制、ゆるキャラやB1グランプリ、ゴミ屋敷対策など、全国自治体の特色ある施策などについて、その背景、期待される効果、課題等をわかりやすく説明する。

2.学びの意義と目標

地域社会の抱える課題と対策について認識を深めることを通じて、自治体等への就職に対するモチベーションを高めることを目標とする。

準備学習(予習)

新聞を読み、地域のイベントへ参加に参加するなど、地域社会の出来事や課題に関心をもってください。

準備学習(復習)

テレビや新聞などで講義に関連した情報に接したとき、自治体や住民はどうすべきかについて、自分なりの考え方をまとめてみてください。

授業計画

1. 地方自治・公共政策について
2. 事例研究（都市計画）
3. 事例研究（道路、再開発、景観）
4. 事例研究（防犯、感染症、ICT等の危機管理）
5. 事例研究（震災対策）
6. 事例研究（子育て支援）
7. 事例研究（教育）
8. 事例研究（高齢者福祉）
9. 事例研究（障害者福祉など）
10. 事例研究（産業振興）
11. 事例研究（地域活性化）
12. 事例研究（地域活性化）
13. 事例研究（環境・リサイクル）
14. 事例研究（行政改革）
15. これからの公共サービス、公務員

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)出席:50% (2)レポート:50%

国際人権・人道法

担当者：小松崎 利明

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

本講義では、世界各地に見られる、基本的人権が保障されない状況、あるいは武力紛争によって人々の生活や生命が脅かされる状況に対して、国際法の一分野である国際人権法や国際人道法がどのように取り組んできたのかを学習し、それらの現代世界における意義と問題点を考える。

2.学びの意義と目標

人権とは何か、なぜ人権尊重が重要なのか、人権の保護はどうすれば確保できるのか、さらに、現代世界において武力の行使はどのように規制されるのか、武力紛争下において人間の生命や基本的権利はどのように保護されるのかといった問題を、法的な視点から考察する能力を養う。

準備学習(予習)

配布資料を読んでおく。

準備学習(復習)

授業で配布されたレジュメや資料の内容をおさらいし、疑問点や理解が不十分な点を整理する。

授業計画

1. 講義概要説明
2. 現代国際社会における人権・人道規範
3. 法的なものの見方と考え方(1)
4. 法的なものの見方と考え方(2)
5. 国際法概論(1)
6. 国際法概論(2)
7. 国際人権法の歴史的展開(1)
8. 国際人権法の歴史的展開(2)
9. 国連システムにおける人権規範 世界人権宣言(1)
10. 国連システムにおける人権規範 世界人権宣言(2)
11. 国連システムにおける人権規範 国際人権規約(1)
12. 国連システムにおける人権規範 国際人権規約(2)
13. 国連システムにおける国際人権法の実施措置(1)
14. 国連システムにおける国際人権法の実施措置(2)
15. 地域的国際機構による人権の保護(1)
16. 地域的国際機構による人権の保護(2)
17. 国際人道法の歴史的展開(1)
18. 国際人道法の歴史的展開(2)
19. 戦闘の手段・方法に関する規則(1)
20. 戦闘の手段・方法に関する規則(2)
21. 紛争犠牲者の保護に関する規則(1)
22. 紛争犠牲者の保護に関する規則(2)
23. 「テロとの戦い」と人権・人道法(1)
24. 「テロとの戦い」と人権・人道法(2)
25. 国際刑事裁判制度 戦争犯罪人の処罰(1)
26. 国際刑事裁判制度 戦争犯罪人の処罰(2)
27. 真実和解委員会 紛争後の和解を求めて(1)
28. 真実和解委員会 紛争後の和解を求めて(2)
29. 人権・人道をめぐる法と政治との相克(1)
30. 人権・人道をめぐる法と政治との相克(2)

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)平常点:20% (2)リアクション・ペーパー:30% (3)期末試験:50%

国際ビジネスの現場 A

担当者：吉田 博司

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1. 内容

春学期開講、15コマを複数の講師が講義する、オムニバス方式の講座である。講師はいずれも、戦後の日本経済を牽引した各種基幹産業に勤務し、主に国際ビジネスの現場で活躍した元ビジネスマンである。講義の内容は、講師たちの実務体験に基づいた生々しい仕事の現場の状況や、各講師の勤務した各産業における全体構造の変遷、現状、そしてそれぞれの産業が抱える問題点や、将来の課題などを語る。

また、将来実業界を目指す学生たちに対して、実社会で働く心構えや、ビジネスに対する基本的な考え方など、社会人の先輩としての各講師からのメッセージが送られる。

本講座の続編として、秋学期開講の「国際ビジネスの現場 B」がある。日本の産業界の実像を把握するために、両講座を継続して受講することが望ましい。

2. 学びの意義と目標

本講座で講師たちの語る内容は、分かりやすい現実論である。実社会とはいかなるところか。仕事の現場では、どのようなことが行われているのか。また海外のビジネスの現場は、国内とどのように違うのか。そこで求められるものとは何か。

複数の講師たちが語る様々なメッセージを注意深く聴き、自ら咀嚼し、理解できないところは講師に質問する。講義に対するそのような積極的な態度をとることを通じて、必ずや将来の糧となるものが得られるはずである。

本講座を受講することで、世界に向ける目を養って欲しい。世界は広く、そこには多様、多彩な活躍の場が待っていることを、学んで欲しい。

準備学習(予習)

次回講師の講義テーマに関連し、関心ある事項を調べておくこと。また、講師への質問を準備しておくこと。

準備学習(復習)

初講を除き、各講師は2コマずつ担当する。各講師の1コマ目の講義内容を復習し、疑問点を2コマ目の講義の際に講師に対して質問すること。

授業計画

1. 国際ビジネスを楽しむ。 講師：佐治洋一（元日立製作所）
2. 日本のエネルギー供給を確保する現場1 講師：隈元泰弘（元三菱商事）
3. 日本のエネルギー供給を確保する現場2 講師：隈元泰弘（元三菱商事）
4. 日本製品を世界に売り込む～鉄鋼輸出の場合～1 講師：高崎浩敏（元JFEスチール）
5. 日本製品を世界に売り込む～鉄鋼輸出の場合～2 講師：高崎浩敏（元JFEスチール）
6. 貿易摩擦を乗り越えて～日本の自動車産業が世界をリードするまで～1 講師：佐藤貞義（元本田技研工業）
7. 貿易摩擦を乗り越えて～日本の自動車産業が世界をリードするまで～2 講師：佐藤貞義（元本田技研工業）
8. 国際市場における日本の製造業の特徴1～最大市場中国での競争を中心事例として～ 講師：奥信彦（元コマツ）
9. 国際市場における日本の製造業の特徴2～最大市場中国での競争を中心事例として～ 講師：奥信彦（元コマツ）
10. 消費財・日用品・雑貨のビジネス現場から、国際交流へのヒント1 講師：富田俊彦（元三井物産）
11. 消費財・日用品・雑貨のビジネス現場から、国際交流へのヒント2 講師：富田俊彦（元三井物産）
12. グローバルビジネスのさきがけ～世界を駆ける石油化学製品のトレード～1 講師：眞弓博司（元丸紅）
13. グローバルビジネスのさきがけ～世界を駆ける石油化学製品のトレード～2 講師：眞弓博司（元丸紅）
14. 日本の食糧供給を確保する現場1 世界の食糧需給と諸問題 商社の開発輸入戦略と課題 講師：田内裕（元三井物産）
15. 日本の食糧供給を確保する現場2 世界の食糧需給と諸問題 商社の開発輸入戦略と課題 講師：田内裕（元三井物産）

教科書

プリントを配布する

評価方法

- (1)出席日数による加点減点:10%
- (2)課題レポート提出:90%:7人の講師が、レポート課題提示出席日数がコマ数の2/3未満は評価対象外

国際ビジネスの現場B

担当者：柴田 武男

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1. 内容

秋学期開講、15コマを複数の講師が講義する、オムニバス方式の講座である。講師はいずれも、現在の日本経済を牽引する各種基幹産業に勤務し、主に国際ビジネスの現場で活躍した元ビジネスマンである。講義の内容は、講師たちの実務体験に基づいた生々しい仕事の現場の状況や、各講師の勤務した各産業における全体構造の変遷、現状、そしてそれぞれの産業が抱える問題点や、将来の課題などを語る。

また、将来実業界を目指す学生たちに対して、実社会で働く心構えや、ビジネスに対する基本的な考え方など、社会人の先輩としての各講師からのメッセージが送られる。

本講座は、春学期開講の「国際ビジネスの現場A」の続編である。春学期は主に、戦後経済成長を担った主力産業を取り上げるが、秋学期は比較的新しく台頭し、変貌の只中にある産業を中心に取り上げる。春学期「国際ビジネスの現場A」と本講座を、継続して受講することが望ましい。

2. 学びの意義と目標

本講座で講師たちの語る内容は、分かりやすい現実論である。実社会とはいかなるところか。仕事の現場では、どのようなことが行われているのか。また海外のビジネスの現場は、国内とどのように違うのか。そこで求められるものとは何か。

複数の講師たちが語る様々なメッセージを注意深く聴き、自ら咀嚼し、理解できないところは講師に質問する。講義に対するそのような積極的な態度をとることを通じて、必ずや将来の糧となるものが得られるはずである。

本講座を受講することで、世界に向ける目を養って欲しい。世界は広く、そこには多様、多彩な活躍の場が待っていることを、学んで欲しい。

準備学習(予習)

次回講師の講義テーマに関連し、関心ある事項を調べておくこと。また、講師への質問を準備しておくこと。

準備学習(復習)

初講を除き、各講師は2コマずつ担当する。各講師の1コマ目の講義内容を復習し、疑問点を2コマ目の講義の際に講師に対して質問すること。

授業計画

1. 国際ビジネスに生きる 講師：佐治洋一（元日立製作所）
2. 商社食料ビジネスの現場1 講師：川村勝司（元双日）
3. 商社食料ビジネスの現場2 講師：川村勝司（元双日）
4. 世界を疾走するマネービジネスの現場1 講師：原正則（元三井住友信託銀行）
5. 世界を疾走するマネービジネスの現場2 講師：原正則（元三井住友信託銀行）
6. 地球環境を守るビジネスとは1 講師：村野隆一（元三井物産）
7. 地球環境を守るビジネスとは2 講師：村野隆一（元三井物産）
8. ある消費財メーカーの事業構造大転換1～生き残りを賭けたデジタル革命下における企業戦略とは～講師：坂部正治（元富士フィルム）
9. ある消費財メーカーの事業構造大転換2～生き残りを賭けたデジタル革命下における企業戦略とは～講師：坂部正治（元富士フィルム）
10. グローバルビジネスを下支えする世界物流1 講師：児玉正博（元日本通運）
11. グローバルビジネスを下支えする世界物流2 講師：児玉正博（元日本通運）
12. 日々進化するネットビジネスの現場1 講師：鷹取功（元野村総合研究所）
13. 日々進化するネットビジネスの現場2 講師：鷹取功（元野村総合研究所）
14. グローバル時代の電機メーカーの経営戦略1 講師：木村行裕（元東芝）
15. グローバル時代の電機メーカーの経営戦略2 講師：木村行裕（元東芝）

教科書

授業の中で指示する

評価方法

- (1)出席日数により加点減点:10%
- (2)課題レポート提出:90%:7人の講師が、レポート課題提示出席日数がコマ数の2/3未満は評価対象外

コミュニケーション学

担当者：小笠原 尚宏

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

私たちは自分自身や他者と、集団・組織と、多様な関わりの中で生きている。感情、意思、情報などを交換するコミュニケーションなしに、私たちの生活は成立しない。この講義では、「コミュニケーション」という視点を通して私たちの日常生活を捉え直し、多様な関係性とそのあり方について考える視座の形成を目的とする。具体的には、(1)基礎的知識の習得、(2)事例検討による実践的・実証的な問題解決のための視点と方法を学ぶ。

また、この授業は関連領域の学習に際して必要となる「コミュニケーション」を理解するための基礎的内容となる。また、たとえば地域社会論、家族関係論、組織論等の入門としても位置づけられるので、積極的な履修を望みたい。

2.学びの意義と目標

個人化、私事化の進行が指摘される現代社会にあって、あらためて絆をつなぐコミュニケーションの役割が重要視されている。紐帯や関係性の喪失、コミュニケーション不全といった問題を理解し、さらにはそれらを解決していくために必要な知識の習得を目標としたい。

準備学習(予習)

時事問題を事例として取り上げるため新聞に目を通しておくこと。また、翌週の学習に関連した資料を配付し、事前課題を課す場合がある。

準備学習(復習)

各単元の終了時に、復習課題および小レポート課題を課す。これによって講義内容の確実な定着を図ってほしい。

授業計画

1. 入門 コミュニケーションとは何か？
2. 現代社会とコミュニケーション
3. コミュニケーション学の基礎(1)コミュニケーションの仕組みとタイプ
4. コミュニケーション学の基礎(2)伝わるコミュニケーション
5. コミュニケーション学の基礎(3)伝わらないコミュニケーション
6. コミュニケーション学の基礎(4)広がるコミュニケーション
7. 人間のコミュニケーション / 動物と人間は何が違うのか？
8. 自我とコミュニケーション / 自我と他者・自己開示と自己呈示
9. 対人コミュニケーション(1)対人コミュニケーションの特徴
10. 対人コミュニケーション(2)説得・支配・欺瞞・交渉
11. 言語的コミュニケーション / 言語・あいさつ・敬語
12. 非言語的コミュニケーション / しぐさ・表情・機械
13. メディアとコミュニケーション(1)声と文字
14. メディアとコミュニケーション(2)電信・電波
15. メディアとコミュニケーション(3)ケータイとインターネット
16. 家族コミュニケーション / 家族の絆とその変容
17. 組織コミュニケーション / 企業におけるコミュニケーション
18. コミュニティとコミュニケーション(1)地域生活のコミュニケーション
19. コミュニティとコミュニケーション(2)地域共同体からコミュニティへ
20. コミュニティとコミュニケーション(3)ソーシャル・キャピタルを考える
21. ネットワークとコミュニケーション
22. 教育・福祉とコミュニケーション
23. 集合行為とコミュニケーション(1)世論の形成・うわさ
24. 集合行為とコミュニケーション(2)社会を築くコミュニケーション
25. 異文化コミュニケーション(1)他者理解のための作法
26. 異文化コミュニケーション(2)コミュニケーションとジレンマ
27. 事例研究(1)コミュニケーションを考える
28. 事例研究(2)コミュニケーション不全とその対応(1)
29. 事例研究(3)コミュニケーション不全とその対応(2)
30. まとめ 現代社会におけるコミュニケーション特性と諸課題

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)期末課題:60% (2)中間課題:20% (3)単元小課題:20%
期末試験は課さず、期末レポート課題と、中間レポート課題、および授業・単元の終了ごとに課す小課題の得点を合計して評価する。

コミュニティ・ビジネスの現場

担当者：瀬名 浩一

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

コミュニティ・ビジネスを創めるには、地域の個性や魅力を再発見し、ビジネスを通じて地域の問題を解決していく意思が不可欠である。とくに厳しい状況におかれたコミュニティを復活させるためには社会起業が急務である。地域の個性や魅力を再発見し、行政に依存しがちな地域住民や企業の意識を変革し、ビジネスを通じて地域の価値を創造することが不可欠である。コミュニティ・ビジネスの現場を支える経営者など利害関係者には「誰をどのように助けるのか?」「利益をどう使うのか?」など地域経営の実情を聴き、将来諸君が「社会起業家」として立ち立つために必要な準備について学んでいる。

2.学びの意義と目標

まちづくり、環境農業、ファンドビジネス、再生可能エネルギー、鉄道輸送力、子供の学習支援、商店街再生など幅広い分野で活躍中の社会起業家の「なま」の話の聞ける。

準備学習(予習)

授業計画のタイトルは、2012年に選ばれたものであり、2013年度は当然変わる。授業の初めに、前年度の講演録を配布するので、関連したテーマを予習し講演者への質問を準備しておくこと。

準備学習(復習)

講演の最後に出題される課題への回答書類(A4 1枚)は、翌週の授業終了時まで(1週間)に教員に提出しなければならない。

授業計画

1. 「仮設」におけるまちづくり
2. NPOチャイルド・ファンドジャパン
3. 環境農業・福祉農業の動き
4. NPOコスモス・アース
5. 復興ファンド
6. (株)ミュージック・セキュリティーズ
7. 再生可能エネルギー
8. 生活クラブ生活協同組合
9. 輸送力の確保
10. (社)日本民営鉄道協会
11. 子供の学習支援
12. NPOてらこやネットワーク
13. 商店街のまちづくり
14. (社)蕨市まちづくり連合会
15. コミュニティ投資が創る環境・社会ビジネス

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)課題回答レポート:70%:講師による評価結果の集計 (2)出席回数:30%

担当者：瀬名 浩一

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

<内容>

行政に依存しがちな住民・団体の意識を変革し、ビジネスを通じて地域の価値を創造することが求められている。近隣を対象とするコミュニティ・ビジネスから始まり、地域、国、世界と拡大するそれぞれの空間規模で直面する社会問題を解決するための持続可能なビジネス（ソーシャル・ビジネス）となることが期待される。日本でも高齢者介護、子育て支援、医療、演劇、教育、環境、自然エネルギー、交通などの分野で育っている。それに伴い我々の働き方も、今までのように公共団体、企業などに終身雇用されるのではなく、将来起業して経営者として自立することが目標になってきた。チャンスを生かすためには、社会経済論、NPO経済論、起業論などを学ぶ必要がある。

2.学びの意義と目標

企業のための組織作り、資金調達、地域への根き方などを実践的に学べる。

準備学習(予習)

講義の終わりに次回のテーマとキーワードを指示するので、毎回1時間の予習をして授業に臨むこと。3回ごとに小テストをするので毎回復習1時間を欠かさぬこと。

準備学習(復習)

授業3回に1回の割合で、授業内テストを行うので、毎週授業後1時間の復習を欠かさぬこと。

授業計画

1. コミュニティを支えるビジネス
2. 非営利組織と営利組織の競争と連携
3. リスクマネジメントのシステム
4. 日本の介護福祉の現状
5. 社会的協同組合の可能性
6. 介護老人施設の経営
7. 子育てネットワーク
8. 日本赤十字社の経営改革
9. コミュニティ・ホスピタルの挑戦
10. 日本と米国の医療税制の比較
11. NPOの市場開発
12. ソーシャル・マーケティング
13. フェア・トレード・カンパニー
14. 地域政策の日英比較
15. 産業力にこだわる日本
16. 地域力を引き出す英国
17. 日本の地域力を引き出す試み（1）－演劇－
18. 日本の地域力を引き出す試み（2）－教育－
19. 日本の地域力を引き出す試み（3）－農業－
20. 日本の地域力を引き出す試み（4）－自然エネルギー－
21. 日本の地域力を引き出す試み（5）－路面電車－
22. 地域金融機関の再生
23. 金融とコミュニティの新しい関係づくり
24. 倫理基準を持つ金融機関
25. 地域の社会経済化への挑戦
26. 社会起業家が求められる背景
27. 価値観を先導する社会起業家たち
28. 社会的企業も起業型組織を目指す
29. 社会起業家を支援する社会金融制度
30. 埼玉県で社会起業家を育成する

教科書

授業の中で指示する

評価方法

- (1)授業理解度:40%:授業3回に1回の割合で授業内試験を行う。
- (2)期末テスト:30% (3)出席回数:30%

コミュニティ政策特論 A (商学)

担当者：工藤 幸一

開講期：春学期集中 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1. 内容

商学は、一般的に「商あるいは商活動」あるいは「商業」に関する学問だと考えられてきた。しかし、アメリカにおいて登場したマネジメント論、マーケティング論の進展をうけ、わが国においても生産から消費までを社会的な視点から体系的に研究する「流通論」が登場した。このことから商学も「流通活動」を研究対象とすることから流通科学の視点から講義を展開する。

流通は、消費者ニーズの多様化・個性化、さらに情報ネットワークの基盤整備などにより、その機能も高度化・複雑化し社会的役割も大きく変化している。近年は小売業の廃業によりシャッター商店街が問題になり地域社会における商業の社会的・経済的役割の再検討が求められていることも視野に講義を進める。

2. 学びの意義と目標

本講では、流通についての基礎的機能・基本的事柄について現代的理解をすることを旨とすると同時にコミュニティにおける商業施設・機能の重要性について理解する。コミュニティ研究の関連科目として欠くことができないと考える。

準備学習(予習)

集中講義のため毎日の講義の復習に重点が置かれる。しかし、履修登録者は、日ごろより新聞の社会欄のニュースや経済欄に目を通す。さらに日常利用している小売業（コンビニ等）の商品構成や陳列レイアウトを注意して見ることを心がける。

準備学習(復習)

集中講義のため毎日の講義の復習に重点が置かれる。理論的、実践的な理解のためにケースを取り上げることが多くなるので、講義ノートを作成・整理することが重要となる。

授業計画

1. オリエンテーション
2. 市場経済のしくみ
3. 企業の経営
4. 流通と商業の機能
5. 経済主体、市場
6. 流通機構
7. 小売業の形態
8. 流通のマーケティング
9. 物流の機能
10. 流通の国際化
11. 流通政策
12. 商業倫理
13. 消費者主義
14. コミュニティにおける商業
15. まとめ

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)試験:100%

コミュニティとフィールドワーク

担当者：庄嶋 孝広

開講期：春学期集中 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

フィールドワークは、社会調査の一つの方法です。社会学や文化人類学をはじめ様々な学問で活用されるとともに、ビジネスや非営利活動の現場でも有効な方法です。

現地社会（コミュニティ）に入り、人々と関係を築きながら、生活を観察したり、話を聞いたり、行事に参加したりして、調査地や調査対象について理解を深めていきます。

理論が現実をうまく説明できているかを確認できると同時に、現実をもとに新たな理論を構築していく楽しみがあります。

本講義では、コミュニティ現場でのフィールドワーク演習を通じて、フィールドワークの基本を身につけます。

2.学びの意義と目標

本講義で、フィールドワークの考え方と方法の基本を学ぶことで、卒業論文等で応用してください。

また、フィールドワークは、まずもって他者に寄り添い、相手を理解しようとする方法です。社会人となって、他者と信頼関係を築きながら、よりよい職業生活、市民生活を送るうえでも、大いに役立つ作法といえます。

準備学習(予習)

集中講義のため、前日に行ったことをおさらいして臨んでください。

準備学習(復習)

集中講義のため、作業に遅れがあれば、各自で追いつくようにしてください。

授業計画

1. フィールドワークとは何か？
2. フィールドワークの方法、インタビュー練習
3. 調査地の紹介と事前準備
4. 現地調査・第1日 - ガイドによる調査地案内
5. 現地調査・第1日(つづき) - 1日目のまとめ
6. 現地調査・第2日 - 自由見学
7. 現地調査・第2日(つづき) - 調査項目の整理
8. 現地調査・第2日(つづき) - 聴き取り
9. 現地調査・第2日(つづき) - 参与観察
10. 現地調査・第2日(つづき) - 2日目のまとめ
11. 調査のまとめ
12. レポート作成
13. レポート作成(つづき)
14. グループ発表準備
15. グループ発表

教科書

プリントを配布する

参考文献 佐藤郁哉『フィールドワーク 書を持って街へ出よう』（新曜社）

評価方法

(1)レポート:25% (2)グループ発表:25% (3)授業態度:25% (4)出欠:25%

コンピュータ応用実習 A

担当者：鈴木 省吾

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

Microsoft Excelの高度な操作法を学ぶ。基礎的な内容の復習からはじめ、Excelの機能を最大限に生かす使い方を習得する。

2.学びの意義と目標

Excelの基本的な操作を既に学んだ学生が、より有効かつ幅広くExcelを使うために必要となる操作法を学ぶ。単なる表計算を超え、統計処理や文書作成が行えるようにする。社会での実用に耐えうるExcelの操作能力を身につける。

準備学習(予習)

授業で出された課題の反復練習。

準備学習(復習)

実習授業なので、実際に授業内で課題を完成させることが重要となるが、課題ごとの内容は、次の週からの前提になるので、復習を必ず行うこと。

授業計画

1. Excelの概要 / データの入力
2. 表の作成・編集・印刷
3. グラフの作成
4. Excel関数
5. ワークシートの活用
6. データベース機能の利用
7. ピボットテーブル
8. マクロの作成
9. Excel VBAプログラミングの基礎
10. Excel VBAプログラミング 1
11. Excel VBAプログラミング 2
12. Excel VBAプログラミング 3
13. 統計処理
14. 文書作成
15. 資料処理

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)課題:100%:毎週出る課題を完成度と作成時間によって評価する。出席は評価割合には含まないが、5回の欠席で不合格、遅刻は15分までとし以後は欠席扱い、3回の遅刻で欠席とする。

コンピュータ応用実習 B

担当者：二神 常爾

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1. 内容

ノートパソコンを用いての実習により、メール、ブログ、SNS、ツイッターなどの様々なコミュニケーション・ツールを利用してコミュニケーションを行い、それぞれの特徴を理解する。また、グーグルは、近年ネット上で文書ファイルや表計算ファイルや予定表や写真を共有するサービスを提供している。グーグルはネット上で音声通話やチャットを行うサービスも提供している。グーグルが提供しているこの種のサービスを利用して、ネット上でのファイルの共有を行う。

授業では1回の授業ごとに1つのテーマについて学習する。毎回プリントを配布する。教師はプロジェクターを用いてデモを行い、学生は教師のデモとプリントに従って、ノートパソコンの操作を行う。学生は二人一組になってメッセージのやり取りやファイルの共有を行う。質問は随時受け付ける。また、授業内容について理解を深めるために、授業時間内に行う課題を出題する。

2. 学びの意義と目標

インターネットやコンピュータ技術の発達とともに、メール、ブログ、ツイッター、SNSなど様々なコミュニケーション・ツールが出現し、多くの人に利用されている。これらのツールの多くは、情報の送り手だけでなく、情報の受け手も情報を発信できる双方向の特徴を持つ。双方向性は便宜性をもたらす一方で、一度発信した情報は回収できないことから、様々な問題が起きている。ルールを守りつつ、これらのツールを使いこなすことは現代社会に生きる我々にとって必要不可欠である。授業ではこれらのツールを実際に利用し、その特徴を習得することを目標とし、ネチケットについても学習する。

また、グーグルはインターネット上で様々なファイルを共有できるサービスを提供している。これらのサービスを利用すれば、従来メールにファイルを添付して情報をやり取りするという手間を省くことができる。これらのサービスについても学ぶ。

準備学習(予習)

教員用授業サイトを事前に見て、参考書の該当箇所を読んでおくこと

準備学習(復習)

授業前に授業で使うファイルを自分のUSBメモリにコピーして、帰宅してからプリントを見ながら、授業で行った手順を復習すること。

授業計画

1. ガイダンス
2. Gメールのアカウントを取得する
3. メールを送受信を行う
4. ネット上のワープロソフトを利用する
5. ネット上の表計算ソフトを利用する
6. グーグル・カレンダーで予定を共有する
7. グーグル・ピカサで画像ファイルを共有する
8. グーグル・トークで音声通話やチャットを行う
9. ブログで新しい記事を書く
10. ブログでコメントを書く
11. ツイッターでツイートを投稿する、フォロワーになる
12. ツイッターでリスト、ダイレクトメッセージを利用する
13. グーグル・プラス (SNS) を利用する(1)
14. グーグル・プラス (SNS) を利用する(2)
15. まとめ

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)出席:30% (2)授業中の課題:35% (3)期末試験:35%

コンピュータ応用実習C

担当者：二神 常爾

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

ノートパソコンを用いた実習を通して、デジタルカメラで撮影した静止画像や動画をノートパソコンで編集したり、編集した画像をCDやDVDに書き込む方法について学ぶ。また、自分の音声や音楽CDをこれらの記憶メディアに書き込む方法についても学ぶ。写真の画像や動画を編集するソフトにより、パソコン上で写真の明るさ、コントラストを調整したり、トリミングをしたり、縮小する。また、動画を短くしたり、動画にテキストや音声を挿入する。複数枚の写真を一定の時間間隔で連続して表示するスライドショーを作成する方法も学ぶ。

また、イラストや文字などの静止画像を複数枚作成し、一定の時間間隔で表示させ、簡単なアニメーションを作ることも学ぶ。タグを使って速く画像を検索する方法についても学ぶ。

授業では1回の授業ごとに1つのテーマについて学習する。毎回プリントを配布する。教師はプロジェクターを用いてデモを行い、学生は教師のデモとプリントに従って、ノートパソコンの操作を行う。質問は随時受け付ける。また、授業内容について理解を深めるために、授業時間内に行う課題を出題する。

2.学びの意義と目標

デジタル技術の進歩とともに、静止画像や動画を記憶する記憶メディアは日進月歩のスピードで大容量になっている。これらの記憶メディアを利用すれば、高精細な画像を再生することが可能である。静止画像や動画などの記憶メディアとして、CD、DVD、BD（ブルーレイ・ディスク）などの光ディスクがある。授業では、デジタルカメラにより写真や動画を撮影し、CDやDVDに画像を取り込む方法を学ぶことを通して、マルチメディアに関する基本技術を習得することを目標とする。このような技術は、情報化が急速に進む社会の様々な局面で今後ますます重要になると思われる。これからの社会人にとって必須の技術である。また、スマートフォンなど最新のデジタル機器に付属しているデジタルカメラで撮影した画像をパソコンに取り込んで自分で編集する方法を習得していれば、画像をブログ、SNS、ホームページなどにアップロードすることも容易にできるであろう。

準備学習(予習)

教員用授業サイトを事前に見て、参考書の該当箇所を読んでおくこと

準備学習(復習)

授業前に授業で使うファイルを自分のUSBメモリにコピーして、帰宅してからプリントを見ながら、授業で行った手順を復習すること。

授業計画

1. ガイダンス
2. ウィンドウズ・ライブ・フォトギャラリーで静止画像を編集する
3. デジタルカメラで静止画像を撮影し、コンピュータに取り込む
4. 音楽CDを空のCD-Rに書き込む(焼く)
5. 自分の音声をCD-Rに書き込む
6. ウィンドウズ・ライブ・ムービーメーカーで動画を編集する
7. デジタルカメラで動画を撮影し、コンピュータに取り込む
8. 動画にテキストや音声を挿入し、DVD-Rに書き込む
9. 静止画像をもとにスライドショーを作成し、DVD-Rに書き込む
10. パワーポイントで動画を再生する
11. アニメーションGIFで動画を作成する(1)
12. アニメーションGIFで動画を作成する(2)
13. ウィンドウズ・ライブ・フォトギャラリーで画像の検索を行う
14. グーグルのPicasaでコラージュ画像を作成する
15. まとめ

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)出席:30% (2)授業中の課題:35% (3)期末試験:35%

財政学

担当者：正上 常雄

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

カリキュラム上の位置づけ

専門選択科目であり、経済学を履修後、1年次秋～2年次に履修するのが望ましい。

目的

財政は我々の税金にかかわる事柄です。我々はなぜ税金を納めなくてはならないのか、財政は何に使われているのか、財政赤字があると何が起きるのかなど、様々な疑問があると思います。我々にとって身近なようでよくわからない財政、新聞では、ギリシャの財政危機とか日本の税と社会保障の一体改革など財政にまつわる様々なトピックが取り上げられています。現実を理解するには、財政の仕組みと本質を理解しなくてはなりません。

2.学びの意義と目標

この授業ではわかりやすいテキストを使って財政を基礎から学んでいこうと思います。教科書に書いてあることを学ぶだけでなく、現在の財政に関する現実の問題についても色々議論してみたいと思います。

財政学は公務員試験などでも出題されますので、過去問題などを使いながら、どのような形で出題されているのか学びます。

準備学習(予習)

教科書は初心者向けのやさしいものを選びましたが、もっと詳しい財政についての知識も授業で補完していくつもりです。難しい話はちょっと苦手という人も、まずは教科書を一読してみてください。

準備学習(復習)

授業では教科書に書かれていることだけでなく、公務員試験などにも対応できるように、専門用語の解説なども行うので、ノートやプリントでしっかり復習して下さい。

授業計画

1. 財政とは何か
2. 市場経済と財政
3. 財政の役割
4. 予算と何か
5. 予算のルール
6. わが国の予算の現状
7. 租税とは何か
8. 租税で行うこと、市場で行うこと
9. 公共財
10. 租税のあり方
11. 租税の種類と公平性
12. 社会保障
13. 公共サービス
14. 財政投融资
15. 財政と民主主義
16. 財政と借金
17. 景気と借金
18. 誰から借金しているのか
19. 公債負担論
20. 財政規律
21. 国と地方の財政関係
22. 自治体の財政赤字
23. 自主再建か財政再建団体か
24. 地方分権
25. 社会保険
26. 年金
27. 公的扶助
28. 財政と所得分配
29. これからの財政のあり方
30. 財政と意思決定

教科書

神野 直彦 『財政のしくみがわかる本 (岩波ジュニア新書)』 (岩波書店)

評価方法

(1)中間試験:40% (2)期末試験:40% (3)平常点:20%
大学の規定に従い、出席率60%以上を単位取得の条件とします。基本的に中間試験と期末試験で評価します。

担当者：大塚 健司

開講期：秋学期集中 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

(1)内容

本講座では、国の制度や施策と地方分権（地域主権）と言われながらも、地方自治体としての埼玉県が、その狭間で各分野において、どのように政策決定してきたか、またますます厳しさを増す財政状況のなかでどう政策展開を図るべきなのか、具体的なケース事例等を通して、実践的な視点から埼玉県を研究対象にし、問題解決の糸口を探すことを狙いとしている。

なお、本講座では、県及び市町村等から講師を招くオムニバス方式で実施する。

(2)カリキュラム上の位置づけ

行政系統の専門科目で大学院開設科目である。

なお、事業計画は講師の都合により変更することを予め了解ください。

2.学びの意義と目標

地方行政がどう動いているか、行政を担当している人達等に来てもらい基本的なことから、実践的なことまで学ぶ。

授業計画

1. 埼玉県の現況と自治体を取り巻く状況の変化
2. 埼玉県の財政構造、仕組み
3. 埼玉県の財政構造、仕組み
4. 土地政策（見沼田圃の保全と活用）
5. 土地政策（見沼田圃の保全と活用）
6. 環境政策（リサイクルと廃棄物問題）
7. 環境政策（リサイクルと廃棄物問題）
8. 少子・高齢社会への対応
9. 少子・高齢社会への対応
10. 農業政策
11. 農業政策
12. 労働商工政策
13. 労働商工政策
14. 地域福祉（福祉のまちづくり）
15. 理解度の確認

準備学習(予習)

「統計からみた埼玉県のすがた」（編集・発行／埼玉県総務部統計課）を事前に読むこと。

教科書

プリントを配布する

準備学習(復習)

配布した資料を良く読むこと。

評価方法

(1)毎回のレポート:100%

自然地理学概説

担当者：秋山 秀一

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

世界の各地ではいろいろな人々が生活基盤となるその土地の自然環境を理解し、土地に根ざして工夫しながら暮らしています。この授業では、日本、アメリカ、そしてスイスを中心としたヨーロッパ諸国における自然を自然地理学の視点から具体的にに取り上げ、学びます。

2.学びの意義と目標

自然地理学の知識を身につけることは、とても大切なことであり、国際理解度を高めることにも大きく寄与します。そのことは卒業後どのような仕事に就こうと、意義があり重要なことです。実際に海外でのフィールドワークを通して得た自然地理の映像、資料、それに書籍、雑誌、テレビ・ラジオ等のメディアとのかかわりの中から、具体的な話をしていきます。

準備学習(予習)

授業内容に関する復習の小レポート、テキストの次回の授業に関する項目を予習し、関連する情報を集めておくこと。

準備学習(復習)

配布プリント、テキストの中で授業中に解説したところを再読し、各トピックについて次回までに説明できるようにすること。

授業計画

1. 導入
2. 地形図を読む
3. 地形を読む
4. 自然地理学と暮らし
5. 地震と暮らし
6. 日本の温泉
7. 世界の温泉
8. 世界の温泉
9. 海岸の地形
10. 砂漠
11. スイスの自然
12. スイスの自然
13. 世界の自然遺産
14. 世界の自然遺産
15. まとめ

教科書

秋山 秀一 『スイス道紀行』(芦書房)

評価方法

- (1)日頃の授業への貢献度:30% (2)出席状況:30%
(3)小レポート、それにまとめとしてのレポート:40%

児童福祉論

担当者：榊 伴夫

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

近年、児童や家庭をめぐる諸問題が多様化・複雑化・深刻化して大きな社会問題となっています。

こうしたことに対応するため、法制度の整備や改正が行われています。

児童福祉発展の歴史を学びながら、様々な社会の課題について考える論理的思考を学びます。

高齢化・少子化さらに人口減少社会・格差社会現象など児童福祉に影響を与えている要因や背景を認識し理解を深めること。

児童や家庭さらには行政機関団体・施設・住民組織等との役割と支援について理解を深めます。

2.学びの意義と目標

講義では、児童福祉発展の歴史を学び、家族や社会の変遷を通じて、社会問題についての理解を深めます。

児童福祉やその関連分野を幅広く学び、少子化時代における児童福祉の課題を検討すること。

児童福祉を通じて広く社会に視野を広げ、様々な社会問題に関心を持つこと。

一人一人が福祉論を学ぶことを通じて、次代を担う子ども達の健やかな成長を願い、共に助け合う（共助）社会の実現に努力する社会人となること。

準備学習(予習)

授業計画を参照して、以下の項目を新聞やインターネットで情報を集めておくこと。

貧困が児童に与える影響

赤ちゃんポスト

障害福祉と偏見・差別

少年非行

準備学習(復習)

配布プリントを再読して、各課題について自分の考えをまとめておくこと。

人間のライフサイクル

少年非行

障害者と偏見

虐待と家庭

家族とは何か

授業計画

1. 児童福祉を学ぶ意義
2. 社会福祉の動向（1）
3. 社会福祉の動向（2） 社会福祉基礎構造改革
4. 少子化と子どもを取り巻く福祉問題
5. 児童福祉の歴史（1）
6. 児童福祉の歴史（2）
7. 児童福祉行政 行政の役割
8. 児童福祉の法体系・行財政
9. 児童福祉行政機関の概要と役割 民間団体（NPO）の役割
10. 児童福祉施設の概要（1）
11. 児童福祉施設の概要（2）
12. 児童の健全育成
13. 保育サービス
14. 要養護児童への福祉サービス（1）
15. 要養護児童への福祉サービス（2） 子どもと貧困
16. 要養護児童への福祉サービス（3）
17. プレゼンテーション（1）
18. プレゼンテーション（2）
19. 障害児福祉サービス
20. 障害（身体障害・知的障害・発達障害・精神障害）の理解 差別と偏見
21. 少年非行（1）非行の原因は何か ネット社会と少年非行
22. 少年非行（2）少年非行の背景と立ち直り
23. ひとり親家庭への福祉サービス
24. ドメスティック・バイオレンス
25. 子ども虐待の防止とその対応（1）
26. 子ども虐待の防止とその対応（2）
27. 事例検討
28. 児童福祉に携わる人材とその育成
29. 児童福祉の課題と展望
30. 期末テスト

教科書

福田 公教, 山縣 文治 『児童家庭福祉(新・プリマーズ・保育・福祉)』(ミネルヴァ書房)

評価方法

(1)期末試験:80%:論文800字。教科書、ノート持ち込み可。
(2)プレゼンテーション:20%:テーマ、方法は別途事前に指示。
出席及び積極的な授業態度は前提の総合評価です。

社会学

担当者：加藤 敦也

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

本講義は社会問題を解釈するための方法論ないし理論枠組みとしての社会学の内容を概観していく。授業では、教科書の内容を、雑誌記事や、テレビドラマ、映画、ニュース番組などの映像を補助資料として用い、日常生活における身近な現象がいかに社会学のテーマとして取り上げられ、どのように社会学の対象領域として説明されるかについて解説していく。また、授業中にテーマに応じて小レポート作成やディスカッションを課すことで、社会学の取り扱う問題を自ら考えることを促す。

2.学びの意義と目標

受講者自身が社会問題を解釈する認知枠組みとして社会的な視点を身につけてもらうことを目標とする。受講者各自はそれぞれ成長してきた過程で問題を解釈する認知の枠組みを身につけてきたはずである。本講義は、その認知のあり方を一つの価値観と見なしながら、その価値観に従うだけでなく、ものごとを社会通念にとらわれず、社会的に理解するための基礎的な知識を身につけてもらいたいと思っている。

準備学習(予習)

授業前の予習としては教科書の該当箇所を読んでおくことが望ましい。

準備学習(復習)

授業後の復習としては講義をまとめた自筆ノートを教科書とあわせて見直すことをすすめる。

授業計画

- 1.社会学とは何か(1)
- 2.社会学とは何か(2)
- 3.社会調査の方法
- 4.家族社会学(1)
- 5.家族社会学(2)
- 6.家族社会学(3)
- 7.地域社会学(1)
- 8.地域社会学(2)
- 9.メディア社会学(1)
- 10.メディア社会学(2)
- 11.階級・階層の社会学(1)
- 12.階級・階層の社会学(2)
- 13.アイデンティティと社会学(1)
- 14.アイデンティティと社会学(2)
- 15.ジェンダーの社会学(1)
- 16.ジェンダーの社会学(2)
- 17.セクシュアリティの社会学
- 18.エスニシティの社会学
- 19.社会運動の社会学(1)
- 20.社会運動の社会学(2)
- 21.教育社会学(1)
- 22.教育社会学(2)
- 23.政治社会学
- 24.相互行為論、社会構築主義
- 25.社会学の歴史：ヴェーバーとデュルケム
- 26.ヨーロッパの現代：ルーマン、ギデンズ、ブルデュー
- 27.日本の社会学史：意味社会学と統合理論
- 28.近代と脱近代(1)
- 29.近代と脱近代(2)
- 30.社会学のまとめ

教科書

宇都宮京子 『よくわかる社会学(第2版)』(ミネルヴァ書房)

評価方法

(1)出席:30% (2)小レポート:30%:授業中に課す (3)定期試験:40%

社会学

担当者：寺田 征也

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

この講義では、日常生活で見られる身近な出来事を題材にして、「社会学」という分野について概観します。「自己」「相互行為」「家族」「メディア」などをテーマに、現代社会の問題にたいして「社会学」がどのようにアプローチしているのか、考えていきます。

教科書を中心に、新聞記事や映像作品などをもちいて、社会的なものの方の見方、考え方、問いの立て方について講義していきます。また、講義は板書にておこない、授業レポートをとおして講義内容の定着具合をはかります。

2.学びの意義と目標

「社会学」という分野は、自分たちが生きている社会を対象に、その成り立ちや仕組みを関係の視線から明らかにしていくことを目的としています。そこには、特有の概念やものの見方、考え方があります。この講義を通じて、受講生自身が自分の生活について、社会的な見方と考え方を通じて見直すことができ、社会的な問いを自ら立てることができるようになることが目標となります。

そうした社会的な思考力は、受講生が今後専門科目を学び進めていく上での基本力となります。また、一人の人間として生きていくときの、周囲との関係づくりや仕事を共同的に進めていくときの助けとなります。普段と少し違った見方、考え方を身につけられることが、社会学を学ぶ意義です。講義をつうじて、「社会学」を楽しく学んでください。

準備学習(予習)

教科書の該当箇所をあらかじめ読んで来てください。

準備学習(復習)

教科書、講義ノート、配布資料を読み直してください。

授業計画

- 1.社会学入門
- 2.社会学の考え方
- 3.社会学の歴史(1)
- 4.社会学の歴史(2)
- 5.社会学の理論(1)
- 6.社会学の理論(2)
- 7.自己とアイデンティティの社会学(1)
- 8.自己とアイデンティティの社会学(2)
- 9.相互行為の社会学(1)
- 10.相互行為の社会学(2)
- 11.家族の社会学(1)
- 12.家族の社会学(2)
- 13.地域の社会学(1)
- 14.地域の社会学(2)
- 15.情報とメディアの社会学(1)
- 16.情報とメディアの社会学(2)
- 17.ジェンダーの社会学(1)
- 18.ジェンダーの社会学(2)
- 19.感情の社会学
- 20.医療の社会学
- 21.グローバル化の社会学(1)
- 22.グローバル化の社会学(2)
- 23.階級・階層の社会学(1)
- 24.階級・階層の社会学(2)
- 25.政治の社会学
- 26.社会運動の社会学
- 27.社会調査方法論(1)
- 28.社会調査方法論(2)
- 29.社会調査方法論(3)
- 30.まとめ

教科書

宇都宮京子 『よくわかる社会学』(ミネルヴァ書房)

評価方法

(1)出席:20% (2)授業レポート:20% (3)学期末試験:60%

社会学

担当者：新倉 貴仁

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

社会学は、私たちが生きる社会を考える学問である。そのため、自らを問うこと＝反省が要請される。本講義では、受講者が置かれた状況を反省することからはじめたい。すなわち、第一に、大学といった制度、学生という身分、書物というメディアから考えることから出発し、社会学を学ぶための準備をおこなっていく。第二に、社会学の思考の系譜を学び、その思考に込められた方法と、それぞれの思考が生み出された背景となる社会について考察していく(学説史)。第三に、宮沢賢治の童話「銀河鉄道の夜」を素材として、さまざまな社会学の主題群を拾い出し、その内容について、ともに、考えていきたい(概論)。

2.学びの意義と目標

社会学の概要を把握するとともに、社会的想像力を養う。また、読む、考える、書くことを身につける。

準備学習(予習)

適宜、教科書の該当箇所を指示する。各自にて、読んでおく。

準備学習(復習)

配布したレジュメの内容を確認し、要点について、各自の視点で論じる。

授業計画

1. イントロダクション
2. 社会とはいうけれども
3. 大学とはいかなる制度か
4. 学生とはいかなる存在か
5. 本との出会い方 書物と出版
6. 読むことを学ぶ 書評を書いてみるために
7. 社会学学説史(1) 近代社会の成立
8. 社会学学説史(2) マルクス
9. 社会学学説史(3) デュルケムとヴェーバー
10. 社会学学説史(4) 形式化と反省 文化社会学と知識社会学
11. 社会学学説史(5) 移民と大衆 アメリカ社会学
12. 社会学学説史(6) 福祉国家と多文化社会 カルチュラル・スタディーズ
13. 社会学学説史(7) 消費社会 構造主義とそれ以後
14. 社会学学説史(8) 現代日本社会と社会学
15. 知と権力 「午後の授業」より
16. 複製技術と労働 「活版所」より
17. 家庭、家族、家 「家」より
18. 共同体と疎外 「ケンタウルス祭の夜」より
19. 都市と田舎 「天気輪の柱」より
20. 空間と時間 「銀河ステーション」「北十字とプリオシン海岸」より
21. アイデンティティ 「鳥を捕る人」より
22. 宗教 「ジョバンニの切符」より
23. 贈与 「ジョバンニの切符」より
24. 自己と他者 「ジョバンニの切符」より
25. 子どもと大人 「ジョバンニの切符」より
26. 現実 「ジョバンニの切符」より
27. ジェンダーの社会学
28. 現代社会の社会学
29. 試験
30. 総括討論、レポート講評

教科書

宇都宮京子編 『よくわかる社会学 第二版』(ミネルヴァ書房)

評価方法

(1)出席:40% (2)レポート:30% (3)試験:30%
出席点は、20点を基礎とし、残り20点について、各コマで指示した課題について書いてもらい、その内容によって加点する。

社会学

担当者：新津 尚子

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

この講義は「家族」「地域」「ジェンダー」などについて、社会学的に学ぶことを目的とする。また後半（19回目以降）は社会学の歴史についても学ぶ。授業では教科書を用いて講義を行うほか、小レポート作成など、履修者が自分自身で考える機会を設け、確実に知識を身につけることを目指す。

2.学びの意義と目標

この講義の目標は、毎回の授業を通じて「社会学的な思考を身につける」ことにある。この思考を身につけることによって、「個人的」と思われる問題の中にある社会的な要素や、「社会的」と思われる問題の中にある個人的な要素を理解できるようになる。これにより将来、履修生がさまざまな問題に直面した際、その問題を多角的に考えられるようになるだろう。

準備学習(予習)

予習として教科書の当該箇所を読み、概要をつかんでおくこと。

準備学習(復習)

復習として教科書と講義ノートを見直すこと。不明な点があれば自分で調べたり、質問するなどして解決すること。

授業計画

- 1.社会学とは何か(1)
- 2.社会学とは何か(2)
- 3.家族社会学(1)
- 4.家族社会学(2)
- 5.地域社会学(1)
- 6.地域社会学(2)
- 7.メディア社会学(1)
- 8.メディア社会学(2)
- 9.階級・階層と社会(1)
- 10.階級・階層と社会(2)
- 11.アイデンティティと社会(1)
- 12.アイデンティティと社会(2)
- 13.ジェンダーと社会(1)
- 14.ジェンダーと社会(2)
- 15.国際社会(1)
- 16.国際社会(2)
- 17.社会運動(1)
- 18.社会運動(2)
- 19.社会学の歴史とさまざまな研究:社会学の始まり(1)
- 20.社会学の歴史とさまざまな研究:社会学の始まり(2)
- 21.社会学の歴史とさまざまな研究:デュルケム(1)
- 22.社会学の歴史とさまざまな研究:デュルケム(2)
- 23.社会学の歴史とさまざまな研究:ヴェーバー(1)
- 24.社会学の歴史とさまざまな研究:ヴェーバー(2)
- 25.社会学の歴史とさまざまな研究:マートン
- 26.社会学の歴史とさまざまな研究:パーソンズ
- 27.社会学の歴史とさまざまな研究:シュッツ
- 28.社会学の歴史とさまざまな研究:ブルデュー
- 29.社会学的想像力
- 30.まとめ

教科書

宇都宮京子編 『よくわかる社会学』(ミネルヴァ書房)

評価方法

(1)出席:30% (2)講義内に課す提出物など:30% (3)学期末試験:40%

社会学

担当者：横山 寿世理

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

1.内容

教科書、雑誌や新聞の記事、ドキュメンタリー番組を補足資料として用いながら、社会学を広く概観する。講義内容を板書でまとめる形で講義を展開する。また、講義内容の定着を図るため、簡単なコメント・シートの提出を課す。

2.カリキュラム上の位置づけ

この授業は1年次に配当される政治経済学科の専門基礎科目（必修）であり、上位の社会学系専門科目を履修するにはこの科目を修得しておく必要がある。また、コミュニティ政策学科の学生にとっては共通専門科目、他学部の学生にとっては教養科目となる。

2.学びの意義と目標

この講義は、社会的な視点を身につけることを目標とする。社会的な視点とは、社会において起きている現象を個人的な問題ではなく、「社会問題」として認識する能力である。良い/悪いといった判断から離れて、常識を疑うという姿勢を身につければ、普段意識されない「社会」「社会の仕組み」を受講者自身が実感できるようになるだろう。

準備学習(予習)

授業前の予習としては教科書の該当箇所を読んでおくとよい。

準備学習(復習)

講義の板書ノートを見直し・作り直すという復習作業を絶えず行うことを勧める。

授業計画

1. 社会的な視点:予言の自己成就
2. 社会学の誕生
3. 産業社会学(1)
4. 産業社会学(2)
5. 産業社会学(3)
6. 階級・階層の社会学(1)
7. 階級・階層の社会学(2)
8. 階級・階層の社会学(3)
9. メディア社会学(1)
10. メディア社会学(2)
11. メディア社会学(3)
12. 社会調査論(1)
13. 社会調査論(2)
14. 社会調査論(3)
15. 家族社会学(1)
16. 家族社会学(2)
17. 家族社会学(3)
18. ジェンダーの社会学
19. セクシュアリティの社会学
20. 行為論
21. 相互行為論
22. アイデンティティの社会学(1)
23. アイデンティティの社会学(2)
24. アイデンティティの社会学(3)
25. 歴史の社会学:マルクス
26. 歴史の社会学(1):ヴェーバー
27. 歴史の社会学(2):ヴェーバー
28. 記憶の社会学
29. 理論社会学
30. まとめ

教科書

宇都宮京子『よくわかる社会学(やわらかアカデミズム・わかるシリーズ)(第二版)』(ミネルヴァ書房)

評価方法

- (1)期末試験:40%
- (2)講義内課題:60%:各テーマごとにコメントの提出を課す。

社会教育課題研究 A

担当者：松橋 義樹

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

秋学期の「社会教育課題研究B」と合わせて、社会教育をめぐる主要な検討課題について、必要に応じて受講者自身で資料を収集して報告してもらう。

この講義では、社会に存在するさまざまな学習機会それぞれの意義と特徴・課題について報告してもらう。

2.学びの意義と目標

社会教育主事任用資格取得を目指す受講者にとっては、社会教育主事の職務において必要とされる事項を身に付けることを目標とする。

また、全ての受講者にとっては、教育をめぐる諸問題について理論的に考えられるようになることを目標とする。

準備学習(予習)

社会教育に関する受講前の予備知識は基本的に問わないが、各回の授業前に報告関係資料などに目を通し、その概要と不明な点を押さえておくこと。

準備学習(復習)

各回の授業の内容について、自分がこれまでに経験してきた教育活動と結び付けることで理解を深めておくこと。

授業計画

- 1.さまざまな学習機会(1)
- 2.さまざまな学習機会(2)
- 3.さまざまな学習機会(3)
- 4.さまざまな学習機会(4)
- 5.授業内報告(1)
- 6.授業内報告(2)
- 7.授業内報告(3)
- 8.授業内報告(4)
- 9.授業内報告(5)
- 10.授業内報告(6)
- 11.授業内報告(7)
- 12.授業内報告(8)
- 13.期末レポート指導(1)
- 14.期末レポート指導(2)
- 15.まとめ

教科書

プリントを配布する

評価方法

- (1)授業内報告:40%:原則1人1回の報告とする。
 - (2)期末レポート:60%:15回目の授業内で提出する。
- 評価方法等の詳細は、1回目及び2回目の授業内で説明するので、やむをえない事情により最初の出席が3回目以降になった場合は、担当教員へ直接申し出ること。

社会教育課題研究B

担当者：松橋 義樹

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

春学期の「社会教育課題研究A」と合わせて、社会教育をめぐる主要な検討課題について、必要に応じて受講者自身で資料を収集して報告してもらう。

この講義では、社会教育と学校教育との関係づくりの意義・現状と課題について報告してもらう。

2.学びの意義と目標

社会教育主事任用資格取得を目指す受講者にとっては、社会教育主事の職務において必要とされる事項を身に付けることを目標とする。

また、全ての受講者にとっては、教育をめぐる諸問題について理論的に考えられるようになることを目標とする。

準備学習(予習)

社会教育に関する受講前の予備知識は基本的に問わないが、各回の授業前に報告関係資料などに目を通し、その概要と不明な点を押さえておくこと。

準備学習(復習)

各回の授業の内容について、自分がこれまでに経験してきた教育活動と結び付けることで理解を深めておくこと。

授業計画

1. 社会教育と学校教育との関係(1)
2. 社会教育と学校教育との関係(2)
3. 社会教育と学校教育との関係(3)
4. 社会教育と学校教育との関係(4)
5. 授業内報告(1)
6. 授業内報告(2)
7. 授業内報告(3)
8. 授業内報告(4)
9. 授業内報告(5)
10. 授業内報告(6)
11. 授業内報告(7)
12. 授業内報告(8)
13. 期末レポート指導(1)
14. 期末レポート指導(2)
15. まとめ

教科書

プリントを配布する

評価方法

- (1)授業内報告:40%:原則1人1回の報告とする。
 - (2)期末レポート:60%:15回目の授業内で提出する。
- 評価方法等の詳細は、1回目及び2回目の授業内で説明するので、やむをえない事情により最初の出席が3回目以降になった場合は、担当教員へ直接申し出ること。

社会教育計画 A

担当者：松橋 義樹

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

社会教育は、学校教育や家庭教育とともに人々の生涯学習を支援する重要な場である。そこで、基本的に行政には、社会教育に含まれる多様な教育活動その他関連する活動を体系的にとらえ、適切な評価にもとづきそれらを改善していくための「社会教育計画」の策定が求められる。

この講義では、秋学期の「社会教育計画B」と合わせて、そのような社会教育計画に関する基本事項について解説する。

2.学びの意義と目標

社会教育主事任用資格取得を目指す受講者にとっては、社会教育計画の策定において必要とされる事項を身に付けることを目標とする。

また、全ての受講者にとっては、社会教育計画に関する基本事項の理解をもとにして、教育をめぐる諸問題について理論的に考えられるようになることを目標とする。

準備学習(予習)

社会教育及び社会教育計画に関する受講前の予備知識は基本的に問わないが、各回の授業前に教科書・プリントなどの指定部分に目を通し、各回の授業の概要と不明な点を押さえておくこと。

準備学習(復習)

各回の授業の内容について、自分がこれまでに経験してきた教育活動と結び付けることで理解を深めておくこと。

授業計画

1. 社会教育の特徴（1）
2. 社会教育の特徴（2）
3. 社会教育における計画の意味（1）
4. 社会教育における計画の意味（2）
5. 社会教育における計画の意味（3）
6. 社会教育における計画の意味（4）
7. 中間試験及び解説
8. 社会教育における地域（1）
9. 社会教育における地域（2）
10. 社会教育における施設（1）
11. 社会教育における施設（2）
12. 社会教育におけるボランティア・集団
13. 社会教育における参加（1）
14. 社会教育における参加（2）
15. 期末試験及び解説

教科書

鈴木 眞理, 熊谷 慎之輔, 山本 珠美 『社会教育計画の基礎』(学文社)

評価方法

(1)期末試験:60%:15回目の授業内で実施する。

(2)中間試験:40%:7回目の授業内で実施する。

評価方法等の詳細は、1回目及び2回目の授業内で説明するので、やむをえない事情により最初の出席が3回目以降になった場合は、担当教員へ直接申し出ること。

社会教育計画 B

担当者：松橋 義樹

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

社会教育は、学校教育や家庭教育とともに人々の生涯学習を支援する重要な場である。そこで、基本的に行政には、社会教育に含まれる多様な教育活動その他関連する活動を体系的にとらえ、適切な評価にもとづきそれらを改善していくための「社会教育計画」の策定が求められる。

この講義では、春学期の「社会教育計画A」と合わせて、そのような社会教育計画に関する基本事項について解説する。

2.学びの意義と目標

社会教育主事任用資格取得を目指す受講者にとっては、社会教育計画の策定において必要とされる事項を身に付けることを目標とする。

また、全ての受講者にとっては、社会教育計画に関する基本事項の理解をもとにして、教育をめぐる諸問題について理論的に考えられるようになることを目標とする。

準備学習(予習)

社会教育及び社会教育計画に関する受講前の予備知識は基本的に問わないが、各回の授業前に教科書・プリントなどの指定部分に目を通し、各回の授業の概要と不明な点を押さえておくこと。

準備学習(復習)

各回の授業の内容について、自分がこれまでに経験してきた教育活動と結び付けることで理解を深めておくこと。

授業計画

1. 社会教育における学習プログラム(1)
2. 社会教育における学習プログラム(2)
3. 社会教育における学習者(1)
4. 社会教育における学習者(2)
5. 社会教育における学習支援(1)
6. 社会教育における学習支援(2)
7. 中間試験及び解説
8. 社会教育における学習情報
9. 社会教育における大学(1)
10. 社会教育における大学(2)
11. 社会教育における連携(1)
12. 社会教育における連携(2)
13. 社会教育における評価(1)
14. 社会教育における評価(2)
15. 期末試験及び解説

教科書

鈴木 眞理, 熊谷 慎之輔, 山本 珠美 『社会教育計画の基礎』(学文社)

評価方法

(1) 期末試験:60%:15回目の授業内で実施する。

(2) 中間試験:40%:7回目の授業内で実施する。

評価方法等の詳細は、1回目及び2回目の授業内で説明するので、やむをえない事情により最初の出席が3回目以降になった場合は、担当教員へ直接申し出ること。

社会教育施設論

担当者：石川 昇

開講期：未定 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

社会教育施設の概要、問題点と課題について説明する。

2.学びの意義と目標

社会教育施設の問題点と課題について認識し、社会教育に関する視野を広げる。

準備学習(予習)

報道等での社会教育施設に関連する情報を把握しておく。

準備学習(復習)

講義におけるポイントを把握する。

授業計画

1. 社会教育と社会教育施設
2. 社会教育施設の種類
3. 現代社会と社会教育施設
4. 社会教育施設の概要と問題点 1：公民館等
5. 社会教育施設の概要と問題点 2：図書館
6. 社会教育施設の概要と問題点 3：博物館
7. 社会教育施設の概要と問題点 4：青少年施設ほか
8. 社会教育施設の課題 1：運営の効率化
9. 社会教育施設の課題 2：広報と集客
10. 社会教育施設の課題 3：社会との連携 1
11. 社会教育施設の課題 4：社会との連携 2
12. 社会教育施設の課題 5：少子高齢化、国際化への対応
13. 社会教育施設の課題 6：環境問題ほか現代的課題への対応
14. 社会教育施設における危機管理
15. 試験

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)出席:30% (2)試験:70%

社会心理学

担当者：山上 真貴子

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

社会心理学と聞いて何を思い浮かべるだろう。人間関係、コミュニケーション、集団関係などのテーマはもちろんだが、人は他者と一緒にいるときにだけ社会と関わっているわけではない。自分について考えるときも、何も考えず自動的に行動するときも、他者は私たちに影響を与えている。この授業では、まず前半に幅広い基礎的な知見を紹介し、後半は具体的なトピック（説得のプロが使うテクニック）を軸に、その知見が実践場面でどう生きるのかについて考えていく。

2.学びの意義と目標

この授業には、日常生活の中で私たちがどのように考え、感じ、行動しているのかについてのヒントがたくさん含まれている。この授業で学んだことを、自分や他者について考えるとき、人間関係や集団、社会について考えるときに使える知識として、日常に持ち帰ってほしい。

準備学習(予習)

毎回のトピックに関連する日常的なテーマについて、自分の経験や意見を書いてもらう（初回以外）。

準備学習(復習)

毎回の授業で出題される「まとめの問題」に解答（回答）しておくこと。次の授業の最初に解説を行う。

授業計画

1. 社会的生物としての人間(1)
2. 社会的生物としての人間(2)
3. 意識されない過程(1)
4. 意識されない過程(2)
5. 社会の中の私(1)
6. 社会の中の私(2)
7. 他者をとらえる(1)
8. 他者をとらえる(2)
9. さまざまな対人関係(1)
10. さまざまな対人関係(2)
11. コミュニケーション(1)
12. コミュニケーション(2)
13. ソーシャル・ネットワーク(1)
14. ソーシャル・ネットワーク(2)
15. 中間試験
16. 影響力の武器
17. 返報性のルールとは
18. 返報性を使ったテクニック
19. コミットメントと一貫性(1)
20. コミットメントと一貫性(2)
21. 社会的証明とは何か
22. 社会的証明の威力と防衛法
23. 好意 優しい泥棒(1)
24. 好意 優しい泥棒(2)
25. 権威の力(1)
26. 権威の力(2)
27. 希少性(1)
28. 希少性(2)
29. 手っ取り早い影響力
30. まとめ

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)平常点:30% (2)中間試験:30% (3)期末試験:40%

社会調査論

担当者：横山 寿世理

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

1. 講義の内容

社会調査とは、社会現象を明らかにすることを目指した手段であり、この科目ではその方法を学ぶ。数的なデータを中心的に使うことになるが、私たちの日常も多くの調査（世論調査や意識調査など）に覆われている。それらの調査の問題点を知っておくことは重要だろう。具体的には、量的調査（アンケート調査）の実施方法とその集計・分析方法を習得することを目指す。また、ただ調査手法を学ぶだけでなく、受講者を調査対象者として、実際に社会調査を模擬的に実施して、集計・分析もしてみたい。

2. カリキュラム上の位置づけ

この授業は、全学年の学生を対象とした政治経済学科の専門科目である。政治経済学科の学生がこの科目を履修するには、社会学を修得している必要がある。

2. 学びの意義と目標

卒業研究や卒業論文執筆のために、アンケート調査を実施できるようにすることを目標とする。また、社会調査はたった一人で行うものではなく、他のメンバーと協力することが必要となるため、他者との協調性を身につけるという意義もあるだろう。

準備学習(予習)

本講義全体が1つの社会調査実習でもあるため、今日の講義で求められること、今日の講義が全体の中のどの位置にあるのかを予想してこることが必要となる。

準備学習(復習)

講義内で課された課題は、次回までにもう一度取り組んでおく必要がある。

授業計画

1. 導入
2. 社会調査とは何か
3. 調査結果の解釈（1）：いろんな社会調査の例を知る
4. 調査結果の解釈（2）：謝意調査の意義を知る
5. 社会学と社会調査（1）：客観的な論証とは？
6. 社会学と社会調査（2）：『自殺論』から社会調査を考える
7. 社会学と社会調査（3）：社会調査の戦略
8. 社会調査にできること（1）：調査結果から仮説を考える
9. 社会調査にできること（2）：検証できる仮説とは？
10. 社会調査にできること（3）：仮説と調査結果のまとめ
11. 社会調査にできること（4）：仮説と変数との関係
12. 社会調査にできること（5）：変数と質問文との関係
13. 社会調査にできること（6）：質問文の作り方
14. 調査票を作る：調査テーマと仮説を考える【グループ】
15. 調査票を作る：仮説と質問文・回答を考える【グループ】
16. 調査票を作る：プリテストの完成（宿題あり）
17. 集計方法を学ぶ：エディティングとコーディング
18. プリテスト結果の確認と調査票の修正【グループ】
19. 実査
20. エディティングとコーディング【グループ】
21. 実査結果の集計（転記）【グループ】
22. 単純集計
23. クロス集計
24. 集計結果の分析（1）
25. 集計結果の分析（2）
26. 集計結果の分析（3）
27. 集計結果分析の講評とここまでの復習
28. 標本抽出の方法と問題点
29. もう少し深い分析をするための方法
30. まとめ

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)講義内課題:60% (2)期末試験:40%
講義内での課題の結果によって、評価を行う。このため、出席点は設けない。ただし、課題提出日にだけ出席しても課題はできないため、恒常的な出席が重要になる。詳細な配点については、講義およびmoodleで確認して欲しい。

社会福祉行政論

担当者：榊 伴夫

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

児童虐待、DV、地域コミュニティの衰退の背景は何か。
家庭機能の減退、晩婚化、単身世帯の増加、雇用形態の多様化などを要因として社会保障制度は転換を迫られている。
保育・教育・介護などの機能を社会が担うことはどこまで可能か。社会福祉を取り巻く環境が大きく変わりつつある。福祉における行政と民間の役割は。
福祉にたずさわる人材の育成をどのように進めていくか。
法律や制度は社会の進展につれてどのように発展してきたのか。「介護の社会化」「措置から契約へ」「自立・自助・自己責任」「格差社会」などの意味するところを学ぶ。
高齢化・少子化時代における社会福祉行政の役割と課題を学ぶ。

2.学びの意義と目標

社会福祉・医療・年金など生活に深く関わる分野を、行政や民間活動などと関連させながら、体系的に学び、論理的思考を培うこと。
社会福祉の基礎的理解を通じて、それぞれの分野に様々な課題があることを学び、その現代的な意味を検討すること。
制度の歴史を学ぶことにより、社会の進展と変化を考える。
福祉行財政を学び、負担と給付の問題を考える。福祉の領域から、様々な社会問題に関心を持つこと。
ひとり一人が社会福祉に強く深い関心を持つことにより、共に助け合う社会の実現に寄与する社会人として活躍すること。

準備学習(予習)

様々な考え方や、価値観を尊重するために、教科書だけでなく、福祉はもとより、文化、歴史、文学、芸術などについて、幅広く興味を持ち、書物を読んでください。授業の中でも書物の紹介をします
「貧困」「格差社会」「家庭機能の減退」の項目について、新聞記事等で情報を集めておくこと。

準備学習(復習)

配布プリントを再読し、自分の考えをまとめておく。配布プリントや、事前に集めた情報から、さらに、広く深く研究する分野を選び課題を明らかにしておくこと。

授業計画

1. 社会福祉行政を学ぶ意義
2. 社会福祉の歴史を学ぶ意義
3. 制度としての社会福祉
4. 社会福祉の歴史1(イギリス)
5. 社会福祉の歴史2(アメリカ)
6. 社会福祉の歴史3(日本)
7. 社会福祉の理念・福祉制度の見直し・社会福祉基礎構造改革
8. 社会福祉の行政組織
9. 社会福祉行政の役割
10. 社会福祉の行財政
11. 社会福祉行政の実施体制(1)
12. 社会福祉行政の実施体制(2)
13. 高齢者福祉行政の概要と課題
14. 障害者福祉行政の概要と課題
15. 母子福祉行政の概要と課題
16. 児童福祉行政の概要と課題
17. 低所得者行政と生活保護
18. 生活保護行政
19. 男女共同参画と社会福祉
20. 貧困や格差と社会福祉行財政
21. プレゼンテーション1
22. プレゼンテーション2
23. 医療・年金制度について
24. 社会福祉施設の概要
25. 司法福祉制度(更生保護、人権擁護)
26. 家族の役割と地域社会
27. 社会福祉の国際動向
28. 現代社会と社会福祉(社会福祉サービスと従事者)
29. 社会福祉行政の課題と展望
30. 期末テスト

教科書

プリントを配布する
(参考図書)「社会福祉の原理と思想」 出版社 有斐閣 編者 岩田正美, 永岡正己, 武川正吾, 平岡公一編

評価方法

(1)期末テスト:80%:800字の論文。教科書・ノート持ち込み可。
(2)プレゼンテーション:20%:テーマ・方法は別途事前に指示。
出席や、積極的な授業参加を前提の総合評価です。

社会保障論

担当者：宮寺 良光

開講期：春学期集中 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

- ・現代社会における社会保障制度の課題
- ・社会保障の概念や対象およびその理念
- ・社会保障の歴史
- ・社会保障の財源と費用
- ・社会保険と社会扶助の関係
- ・社会保障制度の体系
- ・社会保障制度の概要（年金保険・医療保険・介護保険・労働保険・その他社会手当）
- ・公的保険制度と民間保険制度の関係
- ・諸外国における社会保障制度の概要

2.学びの意義と目標

- ・現代社会における社会保障制度の課題（少子高齢化と社会保障制度の関係を含む。）について理解する。
- ・社会保障の概念や対象及びその理念等について、その発達過程も含めて理解する。
- ・公的保険制度と民間保険制度の関係について理解する。
- ・社会保障制度の体系と概要について理解する。
- ・年金保険制度及び医療保険制度の具体的内容について理解する。
- ・諸外国における社会保障制度の概要について理解する。

準備学習(予習)

- (1)講義内容の予習 テキストを読解してくる

準備学習(復習)

- (1)講義内容の復習
毎回出題する課題に対して、400文字程度のレポートを提出する

授業計画

- 1.現代社会における社会保障制度の課題 (1)人口動態の変化、少子・高齢・人口減少社会
- 2.現代社会における社会保障制度の課題 (2)労働・雇用環境の変化
- 3.現代社会における社会保障制度の課題 (3)少子高齢・人口減少社会・政治・経済的な問題と社会保障の課題
- 4.社会保障の概念や対象およびその理念
- 5.社会保障の歴史 (1)欧米における歴史的展開
- 6.社会保障の歴史 (2)日本における歴史的展開
- 7.社会保障の財源と費用 (1)社会保障の財源及び給付費
- 8.社会保障の財源と費用 (2)国民負担率と財源・費用に関する国家的課題
- 9.社会保険と社会扶助の関係 (1)社会保険の概念と範囲
- 10.社会保険と社会扶助の関係 (2)社会扶助の概念と範囲
- 11.社会保障制度の体系
- 12.年金保険制度 (1)年金保険制度の沿革と概要
- 13.年金保険制度 (2)国民年金
- 14.年金保険制度 (3)厚生年金・共済年金
- 15.年金保険制度 (4)年金制度をめぐる最近の動向
- 16.医療保険制度 (1)医療保険制度の沿革と最近の動向
- 17.医療保険制度 (2)国民健康保険
- 18.医療保険制度 (3)健康保険と共済組合制度
- 19.医療保険制度 (4)後期高齢者医療制度
- 20.介護保険制度 (1)創設の経緯
- 21.介護保険制度 (2)介護保険制度の概要
- 22.介護保険制度 (3)介護保険制度をめぐる最近の動向
- 23.労働保険制度 (4)労働保険制度の沿革と最近の動向
- 24.労働保険制度 (1)労災保険
- 25.労働保険制度 (2)雇用保険
- 26.社会手当制度
- 27.公的保険制度と民間保険制度の関係 (1)民間保険に期待される役割
- 28.公的保険制度と民間保険制度の関係 (2)民間保険の概要
- 29.諸外国における社会保障制度の概要 (1)社会保障の国際比較
- 30.諸外国における社会保障制度の概要 (2)先進諸国における社会保障制度の概要

教科書

唐鎌直義 『脱貧困の社会保障』(旬報社)

評価方法

- (1)出席:30% (2)小レポート:30% (3)試験:40%

生涯学習概論 A

担当者：小池 茂子

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

2006年に改正された教育基本法には生涯学習に関する条項が新設された。生涯学習という言葉がようやく市民権を得られてきたようにも思える一方で、それがどのような理念で、どのような背景から提唱されてきたかについては十分に認知されているとはいえない。そこで、本講義では生涯教育の理念について、どのような背景から理念が提唱され、教育政策に反映されるに至ったか、その社会背景を詳細に取り上げる。また、今日の教育改革の方向性、さらには生涯学習社会とは、どのような社会の実現を目指そうとしているのか、講義を通じて論じることとする。

2.学びの意義と目標

生涯学習の理念、理念提唱の社会的背景、今日の教育改革と生涯学習推進施策展開における生涯学習施設運営の課題など、広くテーマを設定し、社会教育や生涯学習行政の現場で働く社会教育主事や生涯学習施設の一つである公共図書館に勤務する図書館司書といった、有資格者の専門性につながる事項の理解を目指す。

準備学習(予習)

毎回、授業時に指定する配布資料を事前に読み込んで授業に臨むこと。

準備学習(復習)

授業時に配布したプリント等を、その時限のノートと照合させ、各時限の学びの定着化を図ること。

授業計画

- 1.オリエンテーション
- 2.教育の領域(家庭教育、社会教育、学校教育)
- 3.社会教育の定義(教育基本法、社会教育法)
- 4.生涯教育の理念(1)
- 5.生涯教育の理念(2)
- 6.生涯教育の理念と社会背景(1)(社会の高齢化、平均余命の伸長)
- 7.生涯教育の理念と社会背景(2)(社会の高齢化、平均余命の伸長)
- 8.生涯教育の理念と社会背景(3)(生涯にわたる発達課題の解決に向けて)教育改革と生涯学習体系への移行
- 9.生涯教育の理念と社会背景(4)(生涯にわたる発達課題の解決に向けて)教育改革と生涯学習体系への移行
- 10.生涯教育の理念と社会背景(5)(学校教育をめぐる問題、学歴主義は必要悪か?戦後の青少年の非行など)
- 11.生涯教育の理念と社会背景(6)(学校教育をめぐる問題、学歴主義は必要悪か?戦後の青少年の非行など)
- 12.生涯教育の理念への批判
- 13.教育改革と生涯学習体系への移行
- 14.生涯学習時代における公共図書館の機能と課題
- 15.まとめ

教科書

鈴木真理 『生涯学習概論』(樹村房)

評価方法

(1)出席点:20% (2)試験:80%

生涯学習概論 B

担当者：小池 茂子

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

1.内容

本講義では第1に、我が国の戦前・戦後の社会教育の理念について学ぶ。第2に、生涯学習の理念が教育政策に反映されていく過程を1960年以降の教育答申等の内容を通して捉える。第3に、戦後間もなく社会教育施設として全国に設置された代表的社会教育施設である公民館の成り立ちと機能について取り上げ、さらに生涯学習時代、多様化・高度化する人々の学習ニーズ、及び現代的な地域課題に対応すべく21世紀に求められる公民館の機能と課題について展望する。

2.カリキュラム上の位置づけ

社会教育主事資格取得の選択必修科目として位置づけられている。(勿論、資格取得を目指さない学生の受講も歓迎する。)

2.学びの意義と目標

戦前・戦後の教育史を概観することを通じ、我が国における、社会教育が草の根の活動の中からいかにして展開されてきたか、また明治期以降の社会教育政策がどのような目的と内容において展開されてきたのかを理解する。

また、社会教育から生涯学習の時代への転換の中で何が変わってきたのか。また、その変遷の中で代表的社会教育施設としての公民館に求められる教育的機能について理解する。

準備学習(予習)

配布資料を事前に読みこんで、毎回の授業に臨むこと。

準備学習(復習)

授業時に配布した資料を、講義終了後ノートと照合し、学びの内容を定着させること。

授業計画

- 1.江戸期の教育：藩校、私塾、寺子屋、稽古事など
- 2.江戸期の社会教育(1)：石田梅岩 石門心学
- 3.江戸期の社会教育(2)：二宮尊徳 報徳教
- 4.江戸期の社会教育(3)：「若者組」
- 5.戦前の社会教育(1)：明治期 近代学校教育制度と通俗教育
- 6.戦前の社会教育(2)：明治期の通俗教育
- 7.戦前の社会教育(3)：大正期～第2次大戦終了期の社会教育
- 8.戦後の社会教育(1)：教育の民主化と社会教育
- 9.戦後の社会教育(2)：教育基本法と社会教育
- 10.社会教育から生涯学習の理念へ(1)何が新たな展開として出現したか
- 11.社会教育から生涯学習の理念へ(2)生涯学習と社会教育の違いとは?
- 12.生涯学習時代と公民館(1)公民館の成り立ち
- 13.生涯学習時代と公民館(2)公民館の現代的意義
- 14.今日の生涯学習振興の方向性(個人の需要と社会の要請とのバランス)
- 15.まとめ

教科書

稲生勤吾 『生涯学習概論』(樹村房)

評価方法

(1)出席点:30% (2)平常点:20% (3)試験:50%

商業経営論

担当者：久保 隆光

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

本講義では、主に小売業、卸売業のマーケティング、店舗経営について学びます。生産と消費を結び付ける機能が商業です。現在、日本の商業を取り巻く環境は激化しています。市場のグローバル化、ITの急速な発展、消費行動の多様化、異業種からの市場参入など、これまでにない動きが活発化しています。

そこで、こうした動き（外部環境の変化）にいかにか小売業、卸売業が対応しているか、その経営について学んでいきます。講義は主に、商業機能についての理論、つぎに店舗経営の実務、事例研究の3部構成で展開します。

普段、利用しているコンビニ、スーパー、ファッション・アパレル店、ネット販売等の経営がテーマの講義です。日々の生活に密着している話題が中心です。

2.学びの意義と目標

つぎの4点をこの講義の到達目標とします。
小売業と卸売業の機能、役割、形態について説明できる。
実際の店舗経営の実務を把握し、説明できる。
商業経営の新しい動向と問題点を説明できる。
事例研究を通して、どのように理論が実際の店舗経営に応用されているか説明できる。

準備学習(予習)

新聞、経済雑誌（例：東洋経済、日経トレンディー）などに目を通し、企業の実例に関心を持つように。

準備学習(復習)

毎回の講義内で解説した専門用語、理論を整理すること。

授業計画

- 1.概要説明 商業とは何か？
- 2.商業と何か？ 小売業の機能・役割
- 3.商業と何か？ 小売業の構造・形態
- 4.商業と何か？ 卸売業の機能・役割・構造・形態
- 5.店舗経営論 店舗計画、商品管理、在庫管理
- 6.店舗経営論 店舗管理、広告・プロモーション
- 7.店舗経営論 価格設定（価値と価格、ブランド）
- 8.店舗経営論 市場戦略、戦略的マーケティング
- 9.店舗経営論 情報システム・ITと商業経営（ネット販売）
- 10.新しい商業経営の動向
- 11.商業経営の問題・課題
- 12.事例研究 モスバーガー VS マクドナルド
- 13.事例研究 Fast fashion（ユニクロ、ZARA、H&M）
- 14.事例研究 楽天
- 15.全体総括

教科書

プリントを配布する

特定の教科書は使用しません。そのため、講義ごとにプリントを配布します。必要な参考図書、ウェブ・サイトは講義内で紹介します。

評価方法

(1)最終試験:80% (2)出席状況:20%

講義は社会的空間です。社会的ルールを守らない場合は厳正に対処します。

商法概論

担当者：佐藤 文彦

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

わが国にとどまらず、世界の経済を中心に担っているのは株式会社である。本授業では、商法のうち、この株式会社を規整している会社法を中心に解説する。ここでは、会社をはじめとする商人がなぜ世に必要とされ、認められる存在であるのか、そしてなぜ株式会社が、世の起業家に、また世界経済に受け入れられているのかという疑問にはじまり、株式会社制度が抱える法的諸問題を会社法がどのように処理しているのかを主に学んでもらう。

2.学びの意義と目標

商法を基軸として、民法を基礎とする私法全般にわたる基本的知識とともに、企業実務家としての素養を身に付けてもらうことを目標とする。

準備学習(予習)

教科書等により関連事項の全体像を自分なりに理解しておくこと。

準備学習(復習)

講義で示された条文・制度の内容を教科書等を参考にしながら理解すること。

授業計画

1. ガイダンス
2. 商法・会社法の意義
3. 個人商人，商人としての会社
4. 商人資格要件
5. 絶対的商行為
6. 営業的商行為
7. 商行為法総論
8. 消費者保護法総論
9. 商法が規定する共同事業制度
10. 会社法が規定する各種会社制度
11. 持分制度とは
12. 株式制度とは
13. 会社法の具体的目的
14. 組織法としての会社法
15. 会社の設立
16. 商業登記制度
17. 会社の組織再編行為総論
18. 合併，組織変更
19. 株式交換・移転
20. 事業譲渡，解散，清算
21. 株式・新株予約権の発行
22. 自己株式の取得，社債
23. 会社の機関総説
24. 株主総会
25. 取締役会
26. 取締役，代表取締役
27. 役員等の責任追及制度
28. 監査役（会），会計監査人，会計参与
29. 委員会設置会社とは
30. 会社の情報開示制度

教科書

山本忠弘ほか編 『やさしい企業法』(嵯峨野書院)

評価方法

(1)学期末試験:100%
出席状況・授業態度が悪い場合，これを減点評価要素とする。

情報学

担当者：河島 茂生, 鈴木 省吾

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

情報学は、20世紀前半に生まれた学問であり、特に1940年代に端緒を求めることができる。いまやその領域は、文理の垣根を超え広い学問分野を形成するに至っている。情報学は、およそ基礎情報学、情報工学・科学、応用情報学、社会情報学に大別することができる。このうち、本科目では、基礎情報学、社会情報学、情報工学・科学の領域を扱っていく。週2回の授業のうち、1回が基礎情報学および社会情報学の領域を扱い、もう1回が情報工学・科学の分野を扱う。

2.学びの意義と目標

現代社会は、しばしば情報社会と表現される。毎日のように「情報」という言葉が人々の耳目にとまる。そのような現代社会を学問的に理解することを旨とする。

準備学習(予習)

毎回与えられた課題をこなし、授業に臨みたい。

準備学習(復習)

授業で触れた内容をテキスト等で読み返し、思考を整理することを求める。また、授業課題で間違った箇所に関しては重点的に見直す必要がある。

授業計画

1. 情報学の今日的意義、情報学の種別
2. 情報概念の定義づけ
3. 情報概念の定義づけ
4. 情報の非伝達：情報伝達の擬制
5. 生物 / 機械
6. 情報社会論
7. インターネット上のコミュニケーション
8. インターネット上のコミュニケーション
9. インターネット産業の構図
10. インターネットと地域コミュニティ
11. 監視社会論
12. メディア・リテラシー
13. メディア・リテラシー
14. インターネット時代の著作権
15. まとめ
16. アナログとデジタル
17. 情報の量
18. 画像のデジタル化
19. 音声のデジタル化
20. 動画のデジタル化
21. 文字のデジタル化
22. 可逆圧縮
23. 非可逆圧縮
24. n進数
25. コンピュータの五大機能
26. 記憶機能と記憶装置
27. パリティ符号とエラー訂正
28. コンピュータウイルス
29. 情報セキュリティ
30. まとめ

教科書

中西 裕 『考える情報学 ディスカッションへのテーマと事例』(樹村房)

評価方法

(1)試験:75% (2)平常点:25%
ただし、単位修得にあたっては出席数が授業回数の3分の2以上であることを条件とする。

情報検索演習

担当者：坂内 悟

開講期：春学期/秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

一次資料と二次情報をはじめとする情報検索の基礎知識を身に付ける。電子ジャーナルを含むデータベース等の各種情報源について、その特性を理解し代表的な図書検索や雑誌記事検索等の検索システムの操作方法、活用方法を演習により習得する。インターネット検索について、サーチエンジンの基礎知識を身に付け、情報検索における活用方法を理解する。また、パスファインダー作成演習を通じ様々な情報源を活用した情報サービス提供の基本を習得する。

2.学びの意義と目標

図書館司書として仕事をするための各種情報サービスについて理解する。情報サービスにおける情報検索についてその特性を理解し、演習を通じ実践的な情報検索能力を身につける。

準備学習(予習)

次回講義に予定している内容に該当する教科書のUNITについて一読し、不明点を明らかにしておくこと。

準備学習(復習)

演習については、同様の課題についての的確に資料を探することができるように、講義で指導した方法で特に難しいと感じた課題については、可能な限り類似の課題で演習を行うこと。

授業計画

1. 情報検索とは何か
2. データベースの構造と索引作成
3. 検索の基本方針、検索語とフィールド
4. 論理演算、様々な検索機能(トランケーション等)、検索結果の出力と評価
5. 図書検索システム演習
6. 図書検索システム演習
7. 図書検索システム演習
8. 図書検索システム演習
9. 雑誌記事検索システム演習
10. 雑誌記事検索システム演習
11. 雑誌記事検索システム演習
12. 雑誌記事検索システム演習
13. インターネット検索(サーチエンジン)
14. パスファインダー演習
15. パスファインダー演習

教科書

安形 輝, 大谷 康晴 『情報検索演習 (JLA図書館情報学テキストシリーズ2-6)』 (日本図書館協会)

評価方法

(1)期末試験:85% (2)出席点 + 平常点:15%

情報通信ネットワーク

担当者：竹井 潔

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

現代社会は情報通信ネットワークによるデータ通信に基礎をおく高度情報通信社会となっている。講義ではこのことを踏まえ、情報通信ネットワークの基本的仕組みの理解とともに具体的なネットワークの構築及び設計ができるようにするためその技術と知識について学ぶ。ネットワークの伝送技術及びLAN、インターネットの仕組みや携帯電話、衛星通信などの問題についても取り扱う。

2.学びの意義と目標

情報社会では、生活においてもビジネス社会においてもネットワークは不可欠なものとなっている。情報伝達の手段としてのネットワークの基本的な構造や特徴を理解することは、これから情報社会に生きる者にとって必須の基礎知識となる。これらを学ぶことによりネットワーク社会におけるコミュニケーションのあり方について考えてもらいたい。

準備学習(予習)

授業では、ネットワーク特有の用語や知識が出てくるが、事前に授業で指示された参考文献等で重要用語を調べておくこと。

準備学習(復習)

授業で十分理解できなかった専門用語や知識について、各自調べておくこと。

授業計画

- 1.オリエンテーション
- 2.情報と通信
- 3.通信ネットワークとは
- 4.通信ネットワークの歴史
- 5.通信方式とネットワークの構成(DTE、DCE等)
- 6.通信サービスの歴史
- 7.通信サービスの自由化と種類
- 8.専用回線サービス、交換回線サービス
- 9.総合デジタル通信サービス(ISDN)
- 10.衛星通信サービス
- 11.移動体通信サービス
- 12.携帯電話の通信方式
- 13.携帯電話のサービス
- 14.伝送方式1 同期方式
- 15.伝送方式2 アナログ伝送、デジタル伝送
- 16.中間試験
- 17.伝送制御手順1 ベーシック制御手順
- 18.伝送制御手順2 HDLC手順
- 19.誤り制御方式1 水平垂直パリティ検査方式
- 20.誤り制御方式2 誤り訂正方式
- 21.通信回線の多重化1 周波数多重化、時分割多重化
- 22.通信回線の多重化2 PCM多重化、パケット多重化
- 23.交換方式1 回線交換方式、蓄積交換方式
- 24.交換方式2 フレームリレー方式、ATM交換方式
- 25.ネットワークアーキテクチャー/OSI
- 26.LANとは
- 27.LAN構築の方法
- 28.インターネット IPアドレス、TCP/IP等
- 29.今後のネットワーク社会
- 30.まとめ

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)平常点:20%:出席、課題提出 (2)中間試験:40% (3)期末試験:40%

情報と職業

担当者：渡辺 英人

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

「情報と職業」高等学校普通教科「情報」教員免許取得を目的とする学生の必修科目である。現代社会におけるさまざまな「活動」にとり「情報」はもっとも重要な要素であると考えられている。この授業では公的機関と情報、民間企業、個人事業における情報など、さまざまな職業と情報について解説し、理解してもらう。授業は毎回マルチメディア教室で行う。受講者全員が一斉に授業を開始し、一斉に終了する。けっして遅刻、欠席しないこと。

2.学びの意義と目標

社会と情報との関係を具体的な例を使いながら、詳しく説明する。社会の中で生きるために必要不可欠な知識となるように学ぼう。

準備学習(予習)

社会教育主事資格、および情報教職免許取得を目的とする学生の必修科目である。評価は教職目的の学生と同じく厳しいものとなる。前週までにテーマと資料を提供するので、復習および予習をすること。

準備学習(復習)

授業で使用した資料と、授業中に記述したノートに基づいて、清書ノートを作成すること。

授業計画

1. 現代社会と情報(1)
2. 現代社会と情報(2)
3. 情報と職業(国内)(1)
4. 情報と職業(国内)(2)
5. 行政と情報(1)
6. 行政と情報(2)
7. 企業活動と情報(1)
8. 企業活動と情報(2)
9. 情報の収集、蓄積、再利用(1)
10. 情報の収集、蓄積、再利用(2)
11. インターネット・ビジネス(1)
12. インターネット・ビジネス(2)
13. 情報化社会と労働環境、労働感(1)
14. 情報化社会と労働環境、労働感(2)
15. 課題作成(1)
16. 課題作成(2)
17. 情報と職業(海外)(1)
18. 情報と職業(海外)(2)
19. 情報化社会の諸問題2(1)
20. 情報化社会の諸問題2(2)
21. 情報化社会の諸問題(1)
22. 情報化社会の諸問題(2)
23. 情報化社会の将来予測(1)
24. 情報化社会の将来予測(2)
25. 課題作成(1)
26. 課題作成(2)
27. 情報化社会とマスメディア(1)
28. 情報化社会とマスメディア(2)
29. 課題作成(1)
30. 課題作成(2)

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)授業参加:40% (2)課題作成:30% (3)試験:30%

情報リスク論

担当者：鈴木 省吾

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

インターネット社会における情報伝達に関わる脅威とその実情や対策を学ぶ。クイズやディスカッションを通して各トピックの理解を深め、日常のPC利用、ネット利用に活かせる知識を身につける。

2.学びの意義と目標

情報社会に参画する態度を育てる上で、重要なトピックの一つとなる情報リスクについて学ぶ。

個人の倫理観のみならず、法規制や技術的対策により情報社会が支えられていることを、授業への積極的な参加を通して理解する。

準備学習(予習)

教科書の該当箇所を熟読の上授業に臨むこと。

準備学習(復習)

小論文、課題を完成させること。

授業計画

1. インターネット社会と情報倫理
2. インターネット社会が抱える問題
3. インターネット上のトラブル
4. インターネット上の脅威
5. 情報セキュリティの技術的対策
6. 情報セキュリティ対策の要点
7. 技術的対策の実際(1)
8. 技術的対策の実際(2)
9. インターネット社会と法
10. 不正アクセス禁止法
11. プロバイダ責任制限法
12. 著作権保護の必要性
13. 著作権保護の課題
14. 個人情報の保護
15. 情報倫理教育へむけて

教科書

会田和弘、佐々木良一、佐々木良一『情報セキュリティ入門 情報倫理を学ぶ人のために』(共立出版)

評価方法

- (1)小論文:50%:授業内のディスカッションを通して、完成させる
(2)課題:50%:クイズ形式で知識の定着を目指す
出席は評価割合に含まれないが、5回の出席で不合格とする。遅刻は15分まででそれ以降は欠席扱い。3回の遅刻を欠席1回とみなす。

情報倫理

担当者：竹井 潔

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

内容

「社会における情報」をキーワードに、その「社会性」や「責任」といった問題に関し、ても対応できる人材を養成することを目的とする。講義においては、広い意味での「情報」を扱い、現代社会と情報、情報倫理などを解説する。とくに情報倫理については「時代とともに変化する『情報』」の観点から、学生自身自身が情報倫理の変容をどう受け取るべきか、ディスカッション形式で提案させるよう、授業を展開する。

2.学びの意義と目標

情報倫理は、情報社会の新しい分野である。これからの情報社会を生きていくためには情報倫理は必要条件である。そこで、授業を通して、情報倫理とは何か、その必要性を一緒に考えてみたい。

準備学習(予習)

事前に授業で指示された参考文献の該当箇所を読み、用語などを調べておくこと。

授業では、グループ討論等の時間もあり、指示されたときは、事前に自分の意見をまとめておくこと。

準備学習(復習)

授業の中でわからなかった箇所、専門用語は、授業のあと各自調べて理解しておくこと。

授業計画

- 1.オリエンテーション
- 2.工業社会から情報社会へ
- 3.情報とは
- 4.情報の価値
- 5.個人情報の価値
- 6.個人情報とプライバシー
- 7.個人情報 事例研究(1)
- 8.個人情報 事例研究(2)
- 9.個人情報漏洩の原因と対策
- 10.インターネットの役割と情報格差
- 11.情報のボーダレス化とOECD8原則
- 12.社会における情報の役割
- 13.情報化による人間生活の変化
- 14.情報化による光の側面
- 15.情報化による影の側面
- 16.中間試験
- 17.著作権について
- 18.著作権 事例研究(1)
- 19.著作権 事例研究(2)
- 20.著作権 事例研究(3)
- 21.著作権 事例研究(4)
- 22.著作権 事例研究(5) 著作権まとめ
- 23.ネチケットについて
- 24.情報社会の課題 インターネット犯罪1
- 25.インターネット犯罪2
- 26.インターネットの危険と対策
- 27.情報倫理の総合演習
- 28.情報倫理の総合演習
- 29.情報倫理・情報モラルの構築
- 30.まとめ

教科書

プリントを配布する

評価方法

- (1)平常点:20%:出席、課題の提出・発表 (2)中間試験:40%
(3)期末試験:40%

人文地理学概説

担当者：飯島 康夫

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

人文地理学の基本的な考え方を紹介し幅広い分析の視角を提供する。一般に地理学は総合的な科目といわれる。ある地域のことを理解するためにはその地域の自然地形、気候・風土とそれらから派生する生活様式、また政治や経済の制度、歴史や文化という知識を総動員させなければその実態が理解できない。

この講義は地理学に関係する隣接科学の諸分野（経済や政治、歴史など）をバランスよく配分することに配慮したが、特に世界経済の進展のなかで諸地域がいかなる空間の形成を伴って発展するのかという問題に関心を置いた。本講義は人文地理学の発展過程とそれに伴って生じた諸問題を紹介したうえで制度や歴史、文化的背景の違いのなかで生じる諸都市・地域の発展形態の違いに焦点をあてる。本講義の参加者が諸都市・地域の現象面に埋没することなくその背後にひそむ、より本質的な空間形成の仕組みと地域ごとの差異について理解するよう工夫してみた。

2.学びの意義と目標

地理学の基礎を学び、現実の地域の調査ができるようになることが望ましい。既存の文献ではなく、自分で判断、分析できるようになること。

準備学習(予習)

教科書に書かれていることを指定したところを事前に読んで理解しておくこと。

準備学習(復習)

前の講義のノートを見て、学んだことを簡潔にまとめること。

授業計画

1. 地理学の発展史
2. 地理学と隣接科学との関係
3. 新古典派地理学のアプローチ
4. 行動・組織論、人文主義のアプローチ
5. マルクス主義的地理学のアプローチ
6. 人文地理の思想
7. 情報ネットワークと空間編成
8. 地域間格差
9. 政治経済システムと都市の空間編成
10. 製造業の空洞化と都市・地域経営
11. 経済のサービス化と都市・地域の空間編成
12. グローバリゼーションと都市・地域政策
13. レポートの添削・指導
14. レポートの書き方、伝え方、プレゼンテーションの方法
15. 総まとめ

教科書

ピーター・ディッケンほか『立地と空間 上』(古今書院)

評価方法

- (1)出席:50% (2)レポート・小テスト:30% (3)発表:20%
- 1.基準に満たない提出物は再提出させる場合がある
 - 2.調べ方、書き方を学んでください
 - 3.極端に出席回数が少ない場合、評価対象外とする
 - 4.基本文献を指示するので、基礎知識を養うこと

政治学

担当者：谷口 隆一郎

開講期：春学期 必修・選択：必修科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1. 内容

この科目では、現代政治学の主な領域の重要な知識を網羅的に学習します。将来、公共性の高い仕事（公務員職等）に就きたいと考えている学生にとっては、知っておくといいいテーマと内容が、この講義には含まれています。地方上級・警察・消防・国家IIで出題される政治学の頻出テーマのほぼすべてをカバーします。加えて、この科目の内容は、一般の企業の採用一次試験の対策としても有効です。

2. 学びの意義と目標

聖学院大学政治経済学部、特にコミュニティ政策学科というところで専門的に学ぶ内容（特に、その政治学的基礎）とはどのようなものかを知ることができます。そして、公務員試験（地方上級・警察・消防）の政治学の内容をカバーしますので、公務員試験合格を目指す人にとって有益です。

準備学習(予習)

テキストの各章を読んで予習する。授業内レポート（BRC：授業内で書き上げる簡単な論述400字程度。BRCについては、オリエンテーションで説明する）の作成を通して予習する。加えて、問題集（『70点で合格！政治学 厳選100問』）で予習する。オリエンテーションで、BRCについての別紙シラバスを配布する。

準備学習(復習)

BRCを再読する。授業内予習時間に書き残した未完成のBRCを授業後に完成させる。それにより、授業後の理解を深める。加えて、問題集（『70点で合格！政治学 厳選100問』）で復習する。

授業計画

1. オリエンテーション
2. 政治とは何か
3. 政治学の発展（1）
4. 政治学の発展（2）
5. 政治と権力
6. 支配の正当性
7. 権力構造
8. 政治的リーダーシップ
9. 政治思想とイデオロギー
10. デモクラシーの理論
11. 現代社会における国家
12. 近代の議会政治
13. 近代の政治原理
14. 主要諸国の政治制度
15. 【中間試験】
16. 現代の行政国家
17. 現代社会と官僚
18. 議会と立法過程
19. 選挙制度
20. 政策と政策過程
21. 現代政治と政党
22. 政治社会と政党制
23. 圧力団体と住民運動
24. 現代の政治過程
25. 政治意識と投票行動
26. 政治的コミュニケーション
27. 大衆社会の政治
28. 日本の政治
29. 国際政治
30. 【期末試験】

教科書

中村昭雄 『基礎からわかる政治学』（芦書房）
TAC公務員講座 『70点で合格！政治学 厳選100問』（TAC出版）

評価方法

(1)中間試験:20%: 穴埋め問題および文章問題（公務員院試験問題）形式 (2) 期末試験 :30%: 中間試験に準じる (3) BRC（要注意）:50%: 各回授業の授業内レポート（BRC）を完成させ、全てを綴じて提出
【要注意】中間・期末試験のいずれかもしくは両方を受験した受講生だけがBRCの評価を受けることができる。

政治学

担当者：森 達也

開講期：春学期 必修・選択：必修科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

<テーマ> 政治の基礎知識 / 政治学の基礎
政治という言葉は、私たち自身が当事者であるところの多様な問題を認識し、討議し、意思決定する営みを意味します。そして政治学は、私たちが日々の政治問題を理性的に考え、解決し、判断するのに役立つ道具箱であると同時に、政治という営みそれ自体を批判的に理解するための手段であると言えます。本講義ではまず政治学の基本的な考え方を学び、現代政治の基礎知識を習得しながら、政治学内部の各テーマを順に考察していきます。

2.学びの意義と目標

政治学がどのような学問領域であるのかを理解すること。身近な問題を政治(学)的に捉え、それに意見を表明し、他者と議論することができるようになること。

準備学習(予習)

配布プリントを各自でできるかぎり完成させ、次回の講義に備えること。

準備学習(復習)

授業で扱った範囲の教科書・プリントの内容を習得して小テストに備えること。

授業計画

1. 講義の概要と趣旨の説明
2. 政治学とは何か(教科書序章)
3. 民主主義の基本原則(プリント)
4. 政治とは何か(教科書第1章)
5. 各国の政治体制(プリント)
6. 政治体制・比較政治制度論(教科書第2章)
7. 国会の仕組み(プリント)
8. 現代政治学の歴史(教科書第11章)
9. 内閣と行政機構(プリント)
10. 政治過程論(教科書第4章)
11. 現代政治の特質と政党(プリント)
12. 政党・圧力団体・メディア(教科書4・6章)
13. 財政と税(プリント)
14. 政策決定論(教科書第5章)
15. 貨幣・金融と日銀の役割(プリント)
16. 中間試験
17. 映像で見る政治(1)
18. 映像で見る政治(2)
19. 資本主義 / 社会主義経済(プリント)
20. 政治と経済(教科書第3章)
21. 日本の社会保障制度(プリント)
22. 福祉資本主義レジーム論(教科書第3章)
23. 労働問題と労働市場の変化(プリント)
24. 福祉国家の危機と再編(教科書第3章)
25. 国際社会と国際法(プリント、教科書第9章)
26. 国際機関(プリント)
27. 冷戦と核兵器の問題(プリント、教科書第9・10章)
28. ナショナリズムと民族問題(プリント、映像)
29. 地球環境問題(プリント、教科書第10章)
30. 総括

教科書

加茂利男ほか著 『現代政治学 第4版』(有斐閣)

評価方法

(1)中間試験:35%:論述問題を含む (2)最終試験:35%:論述問題を含む
(3)授業内課題:30%:小テスト・コメントシート

政治過程論

担当者：高橋 愛子

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

政治学の学問史のなかにおける「政治過程論」の史的位置づけ・特徴について考察し、その後、各論をテキストを参考にしながら学んでいく。基本的なテキストとして下記の教科書を使い、必要に応じて資料を配布する。リアルな政治現象への認識を得るため新聞やニュース映像を適宜使用する。受講者は、政治にかかわる新聞記事のスクラップに各自のコメントを付したコメント・シートの提出が課せられる。<カリキュラム上の位置づけ>必修の専門基礎科目「政治学」修得済みの学生が、政治過程に」についてより専門的に学ぶための科目である。

2.学びの意義と目標

本講義の狙いは以下の三点である。第一に、政治現象の分析や考察において不可欠かつ主要な位置を占める「権力（power）」概念の多面的な学びを通して、政治プロセスの各局面で「権力」がどのように作用しているかを考察すること、第二に、政策決定過程の全体像についての概観を得ること、そして第三に、政策決定の各プロセスの中に潜む様々な問題が私達にとってどのような「意味」を持っているかを考えることである。

準備学習(予習)

予め配布するペーパーあるいは教科書の該当箇所を読んでくること。

準備学習(復習)

授業のポイントについてのコメント・シートの作成、提出。

授業計画

1. 導入:講義計画の説明
2. 導入:政治過程論とはどのような学問か
3. 大衆社会の登場
4. 大衆社会における人間
5. 大衆社会の帰結
6. 大衆社会における人間観の変化
7. E . フロム『自由からの逃走』
8. さまざまな権力観（1）
9. さまざまな権力観（2）
10. さまざまな権力観（3）
11. 政策決定過程と課題設定過程（1）
12. 政策決定過程と課題設定過程（2）
13. 政治システム論（1）
14. 政治システム論（2）
15. 中間テストまでのまとめ
16. 中間テスト
17. 政治文化論（1）
18. 政治文化論（2）
19. 政治的社会化
20. 脱物質主義的価値観
21. 人間関係資本
22. 組織による決定（1）
23. 組織による決定（2）
24. 議会と立法過程（1）
25. 議会と立法過程（2）
26. 利益集団とNGO（1）
27. 利益集団とNGO（2）
28. 選挙制度と政治参加（1）
29. 選挙制度と政治参加（2）
30. 一学期間のまとめ

教科書

伊藤光利・田中愛治・真淵勝『政治過程論』（有斐閣）

評価方法

(1)出席:40% (2)中間テスト:30% (3)期末テスト:30%

税法概論

担当者：田口 安克

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

税金は、私たちの生活のあらゆる面にかかわっている。例えば、サラリーマンは給与から源泉徴収等で所得税や住民税が徴収され、国内の買い物の価格には消費税が含まれ、家や土地を所有している人は市町村に固定資産税を納付する。これら税金は、国や地方公共団体が提供する教育・警察などの公共サービスの財源となり、そのサービスの享受者としても私たちににかかわっている。

本講義では、私たちの生活に深くかかわっている税金に関する法律（税法）のしくみについて、できるだけわかりやすく解説する。税法はどのような考え方がその根底にあるのか、あるいは、所得税法や法人税法といった実際の税法のしくみを解説するだけでなく、税務調査といった税務行政はどのようなものかなど、税金実務についても触れていく予定である。

2.学びの意義と目標

税法は、税金を徴収する側の国や地方公共団体のためという視点だけでなく、納税者である私たちのためにあるということも理解し、現在のわが国の税法全体の概要を把握する。

準備学習(予習)

事前に指定した教科書の該当箇所を読んでくること。

準備学習(復習)

追加プリントを再読し、各項目の理解を深めること。

授業計画

1. 税とは何か
2. 税の基本原則
3. 租税法律主義とは何か
4. 税法を解釈するために
5. 税法を適用するために
6. 所得税（1）
7. 所得税（2）
8. 所得税（3）
9. 所得税（4）
10. 法人税（1）
11. 法人税（2）
12. 法人税（3）
13. 法人税（4）
14. 相続税・贈与税（1）
15. 相続税・贈与税（2）
16. 消費税（1）
17. 消費税（2）
18. 消費税（3）
19. 国際課税
20. その他の国税
21. 地方税（1）
22. 地方税（2）
23. 税金の確定（1）
24. 税金の確定（2）
25. 税金の徴収
26. 税務行政組織
27. 納税者の権利・救済（1）
28. 納税者の権利・救済（2）
29. まとめ
30. 試験とその解説

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)出席:30% (2)レポート:30% (3)期末試験:40%

西洋史概説 A

担当者：小田原 琳

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

西洋史を研究する上で必要不可欠な基礎的知識を学びます。西洋世界の変化を、事象相互の関連や現代とのつながりを意識しながら学んでいきます。西洋史概説Aでは、19世紀までの西洋史を学びます。毎回の授業で提出していただくレスポンスシート（講義内容の要約、疑問点等をまとめていただきます）および期末テストが課題となります。

2.学びの意義と目標

現代社会に生きる私たちは、さまざまな点で西洋文化から多大な影響を受けています。西洋史を学ぶことによって現代社会についての理解を深めることができます。そのための歴史的な基礎知識を着実に身につけることが目標です。

準備学習(予習)

関心のある歴史的なできごとや人物に関して、積極的に本を読むなどして調べてください。

準備学習(復習)

各回の講義は、前回の講義との関連性をもって位置づけられています。前回の講義内容を踏まえて、各回の講義にのぞんでください。

授業計画

1. ガイダンス
2. 古代地中海世界 ギリシャとローマ
3. 海から陸へ 西ヨーロッパ世界と東ヨーロッパ世界
4. キリスト教の発展
5. ふたたび海へ（1） 十字軍と都市の発展
6. ふたたび海へ（2） ルネサンスと宗教改革
7. ふたたび海へ（3） 大航海時代
8. 近代世界システム（1） 近代国家と主権国家体制の成立
9. 近代世界システム（2） ヨーロッパの海外進出
10. 二重革命の時代（1） 産業革命と労働者階級の形成
11. 二重革命の時代（2） アメリカ独立とフランス革命
12. 二重革命の時代（3） ナショナリズム
13. 帝国主義の時代（1） 世界分割
14. 帝国主義の時代（2） 帝国主義勢力の衝突
15. まとめ

教科書

成瀬 治, 佐藤 次高, 木村 靖二, 岸本 美緒, 桑島 良平 『山川世界史総合図録』 (山川出版社)

評価方法

(1)平常点:40%:受講態度およびレスポンスシート (2)期末テスト:60%

西洋史概説 B

担当者：小田原 琳

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

西洋史を研究する上で必要不可欠な基礎的知識を学びます。西洋世界の変化を、事象相互の関連や現代とのつながりを意識しながら学んでいきます。西洋史概説Bでは、19世紀～現代までの西洋史を学びます。毎回の授業で提出していただくレスポンスシート（講義内容の要約、疑問点等をまとめていただきます）および期末テストが課題となります。

2.学びの意義と目標

現代社会に生きる私たちは、さまざまな点で西洋文化から多大な影響を受けています。西洋史を学ぶことによって現代社会についての理解を深めることができます。そのための歴史的な基礎知識を着実に身につけることが目標です。

準備学習(予習)

関心のある歴史的なできごとや人物に関して、積極的に本を読むなどして調べてください。

準備学習(復習)

各回の講義は、前回の講義との関連性をもって位置づけられています。前回の講義内容を踏まえて、各回の講義にのぞんでください。

授業計画

1. ガイダンス
2. 第一次世界大戦（1） 大戦の勃発
3. 第一次世界大戦（2） 革命と大戦の終結
4. 第一次世界大戦（3） ヴェルサイユ体制
5. 第二次世界大戦（1） 世界恐慌とファシズム
6. 第二次世界大戦（2） 大戦の経緯
7. 冷戦（1） 大戦の終結と東西分裂
8. 冷戦（2） 冷戦の激化
9. 冷戦（3） 東西両陣営の経済と社会
10. 第三世界（1） 独立と非同盟中立
11. 第三世界（2） 代理戦争としての地域問題
12. グローバル化のもとで（1） 冷戦終結と多極化
13. グローバル化のもとで（2） 世界経済の一体化
14. グローバル化のもとで（3） 開発と貧困
15. まとめ

教科書

成瀬 治, 佐藤 次高, 木村 靖二, 岸本 美緒, 桑島 良平 『山川世界史総合図録』 (山川出版社)

評価方法

(1)平常点:40%:受講態度およびレスポンスシート (2)期末テスト:60%

専門演習(コミュニティ政策)

担当者：大塚 健司

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週2回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

地域社会の構成要素について考えます。また、実際に地域（大学周辺）の歴史、土地政策、環境政策等実地に調査します。NPO法人との連携を図り、農作業や障害者との交流を体験、コミュニティ政策を学びます。

2.学びの意義と目標

実際に体験することにより、地域社会の構成要素を考えるとともに、実社会で対応できることを目指します。

準備学習(予習)

新聞記事を良く読むこと。
与えられた課題を調べること。

準備学習(復習)

配布資料を読むこと。

授業計画

1. イントロダクション
2. 課題整理、論議、論文の書き方
3. 地域社会の構成要素
4. 地域社会の構成要素
5. NPO法人との実地体験
6. NPO法人との実地体験
7. NPO法人との実地体験
8. NPO法人との実地体験
9. 地域社会の歴史探索
10. 地域社会の歴史探索
11. 土地政策
12. 土地政策
13. 環境政策
14. 環境政策
15. 福祉政策
16. 福祉政策
17. 国と地方自治体
18. 国と地方自治体
19. 国と地方自治体
20. 国と地方自治体
21. 担当者による発表
22. 担当者による発表
23. 担当者による発表
24. 担当者による発表
25. 担当者による発表
26. 担当者による発表
27. 担当者による発表
28. 担当者による発表
29. まとめ
30. まとめ

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)レポート:70% (2)出席率:30%

専門演習 (キリスト教社会倫理)

担当者：菊地 順

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

この授業では、キリスト教社会倫理に関連する人物や思想に、テキストや映像をとおして触れてもらい、それぞれの世界を学ぶこととおして、人間の生き方について考えます。

具体的には、アメリカで1950年代後半から60年代に活躍したマーティン・ルーサー・キングを中心に、その戦い、生き方、思想について学びます。

2.学びの意義と目標

春学期は、キングの背景と、キングの活動の原点ともなったモンゴメリーでの戦いを中心に学びます。そのことをとおし、その背後にあるキリスト教の精神を尋ねつつ、人間の生き方や価値観、特に人間の尊厳とか人格・人権などについて考えます。

準備学習(予習)

予習としては、読むことが中心となりますので、予め配布されたプリントを下読みし、特に英文は必ず下調べをしておくこと。

準備学習(復習)

復習としては、学んだ内容をまとめ、整理し、必要に応じて調べ、レポートの作成に備えること。

授業計画

1. 授業のオリエンテーション
2. アメリカ最南部の世界
3. 1950年代のアメリカ
4. キングの背景 家族
5. キングの背景 教会
6. キングの背景 教育
7. キングの戦い バス・ボイコット運動(1)
8. キングの戦い バス・ボイコット運動(2)
9. キングの戦い バス・ボイコット運動(3)
10. キングの思想的遍歴(1)
11. キングの思想的遍歴(2)
12. キングの思想的遍歴(2)
13. ローザ・パークスの戦い(1)
14. ローザ・パークスの戦い(2)
15. まとめ

教科書

プリントを配布する

プリントを配布します。またプリント以外にも映像等を用いて授業を行います。

評価方法

(1)出席:50% (2)レポート:50%

授業に積極的に参加することを重視します。また最後にレポートを書いてもらいます。その総合的判断で成績を出します。

専門演習 (公共哲学)

担当者：谷口 隆一郎

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

現代の市民社会とその政策を考えるに当たって、各コミュニティが所属する、社会の各領域に内在する規範と、コミュニティがどう関係するかを理解することはとても重要です。私の「公共倫理」の概念を手がかりに、プラグマティズム的思考に即しつつ、コミュニティの新しい政治学の出来(しゅったい)の経緯と動向について学びます。

公共倫理(コミュニティ間の倫理)、民主的市民精神、多元多文化と寛容、市場の公共性、社会政策にとってのコミュニティの意味、コミュニティリアニズム対リベラリズム論争、等の諸問題と諸課題を取り上げます。

(1)1年かけて、公共哲学、政治哲学、政治理論、社会理論等に関する多くの文献を精読・精解する。(2)文献をレジメにまとめ報告・議論する。(3)卒業論文のテーマにつながるトピックを決め、ゼミ・レポートを書く。

2.学びの意義と目標

(1)公共・民主的市民精神・公共倫理の諸問題と諸課題についての理解を深めることにあります。そのために、それらに関して、世界の大学の公共哲学の授業で読まれている良質な内容の多くの文献を精読していきます。(2)将来、公共性の高い仕事(公務員職等)に就きたいと考えている学生にとっては、知っておくといテーマと内容が、この講義には含まれているのみならず、現代政治状況を根底から理解するために不可欠な視点が数多く盛り込まれています。コミュニティをどう捉えるかによって、政策への取り組みの考え方がどのように異なるのか、等について整理して学ぶことができます。(3)論理的に思考することにより、徹底的に日本語能力と思考力を鍛えます。思考力さえ鍛えておけば、それをどんな知識の運用にも役立たせることができます。

準備学習(予習)

授業の中で指示した文献や資料を事前を読む。指定テキストを各自読み進める。

準備学習(復習)

当番制でBRC(授業内レポート)を作成する。各授業で、担当者は前回の授業のBRCを人数分配布する。各自、BRCを読むことで理解を新たにする。また、作成者は配布したBRCへの質疑応答を行う。オリエンテーションで、BRCについての別紙シラバスを配布する。

授業計画

- 1.オリエンテーション
- 2.公共哲学に関する文献を精読し、レジメを作成して、報告を行う
- 3.公共哲学に関する文献を精読し、レジメを作成して、報告を行う
- 4.公共哲学に関する文献を精読し、レジメを作成して、報告を行う
- 5.公共哲学に関する文献を精読し、レジメを作成して、報告を行う
- 6.公共哲学に関する文献を精読し、レジメを作成して、報告を行う
- 7.公共哲学に関する文献を精読し、レジメを作成して、報告を行う
- 8.公共哲学に関する文献を精読し、レジメを作成して、報告を行う
- 9.公共哲学に関する文献を精読し、レジメを作成して、報告を行う
- 10.公共哲学に関する文献を精読し、レジメを作成して、報告を行う
- 11.公共哲学に関する文献を精読し、レジメを作成して、報告を行う
- 12.ゼミ生による発表
- 13.ゼミ生による発表
- 14.ゼミ生による発表
- 15.まとめ

教科書

山脇直司『公共哲学からの応答:3.11の衝撃の後で』(筑摩書房)

評価方法

- (1) 授業参加度(研究報告):50%: 毎回の授業への積極的参加および研究報告・レジメ等
- (2) 研究成果(小論文):50%: ゼミ論文に対する評価

専門演習 (コミュニティ・ビジネス論)

担当者：瀬名 浩一

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

内容

日本経済は、1980年代には国際競争力のある体質を作上げたが、バブル経済崩壊後の1990年代以後は、国際競争力の低下、デフレ体質に陥り、「失われた20年」からなかなか抜け出せない。まず「デフレの正体」を学ぶ。次に問題解決のために中心市街地活性化、構造改革特区、地域再生などさまざまな内需拡大政策が実施されたが、効果は限られているのはなぜかを問う。最後にデフレから抜け出すために、現在提案されてる「若者への所得移転」「女性の就労率向上」「外国人観光客の招致」「インフレターゲット政策」などについてその可能性を探る。

2.学びの意義と目標

日本経済はどうしてデフレから脱却できないか？なぜアジアの新興国市場の獲得に活路を見出す必要があるか？インフレターゲット政策は有効か？などを学ぶ。

授業計画

1. 専門演習の学び方
2. 通俗的見解
3. 貿易で勝ったが通貨で負けた
4. 内需の不振
5. じり貧化している首都圏
6. 再生を目指す地方圏
7. 人口の波とは
8. 人口減少を生産性向上で補えるか？
9. デフレの正体I
10. 若者への所得移転
11. 女性の就労
12. 外国人観光客の増加
13. 高齢者対策
14. デフレの正体II
15. 専門演習の総括

準備学習(予習)

授業計画を参照し、扱われるトピックスについて新聞等で情報を集めておくこと。

教科書

瀬谷 浩一『デフレの正体 経済は「人口の波」で動く(角川oneテーマ21)』(角川書店/角川グループパブリッシング)

準備学習(復習)

配布プリントを再読し、各トピックスについて次回までに説明できるようにすること。

評価方法

- (1)発表力:20%:プレゼンテーション (2)討論力:20%
(3)期末レポート:30% (4)出席率:30%

専門演習 (情報学)

担当者：河島 茂生

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

サーチエンジンやマイクロブログ(Twitter)、ネットゲーム、電子書籍などを取り上げながら、情報社会が抱えている問題を意識化することを目指す。

授業のスタイルは、前半と後半で変える予定である。前半は、新書や雑誌記事など、比較的手軽に読める文献を参照しながら議論を行う。後半は、前半で重ねた議論の枠内でより細かいテーマを設定し、受講生の経験・調査を踏まえつつそのテーマについて深く議論していく。なお、授業内で受講生に発表・報告を求めるが、その際はレジュメを準備することが必要となる。

2.学びの意義と目標

インターネット技術によって支えられている情報社会は、利便性と同時に負の側面も抱えている。本授業では、情報社会の問題を発見できるように議論していきたい。

準備学習(予習)

指定された課題をこなし、口頭発表時には配布資料を作成されたい。また授業外の学習を絶えず行いながら、ゼミに関わる必要がある。

準備学習(復習)

授業で扱った内容を復習し、自分の関心のあるテーマに引きつけて考えることを求める。

授業計画

1. 情報社会への眼差し(ガイダンス・含)
2. グーグル問題
3. ネットゲーム依存
4. 情報収集の変容
5. ネット帝国主義
6. ネットと知性
7. 研究報告
8. 研究報告
9. 研究報告
10. 研究報告
11. 研究報告
12. 研究報告
13. 研究報告
14. 研究報告
15. 外部施設の見学

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)口頭発表:80% (2)ディスカッションへの参加度:20%

専門演習 (情報倫理)

担当者：竹井 潔

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

工業社会から情報社会へと変遷してきた中で、「情報倫理」ということが近年いわれた。 「情報倫理」は今後あらゆる「情報」を扱う上で必要となる。そこで、「情報倫理」がなぜ必要となってきたのか、情報とは何か、現代社会と情報のかかわりの中で、情報の価値を問いかけていきたい。私たちは、次第に情報ネットワーク社会を前提とした情報社会の中で生活をしてきているが、情報社会をとりまく光と闇の部分を知り、情報化によって便益を受けている面と、問題が生じてきた情報社会の課題を検討していきたい。

2.学びの意義と目標

情報社会における諸課題、情報倫理の必要性について理解し、課題を形成していく

準備学習(予習)

事前に指示する参考図書を読んで用語などを調べておくこと。
発表演習には事前に発表資料を作成してくること。

準備学習(復習)

演習でできなかった箇所や理解できなかった専門用語は各自調査して十分に理解しておくこと。

授業計画

1. オリエンテーション
2. BAG (ビジネスゲーム) 解説
3. BAG (ビジネスゲーム) 演習1
4. BAG (ビジネスゲーム) 演習2
5. BAG (ビジネスゲーム) 演習3
6. BAG (ビジネスゲーム) 演習4
7. BAG (ビジネスゲーム) 演習5
8. BAG (ビジネスゲーム) 演習6
9. BAG (ビジネスゲーム) の振り返り
10. 企業活動と経営・組織
11. 経営と管理技術
12. 経営と企業倫理
13. 経営と情報倫理
14. 経営とCSR
15. まとめ

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)演習:40%:課題提出、発表演習 (2)レポート:60%

専門演習 (地域社会論)

担当者：大高 研道

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

生活の個別化が進み、家族や地域社会を取り巻く環境も様変わりを見せる中、就業、結婚、子育て、福祉、教育など、社会のあらゆる場面において発生する諸問題や不安の増大を背景に「危機の時代」が叫ばれつつある。その「危機感」を高めている重要な要素のひとつが「関係性の希薄化」であるという認識のもと、本演習では、「人と人がつながる現代的な形」について考えたい。

演習は、おもにコミュニティ活動の実践と文献講読・討論によって構成される。前者は、宮原駅コンコース緑化活動を実施する。後者は、地域社会を規定している「現代社会」そのものが抱える問題点（雇用やニート問題、子ども犯罪、いじめ、引きこもり、高齢化社会、女性の社会的地位、結婚・離婚問題など）について、テキストをもとに各自が興味のあるテーマを設定して報告・議論する。その上で、現代的課題を解決する舞台として期待されている「地域社会（コミュニティ）」の可能性と課題について検討する。

2.学びの意義と目標

現代社会は、人とつながりにくい社会だといわれている。しかし、私たちは決して1人では生きていけない。人と、社会と、どのようにつながるのか。地域社会（コミュニティ）について学ぶということは、現代社会、そして未来社会において、私たちがどのように（他者とともに）生きるかを考えることに他ならない。

演習を通して、最終的には、現代における社会的諸問題を解決する舞台として期待されている「地域社会（コミュニティ）」のすすむ方向性を、「現代的協同（人とつながる現代的な形）」をキーワードに検討する。とりわけ、地域を基盤に活動する新しい協同の形として注目されるNPO、社会的企業等の協同実践が展開するための可能性と課題について、一定程度のヴィジョンが提起できるようになることを目指す。

準備学習(予習)

・次回テキストの該当箇所は必ず読み、分からない用語等は事前に調べておくこと。報告者は前日までにレジュメを提出すること。

準備学習(復習)

・各自、ゼミ終了後、「学んだこと」、「疑問に思ったこと/さらに学びたいこと」の2点を整理しておくこと。これらについては、ゼミの冒頭に共通討論の場を設ける。

授業計画

1. 地域社会論演習について
2. コミュニティ活動の理論と実践
3. コミュニティ活動の実践(1)
4. コミュニティ活動の実践(2)
5. コミュニティ活動の実践(3)
6. 報告の基礎と技法(1)
7. 報告の基礎と技法(2)
8. コミュニティ活動の実践(4)
9. 調査報告(1)
10. 調査報告(2)
11. 調査報告(3)
12. 調査報告(4)
13. 調査報告(5)
14. コミュニティ活動の実践(5)
15. まとめ

教科書

授業の中で指示する

評価方法

- (1)出席点:70%:報告内容および討論への参加状況（積極性）を含む。
- (2)レポート:30%

専門演習（日本経済論）

担当者：大森 達也

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

本演習では、1990年代に入るまで順調な経済成長を持続してきた日本経済の特徴を、欧米経済先進国との制度的な比較から理解すると共に、90年代の「失われた10年」を経て、21世紀を迎えた今日においてもいまだ問題を抱える日本経済についての講義、ディスカッションを通して、各自考えることをする。

2.学びの意義と目標

本演習では、日本経済の基礎知識を、各自深めることから始め、卒業研究で取り扱う問題に対する意識を高めることを目的とする。

準備学習(予習)

日本経済に関する書籍を前もって読み、講義の問題提起に対して発言できるように準備しておくこと。

準備学習(復習)

各時間の後、ノートをまとめておくこと。

授業計画

- 1.はじめに
- 2.市場経済の特徴
- 3.現代資本主義の特徴
- 4.戦後復興期から高度成長期まで
- 5.石油危機にはじまる低成長期
- 6.経済成長の仕組み(1)
- 7.経済成長の仕組み(2)
- 8.日本的市場競争の仕組み(銀行グループ)
- 9.日本的市場競争の仕組み(日本的経営)
- 10.円高不況からバブルへ(背景)
- 11.円高不況からバブルへ(政策対応)
- 12.「失われた10年」の意味
- 13.「失われた10年」における政策対応
- 14.「失われた10年」の間の世界の変化
- 15.まとめ

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)ノート:75%:15回×5% (2)ブックレポート:25%:1,200文字程度 1回

専門演習 (法学)

担当者：渡辺 英人

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

「法」を学ぶことは社会の中で生きるための最も重要な基礎知識である。この授業では大学生として必ず知っていなければならない「社会のルール」その根本概念について解説し、理解してもらう。2013年度のテーマは「生活の中から見た法と行政」。消費者保護に関する法や行政を学ぶ。新聞やテレビ等のニュース報道で、従来では考えられなかった事件や事故を耳にする。なぜ、このような問題が発生するのか、いっしょに検討してみよう。生活者の視点で社会を確認してみよう。

2.学びの意義と目標

生活の中から見た法と行政を学ぶ。これは生きるために必要な知識となる。

準備学習(予習)

前週までにゼミ資料を配付するので、復習のみならず、資料の読みこみなど予習をすること。

準備学習(復習)

授業で使用した資料と、授業中に記述したノートをもとにして、清書ノートを作成すること。

授業計画

- 1.現代社会と法(その種類と仕組み)
- 2.法と道徳
- 3.法が強制的であるということ
- 4.法の機能
- 5.「犯罪」とは何か?
- 6.現代社会と裁判制度
- 7.デュー・プロセスについて
- 8.消費者を守る法
- 9.研究報告
- 10.研究報告
- 11.研究報告
- 12.研究報告
- 13.研究報告
- 14.研究報告
- 15.研究報告

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)授業参加:40% (2)発表:30% (3)課題作成:30%

専門演習 (まちづくり学)

担当者：平 修久

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

自分たちのまちは自分たちで良くしようという動きが全国的に広がっている。何気なく毎日過ごしている身近なまちをもう一度見直し、埋もれている価値を再発見し、それをまちづくりに活かす動きも各地で見られる。あるいは、まちの問題を自ら市民が取り組む動きも起きている。

そこで、本演習では、具体的なまちの課題を取り上げ、実際のまちづくり活動を行う。授業の性格上、グループ作業があるとともに、学外で行うこともある。また、キャンパス内で行うほたる祭りに参加し、イベントの運営方法などを学ぶ。

2.学びの意義と目標

身近な大学周辺のまちを題材に、まちの見方、問題などへの対応方法を学ぶとともに、実際のまちづくりを体験することにより、考える力と行動する力を身につけること。

準備学習(予習)

事前に、教科書の指定箇所を読んでおくこと。

準備学習(復習)

グループワークやフィールドワークの場合は、振り返りを行い、輪読の場合は、指定箇所を再度読み直す。

授業計画

1. ガイダンス
2. まちづくり活動(コンコース緑化活動の準備)
3. まちづくり活動(コンコース緑化活動の準備)
4. まちづくり活動(コンコース緑化活動の準備)
5. 法まちづくり活動(コンコース緑化の実施)
6. まち探検
7. まち探検まとめ
8. ほたる祭り準備
9. コンコース緑化(花代えなど)
10. レジメの作成方法について
11. まちづくりに関する本の輪読
12. まちづくりに関する本の輪読
13. まちづくりに関する本の輪読
14. まちづくり活動(コンコース緑化活動の後片付け)
15. まちづくり活動(コンコース緑化活動の振り返り)

教科書

田村明 『まちづくりの実践』(岩波新書)

評価方法

(1)出席:30% (2)グループワーク:20% (3)AH感想文:15% (4)発表:15% (5)レポート:20%

専門演習 (キリスト教社会倫理)

担当者：菊地 順

開講期：秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

この授業では、キリスト教社会倫理に関連する人物や思想に、テキストや映像をとおして触れてもらい、それぞれの世界を学ぶことをとおして、人間の生き方について考えます。

具体的には、アメリカで1950年代後半から60年代に活躍したマーティン・ルーサー・キングを中心に、その戦い、生き方、思想について学びます。

2.学びの意義と目標

秋学期は、1964年と65年に公民権法等が成立しますが、それに至るまでのキングたちの戦い(公民権運動)を中心に学びます。また、時代に生きたキングと関連のある指導者たちについても学びます(特にケネディとマルコムX)。この学びをとおして、人間の生き方や価値観、特に人間の尊厳とか人格・人権などについて考えたいと思います。

準備学習(予習)

予習としては、読むことが中心となりますので、予め配布されたプリントを下読みし、特に英文は必ず下調べをしておくこと。

準備学習(復習)

復習としては、学んだ内容をまとめ、整理し、必要に応じて調べ、レポートの作成に備えること。

授業計画

1. 授業のオリエンテーション
2. キングと公民権運動(1)
3. キングと公民権運動(2)
4. キングと公民権運動(3)
5. キングと公民権運動(4)
6. キングと公民権運動(5)
7. キングとケネディ(1)
8. キングとケネディ(2)
9. ワシントン大行進(1)
10. ワシントン大行進(2)
11. キングとノーベル平和賞
12. キングとマルコムX(1)
13. キングとマルコムX(2)
14. キングとマルコムX(3)
15. まとめ

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)出席:50% (2)レポート:50%

授業に積極的に参加することを重視します。また最後にレポートを書いてもらいます。その総合的判断で成績を出します。

専門演習 (公共哲学)

担当者：谷口 隆一郎

開講期：秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

現代の市民社会とその政策を考えるに当たって、各コミュニティが所属する、社会の各領域に内在する規範と、コミュニティがどう関係するかを理解することはとても重要です。私の「公共倫理」の概念を手がかりに、プラグマティズム的思考に即しつつ、コミュニティの新しい政治学の出来(しゅったい)の経緯と動向について学びます。

公共倫理(コミュニティ間の倫理)、民主的市民精神、多元多文化と寛容、市場の公共性、社会政策にとってのコミュニティの意味、コミュニティリアリズム対リベラリズム論争、等の諸問題と諸課題を取り上げます。

(1)1年かけて、公共哲学、政治哲学、政治理論、社会理論等に関する多くの文献を精読・精解する。(2)文献をレジメにまとめ報告・議論する。(3)卒業論文のテーマにつながるトピックを決め、ゼミ・レポートを書く。

2.学びの意義と目標

(1)公共・民主的市民精神・公共倫理の諸問題と諸課題についての理解を深めることにあります。そのために、それらに関して、世界の大学の公共哲学の授業で読まれている良質な内容の多くの文献を精読していきます。(2)将来、公共性の高い仕事(公務員職等)に就きたいと考えている学生にとっては、知っておくといテーマと内容が、この講義には含まれているのみならず、現代政治状況を根底から理解するために不可欠な視点が数多く盛り込まれています。コミュニティをどう捉えるかによって、政策への取り組みの考え方がどのように異なるのか、等について整理して学ぶことができます。(3)論理的に思考することにより、徹底的に日本語能力と思考力を鍛えます。思考力さえ鍛えておけば、それをどんな知識の運用にも役立たせることができます。

準備学習(予習)

授業の中で指示した文献や資料を事前を読む。指定テキストを各自読み進める。

準備学習(復習)

当番制でBRC(授業内レポート)を作成する。各授業で、担当者は前回の授業のBRCを人数分配布する。各自、BRCを読むことで理解を新たにする。また、作成者は配布したBRCへの質疑応答を行う。

授業計画

- 1.オリエンテーション
- 2.公共哲学に関する文献を精読し、レジメを作成して、報告を行う
- 3.公共哲学に関する文献を精読し、レジメを作成して、報告を行う
- 4.公共哲学に関する文献を精読し、レジメを作成して、報告を行う
- 5.公共哲学に関する文献を精読し、レジメを作成して、報告を行う
- 6.公共哲学に関する文献を精読し、レジメを作成して、報告を行う
- 7.公共哲学に関する文献を精読し、レジメを作成して、報告を行う
- 8.公共哲学に関する文献を精読し、レジメを作成して、報告を行う
- 9.公共哲学に関する文献を精読し、レジメを作成して、報告を行う
- 10.公共哲学に関する文献を精読し、レジメを作成して、報告を行う
- 11.公共哲学に関する文献を精読し、レジメを作成して、報告を行う
- 12.ゼミ生による発表
- 13.ゼミ生による発表
- 14.ゼミ生による発表
- 15.まとめ

教科書

山脇直司『公共哲学からの応答:3.11の衝撃の後で』(筑摩書房)
ジュヌヴィエーヴ・フジ・ジョンソン『核廃棄物と熟議民主主義:倫理的政策分析の可能性』(新泉社)

評価方法

- (1) 授業参加度(研究報告):50%: 毎回の授業への積極的参加および研究報告・レジメ等
- (2) 研究成果(小論文):50%: ゼミ論文に対する評価

専門演習 (コミュニティ・ビジネス論)

担当者：瀬名 浩一

開講期：秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

内容

社会的意義が大きいプロジェクトに共感・共鳴し、これに参加・協力したいと考え、自らの責任と負担で、市民が主体的に資金を供する。このような資金提供を通じた新しい公共への参加形態が現れ始めている。寄付、貸付、債券購入、出資という形態で提供される「志ある資金」は、「市民ファイナンス」と呼ばれる。「市民ファイナンス」のリターンは、プロジェクトの実行を通じた「社会的価値」「公益」の実現である。こうした「市民ファイナンス」が提供されることで、社会的意義が大きい一方で収益性の低い事業における資金調達に円滑化・安定化することになる。市民ファイナンスの意義はこれにとどまらず、主体的な意思で資金を提供した市民は当該事業に対する当事者意識・参加意識を持つことになる。

2.学びの意義と目標

社会資本の整備、公共サービスの提供などは、市場取引でも政府部門でも単独解決は難しい。そのような問題を、どのように公民連携（PPP）して解決を図るのかを学ぶ。

準備学習(予習)

授業計画を参照し、扱われるトピックスについて新聞等で情報を集めておくこと。

準備学習(復習)

配布プリントを再読し、各トピックスについて次回までに説明できるようにすること。

授業計画

1. 専門演習IIの学び方
2. 公民連携（PPP）の形態
3. 市民ファイナンスの形態
4. 路面電車事業
5. 歴史施設
6. 村づくり
7. NPO資金支援
8. まちづくり活動支援
9. 動物公園
10. 知的障害者更生施設
11. 交流ネットワークなど
12. 高齢者介護用集合住宅
13. 多目的スタジアム
14. 太陽光発電事業
15. 専門演習IIの総括

教科書

日本政策投資銀行地域企画チーム『PPPの進歩系 市民資金が地域を築く 市民の志とファイナンスの融合』（ぎょうせい）

評価方法

- (1)発表力:20%:レジュメの作成を含む
- (2)討論力:20%
- (3)出席率:30%
- (4)期末レポート:30%

専門演習 (情報学)

担当者：河島 茂生

開講期：秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

授業の内容は、専門演習 (情報学)で学んだ知識をもとにして、受講生がみずからの関心の深いテーマを選び、そのテーマの先行研究をまとめ上げることである。受講生は、資料をきちんと調べ文献を読みデータを整理したうえで、複数回の口頭発表を行う。

2.学びの意義と目標

どのような卒業後の進路を歩むにせよ、しばしば既存の資料を調べることが必要とされる。本授業ではその基礎づくりを目指す。

準備学習(予習)

指定された課題をこなし、口頭発表時には配布資料を作成されたい。また授業外の学習を絶えず行いながら、ゼミに関わる必要がある。

準備学習(復習)

ディスカッションでなされた内容を踏まえ、みずからの次回の発表を改善しなければならない。

授業計画

1. 文献調査の進め方(ガイダンス・含)
2. データベースの活用方法
3. 文献調査報告
4. 文献調査報告
5. 文献調査報告
6. 文献調査報告
7. 文献調査報告
8. 文献調査報告
9. 文献調査報告
10. 文献調査報告
11. 文献調査報告
12. 文献調査報告
13. 文献調査報告
14. 文献調査報告
15. 外部施設の見学

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)口頭発表:80% (2)ディスカッションへの参加度:20%

専門演習 (情報倫理)

担当者：竹井 潔

開講期：秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

社会から情報社会へと変遷してきた中で、「情報倫理」ということが近年いわれた。「情報倫理」は今後あらゆる「情報」を扱う上で必要となる。そこで、「情報倫理」がなぜ必要となってきたのか、情報とは何か、現代社会と情報のかかわりの中で、情報の価値を問いかけていきたい。私たちは、次第に情報ネットワーク社会を前提とした情報社会の中で生活をしてきているが、情報社会をとりまく光と闇の部分を認識し、情報化によって便益を受けている面と、問題が生じてきた情報社会の課題を検討していきたい。

2.学びの意義と目標

情報社会における諸課題、情報倫理の必要性について理解し、課題を形成していく

準備学習(予習)

事前に指示する参考図書を読んで用語などを調べておくこと。発表演習には事前に発表資料を作成してくること。演習は必ず出席し、積極的に参画すること。

準備学習(復習)

演習でできなかった箇所や理解できなかった専門用語は各自調査して十分に理解しておくこと。

授業計画

1. オリエンテーション
2. 経営戦略マネジメント
3. ビジネスゲームによる企業活動と情報社会の理解
4. ビジネスゲーム (BG21) の準備・演習プロセス
5. ビジネスゲーム演習 1
6. ビジネスゲーム演習2
7. ビジネスゲーム演習3
8. ビジネスゲーム演習 4
9. プレゼンテーション
10. 企業活動と情報社会の課題
11. 情報社会における倫理的課題
12. テーマの形成
13. テーマの検討 1
14. テーマの検討 2
15. まとめ

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)演習:40%:課題提出・発表演習 (2)レポート:60%

専門演習 (地域社会論)

担当者：大高 研道

開講期：秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

生活の個別化が進み、家族や地域社会を取り巻く環境も様変わりを見せる中、就業、結婚、子育て、福祉、教育など、社会のあらゆる場面において発生する諸問題や不安の増大を背景に「危機の時代」が叫ばれつつある。その「危機感」を高めている重要な要素のひとつが「関係性の希薄化」であるという認識のもと、本演習では、「人と人がつながる現代的な形」について考えたい。

演習では、演習で醸成された問題意識・関心をもとに、各自が興味を持った（さらに深めたいと思った）課題を選び、調査・報告する。併せて、『コンコース緑化活動報告書』作成、および問題解決主体としてのNPOや社会的企業の現地調査（資料収集やヒアリング）を行う。

2.学びの意義と目標

現代社会は、人とつながりにくい社会だといわれている。しかし、私たちは決して1人では生きていけない。人と、社会と、どのようにつながるのか。地域社会（コミュニティ）について学ぶということは、現代社会、そして未来社会において、私たちがどのように（他者とともに）生きるかを考えることに他ならない。

演習を通して、最終的には、現代における社会的諸問題を解決する舞台としての期待されている「地域社会（コミュニティ）」のすすむ方向性を、「現代的協同（人とつながる現代的な形）」をキーワードに検討する。とりわけ、地域を基盤に活動する新しい協同の形として注目されるNPO、社会的企業等の協同実践が展開するための可能性と課題について、一定程度のビジョンが提起できるようになることを目指す。

準備学習(予習)

・報告担当者には、前の週のゼミで、報告テーマ、キーワードについて発表してもらおう。参加者は、関連するニュースを読み、分からない用語等は事前に調べてくること。報告者は前日までにレジュメを提出すること。

準備学習(復習)

・各自、ゼミ終了後、「学んだこと」、「疑問に思ったこと/さらに学びたいこと」の2点を整理しておくこと。これらについては、次回ゼミの冒頭に共通討論の場を設ける。

授業計画

1. 演習の課題と方法
2. 現代コミュニティの諸課題 各自の問題関心
3. 個別調査報告(1)
4. 個別調査報告(2)
5. 個別調査報告(3)
6. 個別調査報告(4)
7. NPO・社会的企業ヒアリング調査
8. NPO・社会的企業の実際
9. グループ調査報告(1)
10. グループ調査報告(2)
11. 調査レポートの作成指導(1)
12. 調査レポートの作成指導(2)
13. 報告書作成・製本作業(1)
14. 報告書作成・製本作業(2)
15. まとめ

教科書

授業の中で指示する

評価方法

- (1)出席点:70%:報告内容および討論への参加状況（積極性）を含む。
- (2)レポート:30%

専門演習（日本経済論）

担当者：大森 達也

開講期：秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

本演習では、専門演習 で学んだ日本経済の抱える問題に関する基礎知識をもとに、各自、レポート課題を設定した上で、それぞれの課題に関する文献を読み、発表、そして発表に対するクラスディスカッションを行ないつつ、レポート（レジメを含む）をまとめることを目的としている。

2.学びの意義と目標

本演習では、卒業研究 及び で、10,000字程度のレポートをまとめることになるが、そのためのレジメの作成をすることを目的としている

準備学習(予習)

3週サイクルで、文献調査、内容の発表となっている。十分に時間をかけ、準備することが望まれる。

準備学習(復習)

次の発表に向けて、終わったサイクルがどうであったかを振り返ること。

授業計画

- 1.問題の整理
2. 予定課題の発表
3. 予定課題に関する文献調査(1)
4. 文献内容の発表(1)
5. 文献内容の発表(2)
6. 予定課題に関する文献調査(2)
7. 文献内容の発表(3)
8. 文献内容の発表(4)
9. 予定課題に関する文献調査(3)
10. 文献内容の発表(5)
11. 文献内容の発表(6)
12. レポートの発表(1)
13. レポートの発表(2)
14. レポートの発表(3)
15. まとめ

教科書

授業の中で指示する

評価方法

- (1)ディスカッション:30% (2)発表:30%
(3)期末レポート:40%:4,000字程度

専門演習 (法学)

担当者：渡辺 英人

開講期：秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

「法」を学ぶことは社会の中で生きるための最も重要な基礎知識である。この授業では大学生として必ず知っていなければならない「社会のルール」その根本概念について解説し、理解してもらう。2013年度のテーマは「生活の中から見た法と行政」。消費者保護に関する法や行政を学ぶ。新聞やテレビ等のニュース報道で、従来では考えられなかった事件や事故を耳にする。なぜ、このような問題が発生するのか、いっしょに検討してみよう。生活者の視点で社会を確認してみよう。

2.学びの意義と目標

生活の中から見た法と行政を学ぶ。これは生きるために必要な知識となる。

準備学習(予習)

前週までにゼミ資料を配付するので、復習のみならず、資料の読みこみなど予習をすること。

準備学習(復習)

授業で使用した資料と、授業中に記述したノートを基にして、清書ノートを作成すること。

授業計画

1. 現代社会と法 (その種類と仕組み)
2. 法と道徳
3. 法が強制的であるということ
4. 法の機能
5. 「犯罪」とは何か?
6. 現代社会と裁判制度
7. デュー・プロセスについて
8. 消費者を守る法
9. 研究報告
10. 研究報告
11. 研究報告
12. 研究報告
13. 研究報告
14. 研究報告
15. 研究報告

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)授業参加:40% (2)発表:30% (3)課題作成:30%

専門演習 (まちづくり学)

担当者：平 修久

開講期：秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

自分たちのまちは自分たちで良くしようという動きが全国的に広がっている。身近なまちを見直し、まちの価値を再発見し、それをまちづくりに活かす動きも各地で見られる。あるいは、まちの問題を市民が取組む動きも起きている。

そこで、本演習では、大学周辺で実施されているみつばちプロジェクトを学ぶとともに、キャンパス内で類似プロジェクトを置行う場合の企画書を作成する。授業の性格上、学外で行うこともある。

2.学びの意義と目標

身近な大学周辺のまちを題材に、まちの見方、問題などへの対応方法を学ぶことにより、考える力を身につけること。

準備学習(予習)

事前に、教科書の指定箇所を読んでおくこと。グループ作業については、事前に分担した内容を調べておくこと。

準備学習(復習)

グループ作業の場合は、毎回振り返りを行い、輪読の場合は、指定箇所を再度読み直す。

授業計画

1. ガイダンス
2. 聖学院ミツバチプロジェクト
3. まちづくりに関する本の輪読
4. まちづくりに関する本の輪読
5. まちづくりに関する本の輪読
6. まちづくりに関する本の輪読
7. 聖学院ミツバチプロジェクト
8. 聖学院ミツバチプロジェクト
9. 聖学院ミツバチプロジェクト
10. 聖学院ミツバチプロジェクト
11. 中間発表
12. 聖学院ミツバチプロジェクト
13. 聖学院ミツバチプロジェクト
14. 聖学院ミツバチプロジェクト
15. 最終発表、まとめ

教科書

田中淳夫 『銀座ミツバチ物語 - 美味しい景観づくりのススメ』 (時事通信社)

評価方法

- (1)出席:30% (2)グループワーク:20% (3)AH感想文:15% (4)発表:15% (5)レポート:20%

組織行動論

担当者：八木 規子

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

組織行動論は、組織という文脈のなかで、人間が行動する際に見せるさまざまな法則性について学ぶ。個人が、個人として、また、小集団・組織の成員として行動し、認知し、また感情を抱く際にみせるさまざまな法則性に関する理論やフレームワークの習得に基礎を置き、それらの法則性の活用を、実際の組織（大学内のクラブ、企業、非営利団体、等）が直面する諸問題の解決に、どのように適用できるか、ケース・スタディ、ロール・プレイ、グループ・プロジェクト等の学習手法を通じて、身に着ける。

2.学びの意義と目標

われわれが社会生活を営む上では、いずれかの組織に所属することなしに生きていくことはできない。組織は、個人だけでは達成できない目標を達成しうる仕組みとして、人類の発明した仕組みの中でも最も価値のあるもののひとつといえる。しかしながら、組織が所期の目標を達成するためには、所属する成員が協力しあうことが重要となる。組織成員の協力を引き出し、目的に向かって成員を動かすためには、さまざまなスキルが必要とされる。組織行動論を学ぶことの意義は、こうしたスキルを身につけるとともに、人間の認知、行動、感情を動かす原理原則を学ぶことで、自分自身と他者をより良く理解することにある。組織行動論の学びを通じて、自らが組織の良き一員となるだけでなく、後年、部下をもったときには、良き上司として、部下を導き、育成する力を磨くことを目標とする。

準備学習(予習)

教科書の該当箇所および追加で配布する資料を読み込み、自分ならどのような対処をするか、クラス討論に参加できる準備をする。出席・参加点の対象となる小さな宿題を適宜課す予定。

準備学習(復習)

授業中に取ったノートを整理しておく。とくに理論やフレームワークを、現実の諸問題にどのように適用できるか。逆に理論やフレームワークの限界はなんなのか、復習しておくことは、試験の良い準備となる。

授業計画

1. 本科目の進め方について。組織行動論とは何か
2. 組織行動論の歴史。科学的研究方法と組織行動論
3. 学習と知識（Kolbのモデル）
4. パーソナリティ：個人レベルでの違い
5. チーム分け発表【要出席】チームプロジェクトの説明
6. 集団行動の基礎
7. チームを理解する
8. 組織文化 1
9. 組織文化 2
10. コミュニケーション
11. コンフリクトと交渉
12. 前半まとめ
13. 中間試験
14. 個人行動の基礎 価値観、態度
15. 個人行動の基礎 認知、学習
16. 動機付けの基本的なコンセプト 動機付けとはなにか、初期の理論
17. 動機付けの基本的なコンセプト 現代の理論、国民文化の影響
18. 動機付け：コンセプトから応用 給与制度設計と動機付け
19. 動機付け：コンセプトから応用 職務再設計
20. 動機付け：コンセプトから応用 多様化する労働力を動機付ける
21. 個人の意思決定
22. パワーと政治
23. リーダーシップ 1
24. リーダーシップ 2
25. 組織構造の基礎
26. 組織変革と組織開発
27. チームプロジェクト発表 1【要出席】
28. チームプロジェクト発表 2【要出席】
29. 後半まとめ
30. 期末試験

教科書

ロビンズ/高木晴夫訳 『【新版】組織行動のマネジメント 入門から実践へ』(ダイヤモンド社)

評価方法

(1)授業出席・参加点:20% (2)中間試験:30% (3)チームプロジェクト:20% (4)期末試験:30%

卒業研究(コミュニティ政策)

担当者：大塚 健司

開講期：春学期/秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週2回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

地域社会（コミュニティ）の構成要素を考える。
例えば土地政策、環境政策、地域福祉政策、土木・河川政策、森林政策等我々の住む地域社会は、地形、歴史的発展、さらに、法律制度等の上に成り立っている。
改めて地域社会を見つめ直し研究テーマとしてまとめる。

2.学びの意義と目標

自分に住んでいるところの歴史や、市町村名の由来、人口構成、高齢化率、産業の特徴等を調べ、レポートするとともに、各自の研究テーマに沿って、卒業研究として纏める。

準備学習(予習)

与えられた課題を調べること。

準備学習(復習)

配布資料を良く読むこと。

授業計画

1. イントロダクション
2. 卒業研究の纏め方
3. 地域社会の調査
4. 地域社会の調査
5. NPO法人との連携・作業体験
6. NPO法人との連携・作業体験
7. 福祉施設訪問
8. 福祉施設訪問
9. 各自の研究テーマの課題発表、論議
10. 各自の研究テーマの課題発表、論議
11. 各自の研究テーマの課題発表、論議
12. 各自の研究テーマの課題発表、論議
13. 各自の研究テーマの課題発表、論議
14. 各自の研究テーマの課題発表、論議
15. 各自の研究のとりまとめ
16. 各自の研究のとりまとめ
17. 各自の研究のとりまとめ
18. 各自の研究のとりまとめ
19. 各自の研究のとりまとめ
20. 各自の研究のとりまとめ
21. 各自の研究のとりまとめ
22. 各自の研究のとりまとめ
23. 各自の研究のとりまとめ
24. 各自の研究のとりまとめ
25. 各自の研究のとりまとめ
26. 各自の研究のとりまとめ
27. 各自の研究のとりまとめ
28. 各自の研究のとりまとめ
29. 理解度の確認
30. 理解度の確認

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)出席率:10% (2)卒業研究:90%

卒業研究 (キリスト教社会倫理)

担当者：菊地 順

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

この授業では、キリスト教倫理に関連する人物や思想に、テキストや映像をとおして触れてもらい、それぞれの世界を学ぶこととおして、人間の生き方について考えます。

具体的には、アメリカで1950年代から60年代に活躍したマーティン・ルーサー・キングたちの活動を踏まえ、その後のアメリカにおける人種問題を学びます。

2.学びの意義と目標

春学期は、公民権法成立後のキングの活動を学びます。それは、一方ではベトナム戦争に対する反戦運動であり、他方では貧困撲滅のための戦いでしたが、それをとおしてみられるアメリカ社会の悪の構造と、それに対するキングの戦いを学び、キングとその運動の意義について考えます。

準備学習(予習)

予習として、読むことが中心となりますので、予め配布されるプリントを下読みし、特に英文は必ず下調べをしておくこと。

準備学習(復習)

復習としては、学んだことをまとめ、整理し、必要に応じて調べ、レポート作成に備えること。

授業計画

1. 授業のオリエンテーション
2. ベトナム戦争とは(1) その背景
3. ベトナム戦争とは(2) その歴史(1)
4. ベトナム戦争とは(3) その歴史(2)
5. キングと反戦運動(1)
6. キングと反戦運動(2)
7. キングと反戦運動(3)
8. キングと貧困撲滅運動(1)
9. キングと貧困撲滅運動(2)
10. キングと貧困撲滅運動(3)
11. キングの見たアメリカ社会の悪の構造(1)
12. キングの見たアメリカ社会の悪の構造(2)
13. キングの死とその意味(1)
14. キングの死とその意味(2)
15. まとめ

教科書

プリントを配布する

プリントを配布します。またプリント以外にも映像等を用いて授業を行います。

評価方法

(1)出席:50% (2)レポート:50%

授業に積極的に参加することを重視します。また最後にレポートを書いてもらいます。その総合的な判断で成績を出します。

卒業研究 (金融論)

担当者：鈴木 真実哉

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

専門演習I・IIにおいて学んだことを基礎として、さらに応用的・発展的な学習を進めてゆく。最終的には卒業論文の作成につながるようになる。

2.学びの意義と目標

自主的なテーマの選択を通じて、自らの学問的な関心領域を決め、一つのテーマについて深く探究する力をつけることができるようになる。

準備学習(予習)

毎回、発表・報告の主旨を800字程度にまとめて提出すること。また、発表・報告後は修正版を提出すること。

準備学習(復習)

他のゼミメンバーからの感想・質問、指導教員からのコメントをふまえて提出用レポートを作成すること。

授業計画

1. 1 あらかじめ指定したテーマについての発表(4回程度)
2. 1 あらかじめ指定したテーマについての発表(4回程度)
3. 1 あらかじめ指定したテーマについての発表(4回程度)
4. 1 あらかじめ指定したテーマについての発表(4回程度)
5. 2 自由選択テーマについての発表(3回程度)
6. 2 自由選択テーマについての発表(3回程度)
7. 2 自由選択テーマについての発表(3回程度)
8. 3 グループ共同研究発表(2回程度)
9. 3 グループ共同研究発表(2回程度)
10. 4 集団討論(2回程度)
11. 4 集団討論(2回程度)
12. ゲストによるレクチャー
13. 春学期レポート発表
14. 春学期レポート発表
15. まとめ

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)発表:40% (2)レポート:40% (3)出席状況:20%
積極的、情熱的姿勢を高く評価する。

卒業研究 (公共哲学)

担当者：谷口 隆一郎

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

現代の市民社会とその政策を考えるに当たって、各コミュニティが所属する、社会の各領域に内在する規範と、コミュニティがどう関係するかを理解することはとても重要である。私の「公共倫理」の概念を手がかりに、プラグマティズム的思考に即しつつ、コミュニティの新しい政治学の出来(しゅったい)の経緯と動向について学ぶ。

公共倫理(コミュニティ間の倫理)、民主的市民精神、多元多文化と寛容、市場の公共性、社会政策にとってのコミュニティの意味、コミュニティリアニズム対リベラリズム論争、等の諸問題と諸課題を取り上げる。

(1)1年かけて、公共哲学、政治哲学、政治理論、社会理論等に関する多くの文献を精読・精解する。(2)文献をレジメにまとめ報告・議論する。(3)卒業論文のテーマにつながるトピックを決め、ゼミ・レポートを書く。

2.学びの意義と目標

(1)公共・民主的市民精神・公共倫理の諸問題と諸課題についての理解を深めることにある。そのために、それらに関して、世界の大学の公共哲学の授業で読まれている良質な内容の多くの文献を精読していく。

(2)将来、公共性の高い仕事(公務員職等)に就きたいと考えている学生にとっては、知っておくといいいテーマと内容が、この講義には含まれているのみならず、現代政治状況を根底から理解するために不可欠な視点が数多く盛り込まれている。コミュニティをどう捉えるかによって、政策への取り組みの考え方がどのように異なるのか、等について整理して学ぶことができる。(3)論理的に思考することにより、徹底的に日本語能力と思考力を鍛える。思考力さえ鍛えておけば、それをどんな知識の運用にも役立たせることができる。

準備学習(予習)

授業の中で指示した文献や資料を事前に読む。指定テキストを各自読み進める。

準備学習(復習)

当番制でBRC(授業内レポート)を作成する。各授業で、担当者は前回の授業のBRCを人数分配布する。各自、BRCを読むことで理解を新たにする。また、作成者は配布したBRCへの質疑応答を行う。オリエンテーションで、BRCについての別紙シラバスを配布する。

授業計画

- 1.オリエンテーション
- 2.公共哲学に関する文献を精読し、レジメを作成して、報告を行う
- 3.公共哲学に関する文献を精読し、レジメを作成して、報告を行う
- 4.公共哲学に関する文献を精読し、レジメを作成して、報告を行う
- 5.公共哲学に関する文献を精読し、レジメを作成して、報告を行う
- 6.公共哲学に関する文献を精読し、レジメを作成して、報告を行う
- 7.公共哲学に関する文献を精読し、レジメを作成して、報告を行う
- 8.公共哲学に関する文献を精読し、レジメを作成して、報告を行う
- 9.公共哲学に関する文献を精読し、レジメを作成して、報告を行う
- 10.公共哲学に関する文献を精読し、レジメを作成して、報告を行う
- 11.公共哲学に関する文献を精読し、レジメを作成して、報告を行う
- 12.ゼミ生による発表
- 13.ゼミ生による発表
- 14.ゼミ生による発表
- 15.まとめ

教科書

授業の中で指示する
授業内でプリントを配布したり、入手する資料を指示したりする。

評価方法

- (1) 授業参加度(研究報告):50%: 毎回の授業への積極的参加および研究報告・レジメ等
- (2) 研究成果(小論文):50%: ゼミ論文に対する評価

卒業研究 (コミュニティ・ビジネス論)

担当者：瀬名 浩一

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

今までゼミでまとめた「コミュニティ・ビジネスの現場」の講演録『コミュニティ・ビジネスが社会を救う』『コミュニティを復活させるビジネス』『コミュニティ・ファンドの募集』を輪読し、自分が興味を持つプロジェクトを選択し、民間企業、NPO、住民と公共がいかに連携してコミュニティが直面する問題を解決してきたかを具体的ケースに則して研究する。

2.学びの意義と目標

プロジェクトに参加する住民の合意形成のあり方、組織の作り方、資金調達の方法などを学ぶことにより公民連携（PPP）の有効性を学べる。

準備学習(予習)

授業計画を参照し、扱われるトピックについて新聞等で情報を集めておくこと。

準備学習(復習)

配布プリントを再読し、各トピックについて次回までに説明できるようにすること。

授業計画

1. 卒業研究Iの学び方
2. 子育てネットワーク
3. ワーカーズ・コレクティブ
4. 「社会を変える」を仕事とする
5. 福祉ビジネスの現状と課題
6. 棚田の再生
7. 自然エネルギーの地産地消
8. 路面電車を利用した街づくり
9. 秩父の地域経営
10. 川越の地域経営
11. 商店街の再生
12. まちづくり会社の現状と課題
13. 埼玉の起業支援
14. コミュニティ・ビジネスの資金調達
15. 卒業研究Iの総括

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)発表力:20% (2)討論力:20% (3)出席率:30% (4)期末レポート:30%

卒業研究 (情報学)

担当者：河島 茂生

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

授業の内容は、専門演習 (情報学)で培った知識をもとにして、受講生がみずから選んだテーマを調査していくことである。受講生は、まず調査の設計を行い、実際に調査を開始する。また、本格的なプレゼンテーションの技法も扱う。受講生は、プレゼンテーションソフトを使い、複数回の口頭発表を行う。

2.学びの意義と目標

どのような卒業後の進路を歩むにせよ、既存の資料を単に読むだけでは他者の真似事しかできない。専門演習 (情報学)で先行研究を調べたが、卒業研究 (情報学)では受講生が独自の情報を掴むことを目指す。また、他者に伝わるプレゼンテーションの技法の体得を目指す。

準備学習(予習)

指定された課題をこなし、口頭発表時には配布資料を作成されたい。また授業外の学習を絶えず行いながら、ゼミに関わる必要がある。

準備学習(復習)

ディスカッションの内容を踏まえ、みずからの次回の発表を改善しなければならない。

授業計画

1. 調査の進め方(ガイダンス・含)
2. プレゼンテーションソフトウェアの使い方
3. インタビュー調査、アンケート調査、内容分析など
4. 調査設計報告
5. 調査設計報告
6. 調査設計報告
7. 調査設計報告
8. 調査設計報告
9. 調査結果報告
10. 調査結果報告
11. 調査結果報告
12. 調査結果報告
13. 調査結果報告
14. 調査結果報告
15. 外部施設見学

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)口頭発表:80% (2)ディスカッション:20%

卒業研究 (情報処理)

担当者：国分 道雄

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

本演習では、現代の情報化社会において情報および情報機器を主体的に活用するため、情報を科学的に理解し、社会との関わりについて学ぶ。

2.学びの意義と目標

コンピュータ内部での動作を科学的に理解し、情報機器を問題解決のために主体的に利用できる態度と能力を身につける。

準備学習(予習)

次回のテキストの箇所を読んでくること。

準備学習(復習)

授業で取り上げた事柄について調べること。

授業計画

1. 卒業研究についてイントロダクション
2. 担当者による発表
3. 担当者による発表
4. 担当者による発表
5. 担当者による発表
6. 担当者による発表
7. 担当者による発表
8. 担当者による発表
9. 担当者による発表
10. 担当者による発表
11. 担当者による発表
12. 担当者による発表
13. 担当者による発表
14. 担当者による発表
15. まとめ

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)発表・授業への関わり:60% (2)レポート:40%

卒業研究 (情報倫理)

担当者：竹井 潔

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

工業社会から情報社会へと変遷してきた中で、「情報倫理」ということが近年いわれた。 「情報倫理」は今後あらゆる「情報」を扱う上で必要となる。そこで、「情報倫理」がなぜ必要となってきたのか、情報とは何か、現代社会と情報のかかわりの中で、情報の価値を問いかけていきたい。私たちは、次第に情報ネットワーク社会を前提とした情報社会の中で生活をしてきているが、情報社会をとりまく光と闇の部分の認識、情報化によって便益を受けている面と、問題が生じてきた情報社会の課題を検討していきたい

2.学びの意義と目標

情報社会における諸課題、情報倫理の必要性について理解し、課題を形成していく。

準備学習(予習)

事前に指示する参考図書を読んで用語などを調べておくこと。発表演習には事前に発表資料を作成してくること。演習は必ず出席し、積極的に参画すること。

準備学習(復習)

演習でできなかった箇所や理解できなかった専門用語は各自調査して十分に理解しておくこと。

授業計画

1. 情報社会と課題形成
2. 情報社会における最近のキーワード
3. キーワードの調査・確認 1
4. キーワードの調査・確認 2 発表
5. 情報社会における問題点・課題の洗い出し 1
6. 情報社会における問題点・課題の洗い出し 2 発表
7. 情報社会における課題の分類・整理 1
8. 情報社会における課題の分類・整理 2
9. 情報社会における倫理的課題の検討・討議 1
10. 情報社会における倫理的課題の検討・討議 2
11. 情報社会における倫理的課題の検討・討議 3
12. 情報社会における倫理的課題の検討・討議 4
13. 情報社会における倫理的課題の検討・討議 5
14. 情報倫理とその課題
15. まとめ

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)演習:40%:課題提出、発表演習 (2)期末レポート:60%

卒業研究 (政治学)

担当者：川添 美央子

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

各自の関心に従って、現代日本の政治に関する問題を選び、調査のうえ発表し、最終的にはレポートを書いてもらう。

2.学びの意義と目標

自分で問題を設定し、データや論証を添えながら、一定の建設的提言をするレポートを作成する能力を身に付けることを目標とする。

準備学習(予習)

各自、自分の報告については念入りに準備すること。
また、ディスカッサントに指定された学生は、担当相手の分野についてもよく勉強しておくこと。

準備学習(復習)

次回の発表やレポート提出に向けて、指摘された問題点については改善を試みることを。

授業計画

1. 学期末レポートの返却と講評
2. 図書館ツアー
3. 調査の仕方の説明
4. レポートのまとめ方の説明
5. 口頭報告の説明
6. 担当者による発表
7. 担当者による発表
8. 担当者による発表
9. 担当者による発表
10. 担当者による発表
11. 担当者による発表
12. 担当者による発表
13. 担当者による発表
14. 担当者による発表
15. まとめ

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)提出レポート:60% (2)平常点:40%

卒業研究（地域社会論）

担当者：大高 研道

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

卒業研究の中心テーマは、現代的課題克服の主体研究である。グローバル化する現代社会において噴出している労働問題・生活問題の現実を、自分なりの観点から検討した「専門演習」を踏まえて、より具体的な解決主体としての市民・コミュニティ（組織）のあり方、可能性について検討することがその内容となる。

本演習では、まず「専門演習」での学びを通して醸成された知見にもとづいて選択されたテキストを題材に、各自関心のある課題を取り上げ、自由に報告・議論する。その上で、卒業レポートのテーマを確定し、調査方法論および論文執筆の基本的技法について学ぶ。

2.学びの意義と目標

最終的には、地域を基盤に活動を展開する新しい協同の形として注目されるNPOや市民社会組織の可能性について、各自が関心のある領域において一定程度のビジョンを提起できるようになることを目指す。

その集大成のひとつとして位置づけられるのが、「卒業研究レポート」である。今学期の学びは、卒業研究レポート作成にむけて問題関心を具体化し、理論化するための基盤を形成するとともに、大学生活を通じた学びを省察的に検討し、意義づけるための重要な機会をも提供するであろう。

準備学習(予習)

・次回テキストの該当箇所は必ず読み、分からない用語等は事前に調べておくこと。報告者は前日までにレジュメを提出すること。

準備学習(復習)

・各自、ゼミ終了後、「学んだこと」、「疑問に思ったこと/さらに学びたいこと」の2点を整理しておくこと。これらについては、次回ゼミの冒頭に共通討論の場を設ける。

授業計画

1. 卒業研究について
2. 調査方法論
3. 調査課題・対象の焦点化にむけて(1)
4. 調査課題・対象の焦点化に向けて(2)
5. 文献購読・報告
6. 文献購読・報告
7. 文献購読・報告
8. 文献購読・報告
9. 文献購読・報告
10. 調査方法論の再確認
11. 調査領域・調査事例の選定
12. 個別報告
13. 個別報告
14. 個別報告
15. まとめと反省

教科書

授業の中で指示する

評価方法

- (1)出席点:70%:報告内容および討論への参加状況（積極性）を含む。
- (2)レポート:30%

卒業研究（日本経済論）

担当者：大森 達也

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

卒業研究の目的は、専門演習で選んだ各自の課題についての卒業研究レポートを作成する準備を進めることである。

2.学びの意義と目標

研究レポート作成を通じて、それぞれの問題意識を高めるという意義もあるが、同時に、「報連相」の重要性を理解することを目的としている。

準備学習(予習)

研究レポート作成を目的としているため、個別テーマごとの指導が重要とならざるを得ないので、各自、調査・研究の時間を充分にとること。

準備学習(復習)

個別指導に従い、各自、発表後に問題点を整理し、次回につなげること。

授業計画

- 1.目的と進め方
- 2.研究計画書の作成
- 3.研究計画書の発表(1)
- 4.研究計画書の発表(2)
- 5.文献リストの作成
- 6.文献調査の発表(1)
- 7.文献調査の発表(2)
- 8.中間発表(1)
- 9.中間発表(2)
- 10.研究計画書の変更と発表(1)
- 11.文献リストの変更と発表(1)
- 12.追加文献調査の発表(1)
- 13.追加文献調査の発表(2)
- 14.中間発表(3)
- 15.中間発表(4)

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)研究計画書作成:15% (2)文献リスト作成:15% (3)発表:30% (4)中間レポート:40%

卒業研究 (法学)

担当者：渡辺 英人

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

「法」を学ぶことは社会の中で生きるための最も重要な基礎知識である。この授業では大学生として必ず知っていなければならない「社会のルール」その根本概念について解説し、理解してもらおう。2013年度のテーマは「生活の中から見た法と行政」。消費者保護に関する法や行政を学ぶ。新聞やテレビ等のニュース報道で、従来では考えられなかった事件や事故を耳にする。なぜ、このような問題が発生するのか、いっしょに検討してみよう。生活者の視点で社会を確認してみよう。

2.学びの意義と目標

生活の中から見た法と行政を学ぶ。これは生きるために必要な知識となる。

準備学習(予習)

前週までにゼミ資料を配付するので、復習のみならず、資料の読みこみなど予習をすること。

準備学習(復習)

授業で使用した資料と、授業中に記述したノートを基にして、清書ノートを作成すること。

授業計画

1. 現代社会と法 (その種類と仕組み)
2. 法と道徳
3. 法が強制的であるということ
4. 法の機能
5. 「犯罪」とは何か?
6. 現代社会と裁判制度
7. デュー・プロセスについて
8. 消費者を守る法
9. 研究報告
10. 研究報告
11. 研究報告
12. 研究報告
13. 研究報告
14. 研究報告
15. 研究報告

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)授業参加:40% (2)発表:30% (3)課題作成:30%

卒業研究（まちづくり学）

担当者：平 修久

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

大学周辺地域を対象にして、活性化計画もしくはまちの改善計画を検討する。具体的内容を取上げ、詳細な計画を作成する。これらの作業を通して、計画作成の流れを学ぶ。

2.学びの意義と目標

専門演習で修得した知識、作業経験を活かし、さらに、まちづくりに関する知識を深める。まちに対する観察力を深め、フィールドワークを行うことにより、考える力を身につけること。

準備学習(予習)

事前に、教科書の指定部分を読んでおくこと。グループ作業に際しては、担当する内容を事前に調べておくこと。

準備学習(復習)

地域計画づくりに関しては、毎回振り返りを行い、輪読の場合は、指定箇所を再度読み直し、発表の場合はコメントをまとめる。

授業計画

1. ガイダンス
2. 活性化計画づくり
3. 活性化計画づくり
4. 活性化計画づくり
5. 活性化計画づくり
6. 活性化計画づくり
7. 輪読
8. 輪読
9. 輪読
10. 輪読
11. 図書館ガイダンス
12. 卒業研究レポートづくり
13. 卒業研究レポートづくり
14. 卒業研究レポートづくり
15. 卒業研究レポートづくり

教科書

大江正章 『地域の力 - 食・農・まちづくり』 (岩波新書)

評価方法

(1)出席:30% (2)グループ作業:20% (3)輪読:20% (4)レポート:30%

卒業研究 (キリスト教社会倫理)

担当者：菊地 順

開講期：秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

この授業では、キリスト教倫理に関連する人物や思想に、テキストや映像をとおして触れてもらい、それぞれの世界を学ぶこととおして、人間の生き方について考えます。

具体的には、アメリカで1950年代から60年代に活躍したマーティン・ルーサー・キングたちの活動を踏まえ、その後のアメリカにおける人種問題を学びます。

2.学びの意義と目標

秋学期は、これまでに学んできた、アメリカにおけるキングたちの戦いを踏まえ、その後のアメリカ社会における人種問題の動向にも目を向けつつ、広く人種問題について考えます。そして、改めて、人間の生き方について、理解を深めたいと思います。

準備学習(予習)

予習としては、読むことが中心となりますので、予め配布されるプリントを下読みし、特に英文は必ず下調べをしておくこと。

準備学習(復習)

復習としては、学んだ内容をまとめ、整理し、必要に応じて調べ、レポートの作成に備えること。

授業計画

1. 授業のオリエンテーション
2. キングからオバマまで(1)
3. キングからオバマまで(2)
4. キングからオバマまで(3)
5. キングからオバマまで(4)
6. キングからオバマまで(5)
7. 黒人問題とユダヤ人問題(1)
8. 黒人問題とユダヤ人問題(2)
9. 黒人問題とユダヤ人問題(3)
10. 基本的人権の歴史(1)
11. 基本的人権の歴史(2)
12. 基本的人権の理念(1)
13. 基本的人権の理念(2)
14. 基本的人権と日本
15. まとめ

教科書

プリントを配布する

プリントを配布します。またプリント以外にも映像等を用いて授業を行います。

評価方法

(1)出席:50% (2)レポート:50%

授業に積極的に参加することを重視します。また第五にレポートを書いてもらいます。その総合的な判断で成績を出します。

卒業研究 (金融論)

担当者：鈴木 真実哉

開講期：秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

専門演習I・IIにおいて学んだことを基礎として、さらに応用的・発展的な学習を進めてゆく。最終的には卒業論文の作成につながるようにする。

2.学びの意義と目標

自主的なテーマの選択を通じて、自らの学問的な関心領域を決め、一つのテーマについて深く探究する力をつけることができるようになる。卒業論文の作成にスムーズにいかできるようにする。

準備学習(予習)

卒業研究発表に向けて最低10件の資料を報告すること。

準備学習(復習)

他のメンバーからの感想・質問、指導教員からのコメントをふまえて、提出用のレポートを作成すること。

授業計画

1. 1 あらかじめ指定したテーマについての発表(4回程度)
2. 1 あらかじめ指定したテーマについての発表(4回程度)
3. 1 あらかじめ指定したテーマについての発表(4回程度)
4. 1 あらかじめ指定したテーマについての発表(4回程度)
5. 2 自由選択テーマについての発表(3回程度)
6. 2 自由選択テーマについての発表(3回程度)
7. 2 自由選択テーマについての発表(3回程度)
8. 3 グループ共同研究発表(3回程度)
9. 3 グループ共同研究発表(3回程度)
10. 3 グループ共同研究発表(3回程度)
11. 4 集団討論(2回程度)
12. 4 集団討論(2回程度)
13. 卒業研究発表
14. 卒業研究発表
15. まとめ

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)卒業研究レポート:40% (2)発表:40% (3)出席状況:20%
積極的、情熱的姿勢を高く評価する。

卒業研究 (公共哲学)

担当者：谷口 隆一郎

開講期：秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1. 内容

現代の市民社会とその政策を考えるに当たって、各コミュニティが所属する、社会の各領域に内在する規範と、コミュニティがどう関係するかを理解することはとても重要である。私の「公共倫理」の概念を手がかりに、プラグマティズム的思考に即しつつ、コミュニティの新しい政治学の出来(しゅったい)の経緯と動向について学ぶ。

公共倫理(コミュニティ間の倫理)、民主的市民精神、多元多文化と寛容、市場の公共性、社会政策にとってのコミュニティの意味、コミュニティリアニズム対リベラリズム論争、等の諸問題と諸課題を取り上げる。

(1)1年かけて、公共哲学、政治哲学、政治理論、社会理論等に関する多くの文献を精読・精解する。(2)文献をレジメにまとめ報告・議論する。(3)卒業論文のテーマにつながるトピックを決め、ゼミ・レポートを書く。

2. 学びの意義と目標

(1)公共・民主的市民精神・公共倫理の諸問題と諸課題についての理解を深めることにある。そのために、それらに関して、世界の大学の公共哲学の授業で読まれている良質な内容の多くの文献を精読していく。

(2)将来、公共性の高い仕事(公務員職等)に就きたいと考えている学生にとっては、知っておくといいいテーマと内容が、この講義には含まれているのみならず、現代政治状況を根底から理解するために不可欠な視点が数多く盛り込まれている。コミュニティをどう捉えるかによって、政策への取り組みの考え方がどのように異なるのか、等について整理して学ぶことができる。(3)論理的に思考することにより、徹底的に日本語能力と思考力を鍛える。思考力さえ鍛えておけば、それをどんな知識の運用にも役立たせることができる。

準備学習(予習)

授業の中で指示した文献や資料を事前に読む。指定テキストを各自読み進める。

準備学習(復習)

当番制でBRC(授業内レポート)を作成する。各授業で、担当者は前回の授業のBRCを人数分配布する。各自、BRCを読むことで理解を新たにする。また、作成者は配布したBRCへの質疑応答を行う。

授業計画

1. オリエンテーション
2. 公共哲学に関する文献を精読し、レジメを作成して、報告を行う
3. 公共哲学に関する文献を精読し、レジメを作成して、報告を行う
4. 公共哲学に関する文献を精読し、レジメを作成して、報告を行う
5. 公共哲学に関する文献を精読し、レジメを作成して、報告を行う
6. 公共哲学に関する文献を精読し、レジメを作成して、報告を行う
7. 公共哲学に関する文献を精読し、レジメを作成して、報告を行う
8. 公共哲学に関する文献を精読し、レジメを作成して、報告を行う
9. 公共哲学に関する文献を精読し、レジメを作成して、報告を行う
10. 公共哲学に関する文献を精読し、レジメを作成して、報告を行う
11. 公共哲学に関する文献を精読し、レジメを作成して、報告を行う
12. ゼミ生による発表
13. ゼミ生による発表
14. ゼミ生による発表
15. まとめ

教科書

授業の中で指示する
授業内でプリントを配布したり、入手する資料を指示したりする。

評価方法

- (1) 授業参加度(研究報告):50%: 毎回の授業への積極的参加および研究報告・レジメ等
- (2) 研究成果(小論文):50%: ゼミ論文に対する評価

卒業研究 (コミュニティ・ビジネス論)

担当者：瀬名 浩一

開講期：秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

内容

「コミュニティ・ビジネスの現場」を履修し、まちづくり、福祉、環境、などコミュニティ・ビジネスの現場を支える経営者、利害関係者の講演から、コミュニティ・ビジネスの現場では「誰を助けるのか?」、「何をしているのか?」など地域経営の実情を知る。また、将来「社会起業家」として立ち立つために必要な起業家精神・組織づくり・資金調達などについて知りえた内容を手がかりとして、自分の住んでいる地域についてコミュニティ・ビジネスの起業可能性を1万字以上のレポートに纏める。

2.学びの意義と目標

2年生での専門演習、3年生春学期での卒業研究を踏まえて、研究内容を整理し、今後の研究計画を立て、フィールドワークなどを行い、パワーポイントでプレゼンテーションし、討論者などからの質問に答え、卒業研究論文を纏める。

準備学習(予習)

自分の研究内容、発表計画を見直し、扱うトピックについて新聞等で情報を集めておくこと。

準備学習(復習)

自分の研究テーマ、内容と他の人の研究テーマ、内容との関連についても関心を持つこと。

授業計画

1. 卒業研究IIの学び方
2. 卒業研究小論文と研究計画の発表
3. 卒業研究小論文と研究計画の発表
4. 卒業研究小論文と研究計画の発表
5. 卒業研究小論文と研究計画の発表
6. 卒業研究小論文と研究計画の発表
7. 卒業研究小論文と研究計画の発表
8. 卒業研究II小論文の発表
9. 卒業研究II小論文の発表
10. 卒業研究II小論文の発表
11. 卒業研究II小論文の発表
12. 卒業研究II小論文の発表
13. 卒業研究II小論文の発表
14. 卒業研究II小論文の発表
15. 卒業研究IIの総括

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)研究計画:20% (2)プレゼンテーション:30% (3)論文内容:50%

卒業研究 (情報学)

担当者：河島 茂生

開講期：秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

授業の内容は、専門演習 (情報学)からの一連のゼミナールで培った知識をもとにして、受講生がみずから選んだテーマを調査し、その仕上げを行うことである。受講生は、卒業研究 (情報学)に引き続き、実際に調査を行う。また、口頭発表に加えて、文書で研究結果をまとめる。

2.学びの意義と目標

卒業研究 (情報学)に引き続き、卒業研究 (情報学)では受講生が独自の情報を掴むことを目指す。また、他者に伝えられる書き言葉を身につけることを目的とする。

準備学習(予習)

指定された課題をこなし、口頭発表時には配布資料を作成されたい。また授業外の学習を絶えず行いながら、ゼミに関わっていただきたい。

準備学習(復習)

ディスカッションでなされた内容を踏まえ、みずからの次回の発表・文書を改善しなければならない。

授業計画

1. ガイダンス
2. 調査結果報告(口頭発表中心)
3. 調査結果報告(口頭発表中心)
4. 調査結果報告(口頭発表中心)
5. 調査結果報告(口頭発表中心)
6. 調査結果報告(口頭発表中心)
7. 調査結果報告(口頭発表中心)
8. 調査結果報告(文書をもとにしたディスカッション)
9. 調査結果報告(文書をもとにしたディスカッション)
10. 調査結果報告(文書をもとにしたディスカッション)
11. 調査結果報告(文書をもとにしたディスカッション)
12. 調査結果報告(文書をもとにしたディスカッション)
13. 調査結果報告(文書をもとにしたディスカッション)
14. 調査結果報告(文書をもとにしたディスカッション)
15. 学外施設見学

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)口頭発表:40% (2)論文・レポート:40% (3)ディスカッション:20%

卒業研究 (情報処理)

担当者：国分 道雄

開講期：秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

本演習では、現代の情報化社会において情報および情報機器を主体的に活用するため、情報を科学的に理解し、社会との関わりについて学ぶ。

2.学びの意義と目標

コンピュータ内部での動作を科学的に理解し、情報機器を問題解決のために主体的に利用できる態度と能力を身につける。

準備学習(予習)

次回のテキストの箇所を読んでくること。

準備学習(復習)

授業で取り上げた事柄について調べること。

授業計画

1. 春学期レポートの講評
2. 秋学期のテーマについて
3. 担当者による発表
4. 担当者による発表
5. 担当者による発表
6. 担当者による発表
7. 担当者による発表
8. 担当者による発表
9. 担当者による発表
10. 担当者による発表
11. 担当者による発表
12. 担当者による発表
13. 担当者による発表
14. 担当者による発表
15. まとめ

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)発表・授業への関わり:60% (2)レポート:40%

卒業研究 (情報倫理)

担当者：竹井 潔

開講期：秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

工業社会から情報社会へと変遷してきた中で、「情報倫理」ということが近年いわれた。 「情報倫理」は今後あらゆる「情報」を扱う上で必要となる。そこで、「情報倫理」がなぜ必要となってきたのか、情報とは何か、現代社会と情報のかかわりの中で、情報の価値を問いかけていきたい。私たちは、次第に情報ネットワーク社会を前提とした情報社会の中で生活をしてきているが、情報社会をとりまく光と闇の部分を知り、情報化によって便益を受けている面と、問題が生じてきた情報社会の課題を検討していきたい

2.学びの意義と目標

情報社会における諸課題、情報倫理の必要性について理解し、課題を形成していく。

準備学習(予習)

事前に指示する参考図書を読んで用語などを調べておくこと。発表演習には事前に発表資料を作成してくること。演習は必ず出席し、積極的に参画すること。

準備学習(復習)

演習でできなかった箇所や理解できなかった専門用語は各自調査して十分に理解しておくこと。

授業計画

1. 情報社会と課題形成
2. 個別研究テーマの形成
3. 個別研究テーマの研究計画書作成
4. 個別研究テーマの調査 1
5. 個別研究テーマの発表 1
6. 個別研究テーマの調査 2
7. 個別研究テーマの発表 2
8. 個別研究テーマの調査 3
9. 個別研究テーマの発表 3
10. 個別研究テーマの調査 4
11. 個別研究テーマの発表 4
12. 個別研究テーマの調査 5
13. 個別研究テーマの発表 5
14. 総合発表
15. まとめ

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)演習:40%:課題提出、発表演習 (2)期末レポート:60%

卒業研究 (政治学)

担当者：川添 美央子

開講期：秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

春学期に引き続き、各自の関心に従って、現代日本の政治に関する問題を選び、調査のうえ発表し、最終的にはレポートを書いてもらう。

2.学びの意義と目標

自分で問題を設定し、データや論証を添えながら、一定の建設的提言をするレポートを作成する能力を身に付けることを目標とする。

準備学習(予習)

各自、自分の報告については念入りに準備すること。
また、ディスカッサントに指定された学生は、担当相手の分野についてもよく勉強しておくこと。

準備学習(復習)

次回の発表やレポート提出に向けて、指摘された問題点については改善を試みることを。

授業計画

1. 学期末レポートの返却と講評
2. 図書館ツアー
3. 担当者による発表
4. 担当者による発表
5. 担当者による発表
6. 担当者による発表
7. 担当者による発表
8. 担当者による発表
9. 担当者による発表
10. 担当者による発表
11. 担当者による発表
12. 担当者による発表
13. 担当者による発表
14. 担当者による発表
15. まとめ

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)提出レポート:60% (2)平常点:40%

卒業研究（地域社会論）

担当者：大高 研道

開講期：秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

本卒業研究の共通テーマは、現代的課題克服の主体研究である。グローバル化する現代社会において噴出している労働問題・生活問題の中で、自分なりの関心から選択した「現代的課題」をより深く掘り下げ、その解決主体としての市民・コミュニティ（組織）のあり方と可能性について検討することがその内容となる。

具体的には、設定したテーマ（課題）についての多面的な観点からの検討を通して、関連する領域において活動を展開する市民社会組織（NPO、社会的企業、協同組合、ボランティア団体等）調査を実施する。その成果を報告してもらい、最終的には卒業研究レポートとしてまとめてもらう。

2.学びの意義と目標

卒業研究を通して、地域を基盤に活動を展開する新しい協同の形として注目されるNPOや市民社会組織の可能性について、各自が関心のある領域において一定程度のビジョンを提起できるようになることを目指す。その集大成のひとつとして位置づけられるのが、「卒業研究レポート」である。「卒業研究」を通じた学びは、自身の生涯にわたる社会への問題意識・関心の基本的スタンスを醸成するうえでも、重要な意義を有しているであろう。

準備学習(予習)

・報告者は、前回報告で指摘された箇所の修正および新たに執筆した箇所の要旨をまとめたレジュメ等を準備し、事前に提出すること。報告を担当しないものも、毎回、簡単な卒レポ進行状況を報告すること。

準備学習(復習)

・ゼミでの検討会をととして指摘された修正点等は、その週のうちに加筆・修正すること。次回ゼミの冒頭に、簡単な進行状況の報告をしてもらう。

授業計画

1. 卒業研究レポート執筆にむけて
2. 調査方法論の再確認
3. 調査テーマの検討・確定
4. 個別報告(1)
5. 個別報告(2)
6. 共同調査
7. 個別報告(3)
8. 個別報告(4)
9. 個別報告(5)
10. 共同調査
11. 卒業研究レポート草稿の検討I
12. 卒業研究レポート草稿の検討II
13. 現代社会における「コミュニティの担い手」を考えるI
14. 現代社会における「コミュニティの担い手」を考えるII
15. まとめと反省

教科書

授業の中で指示する

評価方法

- (1)出席点:70%:報告内容および討論への参加状況（積極性）を含む。
- (2)レポート:30%

卒業研究（日本経済論）

担当者：大森 達也

開講期：秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

卒業研究の目的は、卒業研究で進めてきた卒業研究レポート準備をさらに進め、卒業研究レポートを完成することである。

2.学びの意義と目標

研究レポート作成を通じて、それぞれの問題意識を高めるという意義とともに、「報連相」の重要性を理解することにある。

準備学習(予習)

研究レポート作成を目的としているため、個別テーマごとの指導が重要とならざるを得ない。各自、調査・研究の時間を充分にとることが重要となる。

準備学習(復習)

個別指導に従い、各自、発表後に問題点を整理し、最終の研究レポートに反映すること。

授業計画

1. 研究計画書の変更と発表(2)
2. 文献リストの変更と発表(2)
3. 追加文献調査の発表(3)
4. 追加文献調査の発表(4)
5. 中間発表(5)
6. 中間発表(6)
7. 研究計画書の変更と発表(3)
8. 文献リストの変更と発表(3)
9. 追加文献調査の発表(5)
10. 追加文献調査の発表(6)
11. 最終研究発表(1)
12. 最終研究発表(2)
13. 最終研究発表(3)
14. まとめ(1)
15. まとめ(2)

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)中間発表:20% (2)最終発表:30% (3)研究レポート:50%:10,000字程度

卒業研究 (法学)

担当者：渡辺 英人

開講期：秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

「法」を学ぶことは社会の中で生きるための最も重要な基礎知識である。この授業では大学生として必ず知っていなければならない「社会のルール」その根本概念について解説し、理解してもらおう。2013年度のテーマは「生活の中から見た法と行政」。消費者保護に関する法や行政を学ぶ。新聞やテレビ等のニュース報道で、従来では考えられなかった事件や事故を耳にする。なぜ、このような問題が発生するのか、いっしょに検討してみよう。生活者の視点で社会を確認してみよう。

2.学びの意義と目標

生活の中から見た法と行政を学ぶ。これは生きるために必要な知識となる。

準備学習(予習)

前週までにゼミ資料を配付するので、復習のみならず、資料の読みこみなど予習をすること。

準備学習(復習)

授業で使用した資料と、授業中に記述したノートを基にして、清書ノートを作成すること。

授業計画

- 1.現代社会と法(その種類と仕組み)
- 2.法と道徳
- 3.法が強制的であるということ
- 4.法の機能
- 5.「犯罪」とは何か?
- 6.現代社会と裁判制度
- 7.デュー・プロセスについて
- 8.消費者を守る法
- 9.研究報告
- 10.研究報告
- 11.研究報告
- 12.研究報告
- 13.研究報告
- 14.研究報告
- 15.研究報告

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)授業参加:40% (2)発表:30% (3)課題作成:30%

卒業研究（まちづくり学）

担当者：平 修久

開講期：秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

一人ひとりの受講生の興味のあるまちづくり、あるいはまちの問題について各自研究を行う。テーマとしては、(1)都市開発・整備、(2)都市問題、(3)地域コミュニティの活性化・維持、(4)安全なまちづくり、(5)福祉のまちづくり、(6)まちの環境保全・再生・創造、(7)まちのイベント、(8)都市行政などを想定している。

2.学びの意義と目標

自ら課題を設定し、調査し、レポートを作成できるようにすること。

準備学習(予習)

事前に、配布資料を読んでおくこと。レポートの発表に関しては、その内容をまとめ、準備しておくこと。

準備学習(復習)

発表の場合はコメントをまとめ、講義の場合はノートをまとめる。

授業計画

1. 公共政策の概要 1
2. まちづくりレポートの発表 1
3. まちづくりレポートの発表 2
4. まちづくりレポートの発表 3
5. 公共政策の概要 2
6. 公共政策の概要 3
7. 公共政策の概要 4
8. 卒業研究レポートの中間発表 1
9. 卒業研究レポートの中間発表 2
10. 卒業研究レポートの中間発表 3
11. 政策評価 1
12. 政策評価 2
13. 卒業研究レポートの最終発表 1
14. 卒業研究レポートの最終発表 2
15. 卒業研究レポートの最終発表 3

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)出席:30% (2)授業への参加度合い:10% (3)発表:20% (4)レポート:40%

地域経済論

担当者：瀬名 浩一

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

<内容>

国内では東日本大震災後の被災地域復興、国外では環太平洋パートナーシップ協定（TPP）への関わりが注目される。日本で生産年齢人口が半減する時代、巨大複合災害に有効な地域政策手段はどのようなものか。立ち上がるための地域経済協力の先例、ヨーロッパ連合（EU）では1990年代、すでに局所から超国家に渡る様々のレベルで地域問題に取り組む姿勢の転換が起こったが、現在は政府債務問題で、存続の危機にさえさらされている。

初めに日本の首都圏と地方圏間の地域格差、第2に、中国、インドなどアジア新興国の消費市場の取り込み、第3に「英国病」を克服し国際競争力を取り戻した英国と日本における地域の雇用、所得、成長率、失業率、格差を正策を比較日本経済の復興政策を探る。最後にEUで起きている地域連合、権限委譲を参考にTPPの可能性と限界を探る。

2.学びの意義と目標

地域社会の経済統計数字の見方、グラフの読み方を学び、地域格差が生まれる理由を経済理論を使って考え、最後に経済格差を長引かせないための地域政策の歴史、手段、効果などについて理解できるようにする。

準備学習(予習)

講義の終わりに次回のテーマを指示するので、授業前1時間の予習をして授業に臨むこと。

準備学習(復習)

授業3回に1回授業内試験を行うので、授業後1時間の復習を毎回欠かさぬこと

授業計画

1. 生産年齢人口半減時代に遭遇した東日本大震災
2. 東日本大震災は日本の各種制度疲労を断ち切るきっかけとなるか
3. 大都市でも地方でも所得と消費が、同時に沈んでいる
4. 最近18年間で中小企業数が、日本では100万社減少、英国では130万社増加
5. 日本の金融業は不況業種といわれるが、社会金融分野で活況である
6. 平成の大合併を避けた首都圏の市町村の財政力指数は今後低下せざるを得ない
7. 就業者の加齢・減少が日本の景気を失速させる
8. 成長する中国・インドの消費市場に向けた日本の企業戦略
9. 新興國小売市場の成長と中国における日系小売企業
10. アジア新興国のサービス需要拡大への戦略
11. ジャパンブランドで戦う
12. 地域経済と一国経済の違いは、地域間交易と地域間所得移転を行う政府の役割
13. 地域の生産と雇用を決定する要因は？
14. なぜ、一人当たりの地域所得に差があるのか？
15. 地域的特化と地域間交易を決定する要因は？
16. 経済的要因は地域間人口移動をどの程度説明できるか？
17. 地域失業格差はなぜ持続するのか？
18. 相対的貧困率の国際比較
19. 日本の地域政策の歴史
20. 広域地方計画
21. 地方分権・地域主権
22. 地域産業基盤整備
23. 地域活性化
24. 東日本大震災関連
25. 英国の地域政策の歴史
26. 英国の1980年代の地域政策
27. 英国のコミュニティ経済開発
28. 地域政策の選択
29. 地域固有の発展
30. 地域政策の評価

教科書

授業の中で指示する

評価方法

- (1)授業理解度:40%:授業3回に1回の割合で授業内テストを合計10回行う
- (2)期末テスト:30% (3)出席:30%

地域圏研究(アジア A)

担当者：江藤 名保子

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

本授業では、日中関係や国際関係に言及しながら、中華人民共和国建国（1949年）以降の現代中国の歩みを考察する。

多くの日本人の対中認識は、三国志や伝統文化・世界遺産などに代表される古典的中国のイメージ、あるいは目覚ましい経済発展を遂げている地域大国としての中国である。しかし、現在の中国の政治・社会状況は、社会主義国家として建国した時からの制度的連続性を持ち、日本とは著しく異なる政治システムや考え方に基づいている。こうした中国の現状を理解するためには、これまでの政治過程を具体的に理解する必要がある。

中国との国際協力も国際ビジネスも、対象となる地域・人を理解することから始まる。そのためには中国政治や歴史に対する基礎知識を備えねばならない。この授業ではその知識の一部を蓄えてもらいたい。

2.学びの意義と目標

第1に、講義への参加をきっかけに中国への関心を高め、正しい知識を獲得し、対中理解を深めることを目標とする。

第2に、中国の政治・外交を事例として社会現象を理解するための情報分析、評価の訓練を行う。特に東アジア地域においては、領土問題など現実には「解答のない問題」が存在する。こうした事例を扱いながら、異なる主張・論点を考察し、そのなかから自分なりの結論を得るための論理的思考を育成する。

準備学習(予習)

授業計画を参照し、トピックに関連する情報を集めること。事前に参考資料が指定された場合は読んでおくこと。

準備学習(復習)

配布プリントを再読し、各項目を説明できるようにしておくこと。

授業計画

1. イントロダクション：授業説明と中国時事問題
2. 政治構造（1）：社会主義と市場経済
3. 政治構造（2）：党、国家、社会
4. 政治構造（3）：中国は民主化するのか
5. 歴史（1）：「抗日戦争」
6. 歴史（2）：社会主義の選択
7. 歴史（3）：社会主義改造
8. 歴史（4）：反右派闘争と大躍進
9. 歴史（5）：文化大革命
10. 歴史（6）：文化大革命
11. 歴史（7）：改革開放とは
12. 歴史（8）：天安門事件
13. 歴史（9）：江沢民・朱鎔基体制
14. 歴史（10）：胡錦濤・温家宝体制
15. 社会（1）：経済格差と社会保障
16. 社会（2）：社会の諸問題
17. 社会（3）：政治思想・文化
18. 社会（4）：ナショナリズム
19. 外交（1）：内政と外交の連動性
20. 外交（2）：台湾問題
21. 外交（3）：冷戦下の外交戦略
22. 外交（4）：ポスト冷戦における外交戦略
23. 外交（5）：日中歴史問題
24. 外交（6）：領土問題
25. 国際関係（1）：中国とアメリカ
26. 国際関係（2）：中国と東アジア
27. 国際関係（3）：中国と東南アジア
28. 国際関係（4）：中国と中央アジア
29. 国際関係（5）：中国の国際的地位
30. まとめ

教科書

授業の中で指示する

評価方法

- (1)平常点:30%:出席を加味する。(2)小テスト:20%:授業内に行う。
- (3)試験:50%

地域圏研究(アジアB)

担当者：小松崎 利明

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

第一に、南アジアおよび東南アジア地域について、いくつかの国を取りあげてその社会・歴史・文化などを学びます。第二に、取りあげた国々および周辺地域における（国家間・民族間・政治的）紛争とその解決について学修します。以上と関連して、第三に、他地域（特にヨーロッパ）との比較において、アジアとは何かといった問題について考えます。

2.学びの意義と目標

南アジアや東南アジア地域に対する知見を広め、より深い理解を得ること、そしてアジアとは何かについて考えることがこの授業の目標・意義です。

準備学習(予習)

配布資料を読んでおく。

準備学習(復習)

課題文献・資料を読み、レポートの形にまとめる。

授業計画

1. 講義概要説明
2. 地域圏研究とは
3. アジアという概念（1）
4. アジアという概念（2）
5. 国家間・民族間紛争とその解決（1）
6. 国家間・民族間紛争とその解決（2）
7. インドの社会・歴史・文化（1）
8. インドの社会・歴史・文化（2）
9. パキスタンとバングラデシュの社会・歴史・文化（1）
10. パキスタンとバングラデシュの社会・歴史・文化（2）
11. インド独立とパキスタン・バングラデシュの分離独立（1）
12. インド独立とパキスタン・バングラデシュの分離独立（2）
13. カシミール紛争（1）
14. カシミール紛争（2）
15. スリランカの社会・歴史・文化（1）
16. スリランカの社会・歴史・文化（2）
17. スリランカ内戦（1）
18. スリランカ内戦（2）
19. 東ティモールの社会・歴史・文化（1）
20. 東ティモールの社会・歴史・文化（2）
21. 東ティモールの独立（1）
22. 東ティモールの独立（2）
23. カンボジアの社会・歴史・文化（1）
24. カンボジアの社会・歴史・文化（2）
25. カンボジア内戦と思想対立（1）
26. カンボジア内戦と思想対立（2）
27. 世界のなかのアジア（1）
28. 世界のなかのアジア（2）
29. アジアにおける紛争と和解（1）
30. アジアにおける紛争と和解（2）

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)平常点:20% (2)ブック・レポート:40% (3)期末レポート:40%

地域圏研究(アメリカ)

担当者：小島 かおる

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

現代国際社会において、アメリカ合衆国は超大国として絶大な影響力を持っています。また、わが国にとっても、政治、経済、社会、文化の広範な領域において決定的に重要な国といえます。この講義では、まず、アメリカの歴史を概観しながら、国家や社会の仕組みを学びます。また、二つの世界大戦や冷戦期、冷戦後のアメリカ外交の特徴を解説し、国際社会におけるアメリカの役割を考えてみます。さらに、移民、宗教、銃規制、女性、社会保障などの観点から現代アメリカ社会の諸相を見ていきましょう。

2.学びの意義と目標

アメリカに関する情報は書籍・テレビ・新聞・雑誌・インターネットなどいたるところに溢れています。「アメリカのことなら大体知っている」という人も多いと思います。しかし、日本とアメリカでは、国の成立の経緯も政治や社会の仕組みも非常に異なっており、「アメリカとは何か」をより正確に理解するためにはそうした基礎知識の習得が重要になります。この講義では、アメリカに関する基礎知識を習得すること、そして習得した基礎知識をもとに「アメリカとは何か」を考察することを目標とします。

準備学習(予習)

参考図書（授業の中で指示）などを使って、次回テーマについての概要を調べておくこと。

準備学習(復習)

講義や配布プリントを使って、「よいノート」を作ること。

授業計画

1. アメリカの自然、地理、気候
2. 植民地時代
3. 独立と建国
4. アメリカ合衆国憲法： 統治のしくみ
5. 領土の拡大/ 明白な運命/ 先住民
6. 黒人奴隷制度
7. 南北戦争
8. 産業の発展
9. ポピュリズム/ 黒人差別制度
10. 革新主義の時代
11. 第一次世界大戦
12. 旧体制の崩壊： 大恐慌とニューディール
13. 第二次世界大戦
14. 冷戦の開幕
15. まとめ
16. フェアディール/ ニューリパブリカニズム/ ニューフロンティア
17. 冷戦の軍事化
18. 南部の変革
19. ヴェトナム戦争と偉大な社会
20. アメリカ経済の停滞
21. デタントから新冷戦へ
22. 保守化
23. 冷戦の終焉
24. リベラルと保守
25. 移民の国
26. 宗教国家
27. 銃規制
28. アポーション / ERA
29. 福祉/ 医療
30. 試験とその解説

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)試験:70% (2)レポート:30%

担当者：倉西 雅子

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

本講義では、政経両分野におけるヨーロッパの歴史を振り返りながら、現在のEUについて考えてゆきます。EUを、政治面における分立的な国民国家体系と、経済面における広域的な市場との調和形態として捉えることで、人類史におけるEUの意義を問うてゆきます。

2.学びの意義と目標

学生諸君が、EUを深く理解するとともに、政治と経済との交差についても知的関心を寄せる契機となることが、本講義の学びの意義と目標です。

準備学習(予習)

日頃より、ヨーロッパ関連の本を多く読むように心がけると共に、新聞、テレビ、インターネット、雑誌等でも、EUについての情報に触れるようにしてください。

準備学習(復習)

本講義では、時間の流れを掴む必要がありますので、講義後は、配布されたプリントの内容を必ず確認し、次回の講義に備えてください。

授業計画

1. ガイダンス
2. ウェストファリア体制からユトレヒト体制へ
3. ロシアとプロイセンの台頭と外交革命
4. ナポレオン体制の成立とその崩壊
5. ウィーン体制の成立とその崩壊
6. 統一国家の誕生とビスマルク体制
7. トルコ帝国と東方問題
8. 第一次世界大戦
9. 戦間期のヨーロッパ
10. 第二次世界大戦
11. 中世の経済とヨーロッパ貿易圏
12. 大航海時代と貿易の拡大
13. イギリスの自由貿易主義
14. 植民地政策とブロック経済
15. 戦後の混乱期
16. ヨーロッパの安全保障体制の再構築
17. デタントの時代
18. 冷戦の終焉
19. 戦後の自由貿易体制の成立
20. EECの成立
21. プレトン・ウッズ体制の崩壊とEC
22. 市場のグローバル化とEC
23. ユーロの誕生
24. EUの誕生
25. EUの深化と拡大
26. 外交・安全保障・防衛分野の発展
27. 警察・法務協力の展開
28. 財政危機に揺れたEU
29. ヨーロッパとは何か
30. 理解度の確認

教科書

プリントを配布する
毎回配布するプリントには、その日の講義内容が纏めてあります。

評価方法

(1)出席:50%:点数化 (2)レポート:50%
本講義では、パワーポイントのスライドを使用して説明しているため、出席に対する評価を高めめに設定しています。

担当者：飯島 康夫

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

20世紀初めの反スラヴ主義的動向や20世紀後半の東西冷戦を思い起こせば明らかなように、つい最近まで「ロシア」は、ヨーロッパ各国にとっての、ひいては世界にとっての選択肢の一つであった。親ロシアか否かという問いは、20世紀には大変な重みを持っていたのである。ソ連崩壊以後、しばらくの間ロシアの存在感は希薄になっていたが、昨今では再び大国として力を誇示し始めている。21世紀においても、ロシアを知っていることが無駄になることはまずないであろう。日露交流の歴史を、遡って、詳しく見ていく。

2.学びの意義と目標

まずは、隣国である大国の歴史の概略を知ることが重要である。
また、その意義は、ロシアに関する基本的な知識を獲得してもらうことにある。取り上げられる分野は、歴史、宗教、政治、思想、文学、芸術など、広範囲にわたる。
目標は昔のロシアから現代のロシアに至るまでの概略をつかんでもらう事である。

準備学習(予習)

試験では授業で触れたことの中から出題するため、積極的な聴講が必要である。
基本文献を指示するので通読すること。

準備学習(復習)

基本文献を部分ごとに読み、理解すること。

授業計画

- 1.1) 歴史:ロシア史の概略
- 2.2) 宗教:ロシア正教を紹介する(6回)。
- 3.3) 思想:西欧主義とスラヴ派との確執等について解説する(6)
- 4.4) 文学:ドストエフスキー、トルストイ、チェーホフなど
- 5.5) その他:時事問題、現代文化、言語などについて。
- 6.ロシアの地理的拡大
- 7.ロシアの起源
- 8.キエフ、ノヴゴロド
- 9.モンゴルのくびき
- 10.モスクワ公国
- 11.ピョートルとペテルブルク帝国
- 12.エカチェリーナ二世と啓蒙
- 13.アレクサンドル一世と専制
- 14.ニコライ一世の専制体制と農奴
- 15.クリミア戦争とアレクサンドル二世
- 16.敗戦と改革
- 17.十九世紀末のロシア・ルネサンス
- 18.アレクサンドル三世と反改革志向
- 19.ニコライ二世
- 20.日露戦争と第一次ロシア革命
- 21.第一次大戦とロシア革命
- 22.帝政ロシアの地政学
- 23.レーニンからスターリン
- 24.第二次大戦とスターリン体制
- 25.冷戦とフルシチョフ
- 26.ブレジネフから
- 27.ゴルバチョフ
- 28.旧ソ連の崩壊と市場経済移行、エリツィン政権
- 29.プーチンの新生ロシアの浮上
- 30.メドベージェフ、プーチンと北方領土

教科書

横手慎二 『日露戦争史』(中央公論社)

評価方法

(1)出席:50% (2)レポート・テスト:30% (3)発表:20%

地域社会と生協

担当者：大高 研道

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1. 内容

今日、世界的な金融・財政危機、環境問題、少子高齢化、不安定雇用、地域紛争など、私たちの経済・社会生活はその根幹をゆるがすさまざまな課題に直面している。また、日本を襲った未曾有の大災害、東日本大震災からの復興プロセスは、日本の経済・社会のあり方そのものの見直しをわれわれに迫っているが、震災から2年が経過した今もなお、福島放射能問題をはじめ、復興にむけたシナリオは不透明なままである。いまこそ、地域における協同と連帯によってこれらの問題を解決することが求められている。

1844年、英国において誕生した非営利の協同組織・事業体である消費生活協同組合（以下、生協）の取り組みは、その後、日本を含む世界中の国々に広がっていった。日本は、とりわけ生協運動が発展した国であり、今日では、組合員数が2,600万人を超え、世帯加入率は約5割にまで達している。本講義では、今日の社会で協同組合、そして生協がどのような位置にあり、私たちの暮らしと社会生活の向上にどのような役割を果たしているのか、その現実と可能性について、地域社会に基盤をおいた協同組織・事業といった観点から学ぶ。

本講義は、「生活協同組合コープみらい」による寄附講義である。講義は、ゲストスピーカーによる講義および実践紹介を中心に構成され、現場実習（店舗体験）、グループワーク等も実施する予定である。

2. 学びの意義と目標

本講義における学びの意義は、地域生活者としての視点から、自らの暮らしを見つめなおす機会を提供する点にある。商業的世界が日常生活の隅々を支配している今日、私たちは「消費者」として他者と接する場面が多い。身近な地域の暮らしの現実の中で生成するさまざまな問題（現代的課題）に対応している協同組合（生協）は、商品を媒介としながらも、単なる「消費者」を超えた「生活者」としての視点に立った事業・運動に取り組んでいる。おもに日常的な購買事業・福祉事業の現場経験にもとづく講義は、自ら考え行動するなかで生まれた実践知を学ぶ貴重な機会になるとともに、グループワークおよび2回実施される現場体験を通して、その実践知を共有・体験することもできる。

本講義では、地域社会における生協の位置と役割について理解することを第一義的な目的とするが、その学びの先には、「閉じられた関係性」のなかに生きる私たち現代人の歩むべき方向性について、一定程度のビジョンを提示できるようになることをもめざしている。

準備学習(予習)

毎回の講義の最後に、次回講義のテーマおよびキーワードについて触れるので、最低限の言葉の意味と背景について調べておくこと。

準備学習(復習)

毎回の講義の最後に「今回の講義で学んだこと」、「疑問点/さらに学びたいと思ったこと」の2点を整理してもらおう。各自、そこで生まれた問題意識を大切に、講義資料等をもとに具体的な用語・取り組みについて調べてみる。これらについては、講義の最終回に質疑応答および意見交換の時間を設ける予定である。

授業計画

1. ガイダンス
2. 世界の協同組合
3. 日本の生協運動および「コープみらい」の歴史的到達点と課題
4. 生協店舗の現場報告とグループワーク（店舗現場体験の事前講義）
5. 店舗現場体験とグループワーク
6. ボランティア体験とグループワーク
7. 生協の地域福祉活動とボランティア
8. 地域農業・漁業と生協
9. 佐渡のトキと地域農業と生協
10. 東日本大震災復興支援の取り組みと生協
11. 生協とユニセフ活動
12. 生協と国際交流活動
13. 食の安全の最前線（品質管理の現場）
14. コープ商品開発の最前線
15. まとめ - 地域社会と生協 -

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)出席点:45% (2)実習ポート:30% (3)期末レポート:25%
出席カードには 今回の講義で学んだこと、疑問点/さらに学びたいことを記入してもらい、その内容は出席評価に加味する。

地域社会論

担当者：大高 研道

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

現代社会は「不安社会」だと言われている。少子・高齢化、ニート、非行・犯罪、登校拒否・引きこもり、孤独死、家庭暴力など、私たちの生活や未来を脅かすような事件が多発する社会は、ますます私たちを不安にさせる。中でも特徴的なのは、いわゆる自らを中流階層と認識してきた多くの人々が危機感を覚えていることだ。一億総中流と言われたのは一昔、今では自らを「中流」と呼ぶ人は少ない。そのことは、「リスク社会」/「不安社会」の中に誰もが巻き込まれる恐れがあることへの危機意識が多くの人々に共有されていることを意味するが、より深くその「不安」の本質を理解しようと試みれば、それは、上記の問題に遭遇した時に「誰が守ってくれるのか?」、「誰が助けてくれるのか?」といった疑念の混じった不安であることが分かる。換言すると、私たちは今、未来社会における「助け合いの形」(=現代的協同)を模索しているといえる。そこで、キーワードとして登場してくるのが「地域社会/コミュニティ」である。

本講義では、現代(不安)社会は、「助け合いの形」のドラマティックな変容過程(崩壊過程ではない)にあると理解し、この現代的協同の中心概念(および主要形態)として注目されている「地域社会/コミュニティ」の現代的な形および再編の方向性について論じたい。

2.学びの意義と目標

人間生活は他者との関係性なしでは成り立たない。災害時や高齢化社会への対応、さらには近年問題となっている子どもへの犯罪にかかわる防犯対策など、地域の役割の重要性はむしろ増しており、21世紀は「コミュニティの時代」とも言われている。反面、生活の個別化とともに地域内の人間関係が希薄化し、地域社会の衰退・崩壊が進んでいるのも事実である。よって、今日の競争社会によって失われつつある他者との関係性や人間性を回復させる誓としてあらためて注目されている「地域社会/コミュニティ」の現代的意味の再検討は、私たち自身の未来社会を展望するためにも重要である。また、このようなコミュニティの現代的文脈から3.11東日本大震災の復興過程を考えると、そこには未来社会にむけて私たちが進んでいく方向性への示唆も見えてくる。

講義を通して、最終的には、地域を基盤にさまざまな活動を展開する協同的市民活動(NPO、ボランティア組織、社会的企業を含む)の現在と可能性について、一定程度のヴィジョンが提示できるようになることを目指す。

準備学習(予習)

毎回の講義の最後に、次回講義のテーマおよびキーワードについて触れるので、最低限の言葉の意味と背景について調べておくこと。

準備学習(復習)

毎回の講義終了後、「学んだこと」、「疑問に思ったこと/さらに学びたいこと」の2点を整理しておくこと。これらについては、次回講義の冒頭に、前回講義の復習・解説という形で質疑応答・意見交換の時間を設ける。

授業計画

1. 地域社会論の射程
2. グループ討論(1) 地域社会とコミュニティ
3. グループ討論(2) 地域社会とコミュニティ
4. グループ討論報告
5. 講義の焦点の再確認 「コミュニティ」と「地域社会」の同質性・異質性
6. コミュニティ概念の再検討(1)
7. コミュニティ概念の再検討(2)
8. 映画にみる「地域社会」の断面(1)
9. 映画にみる「地域社会」の断面(2)
10. 無縁社会とコミュニティ
11. 支えあい場としてのコミュニティ - 機能と現実(1)
12. 支えあい場としてのコミュニティ - 機能と現実(2)
13. 現代社会の諸相:若者問題(1)
14. 現代社会の諸相:若者問題(2)
15. 現代社会の諸相:高齢化(1)
16. 現代社会の諸相:高齢化(2)
17. 現代社会の諸相:働く(1)
18. 現代社会の諸相:働く(2)
19. 現代社会の諸相(まとめ):不安社会の背後にあるもの
20. 現代的協同性の担い手としての家族・近隣組織・アソシエーション・国家(1)
21. 現代的協同性の担い手としての家族・近隣組織・アソシエーション・国家(2)
22. 孤立への対抗戦略(国内編1):障がい者福祉
23. 孤立への対抗戦略(国内編2):ホームレス支援
24. 孤立への対抗戦略(国内編3):ご近所の再構築
25. 孤立への対抗戦略(海外編1):イギリス・アイルランド
26. 孤立への対抗戦略(海外編2):スウェーデン
27. 地域社会論を学ぶことの意味(1)「地域社会崩壊論」について考える
28. 地域社会論を学ぶことの意味(2)市民と行政の協働による地域社会形成
29. 地域社会論を学ぶことの意味(3)若者問題が地域社会論へ提起するもの
30. まとめ

教科書

授業の中で指示する

評価方法

- (1)試験:70% (2)レポート:30%
- ・毎回の出席が前提となる。それゆえ、出席したからといって成績に出席点が加算されることはない。ただし、欠席は減点の対象となる。
 - ・講義の内容理解を深めるためにグループ討論・報告を実施する。討

地域ビジネスの現場

担当者：藤井 重隆

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

地域にはどんなビジネスがあるのだろうか。人が成長して社会に貢献するように、企業も成長して地域社会に、日本に、さらには世界に貢献していくものである。この講座では本学の近くで様々なビジネスを展開している企業を主に、その企業で働くビジネスパーソン6人から「事業内容」「沿革」「理念」などを聴き、聴いた内容をグループで討議・マトメ・発表してもらい理解を定着させる。

講演者としては販売店関係、流通、メーカー、イベント、メディア関係企業など6社を予定している。

2.学びの意義と目標

少子高齢化、グローバルエコノミーの進行、地球温暖化やシェールガス革命、さまざまな要因で地域ビジネスは変わっていく。これからはICT=情報通信技術をベースに再生可能エネルギーや電気自動車などで構築されるスマートシティ化によっても地域は姿を変えていく。就職と言う視点を織り込みながら人・モノ・金の動きの変化によって盛衰を繰り返す地域ビジネスの現場を考えていく。

準備学習(予習)

ビジネスパーソンの講演を聴いたら翌週の講義までに講演のポイントを整理して発表できるようにしておくこと。

準備学習(復習)

ビジネスパーソンの講演を聞いたり、グループディスカッションを行った後は要点をメモするようにすること。

授業計画

1. プログラム紹介
2. ビジネスパーソンの講演
3. 講演 の内容についてグループで討議し、発表する
4. ビジネスパーソンの講演
5. 講演 の内容についてグループで討議し、発表する
6. ビジネスパーソンの講演
7. 講演 の内容についてグループで討議し、発表する
8. ビジネスパーソンの講演
9. 講演 の内容についてグループで討議し、発表する
10. ビジネスパーソンの講演
11. 講演 の内容についてグループで討議し、発表する
12. ビジネスパーソンの講演
13. 講演 の内容についてグループで討議し、発表する
14. 全体的なまとめ
15. 提出したレポートへのコメントと講師からのフィードバック

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)出席点:50% (2)受講態度:30% (3)レポート点:20%

地域福祉

担当者：大塚 健司

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

(1)内容

少子・高齢社会の進展に伴い、福祉をとりまく状況も急激に変化して来ている。

この講義では、このような状況や、介護保険、社会福祉基礎構造改革、障害者自立支援法など、福祉の体系や、社会保障制度の変遷について考え、さらに、社会福祉法で位置づけられた「地域福祉の推進」について考えます。

また、「地域」と「福祉」がどう係わり合い、地域社会を形成しているのか、「福祉のまちづくり」について考えます。

(2)カリキュラム上の位置づけ

行政系統の専門科目である。福祉諸制度と地域社会がどう関わっているのか基礎的なことを学ぶ。

2.学びの意義と目標

福祉諸制度を学ぶとともに、その谷間にある問題を考える。地域社会が果たす役割は何か、そのための地域福祉推進について考えていきます。

準備学習(予習)

次回の授業に関すること(予め項目を指示)を調べておくこと。

準備学習(復習)

配布した資料を良く読むこと。

授業計画

- 1.少子・高齢社会
- 2.少子・高齢社会
- 3.地域福祉の法制度
- 4.地域福祉の法制度
- 5.福祉諸制度の変遷
- 6.福祉諸制度の変遷
- 7.公的扶助制度
- 8.公的扶助制度
- 9.医療保険制度
- 10.医療保険制度
- 11.老人福祉と介護保険制度
- 12.老人福祉と介護保険制度
- 13.年金制度
- 14.年金制度
- 15.児童福祉
- 16.児童福祉
- 17.障害者福祉
- 18.障害者福祉
- 19.社会福祉基礎構造改革と社会福祉法
- 20.社会福祉基礎構造改革と社会福祉法
- 21.地域福祉の歴史的発展と考え方
- 22.地域福祉の歴史的発展と考え方
- 23.地域福祉の推進主体・機関・団体と地域福祉計画
- 24.地域福祉の推進主体・機関・団体と地域福祉計画
- 25.市町村地域福祉計画と他の福祉計画
- 26.市町村地域福祉計画と他の福祉計画
- 27.市町村福祉計画と他の福祉計画
- 28.市町村福祉計画の具体例
- 29.市町村福祉計画の具体例
- 30.理解度の確認

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)試験:80% (2)授業のまとめ:20%

地誌学概説 A

担当者：秋山 秀一

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

世界の各地ではいろいろな人々がそれぞれに、その土地に根ざした暮らしをしています。この授業では世界の各地、とくにアジア諸国と太平洋の島々における人々の暮らしの様子、自然、風土等を、具体的に取り上げながら、地域の今を学んでいきます。

2.学びの意義と目標

卒業後どのような仕事に就こうと、国際理解を高めることは意義があり、大切なことです。実際に海外でのフィールドワークを通して得た映像、資料、それに、書籍、雑誌、テレビ・ラジオ等のメディアとのかかわりの中から、具体的な話をしていきます。これにより、より理解度を高めることに大きく寄与します。

準備学習(予習)

授業内容に関する復習の小レポート、テキストの次回の授業に関する項目を予習し、関連する情報を集めておくこと。

準備学習(復習)

配布プリント、テキストの中で授業中に解説したところを再読し、各トピックについて次回までに説明できるようにすること。

授業計画

1. 導入
2. 現代社会と交通
3. 地図を読む
4. アジアの中の日本
5. 韓国
6. ベトナム
7. ミャンマー
8. マレーシア
9. 香港・マカオ
10. 中国・台湾
11. タイ
12. ラオス、カンボジア
13. フィジーと太平洋の島々
14. オーストラリア、ニュージーランド
15. まとめ

教科書

秋山 秀一 『フィールドワークのススメ アジア観光・文化の旅』(学文社)

評価方法

- (1)日頃の授業への貢献度:30% (2)出席状況:30%
(3)小レポート、それにまとめとしてのレポート:40%

地誌学概説 B

担当者：秋山 秀一

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

世界の各地ではいろいろな人々がそれぞれに、その土地に根ざした暮らしをしています。この授業では世界の各地、とくにヨーロッパ諸国並びにアメリカ、そして、日本の各地、における人々の暮らしの様子、自然、風土等を、具体的に上げながら、地域の今を学び、街歩きの楽しさも修得していきます。

2.学びの意義と目標

卒業後どのような仕事に就こうと、国際理解を高めることは意義があり、大切なことです。実際に海外でのフィールドワークを通して得た映像、資料、それに、書籍、雑誌、テレビ・ラジオ等のメディアとのかかわりの中から、具体的な話をしていきます。これにより、より理解度を高めることに大きく寄与します。

準備学習(予習)

授業内容に関する復習の小レポート、テキストの次回の授業に関する項目を予習し、関連する情報を集めておくこと。

準備学習(復習)

配布プリント、テキストの中で授業中に解説したところを再読し、各トピックについて次回までに説明できるようにすること。

授業計画

1. 導入
2. メンタルマップ
3. 東京はアフリカだ
4. 国際化の中の日本
5. 日本
6. 日本
7. 日本
8. アメリカ
9. アメリカ
10. ヨーロッパ
11. イギリス
12. ロンドン
13. フランス
14. イタリア
15. まとめ

教科書

秋山秀一 『おとなの街歩き』(新典社)

評価方法

- (1)日頃の授業への貢献度:30% (2)出席状況:30%
(3)小レポート、それにまとめとしてのレポート:40%

地方財政

担当者：谷 達彦

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

教育、福祉、道路、上下水道、ゴミ収集など、住民の生活を支える身近な公的サービスは地方自治体によって提供されている。地方財政は日々の暮らしに密接に関わっているが、財源不足や財政力の地域間格差など多くの問題に直面していることも事実である。また、中央集権的な財政システムを分権的な財政システムへと転換するために地方分権改革が求められている。

本講義では、地方財政についての基礎的な理論と制度、制度運営の実態を学習する。具体的には、国と地方の財政関係、地方自治体の予算、地方歳出、地方収入（地方税、地方交付税、国庫補助負担金、地方債）、地方財政危機、地方自治体の財政収支分析などについて学ぶ。日本の地方財政の現状と課題を理解し、自治を支える地方財政のあり方について考えていく。

2.学びの意義と目標

本講義では、地方財政の基礎的な理論や制度について知り、日本の地方財政が直面している課題や今後のあり方について自分なりに考えられるようになることを目標としている。

地方財政のあり方は住民の暮らしに深く関わっている。誰もが地域社会を支える住民の1人であり、地方自治体の行財政に住民参加が求められている今日において、地方財政の制度やその基礎にある考え方について学ぶことは重要である。

授業計画

1. ガイダンス
2. 地方財政の役割
3. 国と地方の財政関係（1）
4. 国と地方の財政関係（2）
5. 地方自治体の予算
6. 地方支出の構造
7. 地方税の体系
8. 固定資産税
9. 個人住民税
10. その他地方税
11. 地方交付税
12. 国庫補助負担金
13. 地方債
14. 地方公営企業
15. 戦後日本の地方財政
16. 中間まとめ
17. 大都市財政
18. 過疎地域の財政
19. 市町村合併と地方財政
20. 公共投資と地方財政
21. 少子高齢化と地方財政（1）
22. 少子高齢化と地方財政（2）
23. 少子高齢化と地方財政（3）
24. 教育と地方財政
25. 地方財政の危機と債券
26. 自治体財政の分析
27. 地方分権改革（1）
28. 地方分権改革（2）
29. 地方財政の国際比較
30. まとめ

教科書

プリントを配布する

準備学習(予習)

新聞等を読み地方財政に関心を持つこと

準備学習(復習)

配布プリントの重要項目について説明できるようにすること

評価方法

(1)出席及びコメントペーパーの内容:40%:コメントペーパーは毎回記入する
(2)試験:60%

担当者：鈴木 潔

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

本講義では、これまでの地方自治研究の蓄積を利用し、日本の地方自治について(1)制度、(2)機構、(3)政策、(4)管理、(5)住民という視点から説明する。

本講義は、政治学、行政学、公共政策論などの政治学関係科目のほか、憲法および行政法などの法律学系科目を学習するうえで重要なポイントとなる地方自治に関する知識を提供している。

2.学びの意義と目標

自治体は私たちの日常生活から縁遠い存在であると思われがちだが、自治体の提供する行政サービスの良し悪しは人々の暮らしを大きく左右している。この講義は、受講者が地域における様々な問題や地方自治の仕組みを考察できるようになることを目標とする。

準備学習(予習)

受講者は、政治・行政に関するテーマについて、書籍、新聞、ニュースなどを利用して情報を収集し、自分が問題意識をもつテーマについて説明できるようにしておくこと。

準備学習(復習)

毎回の講義で実施する小テストの内容を十分に確認しておくこと。

授業計画

1. ガイダンス
2. 地方自治制度の歴史
3. 地方分権改革
4. 大都市制度・都区制度
5. 市町村合併・広域連携
6. 自治体の政治機構
7. 自治体の行政機構
8. 自治体の国際比較
9. 政策体系と総合計画
10. 行政改革と行政評価
11. 立法法務
12. 執行法務
13. 訴訟法務
14. 都市計画
15. 環境政策
16. 廃棄物行政
17. 産業・地域振興
18. 福祉政策
19. レポート報告会
20. 組織管理
21. 地方財政
22. 財務管理
23. 地方公務員制度
24. 人事管理
25. 行政統制とコンプライアンス
26. 住民と自治体
27. コミュニティの自治
28. 自治基本条例
29. レポート報告会
30. 学期末試験

教科書

鈴木 潔 『行政上の義務履行確保と訴訟法務「強制する法務・争う法務」』(第一法規株式会社)

評価方法

(1)試験:50% (2)レポート:40% (3)平常点:10%:授業貢献度、出席状況

中小企業論

担当者：酒井 俊行

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

わが国では企業数の99.7%が中小企業であり、そうした中小規模の事業所に勤める従業者は全体の76.2%にも及んでいます。これらの比率に見られるように、学生の皆さんは卒業後中小企業に勤務することが多く、また大企業に勤めたとしても色々な局面で中小企業と関係を持たざるをえないということです。したがって想像以上に皆さんにとって、中小企業は身近な存在であるわけです。ところがこのように身近な存在でありながら、中小企業についてどれくらい知っているのでしょうか？

この講義は四部構成になっています。第一部（第2回～4回）では本論に入る前の準備を行います。第二部（第5回～13回）では、教科書として指定する統計書に従って、中小企業の構造と動向を学びます。第三部（第14回～22回）では、中小企業白書に従って、わが国中小企業のトピカルな話題を探ります。第四部（第23回～29回）では、第二部～三部での理解を下に理論的な整理を行います。

授業計画だけ見ると何かとても大変な気がするかもしれませんが、基本的なスタンスとして分かり易さを心がけるつもりですので、安心して受講して下さい。

2.学びの意義と目標

上述したように、わが国における企業数の99.7%は中小企業です。このように企業の数だけ見ても、中小企業は身近な存在であるはずなのに、意外に「中小企業WHAT?」というのが実態だと思います。

この授業を受ける第一の意義は、そうした「WHAT?」をなくすることです。中小企業の在り様を正確に理解し、そのわが国における地位・貢献度を理解してもらうことによって、少しでも「WHAT?」をなくすることが私の期待するところです。

第二に、わが国従業者の76.2%が中小事業所に勤めているということです。ということは、皆さんもそうした中小企業に勤めるチャンスが大きいということです。就活に際して業界研究は必須ですが、業界研究に止まらない中小企業研究も極めて大事になるわけです。

以上ここでは2つに限定してこの講義の意義を挙げましたが、この講義はわが国経済の真実を明らかにするためにも重要ということが出来ます。

準備学習(予習)

特に必要ありませんが、出来れば経済学の基本的な知識を有することが望ましいでしょう。

準備学習(復習)

毎回30分～1時間程度の復習により、知識ベースを確実なものにして下さい。理解度を確認するために抜き打ちで確認テストをすることも考えています。

授業計画

1. オリエンテーション
2. 中小企業論をなぜ学ぶのか(1)?
3. 中小企業論をなぜ学ぶのか(2)?
4. 中小企業の定義を知ろう
5. 統計で中小企業の何が分かるか?
6. 統計から理解中小企業を理解しよう(1)
7. 統計から理解中小企業を理解しよう(2)
8. 統計から理解中小企業を理解しよう(3)
9. 統計から理解中小企業を理解しよう(4)
10. 統計から理解中小企業を理解しよう(5)
11. 統計から理解中小企業を理解しよう(6)
12. 統計から理解中小企業を理解しよう(7)
13. 統計から理解中小企業を理解しよう(8)
14. 中小企業白書とは?
15. 中小企業白書を読み解こう(1)
16. 中小企業白書を読み解こう(2)
17. 中小企業白書を読み解こう(3)
18. 中小企業白書を読み解こう(4)
19. 中小企業白書を読み解こう(5)
20. 中小企業白書を読み解こう(6)
21. 中小企業白書を読み解こう(7)
22. 中小企業白書を読み解こう(8)
23. 中小企業問題の歴史～二重構造問題を中心に
24. 中小企業と大企業及び下請問題
25. 中小企業と地域経済
26. グローバル経済下の中小企業
27. 中小企業の金融問題
28. 中小企業政策の方向性
29. 時代の転換と中小企業
30. まとめ

教科書

商工総合研究所 『図説日本の中小企業2013』(一般財団法人商工総合研究所)

評価方法

- (1)試験とレポート:60%:2～3回のレポート提出と期末試験で評価
- (2)授業への貢献:40%:出席状況等授業への貢献度を評価

哲学概論

担当者：大賀 祐樹

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

狭い意味での「哲学」とは「真理」の探求や人間が世界を認識する在り方、言語や論理の厳密な正しさの追求等を意味するが、本講義ではそれだけに限らず、隣接する政治哲学、倫理学、法哲学等に関連するテーマも含め、広く概論する。特に現在私たちが生きている自由で民主的で権利が平等に保障された社会の在り方が何故望ましいかというテーマを中心に据える。

カリキュラム上の位置づけ

この講義科目は、中学校社会科教諭および高等学校地理・歴史教諭免許取得単位認定の科目である。すなわち、この講義は、教諭となることを目指す者のための講義である

2.学びの意義と目標

哲学において大切なことは答えを出すことよりも、問いを立てることである。様々な哲学者がどのような試行錯誤をして問いを立てたのかという道筋を追うことによって、日常社会の生活においても浮上する問題に対して自分なりの問いを立てる力を養うことを目標とする。

準備学習(予習)

特別な予習は必須としないが、講義中に聞いた話題で自分が特に興味を持った点については、配布する資料や授業中に紹介する参考書等で詳しく調べることが望ましい。

準備学習(復習)

毎回プリントを配布する予定なので、興味を持った話題があればその点を掘り下げて、自分なりの問題意識やそれに対する答えを考えておく。

授業計画

1. 英米の哲学とヨーロッパの現代思想
2. 愛と真理について(プラトン)
3. 正義ということばの意味(プラトン、アリストテレス)
4. 自由についてI(カント)
5. 自由についてII(ホブズ、ロック)
6. 自由についてIII(ミル、バーリン)
7. 功利主義(ベンサム、ミル)
8. 公正としての正義(ロールズ)
9. リバタリアニズム(ノージック)
10. コミュニタリアニズム(サンデル、テイラー)
11. ポストモダンと社会(フーコー、デリダ)
12. 自由な社会の根拠(ロールズ)
13. プラグマティズム(ローティ)
14. 権利について
15. まとめ

教科書

プリントを配布する

参考書

『リチャード・ローティ 1931-2007

リベラル・アイロニストの思想』大賀祐樹、藤原書店

『集中講義！アメリカ現代思想』仲正昌樹、NHKブックス

評価方法

(1)試験:60%:期末に実施 (2)レポート:30%:中間に実施 (3)出席:10%

担当者：松原 望

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

統計学は情報の学問です。私たちの日常生活を通して学ぶことでより面白い知的世界が広がります。今の社会を生き抜くために必要な情報の基礎知識を学んで、情報社会で豊かで主体的な人生を築きましょう。初心者歓迎。数学知識不要。

授業計画

1. 少子・高齢化の統計（見方・考え方）
2. なぜ情報が必要か
3. 環境・資源の統計（見方・考え方）
4. 日常生活と情報
5. 経済統計（見方・考え方）
6. 情報産業
7. 地域の統計（見方・考え方）
8. 足で情報を取る
9. 金融・経営の統計（見方・考え方）
10. 情報化の進展
11. 広告・マーケティングの統計（見方・考え方）
12. 情報モラル
13. 教育・心理の統計（見方・考え方）
14. 情報技術（教育）
15. 社会調査の統計（見方・考え方）
16. 情報技術（社会調査）
17. 医療の統計（見方・考え方）
18. 情報技術（医療）
19. 福祉・介護の統計（見方・考え方）
20. 情報技術（福祉・介護）
21. 体育・スポーツの統計（見方・考え方）
22. 情報技術（エンタテインメント）
23. 統計データの扱い方
24. トピック：情報技術者の業務
25. 平均と分散（見方・考え方）
26. トピック：情報技術者の責任
27. 相関関係と相関係数（見方・考え方）
28. トピック：情報産業と法律
29. 回帰方程式と予測（見方・考え方）
30. トピック：情報技術者と人生

2.学びの意義と目標

統計学を通じてコンピュータ力を高め、情報社会で生き活躍する能力を育てる。就職用お買い得科目。

準備学習(予習)

テキストを事前に10分だけ見ておいてください。「眺める」だけでも有効。

教科書

松原望 『はじめよう！統計学超入門』（技術評論社）

準備学習(復習)

レポートおよび復習によって、授業内容を深く理解する。自宅でも可能です。

評価方法

- (1)出席:25%: 8割必要 (2)レポート:25%:簡単なもの数回
- (3)試験:25%:エクセル、ホームページを利用
- (4)熱意:25%:履修したので熱意はあると判断

東洋史概説 A

担当者：赤坂 恒明

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

近代以前のアジア各地域の歴史を取り上げる．特に東アジアについては，国際秩序としての「冊封体制」について具体的に詳論する．また，東洋史をも含む歴史全般に興味を持つ受講者に，自主的にさらに関心を深めていくことができるように，歴史研究の基礎ならびに方法論についても簡単に紹介する．

この授業のカリキュラム上の位置づけは，東洋史に関する入門的な位置づけであり，基礎的な講義である．日本史を学ぼうとする学生にも適している．

2.学びの意義と目標

アジアの多様性を理解すると同時に，歴史事象を正確に把握できるようになる．そして，主観的・独断的な判断をすることなく，それらの歴史的意味を解釈する歴史的思考法を持つことができるようになること．

準備学習(予習)

講義中に指示した内容を、資料・参考文献等によって確認する．漢字を読めない留学生には履修が困難である．世界地図帳と世界史資料集（高校で用いたものでよい）を持参すること．

準備学習(復習)

復習では、授業中に指示された地理や年代等を確認すること．各自の自主的な復習を期待する．

授業計画

1. 序
2. アジアとヨーロッパ
3. 「東洋」という概念
4. 歴史編纂をめぐる諸問題
5. 中華思想
6. 冊封体制論
7. 志賀島出土の金印をめぐる諸問題
8. 倭の五王
9. 遣隋使(1) 隋の煬帝は激怒したのか？
10. 遣隋使(2) 国書紛失事件について
11. 古朝鮮
12. 高句麗
13. 渤海
14. 古代チベット
15. まとめ

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)出席点:10% (2)平常点:20% (3)試験（小テストを含む）:70%

東洋史概説 B

担当者：赤坂 恒明

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

東アジアの一地域としての日本が他の諸地域といかなる関係にあったか、という問題を中心に、主に近現代の歴史のなかから関連するいくつかの事例をとりあげ、個別に論じる。「日本史」の立場からはしばしば看過される問題を積極的に取り上げ、近代的な国民歴史学によって体系化された「一國史」の枠組についても批判的に分析する。

この授業のカリキュラム上の位置づけは、入門的な位置づけの基礎的な講義であり、日本史を学ぼうとする学生にも適している。

2.学びの意義と目標

「日本史」の枠にとらわれることなく、日本列島の歴史を、より広い視野から見るができるようになること。近現代の東アジアにおいて日本が関わった具体的な歴史事象を正確に把握するのみならず、体系化された歴史の枠組がいかに我々の同時代的な状況と密接な関係にあるかについても、理解できるようになること。

準備学習(予習)

講義中に指示した内容を、資料・参考文献等によって確認する。
漢字を読めない留学生には履修が困難である。世界地図帳と世界史資料集(高校で用いたものでよい)を持参すること。

準備学習(復習)

復習では、授業中に指示された地理や年代等を確認すること。各自の自主的な復習を期待する。

授業計画

1. 序
2. 「オホーツク文化」
3. 「もうひとつの蒙古襲来」
4. 山丹交易
5. 千島・樺太の先住諸民族と近代日本
6. 琉球王国
7. 「琉球処分」をめぐる日清関係
8. 韓国併合
9. 日本による朝鮮半島の植民地支配(1)第一期
10. 日本による朝鮮半島の植民地支配(2)第二期と第三期
11. 「戦争抛棄二関スル条約」と満洲事変
12. 日本の進出と、内蒙古東南部地域におけるモンゴル人
13. 熱河作戦
14. 「支那事変」:盧溝橋事件から「南京大虐殺」へ
15. まとめ

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)出席点:10% (2)平常点:20% (3)試験(小テストを含む):70%

日本経済論

担当者：大森 達也

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

本講義では、1990年代の日本経済は、まさに過去の成功の故に、制度的に疲弊し、矛盾を露呈するにいたったと理解し、サブプライム問題以降、混迷する世界経済において日本経済は今後どのような方向に進んでいくか、あるいは、どのように変化するか、戦後の歴史等を踏まえて考えていくこととする。

2.学びの意義と目標

本講義では、戦後の日本経済の成立、その発展の軌跡、経済政策あるいは体制上の特徴などについての講義を通じ、日本経済の現状と将来的な展望を得ることを目的とする。

準備学習(予習)

内容的に、盛りだくさんなので、事前に文献等を読んでおくこと。

準備学習(復習)

試験は、講義内容をもとに行われるので、ノートをしっかりと作っておくこと。

授業計画

- 1.はじめに
- 2.経済体制とは
- 3.古典的資本主義と古典的社会主義
- 4.現代混合資本主義
- 5.経済体制としての日本型資本主義（歴史的背景）
- 6.経済体制としての日本型資本主義（目的、課題）
- 7.経済体制としての日本型資本主義（モデルとして）
- 8.戦後日本経済の発展過程（戦後復興期）
- 9.戦後日本経済の発展過程（高度経済成長期）
- 10.戦後日本経済の発展過程（低経済成長期）
- 11.戦後日本経済の発展過程（バブル経済へ-1）
- 12.戦後日本経済の発展過程（バブル経済へ-2）
- 13.戦後日本経済の発展過程（まとめ）
- 14.前半講義のまとめ
- 15.中間試験14～17
- 16.戦後日本経済の発展過程のおさらい
- 17.戦後日本経済の成長の仕組み（設備投資競争について）
- 18.戦後日本経済の成長の仕組み（その他の企業競争）
- 19.産業構造の変化
- 20.産業構造の変化（課題）
- 21.日本の金融・財政政策（経済政策とは）
- 22.日本の金融・財政政策（政策手段に見る日本の特徴）
- 23.日本の金融・財政政策（課題）
- 24.日本の貿易構造（貿易の意味）
- 25.日本の貿易構造（貿易摩擦から経済摩擦へ）
- 26.日本の貿易構造（課題）
- 27.日本経済:21世紀における課題
- 28.日本経済:21世紀における課題
- 29.後半講義まとめ
- 30.期末試験16～29

教科書

橋本寿朗、他『現代日本経済論（第3版）』（有斐閣アルマ）

評価方法

- (1)中間試験:35% (2)期末試験:35%
(3)ブックレポート:30%:1,200文字程度
3回×10%

日本史概説 A

担当者：東島 誠

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1. 内容

「日本」という国はいつ誕生したのか。おそらく諸君は「縄文時代の日本」や「日本における稲作の始まり」といった表現に、何の違和感もなく慣れ親しんできたことであろう。だが、縄文時代や弥生時代には、まだ「日本」という名の国家は存在しなかった。まずはそのあたりから、諸君の常識、既成の歴史像に、心地よい揺さぶりをかけていきたい。

なお、概説 A では中世前期までの歴史を扱う。概説 A・B に挟まれた中世後期の歴史については、2年次以降、「日本史の研究（中世史特論）」で深く掘り下げて学ぶことができる。

2. 学びの意義と目標

結論は一つではない。この講義では時に、対立する学説を諸君に投げかけることがある。どちらがより説得的か？それを判断するのは君たち自身だ。大学の歴史の講義とはじつは、論理的思考力を鍛錬する場なのである。

なお、当科目は、日本文化学科の選択必修科目であると同時に、政治経済学部社会科学教職科目でもある。限られた時間数ではあるが、高校までの知識重視の歴史とはひと味違う、「考える歴史」を体験することで、将来教壇に立つ諸君の歴史像が、興行き豊かなものとなることを願う。

準備学習(予習)

毎回の授業で扱う基礎用語については、前週のプリントで指示する。事前に調べて予備知識を得たうえで講義に出席すること。

準備学習(復習)

A 4 ファイルを用意し、配布プリントを整理した上で、毎回持参すること。各回冒頭に、質問への応答、学生カードの紹介等の復習を行なうほか、折に触れて以前のプリントを参照することがある。

授業計画

1. ガイダンス: 「日本」? の歴史
2. 邪馬台国連合と 王の身体
3. 継体王朝はどう位置づけられたか
4. 推古朝と天武・持統朝 古代国家を考える
5. 「託宣」と「歌謡」 奈良時代末期に歌われた皇統革命
6. 「唐風」志向と日本の政治原理
7. 浮浪人とはなにか
8. (峠で一服) 心の闇に映じたもの 頼光物『土蜘蛛草紙』を読み解く
9. 院政期社会をどうとらえるか
10. 頼朝と義仲 その分岐点はなにか
11. 義経の結婚
12. 「泰時の徳政」と人身売買法 寛喜の飢饉と鎌倉幕府
13. 中世遊女の世界 後朝の別れの物語
14. 蒙古襲来と得宗専制
15. 悪党の14世紀 中世後期世界への展望

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1) 学期末試験: 55% (2) 授業内での提出カード: 45%: 提出カードの優秀者には、別途加点を行なう。

日本史概説 B

担当者：東島 誠

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1. 内容

概説 B では、近世以降の歴史を扱うが、わずか十数回では、もちろんすべてをカバーすることはできないし、カバーしようとする高校の授業と大差ない、駆け足のものとなりかねない。いきおいテーマは選択を余儀なくされるが、ここでは特に、時代像がイメージでき、「考える歴史」が体験できるテーマを、精選して提供していきたい。

なお、概説 A・B に挟まれた中世後期の歴史については、2年次以降、「日本史の研究（中世史特論）」で深く掘り下げて学ぶことができる。

2. 学びの意義と目標

結論は一つではない この講義では時に、対立する学説を諸君に投げかけることがある。どちらがより説得的か？それを判断するのは君たち自身だ。大学の歴史の講義とはじつは、論理的思考力を鍛錬する場なのである。

なお、当科目は、日本文化学科の選択必修科目であると同時に、政治経済学部 of 社会科教職科目でもある。限られた時間数ではあるが、高校までの知識重視の歴史とはひと味違う、「考える歴史」を体験することで、将来教壇に立つ諸君の歴史像が、興行き豊かなものとなることを願う。

準備学習(予習)

毎回の授業で扱う基礎用語については、前週のプリントで指示する。事前に調べて予備知識を得たうえで講義に出席すること。

準備学習(復習)

A 4 ファイルを用意し、配布プリントを整理した上で、毎回持参すること。各回冒頭に、質問への応答、学生カードの紹介等の復習を行なうほか、折に触れて以前のプリントを参照することがある。

授業計画

1. ガイダンス： 中世後期世界から近世・近代へ
2. 中世世界を破壊したのは、信長・秀吉のいずれか？
3. 家康の神格化と江戸時代の天皇
4. 赤穂事件から見た武士の 近世
5. 災害復興から見た幕政と藩政 明暦江戸大火と宝永富士山噴火
6. 田沼意次か松平定信か
7. 国芳げに良し 化政文化から天保改革期の江戸社会
8. 鯨絵は、なぜいかにして生まれたか？
9. 幕末の情報世界 風説留からみた新選組像
10. 「新聞錦絵」と欲望する近代
11. 自由民権運動と土佐出身者たち
12. 日清・日露戦争と鉄道の 近代
13. 関東大震災の影と光と
14. 治安維持法をめぐる人びと
15. 総力戦から敗戦へ 社会変容のなかの思想的強度

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)学期末試験:55% (2)授業内での提出カード:45%:提出カードの優秀者には、別途加点を行なう。

日本政治史

担当者：吉田 博司

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

明治、大正、昭和戦前期の政治史をふりかえります。明治維新はなぜ起きたのか。明治憲法はどのような背景で成立したのか。日本の議会政治はどのように発展し、挫折したのか。こうした内容を近代日本の政党政治発展というテーマを根底にすえてみていきます。人物論もおり込み、生きた政治史理解をめざします。政治学系の専門科目ですので、かなり詳細な歴史探求となります。

2.学びの意義と目標

現代政治の理解は歴史的考察をふまえることで深められるでしょう。歴史は現代なのです。

準備学習(予習)

講義ポイントを配布するので予習しておく。

準備学習(復習)

5回の講義後、小テストを含めた復習授業をしますので5回分の講義ノートも中心に復習しておく。

授業計画

1. 明治維新と公議輿論
2. 同
3. 同
4. 同
5. 同
6. 同
7. 同
8. 明治憲法のできるまで
9. 同
10. 同
11. 明治憲法の特徴
12. 同
13. 初期議会と超然主義
14. 同
15. 同
16. 同
17. 政友会の成立
18. 桂園時代
19. 同
20. 大正の政変
21. 政党政治化状況
22. 同
23. 同
24. 二大政党時代
25. 同
26. 同
27. 昭和維新
28. 同
29. 同
30. 同

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)平常点:60%: (2)小テスト:40%
平常点が重視されます。

人間関係論

担当者：中嶋 励子

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

私達は日頃、さまざまな他者と関わりながら、そして、社会の動きに関わる行動をとりながら生活している。このような他者との関係や社会の動きに関わる行動について、実証的データに基づく社会心理分野の研究事例を紹介しながら、授業を進めていく。

2.学びの意義と目標

・対人関係、コミュニケーション、ストレスとストレス対処、リスク認知、災害心理学などについて、社会心理学の基礎知識を習得する。
・先行研究事例で用いられている主な研究方法や測定尺度と分析について、基本的な部分を理解する。

準備学習(予習)

翌週と連続する内容の授業に関しては、自主的に予習しておくこと。

準備学習(復習)

その週の授業内容のポイントは、授業内で提出を求めるコメントのテーマとして提示するので、その内容を復習しておくこと。また、中間・期末課題レポートには、授業内容を復習しながら取り組むこと。

授業計画

1. 授業ガイダンス： 授業の進め方など講義ガイダンス
2. 人は他者に会ったときどのように推論するか
3. 人は他者をどのようにタイプ分けするか
4. ステレオタイプの問題点とその低減
5. 魅力ある人、好感の持てる人はどのような人か
6. 对人的影響
7. コミュニケーションとは何か・言語によるコミュニケーション
8. 言語によるコミュニケーションの事例
9. 非言語によるコミュニケーション
10. 非言語によるコミュニケーションの事例
11. 説得の方法
12. コミュニケーションと行動
13. うわさが伝わる背景
14. インターネット・コミュニケーションとうわさの事例
15. パニックとは：集団パニックが起きやすい状況
16. パニックの研究事例
17. リスク認知:人はどのように危険を認知し、行動するのか
18. リスク認知:リスクのものさしと人々の認知
19. 災害心理学： 災害前の心理と行動
20. 災害心理学： 災害後の心理と行動
21. 災害とストレス： 災害直後、時間経過後のストレス
22. 大災害と人々の社会心理
23. ストレスとストレス・コーピング
24. ストレス・コーピングの具体例
25. 消費者の心理と行動
26. 消費行動に影響を与える要因
27. 社会心理学の主な研究方法:実験法、観察法
28. 社会心理学の主な研究方法:質問紙法、尺度について
29. 社会心理学研究における主な分析例
30. 授業のまとめ

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)平常点:40%:毎回の授業内で提出を求めるコメントの内容
(2)課題レポート:60%:中間レポート及び期末レポート
課題レポートの内容と提出方法、提出期限は授業内で提示することを厳守すること。

ビジネス実務

担当者：森 久子

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

新社会人に求められる知識と技能を学び、就職後、直ぐに役立つように適宜、演習を行います。

2.学びの意義と目標

理論と演習を通して学校から社会へと、スムーズに移行する準備となります。そのために、基本的業務ができることを目標とします。

準備学習(予習)

新聞に目を通し、社会や企業の動向を知ること。授業計画を参照し、テキスト内の該当箇所の読めない漢字や意味の解らない言葉は、事前に調べておくこと。

準備学習(復習)

授業内で行う演習をレポートとして仕上げ、提出します。

授業計画

- 1.オリエンテーション
- 2.社会から求められている社会人基礎力
- 3.キャリア理論の活かし方
- 4.組織の形態と自分のポジション
- 5.ビジネスマナー
- 6.身だしなみ
- 7.敬語の種類
- 8.敬語の使い方
- 9.社内の人と、社外の人との言葉づかいの相違
- 10.来客対応
- 11.電話の言葉づかい
- 12.ビジネス文書の取り扱い
- 13.レコード・マネジメント
- 14.前半の復習とまとめ
- 15.スケジュール管理
- 16.会議・会合、出張
- 17.慶弔の知識
- 18.話し言葉と書き言葉の相違と正しい文章表現
- 19.ビジネス文書の種類と特徴
- 20.ビジネス文書作成のポイントと表記の注意点
- 21.社外向けビジネス文書の書式の理解
- 22.社外向けビジネス文書の作成
- 23.議事録と社内向けビジネス文書
- 24.電子メールの特徴・機能と使用時の注意点
- 25.電子メールの作成
- 26.グローバル化とプロトコール
- 27.プレゼンテーションの基礎知識
- 28.労働基準法と社会保険の基礎知識
- 29.社会人として知っておきたい経営と会計の基礎知識
- 30.まとめ

教科書

小泉佳子監修 『新バイリンガルオフィス実務』(日本秘書協会)

評価方法

(1)試験:50% (2)レポート:20% (3)出席:30%

秘書学概論

担当者：森 久子

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

秘書として必要な知識を学びながら、上司のためだけでなく、組織の一員として自分がどのように行動すればよいか学びます。概論ですが、具体的な業務と結びつけるために、適宜、演習も行い、特に11月の秘書検定試験までは、検定対策となるような事例を多く取り上げます。

2.学びの意義と目標

秘書の仕事を学ぶことで、組織内外の人間関係を理解し、直ぐに実務に役立つ知識や技能を身につけ、学校から社会へとスムーズに移行する手助けとなる授業です。従って、秘書業務の基礎知識を身につけるだけでなく、社会人として行動できるようになることを目標とします。

準備学習(予習)

授業計画を参照し、テキストの該当箇所の解らない漢字や意味を調べてください。

準備学習(復習)

知識の確認のために、主に演習問題を宿題とします。

授業計画

- 1.オリエンテーション
- 2.秘書とは(秘書の歴史・秘書の専門分化)
- 3.秘書と急変する企業環境
- 4.秘書と会社組織1(会社とは・会社の種類・組織と役割・重要な会議)
- 5.秘書と会社組織2(秘書の業務形態)
- 6.秘書の職務内容
- 7.秘書の補佐機能
- 8.社会人基礎力
- 9.ビジネス・マナー
- 10.慶弔の知識
- 11.秘書に求められる能力
- 12.秘書に求められる資質
- 13.秘書の資質を高める努力
- 14.前半の復習とまとめ
- 15.秘書と人間関係1(コミュニケーションの基本概念)
- 16.秘書と人間関係2(バーバル・コミュニケーションとノンバーバル・コミュニケーション)
- 17.言葉づかい(敬語)
- 18.秘書と人間関係3(秘書と上司・周囲の人との人間関係)
- 19.秘書と情報管理
- 20.文書業務
- 21.レコード・マネジメント
- 22.秘書とキャリア1(キャリアとは・主要なキャリア理論)
- 23.秘書とキャリア2(秘書のキャリアパス・秘書のキャリアデザイン)
- 24.これからの企業
- 25.秘書と異文化理解
- 26.プロトコールとホスピタリティ
- 27.これからの秘書
- 28.知っておきたい労働基準法の基礎知識
- 29.知っておきたい社会保険の基礎知識・財務会計の基礎知識
- 30.まとめ

教科書

高橋眞知子・北垣日出子監修 『秘書概論』(樹村房)

評価方法

(1)試験:50% (2)レポート:20% (3)出席:30%

ファイナンス

担当者：小林 一之

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

ファイナンスは企業や官公庁などにとって資金計画を立て、必要な投資を行い、実行するという機能を有効に果たす為のものです。本科目では企業経営を軸としてその経済的価値をどう高めていくかを目的として、投資を効果的に行う手法、その結果どれだけの価値が創造されたのかを評価し、その結果をフィードバックする事等を学びます。その基礎として株価の分析、会計のしくみ、経営分析の手法、企業運営のポイントなどを伝えます。

2.学びの意義と目標

企業で財務担当役員や財務管理担当者は勿論、CEOと呼ばれる最高経営者、にとって必須の領域であり、一般の経営管理者・マネジメントスタッフにとっても大切な知識となります。この基礎を理解し将来のマネジメントに生かす事。

準備学習(予習)

- ・ 授業の中で参考書を紹介します。出来る限り目を通す事
- ・ テキストとしてのプリント以外に参考資料を配布します。次の授業までに読んでおくこと。

準備学習(復習)

学習内容は多岐にわたり、それぞれが関連しあっています。予習は不要ですが、講義ごとに配布したプリント等を良く読み返し、次の授業に備え理解しておくこと。

授業計画

1. 財務管理の目的と意義
2. 金銭の時間的価値
3. 演習 1
4. 演習 2
5. 会計の仕組み
6. 貸借対照表、損益計算書のしくみ
7. 演習 1
8. 演習 2
9. キャッシュフロー
10. 企業価値
11. 株価の変動とリスク
12. 投資や資金調達の伴うリスク
13. 資本コスト(1)
14. 資本コスト(2)
15. ポートフォリオ理論(1)
16. ポートフォリオ理論(2)
17. 企業評価
18. 資金調達、配当、財務管理
19. 経営管理プロセス
20. 予算管理(1)
21. 予算管理(2)
22. 損益分岐点分析
23. 原価計算
24. 経営分析(1)
25. 経営分析(2)
26. 特殊原価計算
27. 投資評価(1)
28. 投資評価(2)
29. 意思決定の方法
30. 補足、まとめ

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)出席点:20% (2)理解力:80%:それぞれの項目の基礎概念など

ベンチャービジネス論

担当者：関水 信和

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

当科目はベンチャー企業の現状と問題点やあり方などを学ぶものです。ベンチャー企業と取引をしたり、さらに起業したりする時に役に立ちます。またベンチャー企業経営の勉強を通して、企業と経営の本質について、理解を深められるような授業を行うので、ベンチャー企業と関わりを持たない人にも有意義なはずです。

尚、専門科目ではありますが、企業経営における財務ないし法務などとの関係を解説するので、会計や法律などを勉強する意義などが理解できて、それらの科目を勉強するモチベーションが増すはずです。よって財務や法律をまだ勉強していない人にも受講をお勧めします。

2.学びの意義と目標

企業経営の意義・あり方とリスクをベンチャー企業の経営を通して理解することです。就職先を選ぶ時にも役に立つはずです。

準備学習(予習)

授業の中で、次回のテーマを説明するので、基礎的事項を勉強し、問題意識を持って受講するようにしてください。

準備学習(復習)

授業で説明した内容の具体的な事例を文献ないしインターネットなどで調べて、確認するようにしてください。そして配布するコメント票などに記入するように心掛けてください。

授業計画

- 1.履修ガイダンス、ベンチャービジネスを勉強する意義など
- 2.企業とは、ベンチャー企業とは
- 3.企業経営と財務管理・法務管理などとの関係
- 4.日本のベンチャー企業の現状
- 5.産学連携とベンチャー企業
- 6.産学連携の日・米・欧比較
- 7.産学連携と知的財産
- 8.ベンチャー企業の特許戦略 1
- 9.ベンチャー企業の特許戦略 2
- 10.ベンチャー企業の資金計画と資本政策 1
- 11.ベンチャー企業の資金計画と資本政策 2
- 12.ベンチャー企業の目標と株式上場
- 13.事例研究
- 14.起業のリスクと意義
- 15.まとめ、理解度の確認

教科書

プリントを配布する

評価方法

- (1)出席:20% (2)平常点(課題など):30%
(3)期末試験(配布資料・ノート持ち込み可):50%

法学

担当者：伊藤 泰

開講期：春学期 必修・選択：必修科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

法律学の基礎的な知識を習得することを目的として、おもに憲法、刑法、および民法に関する講義を行う。

2.学びの意義と目標

市民生活を有意義なものとするべく、法学の一般知識を習得し、法的な思考を身につけることが目標。

準備学習(予習)

あらかじめ教科書の内容をざっとでいいので読んでくると、理解が深まります。

準備学習(復習)

関連書籍を読む。

授業計画

- 1.法とは何か
- 2.法と道徳
- 3.法の目的
- 4.権利と義務
- 5.法と裁判
- 6.裁判制度
- 7.訴訟手続上の諸原則
- 8.法源
- 9.制定法と慣習法
- 10.事実認定と法の解釈
- 11.法の解釈の方法
- 12.公法と私法
- 13.実定法の体系
- 14.国家と憲法
- 15.日本国憲法の基本原理(1)
- 16.日本国憲法の基本原理(2)
- 17.犯罪と刑法
- 18.刑法の機能
- 19.犯罪の成立要件(1)
- 20.犯罪の成立要件(2)
- 21.刑事手続(1)
- 22.刑事手続(2)
- 23.家族法
- 24.婚姻と離婚
- 25.親子
- 26.相続
- 27.財産法
- 28.取引の主体
- 29.取引の客体
- 30.契約

教科書

伊藤 正己, 加藤 一郎 『現代法学入門(有斐閣双書)』(有斐閣)

評価方法

(1)試験:80% (2)受講態度:20%

法学

担当者：齋藤 美沙

開講期：秋学期 必修・選択：必修科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

本講義では、様々な法規範の中から、おもに憲法、民法及び刑法を扱います。
身近な問題を手がかりに、法あるいは法律の基本的理論や知識を確認していきます。

2.学びの意義と目標

社会では、法的視点が必要とされる場面が多くあります。
本講義では、基本的な法的思考・知識を身につけることを目標とします。

準備学習(予習)

前週に指示します。

準備学習(復習)

配布プリントを再読して下さい。必要に応じて参考文献を紹介します。

授業計画

1. ガイダンス
2. 法を学ぶことについて
3. 法とは何か
4. 法の分類
5. 憲法（国民主権）
6. 憲法（平和主義）
7. 憲法（基本的人権の原理）
8. 憲法（平等原則）
9. 憲法（精神的自由）
10. 憲法（政教分離）
11. 憲法（経済的自由・人身の自由）
12. 憲法（生存権・労働基本権）
13. 憲法（国会・内閣・裁判所）
14. 憲法（違憲審査制）
15. 比較法（諸外国の法）
16. 民法（総則）
17. 民法（総則）
18. 民法（物権）
19. 民法（債権）
20. 民法（親族）（婚姻・親子・親権）
21. 民法（相続）（相続人・遺言）
22. 民事訴訟，裁判によらない紛争解決
23. 刑法（総則）
24. 刑法（総則）
25. 刑法（罪）
26. 刑法（死刑制度，少年法）
27. 刑事訴訟，裁判員制度
28. 法と社会のかかわり
29. 法・道徳・正義
30. まとめ

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)試験:70% (2)平常点:30%
試験の成績をもとに、出席やリアクションペーパー等を考慮し、総合的に評価します。

法学

担当者：渡辺 英人

開講期：春学期 必修・選択：必修科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

「法を守る精神・法令遵守と責任」
「法学」では、みなさんが市民社会に参加するために必要な「ルールと手続き」について学びます。法は人と人が社会の中でいかに上手く生活していくか、という目的のために存在します。いまから法の意味と目的をよく理解し、責任ある個人、良き市民として、社会に参加してください。将来、どのような職業に就いても、この授業で学んだ内容が、必ず役に立ちます。講義内容の中心は「法の概念」「市民社会の法」「消費者と法」「知的財産権」などです。

2.学びの意義と目標

法を学ぶことは「生きる」ために必要な知識と心構えそのものです。市民社会に生きる一人として、しっかりと学びましょう。

準備学習(予習)

受講の準備として、前週までに講義で使う資料の配布と参考文献の指示を行います。あらかじめ資料や参考文献等をよく読んで、予習、復習をそれぞれ2時間程度行ってください。

準備学習(復習)

受講の準備として、前週までに講義で使う資料の配布と参考文献の指示を行います。あらかじめ資料や参考文献等をよく読んで、予習、復習をそれぞれ2時間程度行ってください。

授業計画

- 1.法を守る精神: 社会における信頼関係
- 2.法を守る精神: 社会(コミュニティ)の形成
- 3.法と道徳
- 4.法の概念
- 5.法の存在形式(法源)
- 6.法の種類
- 7.法の効力 その範囲と限界
- 8.「自然法論」と「法実証主義」
- 9.法と道徳(2)
- 10.自己決定権
- 11.法がめざすもの(法の目的)
- 12.罪刑法定主義とデュー・プロセス
- 13.法の目的(2)
- 14.適法性と違法性
- 15.「犯罪」とは何か?
- 16.「犯罪」とは何か?(2)
- 17.モラルの低下した社会に生きる
- 18.法の目的(3)
- 19.「公」と「私」
- 20.「責任」とは何か?
- 21.「権利」とは何か?
- 22.「正義」とは何か?
- 23.「市民社会」に生きる
- 24.「法」を守る精神
- 25.諸外国の法
- 26.諸外国の法(2)
- 27.市民社会の法
- 28.消費者と法
- 29.知的財産権と法(1)
- 30.知的財産権と法(2)

教科書

西田 典之 『ポケット六法 平成25年版』(有斐閣)

評価方法

(1)授業参加:40% (2)課題作成:30% (3)試験:30%

法政情報論

担当者：渡辺 英人

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

「法政情報論」高等学校普通教科「情報」教員免許取得を目的とする学生の必修科目である。現代社会におけるさまざまな「活動」にとり「情報」はもっとも重要な要素であると考えられている。この授業では「法学」「政治学」分野におけるさまざまな「情報」問題について解説し、理解してもらう。授業は毎回マルチメディア教室で行う。受講者全員が一斉に授業を開始し、一斉に終了する。けっして遅刻、欠席しないこと。

2.学びの意義と目標

法情報、政治情報の発見と分析を行う授業です。この授業で学んだことは、将来、資格試験や就職試験にも必ず役立ちます。予習、復習ともに積極的に取り組んでください。

準備学習(予習)

授業内容に沿った資料を前週までに提供する。資料の熟読など、予習を授業までに行っておくこと。

準備学習(復習)

授業で使用した資料と、授業中に記述したノートをもとにして、清書ノートを作成すること。

授業計画

1. 現代社会における法情報、政治情報(1)
2. 現代社会における法情報、政治情報(2)
3. 情報と法(国内編)(1)
4. 情報と法(国内編)(2)
5. 情報と法(海外編)(1)
6. 情報と法(海外編)(2)
7. 情報化社会と国際法(1)
8. 情報化社会と国際法(2)
9. 情報化社会における犯罪(国内編)(1)
10. 情報化社会における犯罪(国内編)(2)
11. 情報化社会における犯罪(海外編)(1)
12. 情報化社会における犯罪(海外編)(2)
13. 情報化社会とマスメディア(1)
14. 情報化社会とマスメディア(2)
15. 情報と政治行政(1)
16. 情報と政治行政(2)
17. 情報と政治行動(1)
18. 情報と政治行動(2)
19. 情報化社会と個人情報(1)
20. 情報化社会と個人情報(2)
21. 情報公開と情報の保護(1)
22. 情報公開と情報の保護(2)
23. 知的財産権(1)
24. 知的財産権(2)
25. 情報化社会と労働環境、労働感(1)
26. 情報化社会と労働環境、労働感(2)
27. 情報化社会のさらなる法問題、政治問題(1)
28. 情報化社会のさらなる法問題、政治問題(2)
29. 情報化社会の将来予測(1)
30. 情報化社会の将来予測(2)

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)授業への出席:40% (2)課題作成:30% (3)試験:30%

法と裁判

担当者：伊藤 泰

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

2009年5月に裁判員制度というものが始まって以来、「裁判」は我々にとってより身近なものとなってきているが、ではそもそも「裁判」とはいったい何なのだろう。この授業ではこのことをさまざまな角度から考えてみることにしたい。

なお、都合の良い日時に何度か実際の裁判の傍聴に行ってみたいと考えている。そのため、下記の授業計画はおおよそのものである。

2.学びの意義と目標

裁判というものを知っておくことは社会の一員として非常に重要なことである。また裁判を知ることは、法律の現実の姿を知ることにもなるだろう。

準備学習(予習)

教科書を読む

準備学習(復習)

関連書籍を読む

授業計画

1. 裁判はなぜ理解されないのか(1)
2. 裁判はなぜ理解されないのか(2)
3. 紛争と裁判(1)
4. 紛争と裁判(2)
5. カリスマ的裁判(1)
6. カリスマ的裁判(2)
7. 伝統的裁判(1)
8. 伝統的裁判(2)
9. 形式的・合理的裁判(1)
10. 形式的・合理的裁判(2)
11. 法の解釈(1)
12. 法の解釈(2)
13. 新しい社会現象と法の解釈(1)
14. 新しい社会現象と法の解釈(2)
15. 裁判の変化1:戦前の公害と裁判(1)
16. 裁判の変化1:戦前の公害と裁判(2)
17. 裁判の変化2:戦後の公害と裁判(1)
18. 裁判の変化2:戦後の公害と裁判(2)
19. 裁判官による価値の選択(1)
20. 裁判官による価値の選択(2)
21. 「事実」とは何か、狂った「事実認定」(1)
22. 「事実」とは何か、狂った「事実認定」(2)
23. 「自由の国」での「魔女審問」(1)
24. 「自由の国」での「魔女審問」(2)
25. 誤判:誤った事実認定とその原因(1)
26. 誤判:誤った事実認定とその原因(2)
27. 誤判:誤った事実認定とその原因(3)
28. 誤判:誤った事実認定とその原因(4)
29. 誤判:誤った事実認定とその原因(5)
30. 誤判:誤った事実認定とその原因(6)

教科書

大野 正男 『社会のなかの裁判』(有斐閣)

評価方法

(1)試験:80% (2)受講態度:20%

簿記（初級）

担当者：澤村 孝夫

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

企業は手元にある資金を利用して商品売買などの事業を展開し利益を獲得するための活動を行っています。こうした活動を正しく理解するためには、一定の方法で計算・記録・整理するための<道具>が必要になります。それが<簿記>です。また、簿記は、一定期間の取引活動の状況を取引先、出資者、銀行等の利害関係者に報告する役割も担っています。

本講義では、簿記による記帳方法の原理及び記帳プロセスを体系的に学習し、基礎的な経理知識の習得を目指しています。また、日本商工会議所主催の簿記検定試験3級を受験することができます。

2.学びの意義と目標

企業の経営活動の状況を反映させるために必須とされる簿記の必要性を認識すること。簿記のスキルを身につけることによって過去・現在、そして将来の経営活動状況の良し悪しを知ることができるようにする。

準備学習(予習)

企業の取引活動を計算・記録・整理することが必要になるので、計算機が必要になります。従って、講義時には必ず計算機を持参すること。

準備学習(復習)

問題の反復練習

授業計画

1. 簿記の役割とその種類
2. 資産、負債、純資産、収益、費用の内容
3. 簿記上の取引と仕訳
4. 仕訳帳、総勘定元帳、試算表の作成
5. 現金・預金の処理
6. 小口現金出納帳とインプレストシステム
7. 商品売買と3文法
8. 仕入帳、売上帳、商品有高帳の作成
9. 人名勘定と売掛金・買掛金元帳
10. 手形の種類とその記入方法
11. 手形の割引と裏書譲渡
12. 受取手形記入帳と支払手形記入帳
13. 有価証券の取得と売却
14. その他の債権・債務の処理(Ⅰ)
15. その他の債権・債務の処理(Ⅱ)
16. 貸倒れと貸倒引当金の処理
17. 固定資産の取得と売却
18. 減価償却費の計算とその処理
19. 資本金・引出金の処理
20. 税金の種類とその処理
21. 合計残高試算表の作成
22. 決算整理・収益及び費用の繰延
23. 決算整理・収益及び費用の見越
24. 精算表の作成(Ⅰ)
25. 精算表の作成(Ⅱ)
26. 損益計算書・貸借対照表の作成
27. 伝票の種類とその作成
28. 総合問題練習(Ⅰ)
29. 総合問題練習(Ⅱ)
30. 総合問題練習(Ⅲ)

教科書

渡辺正直 『最新式段階式 日商簿記検定問題集3級』(実教出版)

評価方法

- (1)定期試験:60% (2)レポート第1回:5% (3)レポート第2回:5%
(4)レポート第3回:5% (5)出席:25%

簿記（初級）

担当者：山田 ひとみ

開講期：春学期/秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

会計に関する知識はビジネスパーソンにとって必須といわれています。
企業が公表する会計情報は複式簿記にもとづいて作成されており、複式簿記の原理は世界共通です。講義では毎回テーマについて例題を用いて説明した後、練習問題を解答してもらいます。簿記の学習で重要なのは予習よりも復習です。
復習と自習のチェックを兼ねて、適宜、ミニテストを行います。

2.学びの意義と目標

勘定の仕組みを理解して取引を仕訳し、決算の手続きを経て貸借対照表と損益計算書の作成に至るまでの、簿記一巡の手続きを理解することができる（日商簿記3級程度）。「簿記（中級）」を履修するための知識を身につけることができる。また、会計学・経営学関連科目を学ぶ上でも必要な基礎知識が身に付きます。

準備学習(予習)

講義中に指示します。

準備学習(復習)

講義中に指示された演習問題を次回までに解答しましょう。

授業計画

1. ガイダンス（授業の進め方、採点方法）
2. 仕訳（1）
3. 仕訳（2）
4. 転記
5. 試算表（1）
6. 現金・預金
7. 商品売買
8. 小口現金・約束手形
9. 為替手形
10. 手形の裏書・割引
11. その他の期中取引（1）
12. その他の期中取引（2）
13. 有価証券
14. 資本金・税金
15. 試算表（2）
16. 補助簿
17. 決算整理仕訳（1）
18. 決算整理仕訳（2）
19. 決算整理仕訳（3）
20. 決算整理仕訳（4）
21. 決算整理仕訳（5）
22. 決算整理仕訳（6）
23. 8桁精算表（1）
24. 8桁精算表（2）
25. 貸借対照表・損益計算書の作成
26. 伝票・訂正仕訳
27. 総合問題演習（1）
28. 総合問題演習（2）
29. 総合問題演習（3）
30. まとめ

教科書

評価方法

(1)ミニテスト:20% (2)定期試験:30% (3)出席:50%

簿記（中級）

担当者：山田 ひとみ

開講期：春学期/秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

中級程度の商業簿記と、初歩的な原価計算を含む工業簿記について学習する。商業簿記では、株式会社を前提とした取引の記帳方法を学び、工業簿記では製造業における生産活動の記録方法を学ぶ。講義では毎回テーマについて例題を用いて説明した後、練習問題を解答してもらいます。予習、復習、自習のチェックを兼ねて、適宜、ミニテストを行います。

2.学びの意義と目標

株式会社が作成する財務諸表を読む力がつき、経営状態を把握できるようになる（日商簿記2級程度）。また、会計学・経営学関連科目を学ぶ上で十分な基礎知識が身に付きます。

準備学習(予習)

日商簿記検定3級の過去問題集を継続的に使用して基礎力をキープする。

準備学習(復習)

講義中に指示された演習問題を次回までに解答しましょう。

授業計画

1. 商業簿記の一巡
2. 現金・預金
3. 手形
4. 有価証券
5. 債権・債務
6. 引当金
7. 商品売買
8. 特殊商品売買
9. 株式会社会計（1）株式の発行、税金
10. 株式会社会計（2）社債
11. 株式会社会計（3）剰余金の配当・処分
12. 株式会社会計（4）繰延資産
13. 決算
14. 本支店会計
15. 帳簿組織
16. 工業簿記の一巡
17. 材料費
18. 労務費
19. 経費
20. 個別原価計算
21. 部門別個別原価計算
22. 総合原価計算（1）基礎
23. 総合原価計算（2）月初仕掛品
24. 総合原価計算（3）減損
25. 標準原価計算（1）基礎
26. 標準原価計算（2）差異分析
27. 直接原価計算（1）基礎
28. 直接原価計算（2）CVP分析、固変分解
29. 総合問題（1）
30. 総合問題（2）

教科書

授業の中で指示する
第1回目の講義でテキストを指定します。

評価方法

(1)ミニテスト:30% (2)定期試験:40% (3)出席:30%

ボランティア概論

担当者：川田 虎男

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

講義とゲストスピーカーの話を中心とした内容となります。ボランティアについての基礎的な知識また、実際の活動内容について学びます。受講人数によっては、参加者同士のグループワークも複数回実施する予定です。

基礎的なボランティアの知識を身につけるものですので、ボランティアの経験の有無は問いません。

2.学びの意義と目標

東日本大震災においても多くのボランティア活動が注目されていますが、自分たちの日常レベルに落として現代社会におけるボランティアの実情と意義を学びます。

準備学習(予習)

実際のボランティア活動への参加があるとより学びが深まります。授業では毎回一定程度の分量の振り返りシートの記入をしていただく予定です。

準備学習(復習)

昨年度も授業での学びから、様々な活動やプロジェクトが生まれました。授業で学んだことを実際の活動に活かせるよう工夫してください。具体的には、ゲストスピーカーの関わる現場やボランティアセンターを活用して、ボランティア活動を体験することを推奨します。知識として学んだことを、「自分の体験」として納得する機会を作ってください。

授業計画

- 1.オリエンテーション
- 2.ボランティアの定義と活動分野
- 3.ボランティア活動者に聞く「バリアフリーマップとボランティア」
- 4.市民活動・NPO法人とボランティア
- 5.大学生とボランティアI
- 6.大学生とボランティアII
- 7.ワークショップ「ボランティアの種を探す」
- 8.ボランティアセンターとボランティアコーディネーション
- 9.実際のボランティア活動を知るI「災害ボランティア」
- 10.実際のボランティア活動を知るII「コミュニティ活動ボランティア」
- 11.実際のボランティア活動を知るIII「環境ボランティア」
- 12.実際のボランティア活動を知るIV「国際ボランティア」
- 13.ワークショップ「ボランティア講座企画」
- 14.ワークショップ「ボランティア講座企画」
- 15.試験

教科書

授業の中で指示する

評価方法

- (1)出席:25% (2)授業への参加度:25% (3)中間レポート:20%:授業期間中にボランティア体験を行いレポートの提出をしていただきます。
(4)試験:30%

マクロ経済学

担当者：由川 稔

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

概論的な経済学からまた一歩進んで、世の中の経済現象をより理論的に考えてみましょう。特に経済を「マクロ的に」(=巨視的に)捉えるのが「マクロ経済学」です。金融や、財政や、国際経済の動向等についても、理論に根差した理解に挑戦しましょう。

2.学びの意義と目標

理論面では、「基礎レベルの習熟」に目標を置きたいと思います。そしてそれを踏まえて、或る経済現象をどう捉えるべきか、自分の頭で、しかし独り善がりでない考え方で当たっていけるようにする、それがこの授業の意義と目標です。

準備学習(予習)

範囲や課題等、授業中に指示します。

準備学習(復習)

範囲や課題等、授業中に指示します。

授業計画

1. マクロ経済学とは何か(1)
2. マクロ経済学とは何か(2)
3. GDPについて(1)
4. GDPについて(2)
5. 三面等価の原則
6. 名目と実質
7. 財市場の分析(1)
8. 財市場の分析(2)
9. 有効需要の原理(1)
10. 有効需要の原理(2)
11. 乗数理論(1)
12. 乗数理論(2)
13. 乗数理論(3)
14. 乗数理論(4)
15. 貨幣市場の分析(1)
16. 貨幣市場の分析(2)
17. 貨幣市場の分析(3)
18. 貨幣市場の分析(4)
19. IS-LM分析(1)
20. IS-LM分析(2)
21. IS-LM分析(3)
22. IS-LM分析(4)
23. 所得と物価水準(1)
24. 所得と物価水準(2)
25. 財政政策と金融政策(1)
26. 財政政策と金融政策(2)
27. インフレとデフレ(1)
28. インフレとデフレ(2)
29. まとめと復習(1)
30. まとめと復習(2)

教科書

中谷巖 『マクロ経済学入門』(日本経済新聞出版社)

評価方法

- (1)定期試験:60% (2)受講態度:20%:出席状況や授業内提出物。
(3)レポート等:20%:ノートの写しを見せてもらうこともあります。

担当者：竹田 香織

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

<p>講義概要</p> <p>1.内容 本講義では、マスコミュニケーション、マスメディアに関する概念や歴史、現状について理解を整理し、社会における役割や影響、可能性について考察する。</p>	<p>授業計画</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 情報とは何か 2. コミュニケーションとは 3. メディアとは 4. マスメディアの影響 5. メディアの歴史と現状（1） 6. メディアの歴史と現状（2） 7. 広告とメディアミックス 8. メディアリテラシー 9. ジャーナリズム 10. メディア倫理 11. ニュース 12. 災害と報道 13. 事故と報道 14. 事件と報道 15. インターネット 16. ソーシャルメディア 17. 表現の自由と知る権利、プライバシー 18. 民主主義と情報 19. 公共性 20. 世論（1） 21. 世論（2） 22. 世論調査 23. 政治と情報（1） 24. 政治と情報（2） 25. インターネットと政治（1） 26. インターネットと政治（2） 27. メディアとジェンダー 28. メディアとナショナリズム 29. メディアと戦争 30. 総括
<p>2.学びの意義と目標 ・マスコミュニケーションおよびマスメディアと社会、個人との関わりについて理解を深める。 ・情報社会を生きる上で、もはや必要不可欠といえる様々なメディアとの接し方について考えることができるようになる。 ・情報を批判的あるいは建設的に吟味する姿勢を身につける。</p>	
<p>準備学習(予習) ・新聞を読み、ニュースに日々触れること。</p>	<p>教科書 授業の中で指示する</p>
<p>準備学習(復習) ・ノートや配布プリント等を見返し、授業の中で案内する文献を手に取り、授業のポイントが何であったかをおさえておくこと。</p>	<p>評価方法 (1)平常点:30%:毎回授業後にコメントペーパーを提出してもらう。 (2)期末試験:70%</p>

まちづくり学

担当者：平 修久

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

自分たちのまちは自分たちで良くしようという、生活環境の改善や地域振興という動きが全国で広がっている。このようなまちづくりは、人と人とのつながりを深めるばかりでなく、関わっている人たちの人間的成長ももたらす。また、まちは総合的なものであり、まちづくりを学ぶことは視野を広げ、人生をより豊かなものにつなげる。

本科目では、背景、定義、タイプなどのまちづくりの概要、まちづくりの進め方と主な手法、分野別課題と事例、まちづくりの意義や目指すものなどを学ぶ。

2.学びの意義と目標

身近なまちの問題や課題、まちづくりの意義、内容、手法を理解し、説明できるようになることが学びの目標である。

準備学習(予習)

事前に指示する参考文献や配布物などを読んでおくこと。

準備学習(復習)

毎回の講義内容を整理し、まとめること。また、授業に関連する課題については、授業内容の理解を深める復習として、期日までに提出すること。

授業計画

- 1.まちづくりの概要(アイスブレイク)
- 2.まちづくりの概要(聖学院大学周辺のまちづくり)
- 3.まちづくりの概要(まちづくりとは)
- 4.まちづくりの概要(まちづくりの歴史)
- 5.まちづくりの概要(まちづくりの課題別分類と事例)
- 6.まちづくりの概要(まちづくりの内容別分類と事例)
- 7.まちづくりの概要(まちづくりの事例)
- 8.まちづくりの進め方と方法(まちづくりのプロセス)
- 9.まちづくりの進め方と方法(まちづくりのプロセス、ランキングゲーム)
- 10.まちづくりの進め方と方法(都市計画制度)
- 11.まちづくりの進め方と方法(都市計画制度)
- 12.まちづくりの進め方と方法(都市計画制度)
- 13.まちづくりの進め方と方法(住民参加と協働)
- 14.まちづくりの進め方と方法(住民参加と協働の事例)
- 15.まちづくりの進め方と方法(地域通貨)
- 16.まちの課題とまちづくり(コミュニティの衰退と新しいコミュニティの創造)
- 17.まちの課題とまちづくり(コミュニティ創造の事例)
- 18.郊外住宅地の現状と維持
- 19.まちの課題とまちづくり(商店街の衰退と中心市街地活性化)
- 20.まちの課題とまちづくり(中心市街地活性化の事例)
- 21.まちの課題とまちづくり(福祉のまちづくり)
- 22.まちの課題とまちづくり(子育て支援)
- 23.まちの課題とまちづくり(子育て支援のまちづくりの事例)
- 24.まちの課題とまちづくり(観光まちづくり)
- 25.まちの課題とまちづくり(アニメによるまちづくり、事例)
- 26.まちの課題とまちづくり(地域の衰退と維持・活性化)
- 27.まちの課題とまちづくり(地域の活性化の事例)
- 28.まちの課題とまちづくり(地域の活性化の事例)
- 29.まちの課題とまちづくり(震災復興のまちづくり)
- 30.まちづくりのまとめ

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)出席:10% (2)授業に関するまとめ:20% (3)課題:30% (4)レポート:40%

マルチメディア論

担当者：河島 茂生

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

「マルチメディア」という言葉自体は使い古されてしまっている感が強い。しかし、その言葉が指し示していたデジタル技術は現代社会により広く深く根づいてきている。本授業では、まずデジタル技術へと至るメディアの系譜を紐解く。次に、画像・動画・音声のデータの処理を含めて、コンピュータ技術の基本について扱い、その後ウェブ技術を中心にしてインターネット技術の基本を説明する。さらに、デジタル技術にかかわる近年の動向を取り上げ、互いに議論しながら情報社会の批判的理解を養うことを目指す。また、図書館を使った情報検索も行い、デジタル技術の特徴を深く学んでいく。

2.学びの意義と目標

この授業を通じて、デジタル技術について理解し応用できる能力を習得でき、加えて情報社会の問題を発見する術を身につけることができると考えられる。

準備学習(予習)

毎回与えられた課題をこなし、授業に臨みたい。

準備学習(復習)

授業で触れた内容をテキスト等で読み返し、思考を整理することを求める。

授業計画

1. マルチメディアとはなにか(ガイダンス・含)
2. テクノメディア論 / ソシオ・メディア論
3. メディアの歴史I:声の文化から文字の文化 / 印刷の文化まで
4. メディアの歴史II:文字の文化 / 印刷の文化からデジタルメディアの文化まで
5. メディアの歴史III:コンピュータ技術 / インターネット技術の来歴とその思想的背景
6. 現代社会におけるメディアの種別
7. 現代社会におけるメディアの種別
8. 現代社会におけるメディアの種別
9. コンピュータ技術の仕組みと歴史I
10. コンピュータ技術の仕組みと歴史I
11. コンピュータ技術の仕組みと歴史II
12. 画像データ処理の概要および演習
13. 動画データ処理の概要および演習
14. 音声データ処理の概要および演習
15. インターネット技術の仕組みと歴史I
16. インターネット技術の仕組みと歴史II
17. サーチエンジン
18. サーチエンジン
19. データベース
20. (X)HTML / CSSの概要
21. (X)HTML / CSSの演習
22. ウェブユーザビリティ / ウェブアクセシビリティ
23. CMSの概要とその演習
24. Wikipediaの概要
25. Wikipediaの演習と議論
26. SNSの概要
27. SNSの演習と議論
28. Twitterの概要
29. Twitterの演習と議論
30. まとめ

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)試験:70% (2)授業への参加度:30%
ただし、単位修得にあたっては出席数が授業回数の3分の2以上であることを条件とする。

ミクロ経済学

担当者：中野 宏

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

ミクロ経済学の基礎および応用理論を学習する。消費者がモノを買う、企業がモノを作る、市場でモノの価格が決まる、政府が課税や規制を行う、など日常的に行われている様々な経済活動の行動法則や決定原理を明らかにすることで、いかなる経済の状態が社会的に最も望ましいのか、またそれを実現するためにはどうすればよいかを探っていく。その過程において、近年の世界的な潮流である規制緩和や公的企業の民営化、自由貿易の推進といった競争促進政策の意義と問題点が明らかにされるであろう。

経済学という学問の性質上、少なからず数学を用いるが、必要最小限のものについては折に触れて説明する。

専門科目「経済学」を履修した上で受講すること。

2.学びの意義と目標

将来学生諸君がどのような職業に就こうと、社会に出れば「経済」と付き合わずに済ますことは出来ない。景気の動向や、金利・物価・為替レートの動きなどから必要なことを読み取り、あるいはそれらの動きを予想し、仕事に反映させていくことになる。また、少子高齢化・人口減少社会に突入した我が国においては、これまでのような年金に依存した老後は期待すべきもなく、諸君は投資により自らの手腕において老後のための資産形成を行っていかねばならない。今後必要となるのは、テレビや新聞、ネットなどのマスコミ報道を鵜呑みにするのではなく、自分の目で見て自分の考えで決定を行えるような知性と分析道具である。それらを身に付けるために本講義が少しでも役に立てばと願う。

準備学習(予習)

指示された項目につき各自で調べてくること。

準備学習(復習)

経済学の講義は積み重ねで進んでいくため、一度わからなくなるとその後が続かなくなる恐れがある。毎回講義の復習プリントを配布するので、次の講義日までに各自仕上げてくること。

授業計画

1. イントロダクション
2. 資源配分と市場メカニズム (1)
3. 資源配分と市場メカニズム (2)
4. 需要と供給 (1)
5. 需要と供給 (2)
6. 需要と供給 (3)
7. 限界分析と需要曲線 (1)
8. 限界分析と需要曲線 (2)
9. 限界分析と供給曲線 (1)
10. 限界分析と供給曲線 (2)
11. 厚生経済学の基本定理 (1)
12. 厚生経済学の基本定理 (2)
13. 厚生経済学の基本定理 (3)
14. 不完全競争の分析 (1)
15. 不完全競争の分析 (2)
16. 不完全競争の分析 (3)
17. 政府の市場介入 (1)
18. 政府の市場介入 (2)
19. 政府の市場介入 (3)
20. 政府の市場介入 (4)
21. 政府の市場介入 (5)
22. 市場の失敗 (1)
23. 市場の失敗 (2)
24. 市場の失敗 (3)
25. 市場の失敗 (4)
26. 市場の失敗 (5)
27. ゲームの理論 (1)
28. ゲームの理論 (2)
29. ゲームの理論 (3)
30. 講義のまとめ

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)出席:30% (2)レポート:30%:講義機関半ばに1回課題を出す。
(3)期末試験:40%
上記評価のほか、質問等授業に積極的に参加しようとする態度や意欲は加点対象となる。自分の存在をアピールして欲しい。

民法 A (総則・物権)

担当者：松谷 秀祐

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

民法は、私人間の法的関係を規律している法律である。本科目は民法の中で第1編総則（第1条から第174条の2）と第2編物権（第175条から第398条の22）を講義の対象とする。しかし、それら全ての条文について説明し、その内容を覚えてもらうことが講義の目的では決してない。まずは基本的な枠組みを把握することを目標として、現在の取引社会において特に必要不可欠な制度・条文について、売買契約を中心とした具体的な事例問題を用いて説明する。

2.学びの意義と目標

無人島で自給自足生活をしようとする者以外、民法・消費者法と関わりを持たなくてもよい者はいない。自分（たち）が民法・消費者法によって規律されている世界に生きていることを実感し、将来、身の回りに法的な問題が生じたときに、何となくでもよいので、自身で解決の糸口を見出せる能力を身に付けることを目標とする。

準備学習(予習)

翌週分のレジュメも事前に配布するので予めレジュメに目を通した上で講義にのぞむこと。

準備学習(復習)

教科書を読み返す、講義ノートをまとめる。

授業計画

1. 民法の役割、民法の構造、民法を学ぶ意義
2. 民法総則（1）:民法の基本原則
3. 民法総則（2）:自然人と法人
4. 民法総則（3）:自然人（1）
5. 民法総則（4）:自然人（2）
6. 民法総則（5）:自然人（3）
7. 民法総則（6）:法律行為とは、公序良俗
8. 民法総則（7）:心裡留保、通謀虚偽表示
9. 民法総則（8）:錯誤
10. 民法総則（9）:詐欺、強迫
11. 民法総則（10）:代理（1） 代理とは
12. 民法総則（11）:代理（2） 表見代理、無権代理
13. 民法総則（12）:条件・期限、時効総説
14. 民法総則（13）:消滅時効
15. 民法総則（14）:一般条項（1）
16. 民法総則（15）:一般条項（2）、中間試験
17. 民法総則（16）:民法総則のまとめ
18. 物権法（1）:「物」とは、物権とは
19. 物権法（2）:物権的請求権
20. 物権法（3）:不動産物権変動（1）
21. 物権法（4）:不動産物権変動（2）
22. 物権法（5）:不動産物権変動（3）
23. 物権法（6）:動産物権変動
24. 物権法（7）:占有権、取得時効
25. 物権法（8）:所有権、用益物権
26. 物権法（9）:担保物権総説
27. 物権法（10）:抵当権
28. 物権法（11）:質権、留置権、先取特権
29. 物権法（12）:非典型担保
30. 物権法（13）:物権法のまとめ

教科書

円谷峻 『民法』（（財）放送大学教育振興会）

評価方法

(1)中間試験:30% (2)最終試験:70%

民法B(債権)

担当者：松谷 秀祐

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

民法は、私人間の法的関係を規律している法律である。本科目は、民法の中で第3編債権（第399条から第724条）を講義の対象とする。しかし、それら全ての条文について説明し、その内容を覚えてもらうことが講義の目的では決していない。まずは、基本的な枠組みを把握することを目標として、現在の取引社会において特に必要不可欠な制度・条文について、売買契約を中心とした具体的な事例問題を用いて説明する。

2.学びの意義と目標

無人島で自給自足生活をしようとする者以外、民法・消費者法と関わりを持たなくてもよい者はいない。自分（たち）が民法・消費者法によって規律されている世界に生きていることを実感し、将来、身の回りに法的な問題が生じたときに、何となくでもよいので、自身で解決の糸口を見出せる能力を身に付けることを目標とする。

準備学習(予習)

翌週分のレジュメも事前に配布するので予めレジュメに目を通した上で講義にのぞむこと。

準備学習(復習)

教科書を読み返す、講義ノートをまとめる、配布された知識確認問題を解く。

授業計画

1. 「法学」とは、民法とは、債権法とは
2. 債権各論（1）:契約自由の原則、契約拘束力の原則と例外
3. 債権各論（2）:契約の分類（1）
4. 債権各論（3）:契約の分類（2）
5. 債権各論（4）:贈与契約
6. 債権各論（5）:売買契約（1）
7. 債権各論（6）:売買契約（2）
8. 債権各論（7）:賃貸借契約（1）
9. 債権各論（8）:賃貸借契約（2）
10. 債権各論（9）:使用貸借契約
11. 債権各論（10）:消費貸借契約
12. 債権各論（11）:請負契約
13. 債権各論（12）:委任契約
14. 債権各論（13）:その他の典型契約（1）
15. 債権各論（14）:その他の典型契約（2）
16. 債権各論（15）:契約法のとらえ、中間試験
17. 債権各論（16）:不法行為（1）
18. 債権各論（17）:不法行為（2）
19. 債権各論（18）:不法行為（3）
20. 債権総論（1）:債権の目的（1）
21. 債権総論（2）:債権の目的（2）
22. 債権総論（3）:債務不履行（1）
23. 債権総論（4）:債務不履行（2）
24. 債権総論（5）:多数当事者の債権関係（1）
25. 債権総論（6）:多数当事者の債権関係（2）
26. 債権総論（7）:債権譲渡
27. 債権総論（8）:弁済
28. 債権総論（9）:相殺
29. 債権総論（10）:債権総論のまとめ
30. 債権法のまとめ

教科書

円谷峻 『民法』（財）放送大学教育振興会

評価方法

(1)中間試験:30% (2)最終試験:70%

民法C(親族・相続)

担当者：加藤 恵司

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

本講座は、民法の家族法に関する講義である。人は両親によって生を受け、家族と生活し、家族に看取られつつ亡くなっていく。家族は最も基本的、自然的な社会集団である。

わが国の民法典には、旧民法といわれる法典があり、戸主を中心とする家族制度、家督相続制度があった。もう一つは、敗戦後の新憲法に基づいて、夫婦中心の家族制度、遺産相続制度がある。本講座は後者であるが、旧民法をも意識して学習する。

近年の家族形態には、核家族、高齢家族、晩婚・非婚化、少子化の傾向が家族観に変化をもたらしている。「法律は家庭に入らず」という法諺があるが、法律と家族関係は無関係でよいのだろうか。たしかに「夫婦は愛し合うべきである」とか、「子どもを大切に育てよ」とか、「親を敬え」というような道徳観だけでは支えきれずに崩壊していく。裁判によって破綻を決定的にする家族が多く見られる。このような意識を抱きながら講義する。

民法では、結婚、離婚など夫婦関係、親子関係を取り扱った「親族編」、相続、遺言などを取り扱った「相続編」をあわせた部分を家族法と称している。法律と現実を見つめ、判例など具体例を挙げながら現代の家族事情を分析してみたい。

2.学びの意義と目標

人生で出会うであろう出来事について民法に従って学ぶ。判例などを用いて身近に民法を知ることを目指す。

準備学習(予習)

予習レポートを書き、提出する。また、項目ごとに問題点のレポートを書き、提出する。

準備学習(復習)

六法の条文を開いて、講義の内容を思い起こす。

授業計画

1. 家族とは(民法と家族法)
2. 近代家族法の理念
3. 親族の意義
4. 親等について
5. 婚姻の制度と日本国憲法
6. 婚姻の成立
7. 婚姻の効果
8. 現代の婚姻事情
9. 離婚(婚姻の解消)
10. 離婚の法的効果と問題点
11. 現代の離婚の実態
12. 親子法の理念
13. 親子の種類(実子、養子)、
14. 親子の種類(特例実子)
15. 未成年者の保護
16. 親権と親の責任
17. 後見と保佐
18. 現代親子の諸問題(赤ちゃんポスト、人工授精)
19. 現代少子化について
20. 高齢社会と扶養
21. 現代の扶養制度と政策
22. 相続の理念
23. 法定相続と相続人
24. 相続の効力と相続の放棄
25. 相続人の不存在と相続回復請求権
26. 遺産分割をめぐる諸問題
27. 遺言の意義とその方法
28. 遺言の効力と遺留分
29. 相続遺言の現代の諸問題
30. 家族とは何か

教科書

西田 典之, 高橋 宏志, 能見 善久 『ポケット六法 平成25年版』(有斐閣)
鎌田 薫 『デイリー六法2013 平成25年版』(三省堂)
笠井 正俊, 潮見 佳男, 洲崎 博史, 高山 佳奈子, 土井 真一, 中川 丈久 『岩波セレクト六法 平成25(2013)年版』(岩波書店)

評価方法

(1)出席:20% (2)レポート:80%

予備演習 A

担当者：渡辺 英人, 竹井 潔, 大塚 健司, 瀬名 浩一, 大森 達也, 八木 規子, 平 修久, 菊地 順, 大高 研道

開講期：春学期 必修・選択：必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

大学で学びを始めるために必要な基礎力を身に付けてもらうことを目的とする。読解力やコミュニケーション能力を身に付け、発表をこなしレポートを書く力を高める訓練をする。具体的な内容は個別の担当者によって異なるが、図書館ツアー、新聞記事や『ニュース検定公式テキスト』を使った要約や発表の練習、それにもとづくディスカッションなどを行う。なお、授業計画のスケジュールは前後する可能性があることを付記しておく。

2.学びの意義と目標

2年生以降の専門科目や専門演習においてレポートを書いたり発表・議論をすることが楽に行えるようになることを目標としている。

準備学習(予習)

指定された課題をこなし、口頭発表時には配布資料を作成されたい。また授業外の学習を絶えず行いながら、授業に参加することを求める。詳細は各授業で説明する。

準備学習(復習)

授業で扱った内容を復習し、ほかの授業に活かすことを求める。詳細は各授業で指示する。

授業計画

1. イントロダクション
2. 図書館ツアー
3. 読解の練習
4. 要約の練習
5. レポートの書き方解説
6. 討論の練習
7. 担当者による発表
8. 担当者による発表
9. 担当者による発表
10. 担当者による発表
11. 担当者による発表
12. 担当者による発表
13. 担当者による発表
14. キャリアガイダンス
15. まとめ

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)課題:60% (2)授業への参加貢献度:40%

予備演習 B

担当者：渡辺 英人, 竹井 潔, 大塚 健司, 瀬名 浩一, 大森 達也, 八木 規子, 平 修久, 菊地 順, 大高 研道

開講期：秋学期 必修・選択：必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

大学で学びを始めるために必要な基礎力を身に付けてもらうことを目的とする。読解力やコミュニケーション能力を身に付け、発表をこなしレポートを書く力を高める訓練をする。具体的な内容は個別の担当者によって異なるが、図書館ツアー、新聞記事や『ニュース検定公式テキスト』を使った要約や発表の練習、それにもとづくディスカッションなどを行う。なお、授業計画のスケジュールは前後する可能性があることを付記しておく。

2.学びの意義と目標

2年生以降の専門科目や専門演習においてレポートを書いたり発表・議論をすることが楽に行えるようになることを目標としている。

準備学習(予習)

指定された課題をこなし、口頭発表時には配布資料を作成されたい。また授業外の学習を絶えず行いながら、授業に参加することを求める。詳細は各授業で説明する。

準備学習(復習)

授業で扱った内容を復習し、ほかの授業に活かすことを求める。詳細は各授業で指示する。

授業計画

1. イントロダクション
2. 図書館ツアー:データベース編
3. 自己分析
4. 交流分析
5. 担当者による発表
6. 担当者による発表
7. 担当者による発表
8. 担当者による発表
9. 担当者による発表
10. 担当者による発表
11. 担当者による発表
12. 担当者による発表
13. 担当者による発表
14. キャリアガイダンス
15. まとめ

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)課題:60% (2)授業への参加貢献度:40%

予備演習 C

担当者：上嶋 康道

開講期：秋学期 必修・選択：必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

秋学期前半は、書き方で学んだ表現技術を生かして個人プレゼンテーションを行います。後半ではグループで問題の解決にあたり、その成果をプレゼンテーションしてもらいます。

2.学びの意義と目標

春学期の「視点を切り替えられるようになる」という目標の達成を、今度は個人プレゼンテーションとグループワークを通して目指します。

準備学習(予習)

毎日の新聞に目を通すことが求められます。発表の前には入念な準備が必要です。

準備学習(復習)

発表の振り返りが求められます。

授業計画

1. オリエンテーション
2. show and tell
3. プレゼンテーションとは
4. 個人プレゼンテーション準備
5. 個人プレゼンテーション
6. 個人プレゼンテーション
7. 個人プレゼンテーション
8. 個人プレゼンテーションとグループワーク
9. グループ発表準備
10. グループ発表準備
11. グループ発表
12. グループ発表準備
13. グループ発表準備
14. グループ発表
15. まとめ

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)平常点:80% (2)レポート:20%
演習という科目の性質上、出席が悪いと単位の認定はできません。

担当者：土方 透

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要**1.内容**

本講義では、現代の社会学理論が到達した学問的境位を、人間の知の展開として位置づけることを目的とする。

講義では、まず人類の思想の歴史的展開を概観する。そのことにより、はじめて最新の理論と呼ばれるものの「新しさ」が明らかになる。すなわち、思想史上の連続的側面と非連続的側面から、現代の理論というものが理解可能となるわけである。そうした作業を経たうえで、現代社会において、所与のものとして市民権を得た諸思想ならびに諸価値の限界を指摘しつつ、いま考えられる可能な選択肢を提示したい。

2.学びの意義と目標

大学での勉学で「役に立つ」ことを学ぼうとするのであれば、他の科目を履修することが望ましい。そのような「想定内」の問題に答える叡智は、大学での学問とは関係がない。想定外の問題がこれまで指摘されている現代社会にあって、必要なことは、過去の人類の知的な蓄積を学ぶことで、自己の確かな推理力・判断力を養うことである。それが学びの意義であり、それをどのように獲得し、我がものとするかは、各受講者にゆだねる。

準備学習(予習)

なお、講義に際しては、毎回レジメを配布するほか、具体的な時事問題にも触れながら、各トピックスを扱っていく。レジメに目を通した上で参加し、終了後に配布された資料と併せて再読すること。

準備学習(復習)

前回の議論を、そのつど確認してそのつどの講義に臨んで欲しい。

授業計画

1. 科学の危機：イントロダクション
2. 科学の危機：概要
3. 主観 / 客観
4. 20世紀初頭の諸科学の危機とパラダイム転換
5. 自然科学における転換
6. 人文科学における転換
7. 社会科学における転換
8. 現代思想の境位
9. 小括
10. 古典的科学観
11. 近代の科学観と社会科学の成立
12. マルクスの科学観
13. ヴェーバーの科学観
14. 社会科学における客観性
15. 客観性問題：存在と当為
16. 規範科学と事実科学
17. 文献解題 1
18. 文献解題
19. 小括
20. 脱構築
21. コスモスと複雑性
22. 部分と全体
23. 客観性と客観化可能性
24. 規範と構造
25. 小括
26. 自己言及性
27. 脱 - パラドクス化
28. 自己塑性的社会システム
29. 総括 1
30. 総括 2

教科書

土方 透 『法という現象』(ミネルヴァ書房)

評価方法

(1)出席:30% (2)試験:40% (3)レポート:30%
議論が毎回積み上げられていくので、出席をすることがすべての評価の前提となる。

倫理学概論

担当者：谷口 隆一郎

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

倫理学を知っておくとどんなときに役立つのだろうか？生きていればだれでも一度や二度は人生上の大小の壁にぶち当たるはずだ。そんなとき倫理学が役に立つ。どうにもこうにもならなくなった状況、そのような壁の前にたたずむしかないような状況から脱出するには、自分の考え方を換え、状況を違う角度から捉えなおすことが必要だ。倫理学の考え方を身に着ければ、それができるようになる。そのためには、まず自分をしっかり見つめることができなければいけない。自己を見つめるということは、自己の内面に引きこもることではない。自分の心の扉を開くということだ。わたしたちがお互いなんとかうまくやっていけるのは、行動を規制するルールや倫理道徳が存在するからだ。しかし現代社会には法や常識で割り切れない倫理道徳上の難題（アポリア）が多く存在する。それらのアポリアからいくつかを選んで、それらについてじっくり考えてみる。そのことを通して、君が目の前のアポリアに直面し、他者が納得いくように、君の決断と行為について君なりに説明できる力を伸ばそう、これがこの講義の最大にして最終目標だ。

2.学びの意義と目標

とにもかくにも考える力を伸ばすことに力点を置いた授業をめざす。この科目は、社会科の教職科目でもある。公共哲学の基礎となる科目でもある。

準備学習(予習)

テキストの各章を読んで予習する。授業内レポート（BRC：授業内で書き上げる簡単な論述400字程度．BRCについては、オリエンテーションで説明する）の作成を通して予習する。オリエンテーションで、BRCについての別紙シラバスを配布する。

準備学習(復習)

BRCを再読する。授業内予習時間に書き残した未完成のBRCを授業後に完成させる。それにより、授業後の理解を深める。また、作成者は配布したBRCへの質疑応答を行う。

授業計画

1. オリエンテーション/イントロダクション
2. 幸福に 真 の幸福というものはあるのか？：プラトンとアリストテレス
3. そもそも人はみな自分の幸福を求めているか？
4. 正義規範はどのようにしてできたか？：社会契約説
5. 実際、社会契約は可能なのか？
6. 人はどこまで自由（利己的）でいられるか？：ルソーとカント
7. 利己主義はいつ如何なる場合でも実戦可能か？
8. 社会正義は功利主義でどこまで説明できるか？：ベンサムとミル
9. 功利主義から利己主義へ？
10. ニーチェとキリスト教道徳：「ニーチェの、ニーチェのための、ニーチェによるキリスト教道徳批判」の批判
11. メタ倫理学と正義論：現代倫理学の最新理論への招待
12. これらの議論のいったいどこがまずいのか？
13. 「道徳的であるべき」とはどういうことか？
14. 「語りえぬことについては黙ってやらざるをえない」のか？
15. まとめと結論

教科書

永井 均 『倫理とは何かー猫のインジヒトの挑戦』(筑摩書房)

評価方法

- (1)BRC:50%:BRCについてはオリエンテーションで説明する
 - (2)期末試験:40%:論述試験（問題は予告する）
 - (3)授業貢献度:10%:どのように応答・議論したか
- 受講者が少数である場合は、ゼミ形式で授業を行うことがありうる。

担当者：田口 安克

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

ファイナンシャル・プランナー（FP）は、金融、保険、不動産、税金など、「お金」回りの知識を備え、個々人の夢や目標実現のために、将来的な生活設計と一緒に作成し、必要な「お金」の使い方や貯め方などを総合的にアドバイスする職業である。本講義では、FPのもっとも根幹である「お金」について学ぶ。これは、学生生活はもとより、社会人になっても役立つ知識である。「お金」に関する基本的な知識を身につけたのち、FPの初級レベルである3級技能士レベルの金融、保険、税金、不動産の概要を学ぶ。

2.学びの意義と目標

「お金」に関する知識を高めることで、合理的な選択、トラブル回避、将来的な生活設計が立てられる。くわえて、FP資格取得のための入門的知識が得られる。

準備学習(予習)

事前に指定した教科書の当該箇所を読んでくること。

準備学習(復習)

小テストでの解説を再読し、各項目の理解を深めること。

授業計画

1. お金を知る
2. お金を使う
3. お金を稼ぐ
4. お金を貯める・増やす
5. お金を借りる
6. お金のトラブル回避
7. 社会参加費用としての税金
8. 万が一のために 社会保険と民間保険
9. ライフプランとお金
10. 金融資産の基礎知識
11. 不動産の基礎知識
12. リスク管理の基礎知識
13. タックスプランニング
14. 相続・事業承継
15. 試験とその解説

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)出席 :30% (2)小テスト :20% (3)期末試験 :50%

Japanese view of Nature & Landscape Architect

担当者：村上 公久

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

Course Description/ Objectives

Gardens are a reflection of people's view of nature and view of life. When we appreciate gardens, we may come close to the view of nature or the sense of values behind the gardens layout derived from those values.

Furthermore, we may learn religious perspective from certain types of gardens as in the case of the asymmetrical rock gardens of Zen Buddhism in Japan, which are quite different from the symmetrical flower gardens of the West.

2.学びの意義と目標

Gardens well represent the relationship between man and nature. We may learn a variety of views of nature among the racial, ethnic, religious groups from the study of the gardens of the world. Then we may discover a new perspective for the comparative study of those groups through garden study. And we may approach to the better and more profound understanding of Japan through the study of her unique gardens.

授業計画

1. Nature of the Japanese Archipelago
2. The Japanese View of Nature
3. Landscape Architecture
4. History of Gardens
5. Gardens in the world
6. Gardens in the world -2
7. Garden Layout as a Representation of a Natural View
8. Garden Layout as a Representation of a Natural View -2
9. Garden Layout as a Semantic Expression of a Religious View
10. Garden Layout as a Semantic Expression of a Religious View 2
11. Excursion : visiting gardens in Kyoto
12. Excursion : visiting gardens in Kyoto -2
13. Excursion : visiting gardens in Kyoto -3
14. Landscape Gardening in Japan
15. Future of the Japanese Garden

準備学習(予習)

Visiting Japanese Gardens before taking this course is recommended. A list of typical Japanese Gardens in the metropolitan area and its vicinity is provided at the instructor's office Rm. #8605 (6th.floor, Bld.8) .

教科書

プリントを配布する

No textbook: reading lists, handouts, and visual aids are provided throughout the course

準備学習(復習)

reading assignments, including reviewing audio-visual materials on Japanese gardens

評価方法

(1)class contribution through discussion:40% (2)reading assignments, performance, term papers:30% (3)end-of semester final closed-book exam:30%

Graded mainly by class contribution through discussion, and then by reading assignments, performance, term papers (critical article